
狼を追いかけて

烏来巢廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼を追いかけて

【Nコード】

N1376I

【作者名】

烏来巢廉

【あらすじ】

一人は最強を求めて、

一人は友のため、

一人は天命を全うするため。

後漢最強の漢・呂布の若き日からその死までを描く。

天命を知る

——天命。

それは不意にやって来る。

三人の少年に決断の時が迫っていた。

後漢の末、雁門郡馬邑県。

その男は中原から遠く離れた地よりやって来た。

様々な民族の血が混じる深蒼の眼。漢人に見られない体躯。漢では見慣れない馬を連れている。

男は姓を呂、名を布、字を奉先といった。

今朝は寒い。

が、少年には程良く心地よい寒さだ。少年は仮住まいの小屋から飛び出した。

「よし、今日こそ僕が狩りまくってやる」

少年は大きな伸びをし、弓を携えて通い慣れた友の元へと駆け出した。

少年は姓を成、名を廉という。

それから数刻後、三人の少年の前に兎や鹿が積まれた。

「くそっ、今回は廉の勝ちだ」

魏越は悔しがった。

「まあ、次は俺が一番になってやるよ」

今回は仕方無さそうに張遼が言った。

今回の狩りは成廉が見事に鹿一頭、兎二羽仕留めた。

彼らは幼なじみであり、ここ馬邑でも有名な仲良し三人組だ。成廉は早くで両親を無くし、魏越と張遼とは本当の兄弟の様に育った。好奇心の塊みしたいな三人はしばしば大人達は手を焼いていた。

日が傾いている。

「そろそろ帰るか？ 家に来いよ」

魏越の家は邑で唯一の酒屋だった。

客に混じって三人は自慢の獲物を調理してもらった。酒が回り始めて、大人達が騒ぎ出す。

そんな中、成廉はある男が目に入った。

長旅でもしてきたのだろうか。着ている物はボロボロで砂まみれだ。しかも見かけない服装である。

男が隅に座っているのにも関わらず、途轍もない存在感なのはおよそ漢人離れの引き締まった巨体故か。それともその端正な、しかし全くの変化の無い無表情に漂う独特の空気故だろうか。

「おっちゃん、あの人がって？」

「ん？ ……ああ、あの大男のことか？」

奉先とかいったかな。朝から飲んでるよ。

今朝この邑に来たらしいな。

西から来たって言うてるから五原あたりの人かも知れん」

「……奉先……か」

翌日三人はいつもの様に狩りに行った。

「今日はやけに静かだな……」

一番気配りの出来る張遼が呟いた。

「確かになんか変だな」

もう日も高く、仕留められなくても兎の一匹位見かけてもいい頃だ。そんな時、離れた茂みが動いて、何かから逃げるように兎が飛び出した。

「あ」

「よっし！ 追っかけっぞ」

「ちょっ、待ってよ」

魏越が走り出し、成廉も慌てて追いかける。

「オイ、様子が変だって」

二人は聞いて無いのか、どんどん先に行ってしまう。夢中で走る二人は森の奥へと茂みを掻き分けた。

開けた所にそれはいた。

赤橙の毛皮に黒の縞が視界に飛び込む。

「うわっ、とっ虎?!」

眼前に両眼を光らせた大きな虎が睨んでいた。

『ここら辺りには虎は居ないが、虎ってのは力・速さ・気どれに於いても人に勝るんだぞ』

成廉の脳裏に今は亡き父の言葉が蘇る。

「……いるじゃんかよ」

そうこうするうちに虎はじりじりと迫って来る。一步一步近付く虎を前に、弓を持っている二人は臆が動かせない。

遂に虎が牙を剥いて飛びかかった。

その刹那、弦音がしたかと思えば、虎の眉間に風を鋭く切って矢が突き立った。

「えっ!？」

振り返って見ると酒屋で見た男がまだ弦が振動する弓を持って立っていた。

「ほ、奉……先さん」

「す、すげえ！ あの虎を一矢でかよ。」

おい、廉！ この人誰なんだよ？」

魏越は興奮状態だ。追いついた張遼もこの光景に目を丸くしている。

奉先は三人を尻目に虎を解体し始めた。無表情で黙々と小刀で裁く奉先に若干の畏怖を抱きながら、成廉は話し掛けた。

「あの……助けて戴いてありがとうございます」

「……………別にお前達を助けたわけではない」

「でも、」

解体し終えた奉先は手早く獲物を馬に括り付ける。

「……………お前らも帰った方がいいだろう。虎が一頭とは限らない」
悠々と馬に跨り邑へ帰り始める。

「暗くなってきたし、あの人について行った方がいいんじゃないか？」

張遼が言った。

「そだな、帰るか」

三人は奉先を追い始めた。

「…でさあ、あの人が弓でビュンッ！ てやって虎を仕留めたんだ

ぜ!?

一矢でだぞ、一矢!!

ぜってーただ者じゃないぜ。な? 廉

「へ? ……あ、うん。凄かったよ」

酒屋は普段にも増してドンチャン騒ぎだ。と、言うのも魏越が土産話を持って来たからである。彼は酒屋に来てからずっと奉先の武勇伝を大人達に話している。帰ってからその興奮は醒めそうになり。

静かな所に行きたくなった成廉はそつと裏口から出た。

外は予想以上に寒かった。近いうちに雪でも降るかもしれない。

冬が近づいた夜の寒さは酒屋の熱気でボーっとする頭を冴えさせる。

成廉は夜空を見上げた。

空はたくさん小さな光に彩られていた。

「僕の星はどれなんだろう」

父の言葉を思い出す。

『人には誰しも自分の天命を司る星があつて、その運命は変えられない』

らしい。

——それなら僕の運命も既に決まっているのだろうか?

ふと、奉先の事が思い浮かんだ。

確かに成廉は奉先に運命とまで言わなくとも、惹かれていた。あの弓術を目の当たりにして、男として憧れを持つのが当たり前だろう。そして、成廉は会って間もないのに直感的に奉先が力のみの脆い存在だと感じていた。

——あんな人は
誰かの支えが必要なんだろうな……。

その時、背後に気配を感じて成廉は振り返った。後ろに張遼が立っていた。

「遼……」

「寒いな。……こんな所でどうしたんだ？」

「えっ？……いや、ちょっと外の空気が吸いたくて」

ふーん、と気の無い返事が返ってきた。

「魏越は今日にでも奉先殿に弟子入りする勢いだ。よっぽどあの方の武に惚れ込んだんだろうな。」

……廉はどうするんだ？ 今その事考えてたんだろ？」

成廉は虚を突かれた。

全く張遼の観察眼は素晴らしかった。後年、彼が魏の將軍として活躍したのも、こういった人の上に立つ者に必要なものを持っているたからかもしれない。

十四歳の張遼は三人の中で一番のしっかり者で、熱くなりやすい魏越とそれに流されやすい成廉の抑え役である。彼無くしては今日の三人はなかった。

「僕は……」

——奉先さんの元で生きていきたい。

成廉は率直にそう思った。

「……遼こそどうなんだよ」

一瞬間が空く。

「どちらかというと反対だよ」

「そう……なんだ」

成廉は少し肩を落とした。

「はははっ！ その様子だと廉もかぁ。安心しろ、絶対反対じゃないから。」

廉達が本気なら俺も、な」

察した張遼が続ける。

「……ただなあ。奉先殿を見た時感じたんだ。

空気というか、気っていうの？

とにかくそれが途轍もなく馬鹿でかく感じたんだ」

張遼は少し声を落とした。

「俺が怖いのはさ……それが善なのか、悪なのか全く見当がつかないんだよ」

翌日は酒屋に集まった。

正直、成廉は奉先から感じた魅力の様なものが善でも悪でもどちらでも良かった。

魏越が珍しく落ち着いた声で二人に告げる。

「俺、奉先様の弟子にしてみらおうと思う」

「越、」

「いや！ 廉、何も言うな。今回ばかりは誰も俺を止められん」

「そうじゃなくて……僕も行く」

魏越は少し驚いた様だがすぐに顔をほころばせた。

「なんだ、それなら話が早いぜ……ってことは三人揃って行けるんだな？」

「遼……」

成廉は心配そうに見た。

「廉、そんな目で見るなよ。俺が行かなきゃ誰が二人を世話すんのさ」

「よし！！ そんじゃ早速奉先様の所に頼み込むかあ！！」

邑には義舎が一つあり、奉先はそこに寝泊まりしていた。この季節は訪れる旅人も流れて来る難民もない為、彼とその馬が五頭いるだけだった。

「お願いします！

是非とも俺達を弟子にしてください！

奉先様のような武を身に付けたいんです！」

奉先は突然の訪問者に驚いたようだ。

「帰れ」

彼は三人を追いつき出そうと立ち上がった。三人は動かなかったが、軽々つまみ出してしまふ。

「くっそー！

おい、こんくらいじゃ諦めねーぞ！」

以来毎日、朝昼晩、三人はそこに押し掛けて、つまみ出された。

そんな事を繰り返すうちに外は雪が積もる時期になった。

遂に奉先が折れたのは十一月の始めだ。しかし、条件付きである。

「俺が選り抜いた馬が五頭いる。

好きな馬を選んで今日中に一人でも乗りこなせられれば、新年までお前達の相手をしてやろう」

三人はもちろん今まで乗馬したことなど無い。

「よし！ やってやろうじゃねーか」

果敢に魏越と張遼は馬に跨ろうと近付いた。

が、結果は散々だった。

魏越は後ろから近付いたため蹴り飛ばされて、張遼は手綱をなんとか掴めたが跨ろうとすると引きずられた。

しかし、幸い二人は怪我は無かった。

それを見て奉先は密かに感心していた。
馬邑に流れて来るまで居た邑では、同じ様に馬に挑んだ子供がいたがいずれも蹴り殺された。

——それを考えればこいつらはまあ、骨はあるわけだ。

「おい！ 廉もやってみろって！」

今日中に出来なきゃあ、お終いなんだぜ」

魏越が今度は前から手綱を掴もうとしながら叫んだ。

「うん」

「怖いって思ったらやらなくてもいいんだよ」

張遼は心配そうだ。

恐る恐る成廉は一番大きな馬に手を伸ばした。
すると、

「……あれ？」

馬は大人しかった。首の後ろを撫でると気持ちよさそうに耳をパタパタと動かした。

——いけるかな。

ゆっくりと鞍に手を掛けると馬の上に乗った。

「………僕、乗れた？」

「なっ」

奉先は自分以外にこんなに馬を大人しくさせる者を知らなかった。

「す………すげえぜ！！」

廉、やったじゃねーか！」

「驚いた！ 廉、お前才能あるんじゃないか？」

「奉先さん、僕達弟子にしてくれるんですよね？」

成廉は笑いかけた。奉先は嫌そうな顔をしていたが

「……分かった。俺に二言は無い」

奉先の稽古は凄まじいものだった。

最初は乗馬の仕方、弓の引き方を丁寧に教えた。

しかし、十二月に入ると内容が根本的に変わった。本格的な戦闘の稽古を始めたのだ。木製とはいえ大怪我をしかねない。剣術、槍術、騎射術、馬上での身のこなし、対人戦、奉先は持っているもの全てを叩き込んだ。

奉先は手加減する気など全くなかった。

彼らなら立派な戦士になる、という確信があったし、そもそも弟子になりたいと言い出したのは三人の方だ。短い間とは言え弟子にするからには自分の武を伝えてやるのが武人だろうと奉先は考えていた。

三人の中でも騎乗がうまいのは、やはり成廉だ。三人の中で騎射ができたのは成廉だけだった。

しかし、他の武術に関してはあとの二人とくらべると見劣りする。魏越は力のみ大人顔負けで、張遼は常に落ち着いて見切る事や技が長けている。

奉先は三人に本名を教えなかった。教える気も無かった。そして三人の名前も聞かなかった。

——どうせ新年を迎えたらおさらばだ。

武以外に何か教える必要もあるまい。

奉先には仕官の誘いが来ていた。并州刺史丁原である。

流浪の身から一躍部将となれる。仕官すれば食う事に困る事はないだろうし、なんといっても兵が欲しかった。

だから三人と過ごすのもあと僅かとなっていた。

新年まで後一週間という日に奉先は急に泊まりがけで騎馬の訓練をすると言い出した。

それを聞いて三人はホッとした。

ここ連日、武術の稽古が続いて三人とも生傷だらけなのだ。かかり稽古を奉先は三人まとめて相手をしていたが血を見るのは三人だった。騎馬ならそんなに痛い目には遭わないだろう。

四人は三日間、二百里（約八十キロ）ほど北へ駆けた。

そこは見たことの無い景色だった。

「この草原を西へ向かった所が俺の故郷だ」

三人は草原を始めて見た。手前からまばらに生えた蒼が遠くへ行くにつれて濃く広がり、四人の後ろ以外、山と呼べる様なものは無い。己がちっぽけな存在に感じられた。

地平線が何処までも続いていた。

四人は一言もしゃべらずにその景色を見ていた。

不意に奉先が口を開いた。

「……………今日此処にお前達をつれてきたのは、別れを言うためだ」
自分がこんな事を子供なんかに言うなんて柄じゃないな、と奉先は思った。

「!?!?」

「どういう事ですか!?!」

確かに約束は新年を迎えるまでですが……………」

成廉と魏越は慌てた様に叫んだ。しかし張遼は薄々気付いていた。

「……………邑を、出るんですか?」

奉先は頷いた。

「何時までもフラフラしている訳にもいかんだろう。」

ひとまず丁原の元へ行くことにした」

「それなら俺達も連れて行って下さい!!」

「駄目だ、お前達に何が出来ると言うのだ」

「……………そばにすることが出来ます」

成廉は俯いて答える。

「何？」

「奉先さんを主として仰がせて下さい。

そばにいれば共に歩んで行けます！」

一人より四人の方が良いに決まってるじゃないですか！」

四人にはたった一、二ヶ月の間に寝食を共にするうちに言い表せ無い様な信頼が出来ていた。

考えてみれば奉先がこんなに人と関わったのは故郷以来だった。

——言い換えればこいつらとは家族みたいなものなのではないのか？

「…………俺についてくるからには戦に出なくてはならん。

命を張る覚悟はあるのか」

「勿論です。」

僕達は何処までもお供します」

「俺も」

「手足となって存分な働きを見せてやります」

「…………分かった。しっかりついて来い!!」

奉先は馬に鞭打って駆け出した。慌てて三人も後を追う。

馬に揺られて成廉は思った。

——やっと見つけた僕の天命。

奉先さんについて行く事が…………いや、奉先さんこそが僕の天命だ！

!

蒼天已死

成廉、魏越、張遼の三人は長く過ごした邑を後にした。

成廉は既に両親が死んでいたので問題無かったが、魏越と張遼は家族とかなり揉めた。特に長男の魏越は激しく反対され、親から勘当された形で別れとなってしまった。

「自分の道くらい自分で歩むんだ」

魏越は強がっているが、野営した時に一人河原で目の辺りをしきりに拭うのを成廉は見た。

翌朝。

「さて、改めて名乗ろう。俺は姓を呂、名を布という。

お前達の名前も聞こうか」

それぞれ名乗ると呂布は

「よし、今乗っている馬を三人に与えよう」

とだけ言って朝食を食べ始めた。

「えっ、良いんですか？」

返事は返って来なかった。

その頃、正確には西暦一八四年。

後漢は大乱が起きた。『黄巾の乱』である。

太平道。

それが事の発端となった宗教結社だ。指導者は鉅鹿の張角である。張角は山で出逢った仙人に授けられた書物により、妖術を会得した。本来、悪政と貧困に喘ぐ人々を救う宗教だったが、彼の力にも限界があった。

結社全体が出した答えは漢帝国の打倒だった。そもそも政が悪い蒼天（漢帝国）に替わって、黄天が太平の世を導き出す。

これが彼等の言い分だった。そして、遂に一斉蜂起したのだ。本拠地鉅鹿を中心に何十万という信徒が全国各地で、である。

朝廷はこれを賊として対処した。

しかし、衰退した官軍に何か出来るわけでも無く、有力な者が立ち上がる機会となった。

群雄割拠の幕開けである。

一行は并州の晋陽にたどり着いた。

呂布は丁原に面会したが、対する丁原は不愉快だった。というのも臣下となったはずの呂布が一度も臣下の礼を執らなかったのだ。

丁原は氣に入らなかった。

そんな態度のせいかわり当てられた兵はわずか三百だった。

「あまりにも少なすぎではないでしょうか？」

兵数を聞いた張遼は眉をひそめた。呂布なら、いきなり五千の兵を率いても大丈夫だろう。

「兵は数ではない。一人が十人分の働きをすれば三千ではないか」

——つまり訓練は厳しくなるのか。

成廉は肩を落とした。

早速、呂布は召集をかけた。

成廉らは呂布の傍らから兵達の服装を見て唾然とした。明らかに正規軍ではない。

その軍は盗賊やごろつき上がりの者で構成されていた。中には匈奴と思しき者もチラホラ見受けられる。

「どうやら寄せ集めをあてられたみたいだな……」

皆思い思いの武装をしてるだけにまだましだった。これが丸腰の農民だったら、どうしようもない。丁原から支給されるのは糧秣のみなのだ。

馬を数えると五十を満たさず、しかも殆どが駄馬だ。

「文句を言っても始まらない。」

早速調練を始めるぞ」

調練は朝から晩まで行われた。皆がバラバラの武器のため、間合いいもバラバラとなってしまう。

呂布は同じ系統の武器同士、小集団を組ませることでこれを解決した。1ヶ月もすると丁原の軍と比べれば、ましな部隊に仕上がった。

成廉ら三人もしっかりと厳しい調練について来た。

呂布は他の兵と同じように三人を鼯鼠無く扱ったので、めきめき力をつけた。

それでも呂布にはまだまだ遠く及ばなかった。

呂布は晋陽城の官舎に一室を与えられていた。三人も従者として隣室を設けられてある。

「奉先さん、夕飯ですよ」

呂布は大抵、室では武器の手入れか睡眠しかない。

「……そこに置いとけ」

「はい。……そういえば明日で張遼は元服です。

知っていましたか？」

「ああ」

「てっきり忘れてるかと思いました」

「元服といっても、お前達は今更志を立てることもないだろう」

「そうですね。僕等にとっては奉先さんに仕えるだけで十分すぎる
ほです」

「未熟者が偉そうな口を叩く前に手柄の一つぐらいたてて欲しいも
んだ」

呂布は食膳に手を伸ばした。兵卒と同じ中身だ。ちゃんとした食
事を用意させていたが呂布は食べたがらなかった。

成廉はこういった呂布の兵への思いやりが好きだった。

翌朝、調練前の短い間にこじんまりとした元服の式が行われた。

形式どおりに進み、皆が祝い酒を口に付けた程度で終わった。

城を出ようかという時に伝令が駆けてきた。

「報告！ 黄巾賊が各地で一斉蜂起！

并州内でも叛乱が起きたため、召集がかけられています」

「！！」

「遼、黄巾賊って？」

「知らないのかよ。張角という男が教祖の宗教結社だ」

兵達も少しざわついている。

「張遼！魏越！お前らは兵を率いて半日駆けて官庁前で待機してい
ろ。」

成廉は俺について来い」

「俺達が兵を率いるんですか？ まだ元服したばかりなんですよ」

「ただ駆けるだけだ。それ位近くで見ているのだから容易いだろ」
魏越は嬉しそうだ。対してまだまだ子供な自分達で大丈夫だろうか
と張遼は心配である。

「これは命令だ。出来なければ暇に出す。」

成廉、行くぞ」

官庁には主だった部将が集められた。

「知っての通り、黄巾蜂起のため賊が并州内を荒らしておる。
既に五カ所の邑が襲われてしまった。

更に黒山の張牛角が混乱に乗じて并州に迫っている」

丁原が諸将を見渡すと一人挙手した。実力者の張揚だ。

「殿！ それがしに張牛角はお任せください」

何時も得意顔の男だ。呂布は何となく理由も無いが、嫌いだった。

「うむ、黒山の賊はお主に任せよう。他の将は…

……そして呂布は河郷邑の討伐だ。

以上」

呂布には最後に命令が下った。

河郷は恐らく并州黄巾の重要拠点だ。とても三百の兵で討つのは
不可能である。しかし呂布は断らなかった。

「承った」

成廉は目を白黒した。

「いくらなんでも無理な命令です。僕達一隊だけですよ？」

退出しながら成廉は小声で言った。

「お前はその弱気を治せ。」

目の前の敵に立ち向かえないようかどうか？ やっと俺の本気も

出せるというものだ」

無事に帰って来た兵達に明早朝発つ事を告げると、呂布は三人を呼び出した。

「渡したい物がある」

と言って持ってきたのは漆黒の具足と真白な直垂、四人分だった。

「お前達の初陣だ。

四人でこれを身につける。

死人の着る白は抵抗があるかもしれないが、死人は死ぬことは無いのだ。逆に縁起が良からう」

呂布が三人を思つての贈与である事は明らかだ。三人は不器用な優しさを感じた。

「命を惜しまず、全力で闘います！」

不思議と寡兵で大軍に立ち向かわなければならない、という恐怖は成廉から消えた。

白い四人を筆頭に三百四名の一隊が城を出た。

その他の隊もそれぞれの目標に向かったようだ。并州刺史である丁原は上党で張牛角と対する。張牛角率いる黒山の賊は総勢数万とも十数万とも噂されている。

大将が出征するのは当然だが、恐らく張揚に任せて城に腰を据えるだろう。丁原は偉そうな態度だが、それだけである。

——仕える奴を間違えたか。

呂布は既に後悔していたが、やはり戦となると血が騒いだ。

昔、匈奴に混じって暴れたのを思い出した。

あいつ等は元気にしてるだろうか。

呂布は五原にいた頃は漢人より匈奴の方が付き合いが多かったが、そのせいで邑の者からは避けられていた。

手に握る長柄武器を見下ろす。呂布はそれを方天牙戟と呼んでいた。

邑から出て行くと決めた時、旅をする商人が武運を祈る、と方天牙戟を譲られた。その男はどんな馬も手懐ける呂布からよく馬を買っていたからだろう。

本当は方天牙戟が作られたのは西の果てのようだ。涼州より、西域より、更に西へ行った大秦国という国で買ったと、その男が買い付けた商人が言っていたらしい。

大きな矛に三日月状の片刃が付き、その反対側に牙状の刃が五本生えている。とても普通の者には使いこなせそうもない。

使いこなせたのは呂布だけだった。

戦において武器を使いこなせるか、という事はかなり重要である。魏越は呂布への憧れのためか戟を好んだ。張遼は大刀だ。どちらも柄を短くしたものだ。そうしないと彼らの手に余ってしまう。

成廉は戈を好んだ。

時代遅れの武器である。止めとけ、と呂布は言おうと思ったが止めた。戈は古の戦車で使われた武器だったが成廉は上手く使っていた。きっと高い馬上から振り下ろす闘い方が、大柄な馬に乗る成廉に合っているのだろう。

呂布は少しずつ自分らしく成長する武を邪魔するつもりは無かった。

河郷は予想以上の兵力だった。

総兵力約一万の黄色い塊だ。

黄巾賊は黄色の頭巾を自軍の目印としている。

「三十倍かあ」

「弱気になるな、と言ったはずだ」

賊とは言え、三十倍の敵を打ち破った話はない。三人は呂布を信じるしかなかった。

「黄巾賊の主力は并州では無い。

故に武器を持っている兵は少ないだろう。ほとんどが農民のはずだ。しかも我等がこんな寡兵で攻めるとは思っていない。

そこが隙となる。

勝機があるとしたら、相手は民なのだ。恐怖を与えるしかない」

「……どうするんです？」

「俺一人で大将の首を取る」

呂布は少しも表情を崩さなかった。

両軍が対陣した。

黄巾賊は討伐軍が小勢なのを知って、数を頼みに全軍で出てきた。「好都合だ。全軍に恐怖を植え付けてやろう」

既に呂布は一人だけ突出していたが、魏越が追って来た。

「奉先様、俺もお供させて下さい。

やっぱり、一人じゃ……」

「自信があるから言ったのだ。

お前らにはまだ本気を見せた事がないから心配かもしれないが、俺一人で十分だ」

これ以上魏越に言う事は無い。

三人は騎兵四十三騎を先頭に敵軍から一里（約四百メートル）の所で待機した。

呂布が黄色い軍勢の中に埋もれて行った。出来るだけ威圧感無く、ゆっくりと馬を進めた。

黄巾賊は何をするつもりなのか興味深そうに見ている。たった一騎で何ができるかと考えているのだろう。

大将と思しき男を見つけた。呂布を見てニヤニヤ笑っている。

……赤黒い軌跡を描いて、ニヤニヤ顔が宙を舞った。
時が一瞬止まった。

しかし、次の瞬間更に五、六人首が飛んでいた。

「お……お頭が殺られた!!」

呂布の周囲は恐怖で引きつっている。

後方の兵はまだ何が起きているのか分からないようだ。

呂布はありったけの殺気を放ち、敵の騎兵目指して駆けながら、頭上で方天戟を回した。

「合図だ」

「本当に大将斬ったのかよ」

「敵が立て直す前に叩く！ 奉先様目指して駆けまくれ！」

張遼が叫ぶと騎兵を先頭に突撃した。

騎兵がぶつかり、歩兵がその合間を突く。敵の精鋭は少数でほとんどが戦闘経験が無いのだ。

それだけで黄巾賊は崩れ始めた。

呂布の元に三人が辿り着いた時には、呂布の周りに敵兵が無数に転がっていた。

成廉は人の死体を直視してしまい、厭な気分になった。だが、顔に出ないように努めた。

「追撃するぞ！」

打ち破ったとは言え、敵はまだまだ多勢だ。恐怖を植え付けて立ち直れないようにする」

騎兵のみで追い、歩兵には武具や糧秣の回収をさせた。追撃は一方的だった。草でも刈るかの様に首が飛んでいく。

成廉は初めて人を殺す感触を感じた。人はあっさり死ぬものだった。

追い抜きざまに兵の首に戈の刃を引っ掛けると、藁の束を斬るかの様に容易い。頸骨に引っ掛かって、ゴツゴツと音が手に伝わるのが生々しかった。

大勝だ。

夕刻。

追撃した道筋を引き返すと転がっているのは黄色い頭巾の死体ばかりである。

一兵も欠けなかった。重傷二人軽傷八人の損害に対し、恐らく千近くは討っただろう。

魏越は三人の中でも目立って活躍したが、呂布とは比べようがなかった。

二百近い敵兵が方天牙戟の餌食になったようだ。

正に無敵、鬼神の強さ、一騎当千の武と武威である。

三人はようやく己の主の強さと恐ろしさを知ったのである。

その日は河郷の近くで野営した。

黄巾賊は物資を運ぶ余裕も無かったのだろう。三百人には多すぎて輸送も出来ない量だ。呂布は必要な分を残して、余剰は河郷邑の蔵に収めさせた。

ようやく呂布は具足を解いて一息ついた。

白い直垂が返り血で所々染まっている。戦の度に新調しないといけない、と苦笑していると成廉が酒と食事を持ってきた。

三人の中で一番戦に慣れてない様子なのが成廉だが、馬や呂布の身の回りも世話をする。

三人の中で一番従者らしいのも成廉だ。

「ご苦労様です。」

今日の戦で奉先さんが僕達にかなり手加減してくれていると分かりました」

「……全くだな。」

稽古の時もうっかり捻り殺してしまわないか、とヒヤヒヤしているのだ。

早く本気でやり合える位になって欲しいものだ」

「越や遼はすぐにでも強くなります。」

でも僕は……」

「今日の戦で少しは弱気が治るかと思えばこの様か」

「……至らない部下で申し訳ないです」

「そんな事を言う暇があるなら素振りでもしろ！」

呂布に怒鳴られて成廉は慌てて飛び出していった。

張牛角率いる黒山の賊は予想外の強さだ。張揚は一人頭を抱えた。自薦した張揚だったが賊を相手に苦戦していた。特に張燕という男が率いる歩兵は精強だった。

誘う様に森へ退却する張燕軍を追撃した軍勢は還って来ない。

張揚は救援を要請するか迷っていた。黒山賊は森に籠もって居れば良いものの、こちらが気を抜くと邑だけで無く軍の蔵まで襲撃す

る。

救援を要請しようにも丁原は動かないだろう。

河郷での呂布の活躍ぶりは張揚の耳に入っていた。三百の兵で一万の黄巾賊を打ち破った。

張揚は救援を頼むとしたら呂布しかない、と思った。

張揚は字を雅叔、并州雲中郡の生まれだ。

雲中郡は并州の辺境で、呂布とは同郷とも言える。

張揚は決心した。

「河郷に伝令を送れ」

呂布率いる三百の兵は上党に向かった。

呂布はあんまり乗り気がしなかった。

——俺は張揚が好きでは無いのに、むこうは同郷の誼で好感でも持ってるのだろうか。

……利用されているだけかもしれない。

武一点張りの呂布を利用しようと思う者は山ほどいるだろう。しかし、そんな事を呂布は気にしなかった。

歩兵に合わせて、駆けること三日。張揚の元に辿り着いた。

「よく来てくださった、呂布殿」

「……いや、なかなか黒山賊も曲者の様で」

張揚は呂布が来てくれて素直に喜んでいようだ。

「それでは呂布殿には作戦に加わってもらいたい」

まず張揚軍を三手に分け、黒山賊が森から出撃したら中央の軍が当たる。

その背後を呂布が突撃し、分断された敵軍を左右の軍が殲滅する。

なかなかの作戦だが呂布が敵軍を分断できるかどうかで勝敗が決まる。

たが呂布は自信があった。

「任せろ。あわよくば張牛角と張燕も討ち取ってやろう」

黒山賊が森から出てきた。

呂布は早速、密かに出陣した。感ずかれないよう夜半に移動し、馬や兵には縄を噛ませた。

日が高くなってきた頃、両軍がぶつかったようだ。風に乗って喚声が聞こえてきた。

「……続け」

呂布は方天牙戟を構えると駆け出した。

成廉、魏越、張遼も後に続く。

敵軍の最後尾がこちらに気づいた時には呂布が首を飛ばした。暫く駆けると大将らしき男がいた。張牛角だ。

「背後を襲うとは思わなかったぞ！」

槍を小脇に張牛角が突っ込んで来た。呂布は止まらなかった。

槍を擦り上げるとすれ違い様に一閃した。張牛角の胴から上が吹き飛んだ。血飛沫が賊に降り注ぐ。

張牛角の頭を方天戟の先で突き刺すとぶら下げながら、また駆け出した。

もう、敵兵を殺す必要も無い。大将の死体を見ただけで道が開いていった。

最後に左右から張揚軍が襲いかかると黒山賊は総崩れだった。

呂布らは帰還した。勝利に湧く本陣で早速宴が始まる。

「いやゝ呂布殿、お手柄でしたな。」

第一戦功だったと丁刺史に伝えましょう」

「止してくれ。」

兵さえ与えてもらえれば位などいらん」

「無欲な男なのだ。儂は周りの目を気にしてばかりだ」

張揚はいつもの見下した目では無く、真っ直ぐ呂布の目を見ていた。

——意外と小心者なのかもしれない。

何となく呂布は張揚が嫌いでは無くなった。

成廉の馬が脚を折ったのは上党から晋陽へ帰還する途中の事だった。

「奉先さん！　なんとか助けてください」

成廉が月光と名付けてその馬を可愛がっていた事は呂布も知っていた。

馬が脚を折ると立ち上がれない。立ち上がれないで横になると内臓に負担がかかり、苦しんで弱っていく。自分の重さに耐えられない

いのだ。

つまり、それは死を意味していた。

「……殺せ」

「なっ！？ どうしてですか」

「さすがに脚が折れるとどうしようも無い。

良かったな戦場で折れたら命取りだぞ」

「……助けられないのですか」

「お前が殺して救ってやれ。走れん馬に幸せは無いのだ」

成廉は俯いて月光の所に向かって行った。

「月光……」

成廉は月光の首の後ろをさすってやった。月光はこれが好きなのだ。

しかし、既に月光の息遣いは荒かった。月光と目があった。苦痛の色だ。

不思議と成廉は馬の気持ち分かる。

——いやだ、月光を殺るなんて。……いやだけど

殺して救ってやれ、と呂布は言った。

今も月光は苦しんでいる。出来る事は何なのか。

——自分の我が儘で苦しみを長引かせるくらいなら……それなら。

涙で月光が良く見えない。

「ごめんな」

成廉は腰の剣を抜いた。

月の光が綺麗な夜だった。

その日の野営は月光の肉が振るわれた。

「元氣出せて、廉」

「気持ちに分かるけど今夜の飯はこれだけなんだよ」

魏越と張遼が必死に励まそうとした。成廉は食事に手をつけようとしない。

仕方ないか、と張遼は思った。

成廉は自分の具足を解くよりも月光の世話を先にやるのだ。騎馬隊を攻撃する時も絶対馬を攻撃する事は無い。友とまではいかなくても一緒に闘った相棒みtaiである。

それを殺したのだ。張遼が馬を殺す感覚とは違うのだろう。

呂布が幕舎に入ってきた。

「成廉と話がしたい外してくれるか」

頷いて二人は出て行った。呂布が先に沈黙を破った。

「お前は今回の乱で何人殺した？」

「……必死だったので覚えていません。」

十人は確実に殺しました」

「人を斬った感想は」

「……………」

「では、なぜお前は月光を殺しても平気でいられ無いのだ？」

「それは……………」

「食え」

呂布は月光の肉を差し出した。

成廉は横を向いたまま黙った。

「俺はな、月光の事を忘れろと言っている訳ではないのだ。」

死んだ者も自分が手を掛けた者も俺もお前も月光も、皆等しい命だ」

呂布の目はいつになく穏やかだ。

「だが命とは絶えず他の命を糧に生きるものだ。月光を食べば、それはお前の血肉となり成廉という存在の中で生き続ける」

父も似たような事を言っていた気がする、と成廉は思った。

「忘れるな。」

武人は手に掛けた命全てを背負って生きて行かなければならないのだ」

「……奉先さんもそうして生きて来たのですか」

「そうだ」

成廉は呂布に初めて会った時の悟りにも似た哀愁の様な『氣』が、この武人の覚悟だと気がついた。

「食え」

呂布が再度促した。今度は手を伸ばした。

月光の肉は締まりが良く、旨かった。

間もなくして張角が死んだ。

病に蝕まれ、乱の当事者は弟の張宝・張梁となっていたが張宝・張梁も官軍に敗退しそれぞれ斬首された。その直後の死だった。

黄天の世は潰えた。

しかし、太平道の信者は減らなかった。まだ夢見る者達、悪政に耐えられない者達によって叛乱が頻発した。

漢帝国はその微弱な力で鎮圧するのに十数年を要することとなる。

呂布に一千までの兵の指揮が許されたが兵は補充されなかった。それでもまだましな方だった。張揚の計らいが影響したのだろう。他の手柄を立てた部将で何の沙汰も無い者もいたようだ。

殆どの手柄は丁原のものとして朝廷に奏上された。よって丁原は并州刺史兼任で、騎都尉、河内太守に任命された。

張揚が呂布を訪ねて来た。

「これは……わざわざよく来てくださった」

「晋陽の近くに用があつてな。寄らせていただいた」

「ちょうど従者に兎を調理させてるところだ。酒でもどうです」

「では、お言葉に甘えて」

しばらくして成廉が焼いた肉を持って来た。

「？」

君は先の黄巾の乱の時の……」

「はい。奉先さんの傍ら戦に出させて貰いました」

「そうか。呂布殿は有能な部下に慕われているのだなあ。羨ましい限りだ」

「張揚様も部下思いだと有名ですよ」

実際、張揚は少ない恩賞を全て部下に分け与えた、という噂である。

成廉は一礼して退出した。

「良い少年ではないか」

「しっかりしてる様に見えてもまだまだ未熟で」

呂布は張揚の杯に酒を注いだ。

「丁刺史のことをどう思われる」

程良く酔ってきた頃に張揚が聞いてきた。

「仕える程の男でも無いですな」

呂布は素直に答えた。

「やはりそう思うか」

「当然、他人の手柄を己のものにするなんて人のする事では無いでしょう」

「……実は配下の校尉（部隊長）達の不満も募っていてな。」

丁刺史も何とかして欲しいものだ」

張揚は呂布の目をじっと見た。張揚が何を言おうとしているか何となく分かった。

共に叛逆しようというのだ。

普段他の将にえらそうな態度な分、自分の部下には思いやりがあるのだろう。

丁原は嫌いだ、張揚が下野しても部下の境遇は変わらない。丁原の下に収まるのも嫌という訳だ。

——だが、まだその機では無いのだ。

「……………考えておく」

——まだ我慢時であるはずだ。

呂布は成廉ら三人を連れ、黄河を渡り西へ向かった。

丁原に兵の補充を求めると募兵を命じられたのだ。そこで南匈奴の生活圏へ強者を求めに来たのだ。

於夫羅

という男がいるはずだった。

小さい集落に辿り着いた。

入って直ぐに呂布は見知った男を見つけた。かつて、つるんでいた仲間の一人だった。

何故か鍬を手に土を耕している。昔の彼からは想像出来ない姿だ。

「奉先じゃないか！どうしたんだ、こんな僻地に」

男は嬉しそうに近づいて来た。

「ちょっと兵を集めに来た。この長に許可を貰いたいのだが……。
於夫羅はここに居ないのか？」

「あいつは相変わらず大暴れだ。」

今は白波賊を率いてる」

男は白い歯を見せた。

「長はあの丘にある館にいるよ」

「そうか。」

………ところでなんで農業などしているのだ？」

「盗みからは足を洗ったんだ。ここは痩せた土地だから収穫は多くはないけど、作物が穫れるのは嬉しいよ」

「らしく無いじゃないか」

「今は妻もいるし、土地もある。」

昔ほど大きな富は手には入らないけど、安定した幸せだよ」

そんな幸せも在るものなのか、と成廉は思った。

礼を告げると四人は丘へ向かった。

長は呂布が名乗ると喜んで中へ案内した。長と聞いて成廉は老人を思い浮かべたが、年齢を計り難い引き締まった男だった。

「集落内で募兵をしたいのだが」

「構いませんよ。」

既に呂布殿は当代の『飛將軍』と匈奴の中でも有名です。

沢山若者が集まることでしょう」

「七百人ほどで十分だ」

長は眉をひそめた。

「それはまた少ない」

「校尉だからな」

「あれほどの戦功を挙げたのにですか」

「仕える相手を間違えた」

長はふっと笑った。

「というより人の下に収まる方では無いですな、呂布殿は」

「天下はまだ俺を求めておらん」

「雌伏の時……なのですな」

しばらく呂布は長と雑談し、成廉らは早速募兵を始めた。

布地に募兵について書き記し、集落の広場に掲げた。文字を読めない者のために口でも広めてもらった。

翌日から五、六人纏まって呂布の元へやって来て、一週間もすると二千を超えた。喜ばしいのは、半分は自分の馬を連れてる事だった。

丁原は并州が駿馬の産地にも関わらず馬を支給しなかった。出し惜しみしてるのだ。そんな状況で馬が手に入るのはありがたかった。呂布は募兵を打ち切ると集まった若者を広場に整列させた。

「皆、よく集まってくれた。」

「……しかし全員を連れて行くことは出来ん」

みんな顔を見合わせた。てっきり全員ついていけると思っていたのだろう。

「俺はここで戦士を集め、最強の麾下軍を作るつもりだ。」

よってこれから二週間、俺の調練について来れん奴は家へ帰ってもらう」

地獄の調練が始まった。

飛将入洛

呂布らが晋陽に兵を連れてきたのは半年も経ってからだった。

兵は本当に七百余りまで減らされた。

激烈な調練で、死人が十八人に及んだ。最初の二週間で半数以上が脱落した。それからは集団戦の調練で一人二人抜けていった。

一つの壁を超えた、と成廉は感じた。

これを超えれば強くなる、と信じて必死に調練に耐えた。体中擦り傷だらけになり、尿は赤かった。

集落の長の計らいで十分な食事が提供されたが、極度の疲労で胃が受け付けない日もあった。

魏越は耐え切れた様だが、張遼も同じ様に辛そうだった。

二週間と呂布は言っていたが、地獄は半年に及んだため、成廉は生きた心地がしなかった。

しかしながら、この一つの限界を超えた事は三人の自信になった。大人の、匈奴の戦士に混じって最後までついて行けたのだ。一人前の戦士としての自負が生まれていた。事実、三人は匈奴の戦士達に認められる程の実力をつけていた。

何進。

字は遂高。

南陽郡の人。

大將軍である。

もともと屠殺屋であったが美人と評判の妹が同郷の宦官によって

後宮に入った。それにより何進も高官に出世し、黄巾の乱の際大將軍に拔擢されたのだ。

更に妹の何皇后は皇子を産んだ。以来、朝廷で実権を握ることとなる。

しかし、そんな何進を快く思わない者達がいた。

中常侍の十常侍だ。宦官の高官である中常侍の中でも権力者として名が知られている十人を十常侍と呼んだ。

彼らは去勢された者なので抑えられた欲望は金銭、権力、収集に発散された。官位から処刑まで思いのままである。朝廷で十常侍に勝てる者はいないのだ。

何進を除いて。

——大將軍を除くべし。

そんな声が十常侍に広がる中時の帝・靈帝が崩御した。

何進は即座に何皇后と図って、何皇后の息子・弁を帝とした。何進は帝の叔父となるのだ。十常侍を差し置いて、最大の實力者になるのは確実である。

十常侍・蹇碩は早速行動した。

蹇碩は体格が良く、宦官にもかかわらず西園八校尉（官軍指揮官）の一人だ。つまり何進の部下である。

蹇碩は配下を使って何進暗殺を企てた。

しかし、密告者によりあっさり発覚してしまった。

何進は屠殺屋出身とは言え、軍の掌握は抜かり無かったのだ。

西園八校尉の一人、袁紹の勧めにより宦官を皆殺しにしようとした。

だが、思わぬ邪魔が入る。宦官達が何皇后に取り入ったのだ。誰

のおかげで今の位にいますと思っているのか、と諭されればさすがの何進も言い返せなかった。

蹇碩以下首謀者の宦官のみを処刑すると、兵を引いた。

とは言え、宦官を滅ぼさない限り何進は命を狙われ続ける。そこで袁紹は全国から諸侯を召集するよう進言した。

兵力で圧倒し、牽制するのだ。

妙案だと思った何進は早速、詔をしたためさせた。

これに応じて数々の群雄が洛陽に向け、出立した。

西暦一八九年。

その群雄の中に残虐な魔王がいることを平和な洛陽はまだ知らない。

成廉は齢十八になっていた。

気付けばこの歳で呂布麾下軍の隊長にまで勤め上げていた。

この四年間反乱鎮圧と賊討伐に明け暮れた。

特に張燕が後を継いだ黒山賊が厄介だった。どうしても本拠地が特定出来ないのだ。隣の冀州はもっと酷いらしい。

更に并州北部では騎馬民族の鮮卑が頭角を現し始めた。

どちらもなかなかの相手だったが、呂布の敵では無かった。相変わらず丁原に手柄こそ盗られたが度重なる戦闘で麾下の一千はめきめきと力をつけた。

呂布の武勇伝は洛陽にまで広まったようだ。

そんな洛陽から丁原に召集がかかった。詔勅とのことだが、何進の命令に違いない。

成廉は何進が呂布をあてにしている、と思った。丁原に大した指揮能力があるはずが無かった。

新たな褒美を求めて、丁原は張揚、呂布以下直属の部将を引き連れて、洛陽に向けて出立した。

黄河沿いに田圃が広がっている。

空は青々と澄んでいた。

呂布は張揚と並んで進軍した。すぐ後ろを成廉は追走する。

いつの間にか二人は親しくなっていた。

何を話しているのか知ろうとは思わなかったが互いに本音を語る位の仲の様だ。

田圃を見て呂布が言った。

「まるで故郷の草原のようだな」

「今年は珍しく良作みたいだ。」

普段は実りもろくに無いらしいぞ」

「丁刺史は？」

「慣れない騎乗に疲れたんだろう。後ろの馬車だ」

「困った男だ。何も出来んのでは無いか」

二人とも嘲笑を含んでいる。

「奉先、そろそろ我慢し切れん」

張揚は真顔だ。眉間にも皺が寄っている。そろそろ限界に近い様だ。

「まだ、その機じゃないのだ。堪えてくれ」

何を企てているのか成廉には見当がつかなかった。

しかし、張揚は到底何かに堪えられる様には見えなかった。

急報が入ったのは洛陽の外門をくぐった時である。

「報告！ 十常侍が何進大將軍を殺害。」

これを知った西園八校尉の袁紹殿が殺戮を開始しました」

「なんと！」

諸将がざわめいた。

「して、帝は何処に？」

丁原が興奮して聞いた。いくら傀儡状態の帝とはいえ、保護すれば恩賞が貰える。

だが、報告の内容は期待外れだった。

「十常侍・張讓と共に行方不明です」

「それなら儂らが搜索するぞ！」

「お待ちください」

張揚が遮った。

「今の帝を保護したところで我々には無益です」

「儂には有益なのだ」

丁原の顔が醜く歪んだ。

「張讓によって帝が我々を逆賊と認識したらどうなされるのか」

「では、おぬしは誰かが手柄を挙げるのを黙って見ておれと申すか」

「どちらにしろ張讓が洛陽の東に来るとは思えません」

しばらく二人は言い争っていたが、呂布は帝より袁紹が気になった。

——思い切った男だ。大きくなっていくのはああいう者か。

袁紹の行動は賛否両論だったが、一部の知識人からは多大な支持を受けた。

そうこうするうちに帝保護の報が入った。

諸将は保護した者の名を聞いて愕然とした。
その男は涼州刺史・董卓だった。

董卓仲穎。

西涼で名を馳せた男だ。

若い頃羌（遊牧民）の族長を酒宴に招待した際、牛を素手で殺して料理した。そのため族長は畏れ敬い、協力を誓ったという。

中には左右同時に騎射が出来る、と言う者もいる。その他数々の武勇伝が広まっていた。

黄巾の乱の際、失脚して罷免された。

一部の董卓の実力を知る者からは虎を野に放す様なものだ、と反対の声が挙がった。

実際に董卓は天水を拠点にほぼ涼州を手中にした。羌、匈奴を織り交ぜた約十万の兵が董卓の命令一つで中原になだれ込める状態にまで発展している。

そんな董卓が帝を奉戴してしまったのだ。

洛陽は混乱の渦に巻き込まれるのでは、と成廉は思った。

成廉、魏越、張遼は洛陽の東の幕舎で留守番をしている。今日は馬の世話だ。

正式な通達があり、軍の再編があるようだ。
今頃呂布は丁原と参内しているだろう。

「董卓って言ったらさ……あの董卓だよな」

馬に秣を与えながら魏越が言った。

「そうだ。西涼の怪物みたいな奴」

張遼は桶の水を順番にあげた。

「本当に左右同時に弓引けるのかな」
成廉は鞍を磨いている。

「ありゃ、嘘だろ。」

両手に弓持ってたら引けねえじゃん」

「足とか」

「ない」

「じゃあ、口」

「……」

「そんな人間がいたら俺、奉先様の次に尊敬するわ」
魏越が笑って言った。

「ま、噂を聞いた限りじゃ、腕っ節だけで戦は駄目みたいだね」

「ああ、黄巾の乱だろ。」

なんでも負けそうになって、劉……なんとかって奴の義勇軍に助けられたらしいな」

「本当にそう思うか」

張遼が聞いてきた。

「え、どうゆう事？」

「俺が聞いた限り、今回みたいな一気に頂点になれる機会を窺って、わざと負けたって聞いた」

「噂だろ」

「でも、それが本当ならまずい事になりそうじゃないか」

張遼は何かを感じ取っていた。

「なんかいつもの遼らしくないよ」

「俺はいつもどおりだ。」

俺が言いたい事もその内に判るはずだ」

「何か起きるかもしれないってこと？」

「絶対、あの董卓は何か起こす」

何か起きるとしたら、それは中途半端な事では無く、天下の度肝を抜くだろう、と三人は思った。

「何進大將軍の遺軍は儂が指揮する事となった」

董卓が何進の軍を受け継ぐ。

それは董卓が二十万を超える兵を擁する事である。召集された一同は騒がしくなった。

更に董卓が続けた言葉に一同は凍りついた。

「儂は今の帝は漢帝国に相応しくないと思う。」

先日、保護した際も弁はまともな受け答えも出来なかった。比べて陳留王（弁の異母兄弟）の協は聡明ではきはきと喋れる。明らかに陳留王を新帝として立てるべきじゃ。貴公らはどう思うかな？」

その時、丁原が立ち上がった。

「董卓！ 何進大將軍の軍を吸収しただけで充分であろう。」

その上、帝を替えようなどとは不遜極まりないぞ」

丁原は単に董卓がこれ以上の実権を握るのが我慢出来なかっただけだが、一同の目には忠義の士であるかの様に映った。

「すなわち、貴様の様な者を天下では逆賊と言うのだ！」

「う……むむ」

董卓の顔が赤黒く変色した。

「丁原！」

儂を逆賊と申すか！？

儂は漢帝国の事を思っ言っておるのだぞ」

「帝を思いのままにしようとしてもそうはいかんぞ！

どうせあわよくば自分が帝に取って代わろうと考えているのだろう」

徐に董卓は無言で剣を抜いた。

その董卓の形相を見て、丁原は危うく腰を抜かすところだった。

人間、いざという時本当の姿が現れる。

「りりよ呂布、張揚」

少しうわずった声で丁原は部下を呼んだ。

——やれやれ、しょうがない。

ゆっくりと呂布は立ち上がった。張揚は机の杯を見たまま動かなかった。主を守る気など毛頭無いのだろう。

董卓が殺すのを待っているのかもしれない。

「呂布だと？」

呂布がその巨体を晒すと、董卓は何か気付いた様に剣を下ろした。

「あの武勇名高い呂布か」

「そっそうだ！ 儂に手を出して見ろ！」

息子分の呂布がお前を八つ裂きにするぞお！」

「貴様に聞いてはおらん。呂布に聞いておるのだ」

息子分とは呂布も初耳だ。

ここまででっち上げられるとさすがの呂布も苦笑した。

「呂布よ。どうして貴公のような男が丁原ごときに仕えているのだ？」

丁原に対し忠誠心は無い。呂布は正直に答えた。

「力を蓄えるためだ」

丁原の顔が見る見るうちに青くなってきた。

「呂布、儂に仕えよ。」

力なら儂のところの方が蓄えられるぞ。褒美は好きなだけ取ら……」

「僕は帰るぞ！」

身の危険を感じたのか突然丁原が叫んだ。

呂布と張揚を引っ張る様に掴むとその場を後にした。

「良い返事を待ってるぞ」

退出する時董卓のがら声が耳についた。

「お帰りなさいませ、奉先様。

ただ、董卓の侍中を名乗る男が参っています」

張遼が眉をひそめて言った。

帰ったら、丁原の問責の使者が待っているかと思えば、董卓の使者が驚く程速かった。

呂布は早速面会した。

「私は文優と申します。以後お見知りおき下さい」

男は目に強い光を湛えている。切れ長の目はまるで全てを見通せるかのようだ。

下手をすれば董卓より厄介者かもしれない。

「この度参ったのは呂布殿を騎都尉に任命するためです」

「俺はまだ丁原の臣下だ」

「その事については……董卓様は丁原の首を所望です」

驚きはしなかった。大体呂布の予想通りだ。

「今すぐには無理な話だ。俺にとってまだその機では無いのだ」

「そう仰ると思いました。董卓様は誠意を表すために名馬・赤兎を与えとのことです」

「赤兎？」

「汗血馬（西域の名馬）です。

更に体毛も燃えるような赤で、一度脱走した際には一日に二千里（

約四百キロメートル）も駆けたそうです」

「そんな名馬を手放すのか」

「誰も乗りこなせないのです」

「ふむ……」

呂布は位で自分を売りたいなかったが、赤兎は欲しかった。ちょうど帷幕の外から成廉の声がした。

「奉先さん、丁原様がお呼びだそうです」

呂布は返答を先延ばしにする事にした。

「とにかく即答はできません。」

赤兎は文優殿に預けるとして、今夜はひとまずここにお泊まりください。張遼という者に世話をさせましょう」

「そうですか……では、お言葉に甘えて」

任務に失敗したはずのに文優は笑っている。

呂布は何か嫌な気がした。

呂布は丁原の幕舎に向かった。

「これは呂布様、張揚様もいらしてます。どうぞこちらへ」

丁原の従者が出迎えた。新顔の楊醜という者だ。

「それにしても何かあったのでございますか？」

丁原様はかなりお怒りの御様子ですが」

「ああ、ちょっとな」

帷幕の前で呂布は楊醜を止めた。

剣を研いだ時の様な鉄の臭いがする。楊醜はまだ気付いて無い。

「ここまででよい。丁刺史と大事な用件だ。

お前は下がっておれ」

楊醜は一礼すると視界から消えた。

——この臭い………張揚か。

「俺だ……入るぞ」

幕を上げて入るとそこは血の海だった。

丁原が肩から両断されている。

目を開け、口を開け、阿呆の様な間抜け面だ。

「奉先……すまん、自分を抑え切れなかった」

そばに血に濡れた剣を握った張揚が立っていた。

話は簡単だ。

丁原は董卓が帝を保護し朝廷を牛耳る事も、自分が殺されそうなもの、張揚が丁原を止めたせいにしたのだ。

そして丁原は張揚の軍を取り上げようとした。手塩をかけて育てた、我が子の様な兵達が丁原にこき使われるのが張揚には我慢出来なかったのだろう。日頃の不満も溜まっている。

恐らく呂布も同じ立場ならそうしたかもしれない。いずれにせよ二人で独立するのは不可能となった。

——どうする。

先々の事を考えると今の状況では道は一つだ。

「……張揚、お前は丁原の残軍を纏めて并州に帰れ」
うなだれていた張揚が顔を上げた。

「奉先……しかし」

「俺は武一筋の男だ。」

だが、お前は人望があつてこそその男だろう。
主殺しを犯してはいけない」

「お主にその主殺しの濡れ衣を着せるわけにはいかん」

「俺はこの武を売りに乱世を渡り歩ける。」

お前は部下の信頼を失ったら、何が出来るというのだ？
どうやって生きて行くのだ？」

張揚は黙り込んだ。

「お前の限界を悟れなかった俺のせいでもある。
ちょうど董卓から仕官の誘いが来ておるのだ。」

丁原の首を土産にな」

「……あんな男に仕官するのか」

「一時的にだ。」

主殺しを受け入れるのは董卓ぐらいだろう。

お前は并州で力を蓄えてくれ。いずれ次の機が来るだろう。
それまでは別行動だ」

「お主が董卓配下になってしまえば、対峙する事もあるかもしれない」

「それも良からう。雄飛の時までお互い力を蓄えようではないか」
長く沈黙が続く。張揚は深々と頭を下げると

「また会おう」

と一言残して帷幕を出た。

その顔には涙が光っていた。

呂布は丁原の首を切り取ると密かに自分の幕舎に帰った。

「お帰りなさいま……うわっ!？」

これ、どうしたんですか」

成廉は呂布が丁原の首をぶら下げて帰ってきたので驚いた。

「丁原の首だ」

「見れば解りますよ! そうじゃなくて何で……」

「訳は話す。魏越と張遼を呼んでこい」

「……という訳だ」

呂布が話し終えると三人は複雑そうだった。

「何とも言えません。」

張揚様はそこまでして庇う程の者ですか？」

魏越は尊敬する呂布に悪名が増えるのをよしとしないようだ。

「まあ越、奉先様が決めた事だ。」

これから大変だろうから、陰ながら支えていこう」

「三人とも頼むぞ。」

それから今後、丁原殺しの真相を話してはならん。俺が殺した事として振る舞え」

「……」

三人とも気が引けた。やはり主の偽の罪を認めたくなかった。

「返事は」

「……はい」

「よし。張遼は文優を呼んでこい。」

成廉と魏越は麾下一千に出立の準備をさせろ」

三人が出て暫くすると文優がやって来た。

「急にどうなさった？」

口元が笑っている。何が起きたかお見通しですよ、といった顔だ。

「丁原の首だ。持って帰れ」

呂布は首を文優の足下に転がした。

文優は汚い物をつまむ様に拾い上げて覗き込んだ。

「確かにお預かり致します。」

それでは仕官を承知して戴けるのですね」

「それは董卓殿次第だ」

「と、言いますと？」

「麾下一千に西域の良馬を頂戴したい」
さすがに文優は目を丸くした。

西域の馬は確かに良い馬ばかり産する。
しかし砂漠を越えての輸送であり、盗賊への備えも嚴重にしなければなら無い。その為、一頭でも莫大な買値だ。それを一千頭となると、とんでもない事になる。

しかし文優はその条件で約束した。

「承知しました。

私から董卓様に申しましょう」

「頼む」

「それでは今夜中にいらしてください。

先に帰ります。赤兎は置いていきますね」

「まだ仕官すると決めた訳では無いぞ」

「丁原の首の分です」

笑って答えた。

文優が出て行こうとするふと疑問に思った呂布は止めた。

「ちょっと待て、一つ聞きたい」

「何でしょうか」

「お前は誰が丁原を殺したか知っているのか？」

「はい」

「何故分かった？」

「二、三人間者が入ってます」

「そうか。もう、行け」

文優は一礼すると闇に消えていった。

呂布が麾下一千と共に出頭して来た、と聞いて董卓は小躍りした。
成廉、魏越、張遼も呂布について行って董卓に会った。

成廉は董卓は見た目と『氣』が合っていないと思った。顔は鬼のようで体格もがっしりとしており迫力がある。

しかし、『氣』に関しては驚くほどひ弱だ。必死に強さを前面に出しているが、中身は怯えているようにも見える。

面倒な事を起こしそうな匂いがぷんぷんした。

「よく来た、呂布よ」

董卓の傍らに控えた男は文優では無かった。

「仕官するにあたって条件があります」

まだ呂布は礼をしなかった。

「何でも申すがよい」

赤兎では不十分だったかの」

「願いましては西域の良馬を一千頭いただきたい」

董卓は口を開けたまま固まった。

「この条件を呑んでいただければ、ここを去ります」

董卓の手がわなわなと震えた。

無理も無い。たった一人の男と一千の兵の為に莫大な金を払うのだ。恐らく食邑（領地）数千戸も手に入るほどだろう。

董卓が立ち上がろうとした時、すかさず傍らの男が耳打ちした。

董卓は暫く考え込んでいた。かなりの葛藤の様だ。

ようやく董卓は頭を上げた。

「よし、その条件を呑もう」

「ありがとうございます」

呂布は深々と拝礼した。

成廉もそれにならう。

「身命を賭けて董卓殿の手足となって働きましょう」

董卓は満足そうに笑った。

こうして董卓の元に呂布が丁原の首を土産に馳せ参じた事はすぐに知れ渡った。

張揚は董卓との敵対を表明したが、丁原が殺された翌日に陣を引き払い、并州の晋陽に帰ってしまった。

そして呂布の帰順を機に董卓は更に強大になっていくのだった。

魔王君臨

呂布が配下となってから董卓が最初に行った事は弁の廢帝だった。新帝を陳留王の協に定め、董卓は幼い帝の為に相国（最高権力者）となった。

陳留王の親族は何進との権力争いの末、処刑・暗殺されていた。一人ぼっちの協を立てる事は、事実上董卓が朝廷を牛耳る事を意味していたのだ。

強大な兵力を背景に他の追隨を許さなかった董卓に敢えて逆らおうとする者もない。

更に黄巾の乱の功労者は十常侍によって罷免されていたが、彼らを中央に呼び戻す事で軍を一つに纏めた。

かくして董卓の勢力は西より涼州、雍州、司隸、豫州を直接支配下に置き、国土を横断するように伸びていた。

もはや董卓を止められる者はいなかった。

「お前達が最初を選ぶ」

董卓から駿馬一千頭が贈られてきた。どの馬も名馬と言っても過言では無いだろう。

呂布の馬は『赤兎』という汗血馬だ。どの馬より速く駆ける。そしてどの馬より長く走り続ける。

誇り高い馬で、呂布しか乗せない。

成廉でも触る以上の事は許さなかった。赤兎に乗せてもらえる呂布が成廉は羨ましかった。

だから、成廉は赤兎に負けないような馬を捜した。

成廉の目に留まったのは巨大な馬だった。西域の馬は元々、漢の馬より大きいのだがその馬は中でも特に大きかった。鬣は長くて、顔にも掛かり無気力を装った感じがした。

中でも目を引いたのは、大きな蹄だ。普通の二倍はある。

——この馬はきつと強い……乗ってみたい。

成廉は自分に相応しい馬だと感じた。

「奉先さん、ちょっと駆けてきます」

鞍も載せずに成廉はその大馬に跨り、馬腹を蹴った。

「夕刻には帰ってこいよ」

呂布が言ったが馬が駆け出すとその声は風と共に掻き消えた。

大馬はその巨体に似合わず、とても速かった。恐らく、赤兎の次に速い。成廉は風になった気がした。

そして、成廉を驚かせたのはその足音だ。一頭なのに何十頭も駆けてるような、雷のような音なのだ。あの大きな蹄がそんな音を発てるのだろうか。

——稲妻の如き速さに雷鳴の足音の馬か。

「…よし！決めたぞ。お前の名は『雷音』だ！」

成廉の叫びに応えるように雷音は脚を速める。

二人は日が暮れるまで駆け続けた。

弘農王に格下げになっていた先帝・弁が死んだ。諡は少帝とされた。

楼閣から落ちた、という事故死とされたが、董卓の手の者によって殺された事は明らかだ。

李儒。

という男が見え隠れした。

常に董卓の傍らの控えており、頭の切れる男だ。弁殺害を進言・実行したのも李儒である。

董卓がやりたい放題に暴政を行い、李儒がその反対勢力を裏から潰した。二人が上手く組む事で董卓の勢力は漢帝国最強となったのだ。

更に董卓は少帝の葬式で、その死を悼む場にもかかわらず、少帝と関わりのあった者達を斬首した。

少帝の霊前で舞った数多の首は喪服を赤く染めた。それを見て董卓は不快なガラ声で笑った。

董卓は己の力の誇示と反対勢力への見せしめのつもりだった。が、逆にその行為は人々の反抗意識を確固たるものにしただけであった。そんな様子を呂布は醒めた目で見ていた。ここ二、三日董卓と話をした。彼は力が全てだと考えている。

そして、いつ自分と取って代わる者が現れるのか、と怯えている。その怯えが過剰で残酷な行為をさせているのかもしれない。

丁原の件以来、文優に会ってなかった。

呂布はそもそも弁殺害は文優がしたと思っていた。先帝を殺すなんて文優の考えそうな事だ、と呂布は思ったのだ。

だが、文優は献策をするどころか董卓の陣営では気に留められない

いらしい。同じ騎都尉の葉雄に聞いた時は、その存在も知らないと言われた。

文優に会った時の印象とその扱いが違い過ぎる事に呂布は驚いていた。

——まるであの時会ったのが、幻のようだ。

とにかく文優と話がしたくなった呂布は董卓に直接聞くことにした。

「相国」

「なんじゃ、呂布」

「相国の侍中の文優と申す男はどこに住んでおるのですか？」

「何？文優じゃと」

何故か董卓は動揺した。

「文優に何の用じゃ」

「相国の元で働けるのも、文優のお蔭です。そのお礼ぐらいしたいので」

董卓は何と言えば良いか迷っていたが、すかさずまたも李儒が耳打ちした。

「…そうか、呂布は良いと申したか」

董卓は一人、合点すると文優の館を教えてくれた。

呂布は意味が解らなかったがひとまず文優の館に向かうことにした。

文優の館は洛陽の中でも、かなり端の方にあった。が、赤兎の脚だとすぐだ。

本来、洛陽内では下馬するのが常識だったが、董卓の専横と共に乗り放題になってしまった。

文優の館は質素でこじんまりした感じだった。妻や親族は居らず、使用人が二人いるだけだ。

呂布が酒瓶を片手に入ると文優は歓迎した。

「これは呂布殿、よく来てくださった」

文優は奥の部屋に通した。

早速呂布は文優自身について質問した。

「一体、文優はどういう立場なのだ。董卓の侍中のはずなのに、余りにも人に知られてない」

やはり文優は呂布がその質問をする事を知っていたようだ。

「それは、私がそれを望んでいるからです」

「と、言う」と

「今から言う事は誰にも言わないでください」

文優は声を落とした。

「実は董卓様に常に献策し続けているのは私なんです。つまり、私は李儒を通して董卓様を補佐しているのです。

李儒という存在はいざという時に私を隠してくれます」

少し愉快そうに笑った。

「やはり、少帝の件もお前か」

「はい、董卓様はご自分の権威を見せつける事が好きなので。

私はあまり目立っては意味が無いので、普段の生活は控え目にしております」

「李儒の言葉はお前の言葉か」

「李儒もなかなかの知恵者なのですが、董卓様は私の言葉を信用しているようです」

「董卓とも話はするのか」

「いえ、直接会った事は一度もありません。あまり会いたいと思

えませんがね……」

「李儒は信用出来るのか」

「さあ……、人の心までは解りかねます」

文優が悪戯っぽく笑った。

「難しい話は次で最後だ。

そんな風にまともに交流も無い董卓にどうして仕えているのだ？」

「知りたいですか？」

「焦らすな」「私は天下を獲りたいのです。

そして今、最も天下に近いのは董卓様。名君だろうと暴君だろうと私には関係無いのですよ」

文優は初めて会ってから一番の真顔だった。

「いらっしやい！」

「今日は塩が特売だよ！」

董卓の専横が続く中、洛陽の市場だけはガヤガヤと騒がしかった。人と人がそれぞれ己のすべき事の為に行き交っている。

成廉はこんなに賑やか街を見たことが無かった。故郷の馬邑と洛陽とは大違いである。

洛陽全体はどちらかと言うと落ち着いた雰囲気なのだか、市場だけ別の世界のように活気付いているのだ。

成廉は裏路地に入った所の鍛冶屋を訪ねた。入口の露店には鍛え抜かれた剣がずらりと並んでいた。

「すいません、誰かいらっしやいますか」

「あいよ」

奥から親方らしき男がやって来た。たった今も鉄を鍛えていたの

か、汗だくだ。

「坊主、ご用はなんदै」

成廉は『坊主』という言葉に反応しそうになったが、敢えて大人になった。

「新しく武器を買いたいのですが」

「それで、何をお求めだ」

「戈です。戈に片刃を付けて欲しいです」

「戈だと？」

親方は目を丸くした。

「また古臭い物を……特注品になるぞ。金はあるのか？」

成廉は錢の束を見せた。

呂布が董卓に仕えてから金に困るような事は無くなった。董卓はよほど自信が無いのか、金で信頼を得ようとする。呂布の従者というだけで大金が支給されたのだ。

「こりゃあ坊主だなんて失礼な身分の方だったか？　これからお客様とお呼びせにゃならんな」

束を見て親方が言った。

「どの位かかりそうですか？」

「そうだなあ……」

洛陽では董卓による鉄の専売が進んでいた。それは悪徳商人より高値で売るといふ、かなり悪質なものだった。鉄の値は以前の倍以上だ。

「そんだけ金をちらつかれちゃあ、こちとら魂込めて打たにゃならんし……。一月たったらまた来てくれ」

「分かりました。では、また来ます」

「おう！　まいどあり！」

成廉は鍛冶屋を後にした。

成廉が奇妙な少女に会ったのはちょうど、鍛冶屋から官舎に帰るために雷音を繋いだ所に来た時だった。

雷音を物珍しそうに見上げている。

少女の何が奇妙かと言うと、どう見ても幼いのに髪を結い、簪を刺している。普通、簪は成人するか、成人として見られる身分の者がする。

少女の服装はこざっぱりとして、綺麗な物だ。が、華美と言うほどでも無いのでそんなに身分が高い訳でも無さそうなのだ。

——何だろう、迷子かな……？

「馬に乗ってみたい？」

少女はパツと振り返った。

息を呑む美しさだった。

幼い無邪気さと色香の様な雰囲気相まっている。

思わず成廉は見とれた。大きな瞳は好奇で満ち満ちている。

「乗りたい！」

元気な可愛らしい声で成廉は我に返った。

少女を抱え上げると雷音に乗せた。

雷音は赤兎程乗り手を選ばない、温厚な性格だ。

「君、名前は？」

「……白鈴。あんたは？」

「はは、あんたって……ま、いいか。僕は成廉、この馬は雷音」
「かっこいいね」

「そっそう？　ありが…」

「馬の方だよ」

「……………」

「……………」

——ここは年上らしくしないと。

「こんな所に一人でどうしたの？」

「迷った」

「じゃあ、どこから来たの？」

「南安」

「なっ?!」

南安といったら雍州の西の端だ。馬を使っても十日以上かかる。意外にも田舎ものである。

仕方がないので成廉は白鈴を乗せたまま、雷音の手綱を引いて回る事にした。

洛陽は広い。

無闇に歩き回るのは無茶な気がした成廉は西門の方に向かった。

白鈴が南安から来たのなら、捜している者も西門辺りから捜すだろう。

「白鈴は誰と来たの？」

「知らない人」

「へ？」

——まさか人攫いか？

「でも、おじいの知り合いだよ」

「なんだ、おじいってお祖父様の事？」

「うん。おじいが偉くなったから、一族のみんなで洛陽に住むの」

——ということは董卓の配下の誰かの孫か。

洛陽で出世した、と言えば董卓の配下だけだ。己の権力をいいように位もやりたい放題だった。特に涼州からの部下は高官を占めている。

そうこうするうちに西門が見えてきた。

「どうしようかな……」

——どこかですれ違ったかもしれない。

正直向こうが見つけてくれるのを待つしかなかった。

「あ！」

突然、白鈴が声を上げた。

「姫様〜！」

成廉は白鈴が指差す方を見て、ギョツとした。侍女、護衛、その他三十人余りがこちらに向かって走ってくる。

——姫って……。なんかとんでもない拾い物しちゃった？

土煙を上げて、従者達は白鈴を囲んだ。

「姫！！ 勝手気ままにどこそこ行かれては困ります！」

お祖父様にお叱りを受けるのは私達なのですよ！」

「すまん、すまん」

「ったく。どうもご迷惑をかけました」

侍女の一人が成廉に詫びた。

「いえ、馬に乗せて歩いてただけですよ」

「なにかお礼をしましょう。是非ついて来てください」

「そんな、お礼だなんて」

成廉は丁重に断ると白鈴を降ろした。

「それでは」

成廉は一礼すると人混みに入って行った。

「廉れーん！ またね」

——廉々て……。

邑の略奪。

呂布が董卓の配下になって初めての任務がこれだった。

最初は耳を疑った。仮にも漢帝国の全ての権力を握る者の言葉とは思えない。

——まさかこれも文優が献策したのか？

呂布は麾下軍が家々から金目の物を盗ってくるのを見ながら、ぼんやりと思った。

兵達の赤い肩当てがちらちら光った。麾下軍の具足を新しくした。

甲冑は自由だが赤い肩当てと黒い直垂で統一したのだ。

既に襲撃した邑々では、『蝗紅隊』と呼ばれているらしい。略奪を行う様子が蝗が群がる様に見えるからだ。

この不名誉な異名を呂布は気に入っていた。

左右から溜め息が聞こえた。

成廉も魏越も張遼も略奪はしなかった。

こんな事を自分達の隊がするのが恥なのだろう。勿論、呂布も厭だった。

だが、今は心を鬼にするしかないのだ。蝗紅隊には物だけを盗るようにし、乱暴や殺人を禁止した。

呂布に出来るのはそれ位しかなかった。

「文優、邑の略奪はあんまりじゃないのか？」

呂布は文優の館を訪ねていた。

蝗紅隊は呂布が良く制御したため、略奪で済ませた。しかし、董卓率いる軍勢が通った跡は何も残らなかった。

命さえも。男は首を跳ねられ、踏みにじられた。女は徹底的に陵辱され、最後には腑を晒された。

その行為は董卓から兵達への慰安事業とされた。兵のご機嫌取りの慰安事業は、ただの殺戮だ。正に董卓が通る邑は地獄となったのだ。

文優は少し考え込んでいた。

「その件は私も聞いております。しかし私の献策ではありません」「何？」

「恐らく李儒が独断で進言したのでしょう」

「どういう事だ？」

「李儒は今の立場が面白くないのです」

「嫉妬……か」

それなりの知恵者が他人の考えで動くのは屈辱以外の何物でも無い。董卓は李儒の言葉は文優の言葉と信じている。それでも李儒は文優の策では無く、自分の策を披露したいのだろう。

呂布はこれ以上、彼らの関係が続ける必要があるとは思えなかった。

「文優、もう潮時ではないか？」

文優は諦めた様に首を振った。

「無理です。どうしようありません。

もう李儒は私の制御下ではありません。

直接董卓様にお目にかかるうにも、李儒に偽者と言われるだけです」
文優は目を伏せたまま動かなかった。

——もう董卓を止められないのか……？

呂布は一瞬、目眩がした。

成廉と魏越は宮廷近くの酒屋にいた。毎朝の調練の後大抵二人はここにいます。

張遼は将才を見出され、中郎将（将軍）の徐栄の元で勉強してきて此処にはいない。

その日は新しく発注した戈を受け取り、二人でのんびり飲んでいました。

「最近の相国の野郎はまるで鬼畜じゃねーか」

「ちよっ、越！　ここ宮廷に近いんだから言葉に気をつけろよ」

魏越は真っ直ぐな性格だ。思った事は基本的に口にする。成廉はいつもひやひやだ。

——遼がいたら叱りつけてるな。

魏越は酔ったら手がつけられない。よほど連日の略奪が気に食わないのだろう。

成廉もまた然りである。蝗紅隊が邑を襲う様子を見るのは耐え難

かった。日頃、共に苦しい調練をしている兵達の見たく無い一面だった。

明日も洛陽城外にある歴代王族の陵墓を盗掘しなくてはならないのだ。成廉の気は重かった。

「廉々！」

「ん」

人混みから何か聞こえた。

「おい、誰か呼んでるぞ」

成廉は通りを見回した。洛陽広しと言えど、成廉を『廉々』と呼ぶのは一人だけだ。

人混みを掻き分けて白鈴が走ってくる。

「やれやれ……姫様のお出ました」

白鈴は跳ねるように駆けてきた。先日よりも飾りの多い簪に、華やかな着物を身に着けている。

「廉々！！ 雷音に乗せて」

魏越が酔った目で見下ろした。

「ぷっ。お前『廉々』って呼ばれてんの！？ ってか誰？ こいつ」

「知り合い……かな。この間この子が迷子だったから一緒に従者を搜したんだ」

「ねえ！ 雷音に乗せてよ」

相手にしてほしい白鈴は、成廉の着物を引っ張った。

「どうせまた勝手に館から出てきたんでしょ？ 帰んなきゃ駄目だよ」

「随分懐かれているな」

「いっそ嫁に貰っちゃえよ」

魏越がニヤニヤしながら言った。

「冗談だろ。こんな齡十もいってないような子供だよ？」

「子供じゃないもん！ 私、十四だよ！？」

「え？」

「嘘だろ？ 十過ぎてるとは思えねーよ」

「失礼な！ 本当だもん」

白鈴は怒り出した。余りにもうるさいので行き交う人々は何事かと見てきた。

「おい！ 廉！」

「何？」

魏越はもう、うんざりだった。

「こいつの望み通りどっかに連れて行け。これじゃあ、旨い酒も不味くなっちまう」

「……わかったよ。ほら、白鈴、雷音に乗せてやるから、大人しくして」

「本当？ やったあ！」

成廉と白鈴が出て行くと魏越以下、酒屋の皆が溜め息ついた。

「それで、お姫様はどこに行きたい」

「お城の外」

「外はまずいんじゃない？」

白鈴の眉がつり上がっていたので言う事を聞くことにした。

成廉は雷音に乗ると白鈴に手を差し伸べた。

白鈴の手は小さくて白く、か細かった。下から見上げる様子が可愛らしい。

鼓動が高まってしまった成廉は頭を振った。

——いかにいかに。こんな幼い娘に欲情してどうすんだ、僕！

「白鈴、何が見たい？ どこにでも連れて行くよ」

「じゃあねえ……。黄河が見たい！」

向こう岸が見えないくらい広いんでしょ」

「よし！」

成廉が雷音の腹を蹴ると駆け出した。

・
・
・

「うわああ！ 綺麗！」

白鈴が声を上げた。

黄河の畔についた頃には夕陽が河面を朱に染めていた。周りは誰も居ない、二人だけの世界だ。

黄河の近くで農業を営む者はいない。

黄河は大雨の度にその流れを変えるのだ。ここらでは麦が盛んに作られるが、水田もある。水田を作るとき黄河から水を汲いたりしない。必ず、支流から汲くのだ。黄河はいつ氾濫するか分からない、暴れ河なのだ。

その自然の力と闘いながら、あるいは上手く共存しながら中国王朝は栄えてきた。

黄河の雄大な姿を見て、成廉は歴代王朝の努力を垣間見た気がした。

——しかし、四百年の歴史を誇る漢帝国はこの様だ。

そう思うと、美しい夕陽も禍々しい血の赤に見えてくる。

日に日に董卓のやる事は非道くなっていた。帝が幼いからと、今では後宮は董卓の物となり、毎夜女官を犯しているらしい。

成廉は深い溜め息をついていた。

「どうしたの？」

「ん。ああ……明日からまた盗賊紛いな事をしないとイケないと思うとね」

「盗賊……？」

——本当に『お姫様』なんだな。噂も聞かないのか？

「相国のせいだよ」

白鈴の目が大きく開かれる。

「相国の欲望の為に僕達が略奪しないといけないんだ」

白鈴は下を見ていた。

「廉々、兵隊さんだったんだ。大変……なんだね」

暫し、静かな時間が流れた。

「でも……夕陽を見て、元気が出たよ。鈴と来れて良かった」

「本当？」

白鈴がまた見上げるように顔を上げた。

成廉は白鈴を抱き締めたい衝動を抑えながら、白鈴の頭を撫でた。

「本当だよ。また来よう」

成廉は白鈴の手を握ると雷音の元へ歩いていった。

呂布は最初、また董卓が気分任せて人を殺したと思った。
今日は呂布が董卓に顔を出す日だ。成廉は供の者として付いてい

る。

宮廷の中は騒がしかった。文官だけでなく武官もそわそわしているのだ。

——なんだ？ 様子がおかしい。

異変を感じ取った呂布は、急いで董卓の元へ向かった。

「相国！ 一体これは何事ですか？」

「おお、呂布。いや……実はつい先ほど曹操が陳留で叛旗を挙げたのじゃ」

「なんと」

陳留は洛陽のある司隸のすぐ東だ。

「しかも各地の諸侯に相国を討伐しようと檄を飛ばしているのだ。ちょうど、その件について相国にお話が……」

李儒だ。李儒は董卓の前に進むと衝撃的な事を口にした。

「相国、遷都をお考えすべきかと」

「何！？？ 遷都じゃと！」

「陳留を中心に叛乱軍が集結すれば少なからず洛陽にも被害が及びます」

「何もこんな時にする必要も無いじゃろう」

「こんな時だからこそです。天下が大きく動いて人民は動揺しております。平時に遷都を実行したところで上手くは行きますまい。

しかし、動揺している人民程動かしやすいはずです。やるなら今です！」

董卓の心は既に遷都へと傾いていた。心の隙に付け入る事に李儒は驚くほど長けている。

「して、次なる都はどこじゃ？」

董卓が喜々としながら聞いた。

「長安です。あちらは相国の本拠・天水にも近いです。なんと
言っても長安は漢帝国建国の地です。縁起も良いでしょう」

——このままでは本当に遷都しかねない。

「待たれよ！ その言は文優の物か？」

李儒が苦い顔をした。

「違う。しかし相国、この策は絶対実行すべきです」

「せめて文優の意見も聞くべきかと」

「ふむ。では一応、李儒は文優の意見を聞いてこい」

李儒は舌打ちして下がった。

呂布は自分でもなんで文優の肩を持つような事を言ってしまったのか、解らない。ただ、とっさに口が動いてしまった。

文優が心配になった呂布は一人、文優の館を訪れた。

「冗談を言うでない！

長安に遷都などすれば戦の勝敗に関わらず、洛陽の支配は近い内に
難しくなるではないか！

そうなれば函谷関（洛陽の西にある関所）より東を捨てたも同然だ」

「何を言う！

洛陽に敵の侵入を許せば、帝を捕られるかも知れん。そうなるより
は、最初から洛陽を空にした方がましだ！

関中（長安周辺の盆地）なら防衛も容易いのだ」

「その関中に籠もっては中原に二度と進出出来んと、なぜ解らん？」

「黙れ！！

館に籠もっているのはお主の方ではないか！ お主なんか戦略な

ど解るはずがない」

奥の部屋で待つように使用人に言われ、待っていると案の定文優と李儒の言い争いが聞こえてきた。

呂布が文優がこんなに怒鳴るのを初めて聞いた。しかし、結局夜まで続いた舌戦も李儒が董卓に偽った報告で済まそうと決心したため、ようやく終わった。

呂布は李儒が帰ると文優の室に入った。

「豪快な舌戦だったな」

「いや、お恥ずかしい。自分でもあそこまで熱くなるとは思いませんでした」

少しだけ、文優は顔を赤らめた。が、直ぐにいつも通りの真顔に戻った。

「呂布様には今の内に別れを告げておきましょう」

「別れだと？」

「相国のお心を変える事は出来そうにありません。遷都の際に洛陽を離れようと思います」

呂布は驚いた。

「下野するのか」

「私はかなり前から相国の臣下ではなかった。本当はもっと早く気付いたいたはずなのです。でも、天下に最も近い男から離れるのが惜しかったのです」

呂布はまたも自分から離れてしまう、親しい者に帰す言葉が無かった。

「どうぞ、お引き取りください。呂布様と別れるのが辛うございませす」

大人しく呂布は帰る事にした。

「文優、俺の軍師にならないか」

このまま埋もれる文優を惜しんだ呂布は室を出る前に言ってみた。文優は目を丸くしてから静かに閉じた。

「……近い将来に」

曹操。字を孟徳。沛国の人である。

祖父・曹騰は十常侍に匹敵するほどの大宦官である。

その幼少時代は複雑だった。家は裕福だったので生活は豊かだったが、家柄の為に世間からは冷たい目をされがちだった。曹操の父・曹嵩は金で官職を買っていたからだ。

才能豊かな曹操だったが、自分の境遇に半ば失望し、袁紹とつるんで悪童として名を馳せた。

袁紹もまた、袁家の中でも妾腹の子として気にかけていなかった。

二十歳に洛陽北部尉（北門治安官）に任命され功績を上げ、黄巾の乱の際騎都尉に任命されて、この乱も大活躍だった。

董卓の洛陽支配後、董卓は才能豊かな曹操を手懐けようとした。しかし、董卓の専横を目の当たりにした曹操は故郷に帰り、資金を集めて、陳留で旗揚げするに至ったのである。

更に曹操は各地に董卓誅滅と反董卓連合の誘いを飛ばした。

旧友の袁紹をはじめ、中原各地から諸侯が兵を率いてやって来た。その数は日に日に増え続けた。

総数約四十万。

全軍を纏めるのは並大抵の事では無い。そこで曹操は袁紹を総大将に指名した。名門・袁家の名において、全軍の統率を図ったのだ。しかし、表向きは董卓打倒の意志で纏まっているように見える連合軍は、あわよくば自分が第二の董卓に……、と天下に野心を持った者達の集団だった。

函谷関を一匹の黒い蛇が通過している。よく見れば、それは全て人である。

数少ない財産を背負う者。子供を連れている者。歩けない親を背負う者。全てを失い、ボロボロの衣服の者。どの目も虚ろだ。

遷都が敢行された。

何十万という人が羊の様に大人しく歩いている。少しでも列を乱せば、命は無いからだ。

直ぐに戦が始まる。呂布の任務は函谷関までの『追い立て』だ。そこから先は董卓に雍州方面を任されている、李確、郭「シ巳」が管理する。

呂布と蝗紅隊は進むことも無く、その異様で哀れな光景を見ていた。

彼らのほとんどは平民だ。董卓は遷都の際もその強欲さを発揮し、金品財貨を略奪した。

洛陽の富豪や豪族は袁紹との繋がりをでっち上げられて、皆殺しだ。更に洛陽に住む袁家の者も皆殺しだった。

呂布は初めて蝗紅隊に兵以外の人を殺すよう命じた。魏越も殺した。成廉も殺した。幸いにも張遼は徐栄の元にいたので、手を汚さ

ずに済んだ。

成廉は何人も殺した。戦の様に何も考えずに。女子供も殺した。必死に命乞いをして、見上げる上目遣いが白鈴を連想させた。

躊躇いや憐れみは後々、禍根を残す。自分達の為にも手加減はしてられないのだ。

成廉はただただ、鬼になるように努めた。

洛陽に戻ると軍議が始まった。

報告の兵が連合軍の全貌を伝えた。連合軍の攻撃は多方面からだ。

まずは西涼の馬騰、韓遂。約四万で雍州を荒らし回っている。雍州は李確と郭「シ巳」が十万の兵で守備している。

次に北軍として冀州の韓馥、河内の王匡、北平の公孫瓚、そして上党の張揚。約八万で河内に駐屯している。

本軍は南陽の袁術、豫州の臧洪、エン州の劉岱、東郡の橋瑁、山陽の袁遺、済北の鮑信、北海の孔融、広陵の張超、徐州の陶謙、長沙の孫堅、渤海の袁紹、陳留の曹操、張藐。

兵力約二二万で、その陣は黄河沿いに三百余里（約120キロメートル）にも及んだ。

「配置を言う」

李儒が諸将を前に言った。今や李儒はすっかり軍師気取りである。

「馬騰は雍州の四將軍に任せます。」

北軍は黄河を渡河したところが好機です
動きがあるまで放っておきます。

本軍には大將を一人任命して、要塞・虎牢に十万の兵を置けば安心です。

相国は残りの軍と洛陽に駐屯なさって、万全の備えで迎え撃てば、連合軍など者の数で無いでしょう」

董卓は立ち上がり叫んだ。

「よくぞ申した！ 皆の者、連合軍など恐れるに足らずじゃ。

胡軫！お前を総大將に任ずる。副將に呂布と葉雄をつける。虎牢へ出撃しろ」

「応！」

呂布は官舎に戻ると成廉に黒の甲冑と白の戦袍を持ってこさせた。この白装束は黄巾の乱以来、呂布と成廉、魏越、張遼の四人に欠かせない物だ。

「成廉、この戦本気で行くぞ」

「僕はいつだって全力です」

成廉は肩当てを留める手を止めて言った。

「では、いつも以上の実力を出せ」

「……どういう意味ですか？」

「天下は広い。俺より強い豪傑がいるかもしれないぞ」

成廉は噴き出した。

「無いですよ。奉先さんは天下一の漢です。戦の前に謙遜ですか」

呂布がいつもより小さく見えた。

「成廉、天下は俺達が思うより、遥かに大きいぞ。まあ、とにかく全力だ。蝗紅隊がどの程度、天下に通じるのか試すいい機会だ」

胡軫率いる十万の軍が肅々と洛陽を出立した。虎牢に入城したのは二日後の夕方だった。

ふとすると、成廉は独りになりたくなる。正確には雷音と共に。

その日は戦の前の重たい空気に押しつぶされそうになった。そんな時、成廉は着物だけ、雷音に鞍も載せず鬘を掴んで駆けさせる。

成廉の気持ちを汲み取って、雷音も全力で駆けたり、軽く駆けたりする。

——風になれる。

成廉は馬邑の頃より大きく、立派な武人に成長した。しかし、心まで武人になりきれないのだ。

今でも呂布の足下にも及ばない。いつでも成廉に見えたのは呂布の背中までだった。

——でも、風になれば横に並べられる。

雷音に乗った時。呂布に最も近付けるのはその時だけだ。他はだめだ。

——未だに死ぬのは怖い。自分が人を殺すのも怖い。でも、呂布に置いてきぼりを食らうのはもっと怖い。

未熟でも成廉は呂布を追いかける事を止めるわけにはいかなかった。

「走れ！雷音！」

雷音が加速する。

「もっと……もっと速く！」

その言葉は成廉自身に叫ぶかのようだった。

虎牢開放

虎牢の城塞前に一軍が布陣した。

どの兵も中原の者と異なる言葉を話している。連合軍先鋒・孫堅の軍である。

孫堅は揚州で僅か齢十八の時、海賊退治で武功を挙げた男だ。長沙太守に任命されてからは地元のごろつきを見事に纏め上げ、精強な軍にのし上がった。

精強な軍が参戦しているとはいえ、連合軍はその大軍ゆえに消費する兵糧も莫大だ。要するに固く守備に徹すれば、勝手に自滅するのだ。

胡軫は城門を固く閉ざし、守りを固めた。

対して孫堅は守将胡軫を誘うように、鶴翼の陣を構えた。どの兵も馬鹿にしたように武器を下ろして、座り込んでいる兵もいる。

胡軫はすぐに頭に血が上った。呂布、葉雄を呼ぶと攻撃命令を下した。

「あのような軍勢、叩き潰してやる！」

「將軍、お言葉ですが」

葉雄が反論した。

「明らかに敵の誘いだ。今は戦機ではない」

葉雄と胡軫では将器に大きく差がある。胡軫は蛮勇だけの凡将だ。「フンッ。葉雄、いつから臆病者になったのだ？」

胡軫は聞く耳を持たなかった。

呂布は興味が無かった。負けさえしなければいいのだ。

——所詮他人の戦……か。

「呂布は右翼、葉雄は左翼を攻撃しろ。いくぞ、開門！！」

重厚な門がゆっくりと開いた。

敵が出撃したのにも関わらず、孫堅軍は余裕の構えを崩さない。その様子が更に胡軫を怒らせたようだ。出撃すれば、孫堅が慌てると思っていたのか。

「突撃！！」

胡軫は剣を抜いて喚いた。

それを聞いて呂布も

「我が隊をもいくぞ。俺を追ってこい」

一声上げると、赤兎を足で締めた。

蝗紅隊は白の三点を先頭に黒い塊となった。同時に孫堅軍も前進してくる。

敵陣までもう少し、という所で、敵陣で指揮旗が大きく合図した。

——なんだ……？

呂布は目を見開いた。突如、敵陣が鶴翼から錐行の陣になったのだ。信じられない用兵だ。普通の軍には不可能な動きである。

呂布と葉雄はギリギリ孫堅軍と擦れ違い、胡軫の軍だけぶつかった。

——まずい！

このままでは胡軫の軍だけに戦力が集中して、突破されてしまう。

「敵の横っ腹を突く！ 続け！」

呂布は赤兎を棒立ちにさせると体重移動で左に曲がった。蝗紅隊も見事に隊を崩さないで旋回した。

さすがに孫堅軍にはこの動きは想定外だったようだ。敵軍は明らかに動揺している。

全力で駆ける馬の進路を直角に曲げる事は難しい。呂布もまた、信じられない用兵をやって見せたのだ。

成廉は戈を思いっ切り振り下ろした。戈の刃は敵兵の兜も貫く。雷音の高さのおかげで振り下ろす攻撃は歩兵にとって脅威だろう。蝗紅隊の皆はこの勢力でも校尉として申し分ない実力者だ。いくら孫堅軍が精強とは言え、蝗紅隊の敵では無い。血を噴き出すのは全て敵兵だ。孫堅軍は二つに裂かれ始めていた。

呂布は味方の旗印を見つけた。

葉雄だ。葉雄もまた、大将の危機を察知して孫堅軍を分断しようと横を突いていたのだ。

しかし、葉雄の麾下が必死に闘っているだけで、葉雄が見当たらない。

「奉先様！」

魏越が一人の敵将を指差した。その方を向くと、敵将の手には葉雄の首があった。葉雄は討ち取られていた。

魏越は拳を握り締めた。

「そこなる将、名を名乗れ！ お手合わせ願おう！」

「あっ。ちよっ、越！！」

成廉は止めようとしたが、それを呂布が制した。

「ハッ！ 若造が命を捨てに来おった」

敵将は葉雄の首を供の者に転がした。

「俺は孫堅軍の勇将、祖茂。今更逃げるなよ！」

周りの兵達の動きが止まった。魏越までも一瞬身じろいだ。

孫堅軍に四将あり。程普、韓当、祖茂、黄蓋。

彼らは勇猛で名が知られ、『四天王』の異名を持つ。

——そのうちの一人が目の前にいる。

魏越は思わず武者震いした。

「どうした、小僧。怖じ気づいたか？」

「なんの！なんの！！ 行くぜ！」

魏越は馬を寄せると烈しく打ちかかった。魏越は見事な身のこなしで祖茂と互角の勝負だ。

しかし、呂布は勝負がつく様に見えなかった。力が拮抗して、どちらも決め手を出せないのだ。

魏越が横に一闪、祖茂がそれを弾いて反撃するが魏越は受け止める。

「小僧、やるな！？」

「まだまだ！」

更に烈しさを増して、二人は打ち合った。

二人の闘いは永遠に続くかのようにだった。

ふと、周りを見ると蝗紅隊は孫堅軍に包囲されている事に成廉は気付いた。

葉雄の麾下は主の死を知って散ったのか、それとも討ち取られたのか、一人もいない。

「奉先さん、ちょっとまずいんじゃないですか？」

「ああ、丁度どこに退こうか考えている」

「どこって虎牢の要塞に退却すれば……」

黙って呂布が指差した虎牢は固く城門を閉ざしていた。

「そんな……」

多大な犠牲を払って、胡軫は虎牢へ逃げ込んだのだ。城外に取り残された兵達は孫堅軍の餌食となった。

「どっどうするんですか」

虎牢の西には中継拠点があり、徐栄と張遼が守備している。

「黄河沿いまで北進して虎牢の西まで迂回する」

風を切る横薙の刃を寸でのところで避ける。魏越の兜の緒が切れた。

「どうした、小僧。動きが鈍っておるぞ」

実際に魏越に疲れが見え始めていた。対して祖茂は息が少し上がつている程度だ。

力量で互角な二人でも、経験において魏越は遠く及ばない。祖茂は孫堅に従い、漢帝国全土を叛乱鎮圧の為に駆け回ったのだ。并州の中しか知らない魏越では、時間が経てば経つほど二人の差が色濃くなった。

——くそつ、俺じゃ勝てねえのかよ……。

「越！ 退却だ！」

成廉が駆け寄った。

「嫌だ。まだいける！」

「魏越！ これは命令だ」

呂布もやって来て言った。蝗紅隊は既に小さく纏まらせている。

「行くぞ！」

呂布は駆け出した。

「っ……くそ」

魏越は唇を噛んだがすぐに馬首を返した。

「そう易々と逃がすか！」

祖茂が追いつがる。すぐさま成廉が弓を引き絞ると、振り返りざまに矢を放った。

「くっ!？」

祖茂は素早い身のこなしで避けようとしたが、矢は肩に突き立った。

「ちっ……使い手の多いことよ」

祖茂は諦めたのか、矢を抜くと引き返した。

「すまない、廉。借りができたな」

「お礼とかいいって。でも、僕が危ない時も助けてよ」

「任せとけ！」

成廉と魏越は笑い合った。

「おい！ まだ敵中だぞ」

呂布が戒める。

孫堅軍を突破するのは、そう容易そうでも無さそうだった。

眩しい位の朝焼け。明るい朝日が身体を照らす。気持ちのいい朝だ。

成廉は川で顔を洗った。

昨日の疲れからか、程良い痛みで全身が怠かった。

孫堅軍を突破した呂布らは黄河の畔の森に野営していた。

死人は無かった。半分近くの兵が切り傷だらけだったが、致命傷も無かった。日頃の調練が役に立ったのだろう。

炊事はなるべく控えていた。しかし、食糧は三日分しかない。徐栄のいる拠点までギリギリか、保たない位だ。

――腹減ったなあ。奉先さんどうすんだろう

……そうだ、黄河の魚とか採れないかな。

成廉はそんな事を黄河を眺めながら、ぼんやり考えていた。

「ん」

河面に影が見えた気がした。

黄河は広い。対岸が見えるかどうかといった感じだ。

河面は朝日で光り、眩しい。成廉は目を凝らした。

船だ。

それも輸送船である。船団を組んで、こちらに向かっている。

旗印は見えない。だが友軍では無いのは確かだ。

黄河の北・河内には連合軍が駐屯しているはずだ。つまり、北軍は南進して来たのだ。

「あわわ、こりゃまずいって」

成廉は慌てて呂布の元へ走った。

「奉先さん！ 大変だ！」

「なんだ？ 騒がしい」

成廉は息を切らして幕舎に突っ込んだ。

「た、対岸から敵が……」

「何！？ 数は？」

「遠くでよく判りませんでした、かなりの数です」

「そうか、助かった」

「は??」

呂布は満足げに頷いた。

「干し飯を全部食べるように通達しろ。腹が減っては戦はできん」
「襲撃するには相手が多過ぎです!」

呂布はニヤリとした。

「まあ、言う通りにしろ。今夜は腹一杯飯にありつけるぞ」

呂布は立ち上がった。

北軍の第一陣が上陸した。約一万といったところだ。『公孫』と
『劉』の旗が見える。

「まだですか?」

魏越は待ちきれない様子で呂布に聞いた。どうやら魏越は伏兵に
向いて無いようだ。

現在、蝗紅隊は津（渡河拠点）近くの森に伏兵中だ。

呂布の作戦は輜重隊の襲撃である。大軍が渡河する過程は最初に
精鋭部隊が、次に輜重を運び、最後に本隊が渡河する。

本来なら糧秣で困らないために精鋭部隊を先発させるのだが、呂
布はその先発隊がすぐに動くと言ったのだ。

——この状況なら功を焦って、洛陽へむかうはずだ。

この渡河拠点は虎牢の北西に位置している。そして、洛陽まで目
と鼻の先の距離である。

虎牢の軍は孫堅軍に釘付けで、洛陽にいる董卓の軍は精鋭では無
い。今が洛陽に攻め入る好機なのだ。北軍の先発隊がこの機を逃す
はずがないのだ。

蝗紅隊の全員は獲物を見つけた虎の様に微動だになかった。

敵の先発隊・公孫瓚軍は陣を組んで整列すると、輜重隊を待つて待機した。

季節は冬。身も凍る冷たい風が吹き荒れる。

蝗紅隊の伏兵する森は風が無いが、先発隊は見ているだけで寒くなりそうだ。

とはいえ、呂布ら北方の者にとっては大した寒さでは無い。ただ、敵を眼前にして動けない状況に悶々としていた。

正午過ぎにようやく輜重隊の船が見えてきた。

「まだだ」

呂布は逸る兵達を抑える。

先発隊の存在で安心して、のんびりと輜重隊が糧秣を降ろし始めた。

すると、全てを見届けずに公孫瓚が動きだした。

寒さで動きの悪い公孫瓚軍に対し、『劉』の旗を掲げた一千余の一隊の動きが良くて、呂布の印象に残った。

先発隊の土煙が消えるのと同時に輜重隊を乗せて来た船が離岸した。輜重隊は柵を使って簡単な屯舎は作ろうとしていた。

「よし、行くぞ！」

全員が馬に乗ると森から飛び出した。

蹄の音が響くだけで、声も無く殺到する蝗紅隊に輜重隊は気付いた。呂布には慌てふためく様子が良く見えた。

密かに渡河して洛陽に奇襲をかけようとしていたのに、自分達が奇襲されたのだから当然だろう。

闘争心を抑えられた蝗紅隊の兵一人一人の働きは凄まじいものだった。五千余の輜重隊はその殆どが全滅した。

「ここにある物資から、あるだけの矢を持って来い」

輜重隊が輸送した矢が山積みになされた。

「全員持てるだけ矢を持ち、津にて待機しろ」

矢には魚油に浸した布を巻き付けて、火を着けられるようにした。

「奉先さん、敵を船ごと燃やすつもりですか？」

「そうだ」

「止しましょう。火がこちらに広がります」

風向きは強い北風だ。船に火が着いたら、津まで燃える。

「それが狙いだ。敵を焼き滅ぼして、津も焼いて使い物にならなくなる。一石二鳥だ」

日が傾いてくると多数の船団が近づいてきた。『王』の旗、王匡だ。

「構え！」

蝗紅隊は潜んでいた津から棧橋に飛び出した。接岸しようとしていた王匡軍は突然の事に対応出来ない。呂布も自ら弓を構える。

「放てえー！」

合図と共に一千本の火矢が呻りを上げて飛び立った。

空一面、赤く染まる。全て敵の船に吸い込まれていく。次の瞬間には船は炎上していた。

ある船は漕ぎ手が全滅し立ち往生。またある船は突き刺さる無数の矢の重みで転覆した。

「水面の動くもの全てが的だ。一兵も逃がすな」

全ての船が使い物にならなくなると、今度は黄河に辛うじて浮いている兵に射かけはじめた。

しばらくすると、津に火が燃え広がった。

同時に西に土煙があがる。異変に気付いた公孫瓚が引き返してきたようだ。

「退却だ。十日分の糧秣を持って」
蝗紅隊は素早かった。

公孫瓚軍が辿り着いた光景。

それは荒らされた糧秣と陸上、河面を埋め尽くす死体だった。津には火が放たれ、黄河に浮く死体はどれも十数本の矢が突き立っている。

そこには地獄が造られていた。

蝗紅隊は中継拠点に辿り着いた。

「よく来た、呂布殿」

守将の徐栄が出迎えた。

「戦の疲れを癒してくれ」

「感謝する」

その日はそのまま留まる事になった。

「大活躍だったな」

成廉と魏越が馬の世話をしていると背後から声がかかった。

「あっ、遼！」

「おう」

三人は顔をほころばせた。

「しばらくだったな」

張遼は二人の仕事を手伝うと三人で酒屋に向かった。こんな風に三人が食事をするのは久しぶりである。

「兵法はどう？」

成廉は張遼に聞いた。

「うん。なかなか奥が深いよ」

「どうせ戦は力だろ」

魏越が肉に食らいつきながら言った。

「ははは。俺も前までそう思ってたよ

でも、兵法を上手く活用出来れば、力でも数でも劣っていても戦で勝てるんだ」

「確かに。先日も胡軫將軍は何倍もの兵力だったのに孫堅に負けた」
成廉は納得したように頷いた。

先日の孫堅軍の驚くべき動きも兵法が関わっているのだろう。その速さに胡軫は対応仕切れなかったのだ。

「それにしても奉先さんは何で遼に兵法を学ばせたんだろう？」

「ホントに不思議だよな。俺は越が勉強するべきだと思うぞ」

「どういう意味だ？」

魏越は手を止めた。

「お前勢いに任せて一騎打ちしたんだろ。しかも四天王の祖茂と」

「う……何で知ってたんだよ」

どんなに強くなっても魏越は張遼に弱い。

「戦は力だけじゃないんだから、もっと自覚しろよ」

「ちえっ、分かったよ」

魏越がそっぽ向くと成廉は慌てて二人に酒を注いだ。

「まあまあ、喧嘩は止そうよ」

三人の愉しげな声は夜が更けるまで続いた。

翌日、蝗紅隊は洛陽に帰還し、虎牢での戦況を報告した。

董卓は葉雄が死に、胡軫が敗退した事を知って怒り狂った。

呂布は北軍撃退の功により中郎将に任命され、新たに一万の兵がつけられた。

「五月蠅い連合軍を叩き潰してやる」

と、董卓も李儒の制止を振り切って、呂布と共に出撃した。胡軫は降格し、洛陽の守りにつかされた。

代わりに胡軫の残軍を指揮するのは徐栄である。

こうして虎牢を挟んで北軍の生き残りを含めた連合軍・約二五万と董卓軍十五万が対峙した。

徐栄は胡軫の残軍を掌握すると、守りを固めた。孫堅軍はかなり手強い。迂闊に手を出しても被害が増えるだけだ。

しかし、そんな睨み合いが何日か続くと、後軍の董卓から出撃を催促する使者が何人もやって来た。

「まったく、相国は何考えておるのだ」

「將軍、どうなさいました？」

徐栄が無茶な書状を読んで思わず愚痴をこぼすと、張遼が尋ねた。張遼は校尉（部隊長）として徐栄を支えていた。徐栄はこの若き副将を気に入っていた。

「おお、張遼か。実は相国から出撃命令が何度も来ているのだ」

「この微妙な戦況ですか？」

虎牢はほぼ包囲されていた。

西に董卓率いる七万がいるものの、すぐ目の前に勝利で士気盛んな孫堅軍、北には北軍の生き残りである公孫瓚軍が布陣している。

もう、北軍で連合軍に参加しているのは公孫瓚だけだ。王匡は命からがら逃げおおせ、張揚は呂布の襲撃を待っていたかの様に、王匡軍が全滅すると晋陽に帰ってしまった。

とは言っても、今出撃したところで勝算はない。

「どうしようか……。何かしら行動を起こさねば罪を問われてしまう」

徐栄は困り果てた。

「それならば、俺に諜報をさせてください」

張遼の言葉に徐栄が眉をひそめた。

「何も校尉のお前がする事も無かろう」

「相手の内情を知れば戦機を見つけられるかもしれませんが。ただ諜報するだけではなくて、戦の際には内部から攪乱も出来ます」

張遼の言う事は正しい。徐栄は張遼に賭けてみることにした。

「よし、お前に五百の兵を与える。好きにやってみろ」

早速、張遼は配下から揚州出身の者を四名程選抜すると、孫堅軍の陣営に潜り込んだ。

孫堅の兵は使う言葉が違う。中原の言葉でも通じはするだろうが、怪しまれる事間違い無い。張遼は命令だけで終始口を開かなかった。

張遼が潜り込んだ隊にその日の食糧が配給された。渡された量は虎牢の守兵の半分以下だ。張遼からしてみれば腹の足しにもならない。

連合軍は大軍の寄せ集めな為、大体予想はしていた。しかし、この量はさすがに予想以上である。

張遼は配下の一人に食糧官に反抗的な態度をとるように耳打ちし

た。

「おい！ 何で食いものの取り分が少なくなったんだ？

こんなんじゃないあ戦なんてやってられねえぞ」

意外にも孫堅軍の兵からも声が上がった。

「そうだ、そうだ！ かれこれ一月だぞ」

「孫堅様が俺達にこんな仕打ちをするはずがねえ。理由があんなら教えろ！」

食糧官はかなり困った顔をして必死になだめようとしたが、兵達の騒ぎは広がる一方だ。

食糧官は諦めたのか状況を説明し始めた。

連合軍糧秣を管理している袁術から糧秣が届けられない、と言うのだ。

それを聞いた兵達は更に騒ぎ立てた。明らかに袁術が孫堅の緒戦の功を妬んでの行動だ。

——上手く利用すればこの状況を打破出来る。

張遼は配下に他の隊にも誰によって飯が食べれないのか話を広めさせた。すぐに袁術を批判する声と食糧を要求する声が上がった。

「兵達に知れ渡ってしまったか……」

孫堅軍はこの隊も食糧配給を叫んでいる。孫堅はすぐに決断した。すなわち、本陣にいる連合軍総大将・袁紹に直談判したのだ。

袁紹と袁術は従兄弟である。孫堅は総大将であり一族である袁紹に命令してもらえば袁術も動くだろうと読んだのだ。

張遼は孫堅が本陣へ向けて出立した知らせを聞くと、すぐに闇夜に紛れて脱出した。袁術は絶対動くはずだ。

張遼は虎牢の南へ迂回した。虎牢の南には山と深い森が広がっている。その森からなら誰にも見つからずに虎牢へ帰還する事が出来た。

虎牢の守兵は驚いた。それも仕方が無い。急に張遼が南の森から現れたのだ。

張遼は城内に入ると、徐栄の元へ向かった。

「随分早い帰還だったな。それで、何が分かった？」

「連合軍は糧秣の供給が上手く行ってません。孫堅軍は空腹状態ですが、ようやく新たな糧秣の輸送が決定しました。孫堅軍は士氣盛んになるでしょう」

それを聞いて徐栄は目を閉じた。

「そうか……このままではまずいな」

「いえ、むしろ好機です」

「と、言うത്？」

「糧秣が届いて士氣が最高潮に達した時。その時を叩くのです」

即ち、張遼の作戦は袁術の輸送隊を密かに襲撃し、そのまま輸送隊になりすますと、兵糧庫に運び込んだ上で火を放つというものだ。孫堅軍が混乱したところを徐栄が出撃する。

机上の作戦としては完璧である。ただし、本当にこうも上手く運べるか判らない作戦でもある。

特に輸送隊になりすます軍が危険だ。しかし、その役を張遼は勤めると言って、配下を二千まで増員してもらった。

「それでは、火の手を合図に総攻撃ということだ」

「うむ、次に会うのは敵陣のど真ん中だ」

——張遼なら失敗は有り得ない。

徐栄にそう思わせるほど、張遼の信頼は厚かった。
その日の夜。張遼は騎兵一千、歩兵一千の構成で出撃した。

「隊長！ 前方より一千程の隊がこちらに参っています」

袁術軍輸送部隊・隊長は眉をひそめた。

「旗印は？」

「『孫』です。孫堅軍からの護衛隊かもしれません」

「ふむ」

『孫』の旗を掲げた一隊は輸送隊の前で停止すると、隊長と思しき男が頭を下げた。

「主・孫堅様の命により護衛の増援に参りました。ここらで山賊が荒らし回っているので気をつけよとの事です」

「ご苦勞、お主達は後方を頼もう」

「わかりました」

護衛隊の隊長、張遼は口元を上げた。

輸送隊がしばらく進軍していると、左右を森に囲まれたところで襲撃を受けた。

「山賊です！」

「軍を前に。孫堅軍は我々と待機」

——好機。

輸送隊は僅かの兵と輸送に駆り出された農夫、そして張遼率いる董卓軍のみとなる。

張遼は隊長の元へ行った。

「おい、所定の位置につけ」

気付いて隊長が言った。

「散れ」

「何？」

「散らなきゃ命は無いぞ」

張遼は拔刀すると隊長を斬り倒した。

「殺れ！」

獣達は牙を剥いた。

「なっ何しやがるんだ！」

輸送隊は突然の攻撃に混乱した。

北に敗走されては困る。孫堅にこの事が知られてはまずいのだ。

張遼は農夫達を南へ追い散らすと、すぐに山賊と戦闘中の隊を挟撃した。

この山賊も勿論、董卓軍である。前線に出ずに怠けてばかりの袁術軍一隊では相手にならなかった。

その殆どを殲滅すると、張遼は配下に死体の甲冑と替えさせた。こうして、兵は全て董卓軍の袁術輸送隊が出来上がった。

張遼率いる輸送隊は夕暮れ時に孫堅の陣にたどり着いた。

「これで明日から配給が増える」

「よっしゃ！董卓なんかすぐにでも滅ぼしてやらあ」

糧秣を担いだ兵や荷車が陣門を通るたびに孫堅軍の兵達は嬉しそうに騒ぎ出した。

「ご苦労だった」

孫堅自ら出迎えた。

「輸送した糧秣は夜までに蔵へ運び込んでくれ」

「かしこまりました」

張遼は頭を下げると作業に戻った。

しかし、張遼は孫堅がその背のある点を凝視している事に気が付

かなかった。

張遼の背中側の甲冑に血痕が付いている事に孫堅は気付いた。

「これで最後です」

糧秣を全て納め終わった。

周りは既に真っ暗だ。空は厚く雲が垂れ込んでいる。

「將軍はもう出撃の手筈を整えているだろう。皆、例の物を出せ」
張遼は虎牢を出立するに当たって、配下に竹筒の水筒を持たせていた。ただ中身は水では無く、魚油で充たされている。

張遼の作戦の締めは、蔵の焼き討ちだったのだ。

「着火」

竹筒の口には布が通されている。張遼の号令と共に竹筒に火が灯される。火の塊が次々と各蔵に吸い込まれてゆく。冬の乾燥した北風が味方して、火は容易く燃え広がった。

天にも届かん勢いで燃え盛る炎を前に、張遼と二千の配下は雄叫びを上げた。

「孫堅様が仰ったとおり南への街道は死体だらけです」

報告の兵の知らせを受けて、孫堅は立ち上がった。

孫堅は輸送隊の隊長の背中の血痕がある事に疑問を持ち、兵に調べに行かせていたのだ。

「すぐさま袁術軍の輸送隊を捕縛せよ!! 抵抗するなら斬ってもかまわん。奴らは董卓軍の回し者だ!」

いきり立った孫堅は帷幕の外へ出た。

「ッ!!」

雲が赤々と染まっている。それは兵糧庫の方だった。

——遅かったか！

空が赤々と燃えている。それは日の出と見紛う程である。

「張遼め。派手な狼煙を上げよった」

徐栄は上機嫌に頷いた。

「これより孫堅軍に奇襲をかける！ 皆の者、日頃城から出れない鬱憤を吐き出せ！」

五万の軍勢が孫堅軍に襲いかかった。同時に内部からも張遼が蜂起して、孫堅軍は大混乱に陥った。

「退くな！ 堪えろ！」

孫堅自らは張遼の二千を食い止めた。

——このままでは危険だ！

孫堅配下、四天王の祖茂は孫堅の命を助けようと「御免」と叫んで、孫堅の赤い巾を取り上げて被り、身代わりとなって張遼を引きつけた。

その間にも孫堅軍は徐栄軍に包囲されかかっていた。なんとか孫堅は四天王の程普、韓当、黄蓋に護られて、包囲を切り抜けて脱出した。

付き従う百騎余りと共に南へと敗走していった。孫堅軍の半分は討ち取られ、残りは四散した。

祖茂を追っていた張遼だったが途中で見失い、徐栄と合流して虎

牢に帰還した。

堂々の凱旋である。

城塞内は労いと大きな歓声に包まれた。

辺り全てが孫堅軍の兵の死体で埋め尽くされた戦場に『劉』の旗を掲げる一隊の軍勢が立ち尽くしていた。

「ちっ。……一足遅かったか」

その隊の先頭の三人のうち、一番体格の良い男が悔しそうに言った。なかなか髭の生え揃わないその青年の目は少年の様に澄んでいる。

「徐栄がここまで戦が巧いとは……にわかに信じられんな」

変わって、首が隠れる程立派な髭を生やした男が感心したように呟いた。

「徐栄じゃねえ」

戦場にも関わらず、ひときわ目立つ洒落た服を着た男が遮った。その尋常じゃない耳たぶには沢山の装飾品で飾られている。

誰がどう見ても将には見えない。

「夜襲を考えたのは、自ら兵糧庫を焼いた張遼って奴の仕業らしい」

「兄者、それは本当か？」

「ああ、俺様の勘だ。間違いないよ」

二人の男は首をすくめた。

「また大兄の勘かよ」

「やはり徐栄の業だ。あの男、油断ならんな」

「おい！俺様の勘を舐めんな！今まで救われた事が何回あると思っただ」

「アブナイ目に遭った方が多いぞ」

「そうだ、その度に尻拭いすんのは俺達じゃねえか」

非難された洒落た男は悔しそうに馬上で喚きだした。

洒落た男が劉備、字を玄德。

髭の男が関羽、字を雲長。

大男が張飛、字を益徳。

この三人、未だ公孫瓚軍の一介の将でしかないが、後に天下を騒がす男達である。

徐栄が孫堅軍を打ち破った知らせを受けて、董卓は歓んだ。

「李儒、この機に連合軍を叩くのじゃ」

今では董卓の知恵袋は李儒である。

最初、文優が下野したと李儒から聞かされた時、董卓はとても不安になった。自分の判断だけでは浅はかでは無いか、と常に文優の意見を聞いていたからである。

しかし、そこですかさず李儒は自分を売り込んだ。

李儒としては文優の意見をただ、董卓に伝えるだけの仕事など面白くもなかった。

董卓が顔も合わせていない文優の進言を実行し、李儒の進言を退けた時は屈辱にまみれた。

——私は館に籠もる者以下か!?

怒りと悔しさに堪えかねた李儒の行動は文優などいない者として振る舞う事だった。最初から董卓と文優の信頼性など薄っぺらい物

だった。

李儒の非道な献策とそれを容れる暴虐の董卓から、文優はあっさり手を引いた。董卓への影響力は容易く文優から李儒へと移行したのだ。

自分の勢力を誇示しながらも裏では人民が己をどう見ているのか、とびくびくしているのが董卓という男の本性である。

著名な知識人を侍中に置いてはその意見を頻繁に聞いていた。

しかし、それでも李儒に及ぶ程影響力を持った者は現れ無かった。

孫堅が敗れて連合軍は動揺したがむしろ、その結束を強めた。総大将・袁紹は全軍を虎牢に前進させると、何重もの陣を組ませた。本気の全軍での攻城戦である。

流れるような連続的な攻めで、一気に要塞を抜く構えだ。

そこで李儒は一計を案じた。

「相国、一度連合軍とぶつかったら、洛陽を棄てましょう」

「そんなあっさりと棄てても良いものかな」

先日の遷都で民は一人も居ないが、それでもかつての都である。

董卓は眉をひそめた。

「天下が固唾を飲んで見守るこの戦い。図らずも諸侯はどちらに着くべきか迷っておるでしょう。」

そこで洛陽に火を放てば、連合軍が来たところでどうしようもございません。都でさえも意のままに出来る相国の力を見せつけてやるのです。

そうすれば天下が容易く相国の物になるのも然りかと……」

「なるほど。しかし、儼は戦がしたいのじゃ」

董卓は子供が強請る様に不満そうである。李儒はなだめながら「どうかご辛抱を。相国の身の安全の為です。私は相国が戦だけで無く、戦略でも優れている事はよく存じております」

ふふん、と董卓は鼻を鳴らすと、まんざらでもなさそうだった。

「袁紹や曹操など次の機会に叩き潰せばよいのです。連合軍には呂將軍を出撃させましょう」

「よし！ いいだろう。全軍に通達しろ」

夜明けと共に連合軍第一陣が城壁に寄せてきた。

盾を上に向けた兵が城壁に取り付こうと、駆け寄る。中には木製の兵器を運搬する者もいた。

『雲梯』

攻城戦では欠かせられない兵器だ。車輪のある移動可能な台に梯子を付けた物である。梯子の先端部には鉤があり、これを城壁に引っ掛けて固定する。

しかし、雲梯ですぐに優勢になるわけでも無い。あくまでも攻城戦において有利なのは籠城側である。

雲梯の鉤を掛けられそうになると、虎牢の守将・徐栄は兵達に鉄板を城壁から提げさせた。

鉤は掛かる事無く、弾き返された。引っ掛ける事に失敗した雲梯に火矢が集中する。冬の乾燥した空気の中、雲梯はあっさりと燃えてしまった。

「全軍揃いました」

成廉は呂布に報告した。

城塞の東門には呂布率いる一万の軍勢が集結していた。

董卓より出撃命令が下された。

同時に連合軍の中軍を抜けたら、引き返し、その日の内に徐栄と共に退却するよう命じられた。

——董卓は洛陽を棄てるつもりか。

そもそも、中軍まで突破しろ、という命令も無理難題だ。

それは一万の軍勢で十万もの軍勢を突破しなくてはならない。恐らく十カ所の陣を抜かなくてはならないだろう。

だが、呂布も成廉も魏越もやり遂げる自信があった。

——所詮、連合軍など烏合の衆。蝗紅隊と涼州で生き延びてきた騎馬兵なら可能な話だ

「開門！」

冷たく澄んだ空気に、呂布の声が響いた。

いきなり開いた城門に連合軍の兵達は驚いた。が、すぐに好機、と一人の校尉が突入体勢に兵を動かした。……と、そこでその校尉は城門に立ちふさがる巨大な黒い影に気が付いた。

その黒の先頭には雪の様に白い戦袍を身に纏った三騎が校尉の目に入った。そしてその後ろには『呂』の旗がはためいていた。

「貴様は！ 呂ッ……」

校尉の首が吹き飛んだ。

彼の視界に最期に映ったのは燃える様な赤の体毛の馬と紅い肩当てだった。

「俺に続け！」

呂布が天高く、方天戟を突き上げると

「応！！」

と兵達も雄叫びを上げて、敵陣に突撃した。

先頭の呂布が横に一閃すれば血飛沫が上がって、道が出来る。

成廉は呂布の背後につくと騎射で援護した。成廉は騎射の腕を更に上げていた。当たれば即死、とまではいかないが、弦音がする度に敵兵に矢が突き立っていた。

成廉の隣りでは魏越が護るかの様に併走した。魏越はあまり兵卒に興味が無いらしく、繰り出される槍を弾き、近づく敵兵を殺すまでに留まった。お蔭で成廉は安心して弓を引くことが出来た。

呂布軍が近付けば敵兵の群れは畏れをなした様に左右に揺れた。連合軍の幾重もの陣はまさしく人の波だった。

次なる陣にぶつかれば、空気をも震わす衝撃と数多の兵の熱風が呂布の顔を打った。

呂布は二、三人程の将を討ち取っていた。校尉なら十人は超え、兵卒となればその数は数えきれなかった。

が、手柄に興味は無い。首級を挙げる事無く、打ち捨てた。今、優先すべき事は敵陣の突破だ。呂布は極力、自軍の騎兵を生還させたかった。

騎兵は敵陣で止まれば、苦戦は必至だ。騎兵とは走り続けなくてはならない軍なのである。

とにかく、駆けつけ、ようやく連合軍の中軍に突入した。

そこには呂布の生涯の宿敵とも言える男達が待ちかまえていた。

中軍に突入すると、呂布は違和感を覚えた。勝手に道が出来ていたのだ。が、呂布は一抹の不安を捨て去り、とにかく軍を駆けさせた。今はすぐにでも退却したかった。

四方八方どこを見ても敵である。ここは『死地』なのだ。

中軍をある程度抜いた所で、呂布は素早く軍を反転させた。ギリギリ目の前まで迫っていた敵が急に反転したので、顔の引きつった連合軍の兵達は啞然とした。

突然の事に反応出来ず、兵達は呂布軍を見送るしかなかった。敢

えて追いすがろうとする者もいなかった。

呂布軍は先ほど不気味に道を空けていた陣に近付いた。その軍勢の旗印は『曹』の文字。曹操の軍勢である。

「奉先さん！ あの軍、曹操が率いてますよ！」

成廉が叫んだ。言いたい事は良く分かる。厄介な相手なのだ。「分かっている」

曹操は黄巾の乱の際、その名を轟かせた。実戦経験の無い官軍を率いて、輝かしい功績を打ち立てている。

それは呂布だけで無く、皆承知だった。

——さあ、どう動く？ 曹操。

このまま曹操が何もして来ないとは思えなかった。

呂布が二手に別れた曹操軍の間に飛び込んだ。兵達も後に続く。

その様子を曹操は見ていた。

「締め上げろ！」

曹操が叫ぶと二手の軍勢は一斉に呂布軍に向きを変えた。曹操軍の兵が手に握るのは全て矛だ。何千という矛が騎馬隊の横っ腹に突き込まれた。

馬が悲鳴を上げる。脚を折る馬。棒立ちになる馬。矛で軀を貫かれ、絶命する馬。

被害は甚大である。

しかし、呂布軍の兵は歴戦を勝ち抜いてきたのだ。落馬した者は止まる事無く走り続けた。

曹操の陣を抜くまであと少し。兵はほとんど失わなかったが、馬の犠牲が大きかった。

呂布が後ろを振り返ると騎乗している兵は七千程。およそ三千頭もの馬を失った事になる。

呂布は齒噛みした。勿論、応戦する事も出来ず、ただ退却するしかない。

「何処だ?! 曹操―!」

思わず呂布は叫び、辺りを見回していた。と、呂布の視界に牙旗（大将旗）が映った。

――あれが曹操か?

曹操は牙旗を支える武将と二騎の武将を従えて、こちらを睥睨していた。大将としての気概は充分の堂々たる姿である。

だが、呂布の予想以上に曹操は小さかった。恐らく呂布の胸程しか無いだろう。その気概に反する体躯に若干の賤しさを覚えた。

「曹操!!」

呂布は矮小な男に叫んだ。

「この借りは必ず返す。覚悟しておけ!」

曹操は呂布が吠えるのを見て一笑すると、片手を挙げてそれに応えた。

呂布は赤兎の腹を締めた。更に軍を落馬した兵、ギリギリの速さにまで加速させた。曹操の陣はもう抜け出せた。あとは大した軍はいない。

呂布は虎牢まで一気に駆け抜けるつもりだった。

不意に一隊の軍勢が行く手を阻んだ。兵の甲冑はバラバラだが、驚く程動きが良い。

動きで呂布は北軍を奇襲した時の公孫瓚軍にその軍勢がいたのを感じ出した。掲げる旗は『劉』の文字。

「呂布! この劉備玄德様が相手をしてやるぜ」

馬の上に立ち上がり、こちらを指差す中央の男は奇妙な出で立ちだった。

とにかく呂布は将と思えなかった。男の大きな耳にはジャラジャラと装飾品がぶら下がり、簪は遊女がするような華美で煌びやか、更に軀の周りを固める様に十程の璧が腰に揺れていた。風流人を氣取った輩にしか見えない。

「っしやああ！！」

劉備は馬を呂布まで寄せると剣で打ちかかってきた。それを合図に両軍共に激突する。

呂布は方天牙戟を両手に握ると劉備目掛けて振り下ろした。しかし、絶妙な角度でいなされる。

劉備は馬の上に立っているのにも関わらず、構えを崩すことも無い。劉備はかなりの使い手のようだ。

「それならば」

呂布は横に一閃した。が、外れた。飛び上がって避けたのだ。

「貰ったあ！！」

呂布が方天牙戟を振り切ったその隙を突いて、劉備は飛び込んできた。

「ッ！？」

寸でのところで呂布は切っ先を避け、劉備を吹き飛ばした。

「チッ、この機を逃しちまうとは……」

劉備は三回宙返りして着地した。

「雲長！益徳！おめえらの出番だぜ」

「どうした大将、お手上げか？」

「勢いに任せるからそうなるのだぞ、大兄」

呼ばれて関羽と張飛が現れた。二人とも兵卒と同じ甲冑だ。

「フッ、雑兵がしゃしゃり出て来るつもりか」

「へん！ 親殺しの分際ででけえ口叩いてんじゃねえ」

呂布が吐き捨てると、張飛も負けずに言い返した。

「親殺し……？」

「今更とぼけるか！？ 義父の丁原を殺したじゃねえか」

どうやら丁原が諸侯の前で言った『息子分の呂布』という苦し紛れの嘘が天下に広まっているようだ。

その上、丁原は董卓の暴挙を咎めたから殺されたと認識されているようである。故にそれと対比して、丁原を殺した呂布の悪名は広まってしまったのである。

真実を言う訳にもいかない呂布は黙りこんだ。

「ケッ！ 位や恩賞に目が眩んで董卓なんか尻尾を振るたあ、お前なんか狼と何ら変わりねえぜ」

「くっそー！ 黙れ！！ 奉先様はそんな男じゃねえ！」

思わず飛び出したのは、成廉と魏越だ。

「奉先様はなあ……」

「魏越！ 約束を忘れたのか？」

呂布が魏越を制した。

「ごちゃごちゃ意味分かんねえよ！」

「いざ！」

張飛と関羽は呂布を挟み込むように斬りかかった。張飛が矛を繰り出し、関羽が避けた呂布の隙を突く。

単純な戦法だが相手がこの二人だと脅威である。張飛の振り下ろす矛を受けると、呂布の腕に衝撃が走る。手が痺れそうな程だ。想像以上の馬鹿力である。

張飛の顔つきに先程までの爽やかな青年の面影は無く、血管が浮かび上がり、眉はつり上がっていた。

関羽はというと、兵卒の甲冑でいても体中から殺気が発せられていた。武威の風格が呂布を威圧する。しかし、あくまでも冷靜的確に呂布が居着いたところで大刀を閃かせる。並みの武では無い。

呂布は関羽と張飛の強さを信じられなかった。

——どうしてこんな男達が兵卒をしてるのだ……？

だが、身分など関係無い。呂布は笑っていた。ただ、目の前にいる、自分に匹敵し得る武人と手合わせする事に喜びを感じていた。血潮がたぎる。

——楽しませてくれよ。

呂布は方天牙戟を固く握り締めた。渾身の一撃を張飛に喰らわす。急な反撃に張飛は慌てて矛で受けると、空気を震わす程の衝撃波が馬ごと張飛を弾いた。

「ぬん！」

関羽が背後から斬りかかった。が、呂布は上体を大きく横に避けると、その体勢から斬り上げた。方天牙戟の刃先が関羽の兜を飛ばした。

「チィッ！」

二人掛かりの張飛と関羽が押され始めた。汗だくで肩で息をする二人に対し、呂布は息は乱す事も無い。

静かな武人の至高の武を前に、張飛と関羽は打ち合うことは出来ても、討ち取る事など不可能だったのである。

少しずつ、二人の心に小さな隙が表れ始めていた。

洛陽炎上

じりじりと劉備は馬を進める。

呂布軍の兵が何人かが功を上げる好機、と劉備に斬りかかったが皆すぐに首が飛んでいく。その度に数の過ぎた飾りが発てる金属音が成廉には耳障りだった。

三人の周りが静まった。兵達は無理するのを諦め、この奇怪な敵将を成廉と魏越に任せることにしたようだ。

「いくぜ！」

雄叫びを上げて、先に動いたのは魏越だった。魏越が持つ戟は特製だ。呂布の方天牙戟程では無いものの、並みの兵卒では操るのは無理な代物である。

しかし、劉備は二振りの剣で易々と受け止めてしまった。そのまま柄の上を滑らせた剣が魏越の手に襲いかかる。

「うわっ！」

思わず魏越は戟を手放した。

——ヤバイ！！

「武人が己の武器を手放すとは、愚行ぞ！」

魏越は襲い来る刃を予測して、軀を強ばらせた。

劉備が魏越の首目掛けて剣を突きつけたところで、成廉が雷音ごと劉備にぶつけた。劉備がよろめいた時に、魏越は反射的に剣を抜いて突いた。

が、劉備は雷音の尻に飛び乗って剣撃を避け、ついでに成廉に一撃した。

「うわっ!？」

成廉は軀をめいっばい倒して避けようとしたが、髻が簪と共に斬り飛ばされた。

成廉が反撃に移ろうとすると、既に劉備は魏越の馬に飛び移り様に斬りかかり、そして自分の馬に戻っていた。

まるで舞うが如き攻撃に成廉と魏越は翻弄された。こちらから攻めれば、受け止められるか受け技が二人に襲いかかる。

しかし、受けに回っては何処から来るかも定かで無い剣撃が待っている。

「まだまだだな」

劉備が二人に告げた。事実、成廉はこの劉備という男との差を感じた。

——この人でこんなにもかなわないのに……。奉先さんはどれだけ大きいんだよ？

成廉は呂布の武人としての大きさをひしひしと、身を持って感じた。

呂布と張飛、関羽の二人の打ち合いは激しさを増し、兵達は戦闘を止めて見入っていた。中には余りの気迫に圧され、後退りする者までいる。

静かに、殺気のみが漂う呂布に二人は気圧されていた。少しも微動だにさせない表情も相まって恐怖心を煽る。

呂布の桁外れの力の、それでいて隙の無い攻撃に二人は受けるし

が無い。

張飛の馬鹿力は受け流し、関羽は力でねじ伏す。呂布は攻め方を様々に変化させながら押しに押しまくった。

と、呂布の視界の端に土煙が映った。

『袁』の旗。連合軍総大将・袁紹が軍を進めてきたのだ。袋に飛び込んだ呂布軍を討ち果たす好機と観たのだろう。

これはさすがに呂布の計算外だった。そもそも、こういう状態に陥らないための中軍突破をしたのだ。

連合軍は虎牢を攻める為に横に長く、何重にも展開していた。普通は分断するように中央を突破すれば、指揮命令系統が乱れ混乱し、収集がつかなくなる。陣形の立て直し、再編で追撃どころではなくなるのだ。

呂布は拔かり無く、徹底的に掻き回した。こんなはずではなかった。

しかし、それでも袁紹の本軍はこちらに迫っている。

——惜しいかな、結局敗走となるか。

「この勝負預けた！」

呂布は赤兎の尻を打った。

いきなり馬首を返して行く呂布を張飛と関羽はポカンと見ていた。

「……やられた」

押していた呂布が急に退くのを心に隙の出来ていた二人はどうするとも出来なかった。

呂布は兵を纏めつつ、成廉と魏越の元へ走った。ちょうど二人は劉備を相手に苦戦を強いられていた。

「成廉！ 魏越！ 退却だ」

「えっ？」

「何!？」

劉備も狼狽していた。

「なんで袁紹の野郎がここにいんだよ!」

袁紹の軍を見て呂布以上に驚く。

その隙に二人は馬首を返す。

「ああっ! てめえら、待てえ!!」

劉備はすぐに追いつくがろうとしたが呂布が許さない。呂布は剣を抜くと劉備の馬目掛けて投げつけた。

唸りを発した剣は馬の頭を貫通していた。

「また会おう、劉玄德」

呂布軍は混乱した前軍に紛れ込んで、虎牢の城門を目指した。

「プッ、なんだその頭?」

虎牢から全軍を撤退させる道中、張遼は成廉の頭を見て笑った。

「うるさい! フンッ、命掛けて闘った証だよ」

成廉は劉備との戦闘の際、髻を斬られてざんばら髪になっていた。髻を切り取られる、それは耐え難い屈辱を伴う。髻はしばしば首の代わりとして見られる。髻を切り取る刑も在る程だ。

そしてなんとと言っても格好が悪い。冠を被ることも出来なくなるので、男達にとって髪・髻は大切な物なのだ。

「ちっくしょ。僕がもっと強かったら……」

「廉なんかまだましさ」

魏越が言った。魏越は帰還してからずっと暗い。今も頭すら上げないで、手綱を見ていた。

「己の武器を落としちゃうなんて……武人失格だ」

ハア、と二人の溜め息は闇夜に広がった。

袁紹が呂布軍を追撃出来た理由。それは至極単純でいて、困難なものだった。

呂布の強力な攪乱により、連合軍の前軍、中軍は一部を除いて命令系統が絶望的になっていた。一つの陣に一万余もの兵がいるのだ。収集もつかない。

袁紹はそんな陣を収集する事も無く、呂布を危険視した。何せよ十倍の敵と対等にやり合う男である。

とにかく袁紹は呂布を討たんと軍を進めたのだ。

そこで問題が発生する。混乱している人の群れをどう通るのか。

ここで袁紹の将としての大きさが表れた。なんと、味方の兵の陣を敵陣として対処、突破させたのだ。無論、直接攻撃は行わなかったものの、踏み殺された兵は数知れなかった。

結局、呂布は取り逃がした訳で諸將の批判と不満が上がっただけだった。

連合軍が陣形を組み直す様子を二人の男が眺めていた。

「まさか袁紹殿がここまで大胆だとは思いませんでした」

曹操の傍らの男・夏侯惇が言った。

「いや、本初（袁紹の字）はああいう男だ」

曹操は天下で一番、袁紹という男を理解していると思っている。同時に袁紹も曹操をよく理解しているだろう。

少年時代に曹操と袁紹はいつも連んで、悪童の名を広めていた。率先して悪知恵を用いていたのは曹操の方で、どちらかというと袁

紹は行動が遅い。その代わり一度決断すると、突拍子などんでもない事を堂々と実行する。先年の何進暗殺事件の際も、袁紹は躊躇うことなく宦官を虐殺した。

実はそれを機に曹操は袁紹を危険視し始めた。

——私が天下を狙うとしたら、本初は最大の敵になるかも知れない。

曹操とて、天下に野心があった。しかも人一倍強い。

曹操は宦官の孫、というだけで様々な障壁にぶつかった。子供の頃から何かとその点についてからかわれる事は多々あった。

宦官が力をもっているうちは、世間は白い目で曹操を見てきた。成人した時の官職も微妙なものだった。

袁紹をはじめ、周りが高官に収まる中、洛陽の北部尉（北門警備監督）という大した官職では無かった。しかし文句を言えるほどの低さでも無い。

その頃は祖父・曹騰は引退しており、曹操にあれこれ言う発言権は無かった。

今の曹操は己の実力のみでここまで来たとと言っても過言ではない。曹操の理想の天下。それは名家の名に惑わされない、実力と才能を重点とした天下だった。

——私の描く天下を創れるのは無論、私しかない。

本初は連合軍の乱れきった陣形の立て直して苦戦している。恐らくそれが董卓軍の狙いだろう。本初はまんまと、してやられた。天下を掴むのは袁紹では無く私なのだ。

「惇、出陣の準備をしろ」

「……？ どうするのですか？」

夏侯惇は曹操の顔を見た。

「昨日の董卓軍の戦法からして、既に虎牢はもぬけの殻だろう」
曹操は袁紹のいる幕舎に向けて歩き出した。

——まずは董卓を滅ぼして天下の足掛かりにしてやろう。

曹操の眼中に呂布はまだ入って無かった。

「何い？虎牢に突入だと。駄目だ、駄目だ！」

曹操が虎牢突入を進言すると、袁紹は反対した。

「本初、よく考えろ。奴らがこれだけの攪乱を仕掛けたのだから、撤退の時間を稼ぎたかったに違いないだろう」

袁紹は余り寝れていないのか目が充血していた。ガリガリと頭を搔くと、

「俺にそんな余裕は無い。そんなに攻めたかったら孟徳が先鋒をしてくれ」

「……分かった」

曹操は正午には自陣に戻ると甲冑を着けずにそのまま出陣したが、虎牢に着いてみると既に開城していた。

「どういう事だ？」

夏侯惇の目線の先には『劉』の旗が風で靡いていた。

「『劉』だど？誰だ。惇、聞いてこい」
と曹操は言ったがそれには及ばなかった。

華美な服を纏った劉備が関羽、張飛を引き連れて曹操の前に現れた。

「初めまして、だな曹操殿。俺様は劉備だ。虎牢は俺達が一番乗りだぜ」

へへへと笑う劉備を見て夏侯惇は眉間に皺を寄せた。

劉備なんて名前を夏侯惇は聞いたことがなかった。そんな輩なのに曹操を前に下馬もしない。些か身長が低い事を曹操は陰ながら気にしている。夏侯惇は密かにそれを知っていた。

極力この劉備を下馬させるべきである。

「失礼だが劉備殿、貴公は何なのだね？」

「これは失礼したな。俺様は今、平原の太守の代任をしてる。で、あんたは誰だあ？」

劉備は耳飾りをいじりながら、夏侯惇に聞いた。

「それがしは夏侯元讓と申す。」

劉備殿、出来れば下馬していただきたいのだが……」

「おお、曹操殿を支えてるといいう夏侯一族の一人か」

夏侯惇は劉備がそこその官職な事に内心驚いていた。だが、この横柄な態度で乗馬されるのはまずい。

「下馬していただきたい」

「まあまあ、惇」

夏侯惇が再度促そうとすると曹操が止めた。

「ところで劉備殿は黄巾の乱でも活躍されたのではないか？」

曹操は劉備の態度より、その華美な格好より、その左右の武人が気になった。どちらも関羽、張飛と名乗ってから油断無く、こちらを見据えている。

ただのごろつきの頭目みたいな劉備の下にどうしてこんな剛勇の士がいるのか。

「どうだ、一杯やらんか？」

貴公の武勇伝でも聴かせてくれないか」

「おっ！ 酒かあ、曹操殿も気が利くじゃねえか」

早速、虎牢の官舎の大広間で宴が催された。

曹操と劉備は意外に意気投合し、夜が更けるまで語り合った。

傍らで夏侯惇はそれが不思議だった。昔から曹操と対等に語り合える者はいなかったのだ。いつだって曹操が一つ上の次元で話すため、誰だっについていけなかった。

劉備は初めての曹操の語り相手となったのだ。

話を聞いている限り、関羽、張飛という男とは臣下を超えた絆で結ばれているようだ。その時点で劉備という男を甘く見る事は出来ない。

——この劉備という男。下手して、使い方を間違えれば我々にとって一番危険な男かも知れない。

夏侯惇の危惧は遠い将来に証明される事となる。

「報告！報告！」

兵達が騒ぎ出したのは、虎牢で一夜を過ごした翌朝だった。

「何事だ?!」

曹操は寝台からだるさが包み込んだ躰を起こした。

「洛陽が……洛陽が炎上しております！」

「何い!?!」

曹操は慌てて楼閣に登った。確かに洛陽の方角に煙が上がっている。

虎牢から洛陽まで普通に進軍すれば一日以上かかる。それだけの距離があるのにも関わらず、黒雲の様に煙が西を覆っている。

——まずい、この様子では洛陽は全焼。董卓の作戦は焦土作戦だったか！

「早く劉備を起こしてこい！ それから本陣の本初に早馬だ！」

曹操はいつも以上に取り乱し、供の者に叫んだ。

洛陽で曹操は長く生活していた。いわば、第二の故郷に等しい。

曹操はすぐさま甲冑を身に付け、出陣した。

・
・
・

一日中、駆けに駆けた曹操は洛陽に辿り着いた。城門をくぐるとそこに嘗ての都の姿は無かった。

そもそも城門自体が燃え尽きていた。所々火が残っているが、木製の建造物は跡形も無く消え失せ、土台しかない。

中央の大通りには黒く炭化した犬や鶏が転がっていた。目につくといえば、楼閣の燃え尽きた城壁や石造りの政庁や玉座位だった。

——これが何十万もの人口を誇った漢帝国の都か……？

曹操は拳を震わせた。部下達からも呻き声が漏れた。

少しでもましになるように、曹操は片付けを命じて、袁紹ら本軍を待った。連合軍は大軍故になかなか到着しない。

曹操は煩わしかった。すぐにでも飛び出したかった。本軍が到着したのは曹操が洛陽に着いてから二日経っていた。曹操は軍議を

要請した。

「董卓の軍に追撃をかけるべきだ！」

曹操は卓上をダンツ、と叩くと諸将に訴えた。

しかし、半分の将はあからさまに嫌な顔をし、残り下を見て黙り込む。同意してくれると思っていた劉備は公孫瓚と虎牢の守備を任されて、ここには居なかった。

「そんな事をして、先日みたく反撃されるかも知れん」

「追撃よりも洛陽を整備するべきではないかな？」

「そうじゃ、兵も疲れておる。そろそろ和睦を考えても良いじゃろう」

皆、自軍の消耗を嫌って、消極的だ。

「孟徳！お前は昔から口が過ぎるぞ。一軍の将なら全体の事を考える」

袁紹までこの調子である。

「ここに義士はいないのか！？」

我々は董卓の暴虐を退けて、帝を救わんとすべく集ったのではないのか！

貴公等はそれでも漢帝国の臣か！」

曹操は席に着いたまま微動だに出来ない男達に吠えた。

「誰も怖くて動けんのなら、私一人で追撃する。貴公等のような腰抜け共とは今日付で決別だ」

曹操はさっと諸将に背を向けると、帷幕を後にした。

結局、挙兵した頃からの仲である張藐と張超しか追撃に参加しなかった。

曹操は自軍の兵を一同に集めた。

「皆の者、私は董卓の暴虐と横暴を間近で目にし、反董卓連合を呼び掛けた。しかし、彼らは敵軍を前に尻込みする腰抜けだ」

兵達はただ目をガラガラと光らせて、聞き入っていた。

「多勢に無勢。しかし、我らは董卓を滅し、帝を救わんとせんが為に集ったのだ！

恐れるな！ 我ら、今こそ忠義の烈火と成らん！！」

「応!!!」

うおおおお、と兵達の雄叫びが空に響き渡った。

「徐將軍の軍、伏兵完了の様です」

「魏越殿、張遼殿、高順殿の騎馬軍、伏兵完了」

続々と今回の『狩場』の全貌を伝令が告げた。

呂布と徐栄は連合軍の追撃を徹底的に叩く為、万全の布陣を仕掛けていた。

「これじゃあ追撃の軍は全滅ですね」

少し可哀想、と成廉は雷音の耳の裏を掻きながら呟いた。

洛陽から長安までの道は黄河沿いに続いている。途中、函谷関という関があり、函谷関から東に三十里の所で黄河は急に南に曲がっている。

要するに東より追撃する軍はそこを通り抜けるまで前方、右手は黄河、左手は山という地形を進軍しなくてはならない。

絶好の『狩場』である。

山には西方より徐栄の一万、張遼の三千、魏越の三千、高順の三千、そして呂布、成廉の蝗紅隊が伏兵。

初めに追撃軍を素通りさせて、徐栄の軍が当たり、敗走する軍を背後から次々に襲いかかる作戦だ。

高順という男は元々、蝗紅隊の小隊長だ。先の連合軍攪乱の際に曹操の攻撃で馬を失った。

蝗紅隊の無敵の強さは個人の武勇とその良馬によって支えられている。つまり、極限まで鍛え抜いた馬を失う事は蝗紅隊から外される事を意味するのだ。替えの馬では足手まといとなってしまう。

しかし、高順が率いる隊は群を抜く動きで、呂布も目にかけてい

たため、異例の大拔擢となったのだ。

呂布と徐榮は特に兵達に枚を噛ませたり、斥候の警戒はさせなかった。ただ、私語を厳禁し、持ち場を離れさせなかっただけだ。追撃軍は我を失い、斥候など出す事も無いと読んだのだ。

「連合軍は洛陽の有り様を見て、さぞかし怒っているでしょうね」
成廉の呟きに呂布が振り返った。

「お前も董卓が憎いか？」

「そんな事を普通は聞きますか。仮にも奉先さんの主君ですよ？」
成廉は憮然として聞き返した。

「いや、お前の事だから連合軍と共に董卓を討ちかねんな、と思っ
てな」

「僕にそんな過激な事出来ませんよ、今更」

成廉は黄河に視線を移した。

「でも……たまに、思うんです。奉先さんが董卓に仕えてなかった
ら、連合に加わるように言ってたかも知れない、って」

「……そうか」

呂布も黄河に目を移した。

「それも悪くないな」

「へっ？」

「もとはと言えば、駿馬をお前達に与えたくて仕えたようなもんだ」

「そんな事、董卓の耳に入ったら叛逆罪を問われますよ」

成廉はやれやれと首を振った。

「だが、このままでは董卓の天下だ」

そう、ここで連合軍を打ち破れば董卓に逆らえる者は事実上居な
くなるのだ。

洛陽の炎上。これは予想以上に諸侯の心を揺さぶるだろう。連合
は解体され、最大の兵力を誇る董卓に対し、諸侯は己の領地を守る

事に専念し始める。

そして、諸侯同士で領地を巡って争いが起きれば、董卓は詔勅をもって彼らを仲介して味方につける事が出来る。

逆らえば背後から中原に雪崩れ込まれ、すぐにでも董卓の天下だ。

成廉は複雑だった。一度仕えたからは、身命を賭して忠誠を誓うのが主従の姿である。

明らかに呂布が董卓に仕えたのは間違いだった気がする。

成廉にとって主は呂布であって、董卓では無い。呂布は絶対であるし、正に身命を賭す覚悟が出来ている。

だが、その呂布が董卓を裏切ると言い出したらどうするだろうか。成廉は恐らく激しい葛藤に襲われる事となるだろう。

——奉先さんはそれを言い出しそうだから怖い。

曹操は軍を休ませる事無く、駆け続けた。怒濤の勢いで進軍する曹操は呂布らが伏兵している事に全く気が付かなかった。

曹操がようやく己の置かれている状況に気付いたのは、徐栄の軍が森から飛び出してからだった。

「くうっ、伏兵に気付けなかったとは……槍兵！ 弓兵！ 前へ！」
辺りを見回すと、冷静さを取り戻すと同時に最悪の状況を悟って愕然とした。

前方に伏兵、左右は山と黄河に挟まれ、退路もまたすぐ横に山が続いている。冷静に地形を考えれば、そこら中に伏兵が潜んでいるのは間違い無い。

曹操は唇を強く噛んだ。全て自分の責任である。

「全軍退却だ！！」

夏侯惇がこちらを振り返った。

「追撃されますよ！？」

曹操の言葉が信じられない、といった顔だ。

「既に私達は包囲されている。ここは死地だ！　ただ生き延びる事を考えよ！」

曹操は周囲の兵に聞かすように叫んだ。

「前衛は徐栄の軍を近付けさせずに退け。中軍、左翼は黄河を背に伏兵に備える。後衛は先発して退路を確保しろ」

曹操は感情に任せて追撃した時と打って変わって、的確な指示を始めた。

だが、もう遅かった。

曹操の命令が全軍に行き渡る前に、張遼の騎馬隊三千が山上から逆落としに突撃した。のろのろと後退する鈍重な曹操軍の脇腹を切り裂いていく。

それを合図に魏越、高順も加わる。ほぼ挟み撃ちで不意を突かれた曹操軍は総崩れだった。

徐栄の軍に近付けば、矢の雨を浴び、中軍に留まれば、黄河に追いつき落とされ、退路へ逃げれば、待ち受ける騎馬隊に踏み潰された。

曹操は親衛隊のみを率い、ただ駆け抜けた。

死の恐怖がひしひしと曹操を感じた。乱戦を抜けると、とにかく日が沈む方を背に道無き森を駆け抜けた。周りに夏侯惇ら部下の姿は無い。親衛隊も何人か欠け、千足らずしかない。

——全て私の誤りか……。

曹操が小さい軀を更に小さくして溜め息を吐くと、黒ずくめの一隊が立ちふさがった。

先頭の大將は白装束に燃える様な深紅の巨馬に跨り、真っ直ぐ曹

操を見つめていた。背後に見え隠れする旗には『呂』の文字。

——たった一万の騎馬で十倍の連合軍を掻き回した男か。

曹操は自らが痛手を喰らわした将を睨み返した。曹操も呂布の武名は耳にしている。だが、怖じ気づいている場合では無い。

「曹操！ 先日 of 借りを返させてもらうぞ」

呂布が叫んで方天牙戟を振り下ろすと、蝗紅隊が一斉に襲いかかった。応戦しようと向かって来た兵を成廉が叩き落とす。

曹操は呂布率いる軍に初めて傷を着けた男だ。呂布は静かに怒っていた。あえて表に出さない。

しかし、成廉は気付いていた。だから曹操を狙ったりはしない。周囲の兵を斬り伏せて、曹操への道を作るだけだ。

「曹操様、早くお逃げください」

曹操の親衛隊が軀を張って盾になる。

成廉ら、蝗紅隊が奮戦してもなかなか曹操まで辿り着かない。曹操はすまん、と小さく言うのと馬に鞭打った。

「逃がすか！」

成廉は背中から弓矢を取り、素早くつがえると曹操に向けて放った。

「うわっ」

矢は曹操を外したが馬に当たり、落馬した。

「奉先さん！ 今です。曹操が逃げてしまいます！」

「よし！」

呂布は方天牙戟を頭上に挙げ、落ち葉に足を取られながら立ち上がった曹操に迫った。

曹操がとっさに剣で防ごうとすると、一騎の騎馬武者が割っては

言った。

「曹操殿！ ご無事ですか！？」

「――曹洪！！」

その若武者は曹一族の一人・曹洪だった。呂布の振り下ろした方天牙戟を受け止める。

「小癩な奴よ！」

呂布は虫を払う様に方天牙戟を振り回す。しかし、ギリギリ触れることなく曹洪は全て避けきった。

「奉先さん！ 新手です！」

成廉が叫ぶ。いつの間にか、夏侯惇が率いた残軍が曹操に向けて駆けつけて来る。

呂布が夏侯惇の斬撃をかわしているうちに、曹操は曹洪の馬尻に乗った。素早く親衛隊が逃げる曹操の背後を固める。

――ここで逃がしたら次が無い！

「ううおおらああ！！」

呂布は渾身の力を振り絞って方天牙戟を曹操目掛けて投げつける。方天牙戟が人の壁を一つ、二つ、…と貫いていく。その度に鮮血が高く飛沫を上げ、臓腑が飛び散った。

最後の一人を貫いた時、幸か不幸か方天牙戟は音を発てて地に落ちた。

「止まれ」

追いつがろうとする蝗紅隊を呂布は留めた。

「大魚を逃す、か。奉先さん、曹操は僕達にとって厄介な相手になりますよ」

「分かっ取る」

——いづれまた見えることとなろう、曹操。

呂布と成廉は惨敗して逃げ帰る曹操軍を見送った。

長安動乱

連合軍解体――。

それはあっさりと現実のものとなった。

伏兵に敗れた曹操は一旦、河内に入った。そこで残軍をまとめ、体勢を整え、洛陽の本陣に帰還した。しかし、曹操は袁紹に對面して言った言葉は連合の脱退だった。追撃前の宣言通り、腰抜けの諸侯とは決別する事にしたのだ。

「本初も変な意地等捨てて、本拠に帰った方がいいぞ」

曹操は冷たくそう言い残して、張藐、張超と陳留に帰った。

更に連合軍に事件が起きた。

袁術の元に身を寄せていた孫堅が洛陽の整備作業中にとんでも無い物を発見した。

玉璽である。

玉璽は皇帝の所持品であり、詔勅を発したりする際必要な象徴的な物だ。恐らく今は使用されていない古い物だろう。

思い掛けない収穫があった孫堅はこれを本拠に持ち帰る事にし、連合からの脱退を表明したのだ。

しかし、袁紹に玉璽の件は耳に入っており、勝手に帰り始めた孫堅に一計を案じた。

荊州の劉表に待ち伏せを依頼したのだ。

劉表は連合に参加してはいないが、何進に荊州牧に任命されてから荊州の名だたる豪族を押さえ、北から南まで完全に支配するかなりの勢力である。

劉表は袁紹の依頼を承諾し、荊州を通る孫堅軍に襲いかかった。

不意を突かれた孫堅軍は大敗北を喫し、ほとんどの兵を討たれた。以来、孫堅軍と劉表軍は犬猿の仲となる。

この裏に袁紹がいることを知った諸侯は、元連合の仲間でさえも容赦しない袁紹に不信感を抱いた。

同時に己の力しか頼りにならない、弱肉強食の群雄割拠の時代になった事を悟った。皆、自分の本拠地で力を蓄えるのが先決としてのだ。

勿論、袁紹とて同じである。総大将のいない軍など無いに等しかった。

結局、連合軍は董卓に大きな打撃を与える事も無く、空中分解してしまったのである。

連合軍の空中分解は董卓の躊躇いを捨てる最後のきっかけとなった。中華には董卓に逆らえる者が一人もいなくなったのだ。董卓の横

暴は更なる拍車が掛かった。

帝には自らを『尚父』しょうふと呼ばせ、官職は勝手に任命し、詔勅も自由に出せられるようにした。

人々も董卓を恐れ、参内すると帝に謁見しなくても、董卓には必ず顔を出すという習慣さえ出来てしまっていた。

勿論、楯突こうとした者は董卓が放つ臆病な程過剰な問者によって即刻知らされ、処刑された。

——我々に董卓の暴虐を止める術はないのか。

そう頭を巡らしていたのは司徒（民政大臣）の王允という男だった。

王允は名家の生まれで、董卓が遷都を敢行した際に司徒に就任し

た。王允は董卓の桁外れの臆病さとそれによる残虐性を見抜き、董卓の命令には全て賛成し、大人しく従っていた。

しかし、それも全ては己が権力を得るため、『好機』が訪れる時の為に董卓に近付いた。

そんな事も知らずに董卓は洛陽時代から大人しく確実に仕事をこなし、賛同してくれる王允を信頼していた。

信頼を勝ち得た王允は秘密裏に董卓排除の為動いていたが、武勇計り知れない董卓を前になかなか行動に移せない。

連合軍を退けた為、董卓に天下が傾いている。早く行動しないと後の祭りとなってしまう。

しかし、困ったことに呂布の存在も大きかった。

先日の虎牢の戦以降、董卓は呂布を重用し始めた。董卓は常に呂布を侍らせ、更に身の回りを固めさせていた。

魔王とそれに従う最強の戦士。

王允はまず最初に呂布を何とかする事にした。

董卓が連合軍に勝利した事を祝って、諸将と官吏に宴の席を設けた。勿論、呂布は董卓側近として招待され、成廉、魏越、張遼も同伴した。

始めに今回の戦功一番である徐栄と呂布が表彰され、玉帯が下賜された。

「遼は何も音沙汰無し？」

成廉が納得いかない様子で聞いた。あの強兵率いる孫堅を叩きのめしたのは張遼の火計である。張遼は一人で孫堅を打ち破ったようなものだ。

「いや、徐將軍は上奏するって言ったんだけど、断ったんだ」

「また何で？ 出世の良い機会じゃねーか」

魏越は早速酒を飲み出して、いつもの酔いが回り始めている。

「出世したら奉先様の麾下にいれなくなるかもしれないからな」

「成る程な」

「主想いだねえ」

「それは廉もだろ」

三人の席だけ和やかな空気だが、周りの者は皆何かに脅えるように俯くのが多かった。

皆、今から何が始まるのか知っているからだ。三人はまだ知らない、これから目の前に地獄が現れることを。

「ところでありゃ何だ？」

魏越は幾分酔った動きで指さした。

宴席の中央に巨大の鼎が鎮座していた。その大きさは人が十人程入れるかどうかというものだ。下には既に火が燃やされ、中からは蒸気が上がっていた。匂いからすると何かを煮込んでいるわけでは無く、ただの湯のようだ。

「何だろう。結構、宴が始まる前から気になってたんだけどね」

「相国の事だからまたイカれた事しでかすんじゃないかねえの？」

「しーっ。声がでかいよ、越！」

また悪酔いだ。

「越には困ったもんだよね。……遼？」

張遼は拳を握り締めて、ある一点を凝視していた。

「なんか、……すぐく厭な気がする」

張遼の視線の先には鎖に繋がれた男数人がいた。

董卓がパンパンと手を叩いた。

「皆の衆、宴も盛り上がってきたところで酒の『肴』を用意した」
兵に連れられて入ってきたのは捕虜と思しき男五人だった。五人は精気のない顔で、諦めが表れている。

「こ奴等は先の戦の際、袁紹らに内通していた者じゃ。裏切り行為は万死に値する。よって、この場で公開処刑を行う」

にやりと董卓の口元が歪んだ。

やれ、と董卓が短く言うのと五人はご馳走を待ち受ける巨大な鼎の横に連れて行かれた。

席の者は皆どよめく。董卓はここで人を煮殺そうと言うのだ。捕虜は足枷が鎖で繋がれているため、五人で鼎の横の台に立たされた。

「行け！」

兵が一人目を押したが、ギリギリ踏みとどまった。煮えたぎる湯を前に死への恐怖が湧き出したのか。一人目は動くことも出来ない。舌打ちをして兵が棒で突き落とした。ボチャッと湯を撒き散らし、一人目の姿が消えた瞬間、

「ぐギャアアああああ」

大量の熱湯が飛び散る。百度近い熱湯である。男の頭髮は湯掛かれるとすぐに抜け落ち、皮膚がボロボロに剥がれ始めた。

一人目が暴れると二人目が引っ張られ、次々と捕虜は熱湯地獄へと落ちていった。

成廉達の席側に一人、這い上がろうとしてきた。

「うっ」

鼎の上から顔を出したのは皮膚が全て剥がれ落ち、眼球は白濁して片方は取れかかっている、という目もあてられぬ形相だった。

幸い、すぐに力尽き落ち、視界からは消えたが三人は目を逸らした。死の断末魔が叫びを上げる中、宴席は静まり返った。気分が悪くなって何も告げずに退席した者までいる。

その中でただ一人、董卓だけが愉快そうにガラ声で笑い続けた。その割れ鐘の様な不快な声が三人の頭に響く。

成廉は頭が痛くなってきた。魏越は怒りで拳が震えた。張遼は怒りを内に秘め、ただただ董卓を睨み付けた。

——董卓の声が聞こえるのが厭だ。視界に入るのが厭だ。同じ空気を吸うのが厭だ。同じ国にいるのが厭だ。董卓が生きているのが厭だ。

あいつは生きてちゃあいけない！

董卓のした事は到底、人のする事では無い。三人は無性に董卓を殺したくなった。

その様子を王允は静かに見ていた。

「つたく！ 何なんだ！？ 董卓の野郎は！」

官舎に帰るなり、魏越は叫び散らした。成廉も張遼も止めない。むしろ同感である。

「あれが人間のする事か！？ 処刑するならするで首を跳ねた方が苦しまないだけマシだろ！」

「あの時、」

張遼が静かに口を開いた。

「董卓を殺そうか、と思った」

「そりゃ奇遇だな。俺は今でも殺してえよ」

魏越は酒の臭いを振りまきながら胡床を蹴り飛ばした。

「あんな奴が相国だなんて……帝が不憫で堪らない」

張遼も吐き捨てる様に呟いた。

成廉だって二人のやり取りを聞かずとも叫びたかった。だが、その衝動は気持ちの悪さと、董卓は呂布の主であり自分は呂布の臣下である、という自覚でかき消された。戦場で飽きる程死体を見てきたつもりだったが、さすがにあの光景は衝撃だった。

鼎の中で叫び声を上げながら人とも見受けられない肉が煮立てられる様が、頭から消えないのだ。こちらの気も狂いそうだ。

客人が訪ねてきたのはそんな時だった。

「司徒様がおいでです」

従者の一人が知らせてきた。成廉は今のところ呂布の従者の長という事になっている。魏越と張遼は校尉一筋でいくらしく、従者は引退したようだ。

——それにしても妙だ。

中郎将とはいえ呂布の様な一介の将の元を司徒という身分は訪れるものではない。

司徒訪問と聞いて魏越は訝しげな顔をしたが、張遼は何かしらを悟ったらしく、

「俺達も応対しよう」

と言ったので、三人で迎えることにした。

「申し訳ありません。呂將軍は只今不在でございます」

成廉は茶を出しながら詫びた。

「よい、また相国に呼ばれたのだろう」

王允は人の良さそうな、乱世向けで無い顔立ちの中年男だった。いかにも文官といった風貌だが、薄い皺が健康を示している。

「將軍に何か用件があったのではありませんか？」

張遼が一息ついた王允に尋ねた。

「將軍にお伝えしましょう」

「ふむ、まあ君達も座りたまえ」

王允はぐっと三人に近付くと

「実は君らにも用件がある」

「相国の件ですね」

張遼が落ち着いて言った。

「さすが鋭い、張遼殿。噂通りの勘だ」

「噂通り？」

「呂將軍がよく君ら三人の自慢をするんでね」

「そうなんですか？」

呂布が自分達を褒めるなんて初耳だ。知らない一面という事だろう。

「そんな事どうでもいい。本題にはいつてくれ」

魏越が遮った。

「越！」

魏越は呂布以外を敬意の対象としてみなしていない。昔からの事だが敬語を使うのは呂布にだけだ。その度に成廉と張遼が注意するが全く訊かなかった。

「よいよい」

成廉と張遼を制して、王允は笑った。が、すぐに真面目な文官特有の刃物の様な目つきで衝撃の言葉を放った。

「董卓誅滅に協力してほしい」

「ち……誅滅……、ですか？」

さすがに張遼でも予想外だった。てっきり、近日の董卓の横暴についてかと思っていた。

誅滅。つまり、董卓を殺すのを手伝え、と言うのだ。

「あの、……ご冗談でしょう？」

成廉がおずおずと聞いた。

王允は董卓が上洛してから今まで側近としてその命令に従ってきた。董卓は自分の言う事に賛同するものをととても大切にする。王允への信頼は厚く、董卓の天下がほぼ決まった今の時勢、将来の安泰は保証されているはずだ。

王允に董卓が死んで得する事など無いはずである。

「董卓が政権を握ってから今日までの暴挙、君らだって知っておる

だろう」

王允は口髭をいじりながら語り出す。それくらい三人だって、いや、天下の誰しもが知っていることだ。

今の帝・協を擁立して以来、反対勢力をことごとく処刑。意見した者や気に入らないだけの者まで、気紛れで殺された。私財の蓄えの為に付近の邑を襲撃し、男は皆殺し、女は陵辱された。

そして、連合軍が解散してからは後宮に入り浸り、本来帝に仕えるはずの女官は董卓の物となっている。

官職は自分の部下に好き勝手に与え、一族は九十を数える母親から孫娘まで爵位を贈っているという。

僭越もいいところだ。董卓がやっているのはただ、己の欲望のおもむくままやりたい放題しているのだ。

その上、後になってから己の身に復讐が返ってこぬように、殺す時は臆病といえる程に徹底的である。

「そんな董卓の被害を一番受けるのは帝だ」

王允は溜め息混じりで言った。

「更に董卓は新たに長安の北に城を造っている」

長安の北・嵎である。長安に遷都した頃から着工して、完成間近だ。

「計画ではその城の城壁は長安のそれよりも高く、食糧は二十年分ともいわれる」

まるでもう一つの都でも造るかの様な規模だ。十万以上の人民が徴発されて建造されている。民力は先の遷都以来衰え、苦しんでいるのは民もまた然りだろう。

「儼として董卓に従ってきたのは全て漢帝国の為、帝の為なのだ」

「だから董卓を殺そうってか？」

「その通り。董卓の暴挙を止め、天下に太平をもたらすにはそれしかない」

王允は言い放った。

しかし――、

「フンッ、信用できねえな」

魏越は酒臭い息を吹きかけた。成廉、張遼も同じだった。

この話自体が罠の可能性はある。董卓が叛乱の芽を摘み取るためにこんな探りを入れていたとも考えられるのだ。

特に呂布とその麾下である成廉らは董卓に最も近い軍である。呂布が叛乱を起こせば、董卓もさすがに手も足も出ないだろう。

側近である王允が董卓の回し者であると考えるのが普通だ。

「董卓誅滅の話が本当だとおっしゃるのなら、それなりの誠意と信用出来る証を示して頂きたい」

張遼は油断無く、王允を促す。フーッと王允は溜め息をついた。

「さすが、呂將軍の子飼いの腹心。抜かり無いようだ……」

王允は懷から一通の書状を取り出した。

「本当は呂將軍が帰宅してからと思ってたのだが……、見るがよい」
「こ…これは！」

覗き込んで三人は息を呑んだ。

《相国、政權を握り、朕、帝位に就いて二年経つ。早くも三年を迎えんとす。

相国、百官を畏れさしめ、それを殺すること甚だなり。民もまた然り。

その暴虐、世間で相国を魔王と称する程なり。

朕未だ年少、無力の為それを留められず。

しかし、相国を留むること朕の責務なり。

よって司徒、王允をして密勅を下す。

相国に近しい者と合して謀り、相国を死に至らしめよ。

朕、相国の死をして、天下太平を切に願う。
協

それは帝から密かに下った命令、密勅だった。

時の帝・協は未だ十一歳。そんなまだ子供の皇帝が切々と今の漢帝国を嘆く心境と董卓誅滅の意志を綴ったのだ。

「疑って申し訳ございません」

成廉と張遼が頭を下げてしまったので、魏越も渋々詫びた。

「いや、儂も始めから密勅を示せば良かったのだ」

王允は後は協力を誓って欲しかった。

「……それで、協力してもらえるか？」

「勿論です！」

張遼が勢い良く言った。

「俺……いえ、私だって漢帝国の一員。僭越ながら遠くから、いつも帝に忠誠を誓っておりました。何なら呂將軍も説き伏せてでも董卓を殺して見せます！」

張遼の言葉に王允は満足げに頷いた。

「魏越殿は？」

「しゃーねーな。協力するよ、董卓の野郎は殺してえからな」

魏越も折れて、王允は満足だった。

二人が董卓誅滅に息巻く中、成廉は黙り込んでいた。

「おい、廉！ まさかお前反対なのか？」

張遼が少し頬を紅潮し、興奮した様子で聞き咎めてきた。成廉はこんな張遼を初めて見た。

いつだって冷静沈着な彼らしからぬ様子だ。

「僕は、奉先さんが協力するなら……」

若干、威に圧されつつ成廉はたどたどしく答えた。

「よし、決まりだね」

王允は膝をポンツと叩いてそう言うのと立ち上がった。

「儂は来年辺りを考えておる。それまでに將軍の説得を頼むぞ」

「はい」

王允は三人の言葉を聞くとあっさり帰ってしまった。

「司徒殿、いかがでした？」

歸りの馬車の中、王允のほかにもう一人、男が乗っていた。

「案外、簡単だったな」

王允は満足げに鼻を膨らました。

「これで上手く董卓が死ねば、儂の天下」

「そして呂布とその腹心を手懐ければ、恐いものなどありません」

王允は帝への忠誠など全く無かった。始めから董卓に仕えたのは董卓を天下一歩前で誅殺するのが天下への一番の近道だったからだ。

呂布もその腹心もただの駒に過ぎない。先程の様子では彼らを御すのは容易そうである。

「儂が天下を取ればお主の褒美も好きなだけ取らそう」

「それには及びません。私は天下が穫れれば充分でございます」

男の声はいたく冷たかった。

「全く……無欲の男よのう、文優」

王允の横で静かに微笑んだのは、かつて董卓に仕えていた文優だった。

——ん？ 戸は確か張遼が閉めていったと思ったが。

呂布が閉められたはずの戸が開いているに気付いたのは、張遼の董卓誅滅を説く熱い弁舌の後だった。

張遼が折り入って話がある、と言うので聞いてみれば、呂布にとつてたいして興味の無い話だった。それでも、帝の苦しい立場を考えて欲しいと懇願するので、一応保留という事で下がらせた。

ひと息ついて、酒でも飲もうかとする、秋の少し寒い風が吹き込んでいたのだ。

——誰かいる。

室の外に人の気配が明らかにある。

「誰だ？」

呂布が静かに尋ねると、一人の男が音も無く呂布の前に現れた。

呂布は男に見覚えがあった。

「文優ではないか！」

「お久しぶりでございます」

文優は恭しく頭を下げると小さく笑った。

「よく来たな、すぐに酒に準備をさせよう」

呂布は成廉を呼ぼうとしたが、文優はそれを止めた。

「今夜は呂布様に内密に話があって来たのです」

こっそりと呂布の室を訪れているので、それも当然だろう。

「分かった。……それで？ 話とは？」

「董卓誅滅の密勅の件は既にご存知でしょう」

呂布は一瞬、言葉に詰まった。

「お前もか……」

呂布は失望を込めた溜め息を吐き出した。

「それを文優が言ってくるという事は……今は王允の元か」

「おっしゃる通りです」

「なぜだ？」

いつだったか、文優とは将来の主従を誓ったはずだ。

「私の夢を以前語ったのは覚えていますね」

文優は天下への野心が強い。文優の夢は天下を手に入れる事。

「董卓を利用出来なくなった以上、天下を手に入れる為には王允について董卓を殺すのが一番の近道なのです」

「だろうな」

「呂布様との約束だって忘れていません。今でも呂布様の人柄と武勇を尊敬しております」

文優は少し目を泳がしてから、話を続けた。

「お願いします！　どうか私と司徒殿に協力して、共に天下を掴みましょう！」

文優は手を床につけて、必死に頼み込んだ。

——こんなに必死になっているの文優を見るのは二度目だったかな。

以前、文優が董卓の参謀・李儒と言い争いをした時も、普段の冷静な文優らしからぬ興奮だった。

「お前の気持ちと熱意は良く分かった」

文優はパツと顔を上げた。しばらく沈黙が続き、二人の視線は交錯し続けた。

「董卓は俺が殺そう」

「それならば、わ……」

「だが、王允に協力してではない、俺の意志でだ」
文優の顔が曇る。

「どういう意味でしょうか」

呂布はしばらく黙って答えなかった。

「文優、俺はお前が賢くて、知略に富み、そして天下への野心が強い事を良く知っているつもりだ」

呂布は睨む様に文優を見た。

「だが董卓を殺して本当に天下が手にはいると思うか？」

天下には董卓でも従わせられない群雄が散らばっている。果たして、王允ごときにそれができるのか。

「董卓を殺して、最初の障壁は西涼の四將軍だ」

董卓の本拠地である隴西・天水を中心に李確、郭「シ巳」、張済、樊稠が十万の強兵と共に守備している。北の大地で鍛えられた彼らの騎馬隊は精強だ。

「董卓を殺し、長安の官軍十万を掌握出来たとして、王允が勝てると思うか？」

王允は文官としては有能だが軍事に関しては素人だ。

「そのために呂布様に協力を願って……」

「悪いが、」

呂布は手で制した。

「俺は董卓を殺すとしたら、その後は麾下以外の兵を解散させて長安を出す」

「そんな……」

文優は開いた口が塞がらなかった。

呂布は西涼軍と闘うつもりなど無かった。今呂布の元にいる蝗紅隊を除いた兵は皆、西涼出身だ。家族がいるかもしれない西涼に彼らを使って攻め込むのは忍びない。

「董卓を殺すだけしといて、私達を見捨てるというのですか?!」
怒った様に文優が問い詰める。が、呂布の一睨みで黙り込んだ。

「俺の意志で殺すと言った。本来なら四將軍が恨むのは俺だろう、……王允が董卓に取って代わろうとしなければな」

王允が政権を奪えば、四將軍は王允によって董卓は殺されたと思うだろう。そして、呂布のいない王允軍は西涼軍に徹底的に叩き潰されるだろう。文優はやはり口を開けなかった。

「そもそも、お前の天下取りは間違っている」
「??」

「天下はな、他人からかすめ取れるような甘いもんじゃないんだよ」
文優はうなだれた。

外戚という立場で政権を握った何進は十常侍に殺された。その混乱に乗じて政権を握った董卓もまた、配下に殺されようとしている。王允が政権を握ったところで西涼軍に攻め込まれ、滅びるだろう。そして、四將軍もまた配下か、はたまた他の勢力に滅ぼされるのだ。

「俺はな、天下というものは一群雄として、力をつけて少しずつ大きくならなければ見えないものだと思うのだ」

既に冀州の袁紹、陳留の曹操、幽州の公孫瓚、荊州の劉表、益州の劉焉、…その他各地の群雄は着々と力をつけている。

それに比べ、王允と文優は楽をしようとしている。そんな事をし
て本当の天下が見えるはずが無い。

「董卓のする事は確かに赦せる範囲をとうに越えておる。俺も赦せないと感じてはいるし、天下から除くべき者であろう。

だから俺は董卓を殺す」

呂布は文優を見下ろした。

「後はお前達の勝手だ」

「わ……かり……ました」

文優はうなだれたまま立ち上がり、扉に向かった。

「失礼しました」

文優は来た時と同じように闇夜に消えた。

「次！ 錐攻の陣！」

成廉の指示が響き渡ると蝗紅隊は駆け続けながら、まるで巨大な漆黒の生き物の様に動いた。

成廉と蝗紅隊は毎日、午前中の調練が日課だ。本来なら呂布の麾下である蝗紅隊を調練するのは呂布の仕事なのだが、いかんせん呂布は董卓の護衛の為に調練が出来ないため、成廉に任されているのだ。

魏越、張遼、高順は他の九千の兵を三千ずつ調練している。

一度、合同訓練で各隊で闘った事がある。木製の武器を使う。

将才としては張遼、高順なのだが蝗紅隊の兵が強過ぎる為に圧倒的だった。

以来、蝗紅隊は合同訓練に混ぜてもらえなかった。あんまり強過ぎるのも問題なのかもしれない。調練は成廉にとって孤独な時間だった。

「よし、今日はここまで。お疲れ様、以上、解散！」

蝗紅隊の兵は調練が終わると皆、思い思いの事をする。

成廉もまた同じである。普段通りなら魏越らの待つ酒屋に向かう。この酒屋は成廉らが洛陽で常連だった店が、遷都に伴い移転した店だ。

魏越はこの店長と仲がいい。その誼で長安に移ってから酒屋といったらこの店にしか行かない。

ただ、今日は行く気がしなかった。

なぜなら昨日、呂布が遂に董卓誅滅を実行すると腹心の四人に宣言したからだ。

特に張遼が喜んでいて。恐らく酒屋に行ったところで、その話しかしないだろう。

成廉は気がすすまなかった。別に、董卓を殺す事を躊躇している

わけでは無く、呂布が言った話が呂布の悪名をまた増やしそうで心配なのだ。

呂布は大義名分である密勅を伏せて、董卓を暗殺するというのだ。これでは主殺しと汚名をかけられかねない。

ただでさえ丁原の件で父親殺しの汚名が世に広まっているというのに、更に増えてしまう。

呂布はそれを気にする様子は無い。だからこそ成廉は心配なのだ。

人は風評というものをヤケに信用する。会ったこと、見たことも無いのに風評のみで判断する。そして、勝手に惑わされる。

あそここの太守は部下に寛大で褒美が沢山貰える、そんな噂に釣られ仕官してみれば全くの逆だって有り得るのだ。

それでも、人は風評を中心に人を見る。

そんな天下に悪名を広めて、いざという時呂布はどうするつもりなのか。

成廉は雷音に跨ったまま、雷音の脚が赴くままふらふらと長安城内を彷徨いていた。

——そういえば……白鈴はどうしているのだろうか。

成廉は名前しか知らない、少女に思いを馳せた。

初めて会ってから一年の月日が経とうとしている。白鈴とは遷都以来、行方知れず、洛陽の酒屋が唯一の共通点だった。白鈴は成廉に会いたくなったら、正午過ぎに酒屋に行けば必ず会えたのだ。

しかし、長安への遷都によって、白鈴がなかなか身の上話をしてくれない事が災いし、成廉は白鈴の手掛かりを全く掴めずにいた。

——このまま、もう会えないのかな。

成廉は白鈴に惹かれていた。

小さい躰の可愛らしい仕草は今でも成廉の脳裏に焼き付いている。会えるものなら会いたい、だがその方法が分からなかった。

成廉が裏路地に入った時、女の悲鳴が聞こえた。

長安は董卓が遷都してから、治安がかなり荒んでいる。強制移民により職をなくした者は数知れず、盗賊やごろつきに身を落とす者も少なくなかった。

今、長安でまともな職に就いているのは官吏と董卓の虐殺から逃れた富豪だけで、ほとんどの民は重税に喘いで明日を生きれるかどうかの生活をしている。

そんな長安の裏路地の悲鳴など日常茶飯事なのだ。

だが、なぜか今回ばかり気になった成廉は声のする方へ雷音を進めた。

建物で日の当たらない影になった裏路地に小さな少女が丸腰の男三人に服を脱がされていた。

少女はこんな裏路地に似合わない、というより不自然な豪華な着物だった。恐らく強姦ではなく服狙いの強盗だろう。

「お前たち！ 何をしている！？」

成廉が叫ぶと三人の男は慌てた。

「やべえ！ ずらかるぞ」

どうやら成廉の格好を見て、都尉と思ったらしい。少女の恐らく絹で出来た上着だけを盗って、彼らは逃げてしまった。

「君、大丈夫？」

成廉は雷音から降りると、倒れ込んでいた少女に手を差し伸べた。

「だ……大丈夫です」

その声は聞き覚えがあった。

少女ははだけた服を直しながら、羞恥心からか赤らめた顔を上げ

た。

二人の目が合う。成廉は時間が止まったかのように感じた。

「白……鈴……？」

涙を浮かべた瞳で成廉を見上げてきたのは白鈴だった。

「れん……れん？」

キョトンとした目で白鈴は成廉を見上げてきた。寸の間を置いて、その目に涙が滲み出す。

「廉々！」

白鈴は成廉に飛びついた。

「うわっ」

成廉は体勢を崩して尻を打ってしまった。

「な、何でこんな所にいるの？」

驚いた成廉が聞くと、白鈴はめそめそとここに来た経緯を話し始めた。

白鈴は遷都の際、祖父に特別に手配され、略奪されること無く無事に長安へ移動出来たらしい。

成廉の事が気にかかっていたら、いても立ってもいられない心境だったが、同時期に反董卓連合が結成されて戦になってしまった。

白鈴は成廉が戦に出陣する事を知っていたので、かなり心配してくれたらしい。

「でも、呂將軍の元で闘うって聞いて少し安心したの」

成廉は眉を上げた。

「軍の陣容なんかがよく分かったねえ」

「え？ あの、おじいに頼んだら色々教えてくれて……」

軍の配属、陣容は秘密事項である。普通は戦に参加している者、中央の高官ぐらいしか知ることが出来ない。白鈴の祖父という者は余程の位という事だろう。

それだけ高官なら名声もある。もしかしたら、すでに会っているのかも知れない。

それから白鈴の元には呂布勝利の報せが訪れ、その度に白鈴の顔に安堵の表情が表れたのである。

虎牢を中心に半年以上続いた対戦も、連合解散という形で終わりのも告げ、白鈴はまた成廉に会う機会だ、と早速捜す事にしたのである。

しかし、情報源だった祖父は戦以来、なかなか会ってくれず、手紙も返事が無い。

どうやら屋敷に籠もっているらしい。

仕方無く、前回の様に館から脱け出した白鈴は成廉の姿を求めて長安の街中を捜し回ったのだ。

「そしたら、さっきみたいに変な人たちに……」

襲われるのも当たり前である。成廉は白鈴がどの位の家娘なのかは知らないが、白鈴の服装はとにかく煌びやかだ。

野盗どもに襲われるのも仕方が無い。

今の長安の裏路地に豪華な服装の少女が彷徨いていれば、それは襲ってくださいと言っているようなものだ。

白鈴は『今の長安』というものを理解していないようだ。董卓が遷都してからの荒れようを耳にしないのか、余程の世間知らずのお姫様である。

「話はこれくらいにして帰ろうか」

成廉は白鈴を雷音に乗せた。その高さで白鈴の顔に笑みが戻る。

裏路地から出ると、日が傾き夕陽が街を照らしていた。

「なんか思い出すね」

「何を？」

成廉は手綱で雷音を引きながら聞くと、白鈴は笑いかけた。夕

陽で簪がキラキラ光る。

「廉々と初めて遭った頃！」

「ああ、そういえば……」

黄河の畔に二人で行った時も綺麗な夕陽だった。成廉は白鈴に会うまでまともに夕陽など見たことなかった。在るのが当たり前物を美しいと感じなかった。

しかし、今は違う。白鈴と出逢い、二人で見る夕陽は至福の世界だった。

「ここでいいよ」

長安の北で白鈴は止めた。

「何で？ 送っていくよ」

成廉が振り返って言う和白鈴は首を振った。

「後はあたしだけで行けるもん」

白鈴は眉を寄せた。そうは言っても成廉は不安である。

「だめだよ。さっきみたいに襲われたらどうするの？」

それにこれを機会にどこに住んでるのか知っとかないと、また会うの大変だよ」

「いいから！」

少し怯えを感じさせる顔で白鈴が叫んだ。いきなりの豹変に成廉は驚いた。

「どっ……どしたの？」

「ここで……いいの」

白鈴は雷音から降りようとした。しかし、雷音の肩の高さは成廉の身長とほぼ同じだ。

案の定、白鈴は落ちて尻を打ってしまった。

「痛ッ」

「だっ大丈夫!!？」

「大丈夫」

成廉が手を差し伸べる前に白鈴は立ち上がって、大通りの人混みに紛れてしまった。

——おかしい。

白鈴の顔は明らかに成廉が館に来ることを拒否していた。成廉は雷音の手綱を握り締めたまま、白鈴の後を追った。

人混みでも目立つ程の服装であとをつけるのは容易いことだった。

しばらく走ると、上流階級の貴族の屋敷の集まる所まで来た。ここらは爵位を持った者や皇族、王族が生活している。

白鈴はそのうちの一軒の門番が頭を下げている門をくぐった。

もちろん成廉が追えるのもここまでだ。門番にあっさり止められた。

「こちらは渭陽公のお屋敷だ。ご用件は何か？」

成廉は耳を疑った。

「渭陽公？」

「そうです」

「失礼を覚悟で聞きますが今通ったお子ですか？」

「はい」

「それは本当なんですか？ 何かの間違いとか……」

「まことです。密かに外出なさっていたそうで」

「そう……ですか。また来ます」

成廉は来た道を引き返し始めた。

だんだんと頭が真っ白になる。驚愕と失望感に成廉は押しつぶされそうだった。

渭陽公、白鈴は爵位を持った成廉よりも遥かに上の位であったのだ。

そして、董卓が孫娘に贈っていた爵位も渭陽公。

つまり白鈴は董卓の孫だったのである。

——どうして白鈴が……。なぜ董卓の孫なのか。いや、どうして教えてくれなかったのか。

成廉は官舎に帰り着いてから溜め息ばかりついた。

「廉、お前どうしたんだ？　なんか変だぞ」

様子を悟った張遼が声を掛けた。魏越も心配そうに見ている。

「あ……の」

成廉は口を開いたが何と言えど、何から話せばいいか分からなかった。

「ごめん、一人になりたい」

なんとかそれだけ言うと、成廉は戸に手を掛けた。

「奉先様が召集かけてるぞ」

魏越の呼び掛けに成廉は片手を挙げて了解の意思を見せると、静かに中庭に出た。

あれから董卓誅滅の計画は着実に進んでいる。

董卓の暴虐は殺すべき凄まじさで、前までは成廉は董卓を殺す事自体に抵抗は無かった。出来ることならば己の手でとどめを刺す事も厭わない。

——でも……。

今は違う。

董卓は白鈴の祖父であり、白鈴は董卓の孫なのだ。董卓を殺す事それは白鈴を殺す事に等しいと言える。なぜなら、董卓の暴虐は一族皆殺しにされて然るべきなのだ。

普通に逆賊と見なされても三族処刑だが、董卓は度が過ぎている。

恐らく王允は董卓の一族全てを根絶やしにするだろう。その中に白鈴がいるのだ。そう考えるだけで成廉の胸は張り裂けそうだった。

——もしかしたら僕が手をかけることになるかもしれない。

董卓が死ねば呂布を含め、軍は王允が掌握するだろう。そして最初の命令が董一族の皆殺しだ。そうなれば成廉がなんとかする事は全くをもって無理である。

——とにかく、明日もう一度渭陽公の屋敷を訪ねよう。

もしかしたら似た少女を追っていたかも知れない、という小さな希望を胸に成廉は呂布の室へ向かった。

呂布の室に成廉、魏越、張遼、高順が集まった。

「では、今回の計画を説明する」

呂布は腕を組んだまま話し始めた。

まず、完成した嵎城。

何十万という人民を動員した建設が終了し、董卓は一族と共にそこへ移住する事になっている。金銀財宝を荷車数千丈、美女千人を侍らせるといふ噂である。嵎城には兵糧二十年分が民から徴収され、貯蓄されているという。

一歩間違つて籠もられてはどうしようもない。まずは誘き出す事が必要である。

そこで、董卓が中央から離れてから、すぐに帝、王允に協力してもらい、董卓に帝位禅譲の偽勅を発する。董卓は浮かれてすぐにも参内するだろう。

そこで成廉らが待ち伏せし、万が一の為に呂布も董卓の護衛として挟み撃ちする。

帝の御前であるから護衛兵の数も限られる。董卓を殺せるのは確実である。

董卓を殺したら、呂布はすぐさま手勢を率いて睢城を襲撃。董一族は皆殺し、財宝・兵糧・後宮から連れ出された女官を奪還する。

その後、呂布は西涼の董卓四將軍に備える事となる。

「肝心なのはそれからだ」

「はい、李確らはかなり手強いでしょうから……」

「そうではない」

「??」

「俺は睢城陥落を見届けたら蝗紅隊以外の兵を解散させて、長安から出奔するつもりだ」

四人は顔を見合わせた。呂布は一体何を言い出しているのか。

「しかし！ 奉先様！ 我々がいなくては王允なんか李確らを退ける将才などありません」

魏越が軽く反発した。

「だろうな。王允は殺され、帝は李確らの虜となるだろう」

「そんな!!」

張遼の顔色が変わった。

「俺達は帝の現状を打開するために司徒殿と協力するんじゃないのですか!？」

その司徒殿を見捨てるおつもりですか!？」

呂布は険しい目つきで張遼を見た。

「王允に何を吹き込まれたのか知らんが、俺達は今回利用されているだけだ」

「どういう事です?」

「王允は董卓に代わって天下を我が物にしようとしているにすぎん。董卓に対抗しうるのは董卓の側近であり、精強な軍を率いる俺達だから」

「そんな……」

「それとも張遼は王允の狗として生きていきたいのかな？」

さすがの張遼も口を噤み、皆黙り込んだ。なんと言っても皆一番は呂布なのだ。

「安心しろ、李確らもすぐに何者かに滅ぼされるだろう」

それが天下というものだ、と呂布は呟く様に言った。

「出奔したら俺もそろそろ旗揚げしようかと思っている」

この言葉には皆顔を上げ、目を輝かせた。

——遂に呂布奉先が天下に名乗りを上げる……！

「そこで新たな本拠地を張遼の才に任せようと思う」

張遼がハッと頭を下げる。本拠地の選定を任すというのだ。呂布が出奔して、旗揚げすると言った以上、張遼も皆も呂布の為に尽力するのみだ。

「以上！ この事は時がくるまで門外不出とする」

結局、成廉は一言も言葉を発せられなかった。

計画通り事が進めば、渭陽公が白鈴だった場合、その死は免れられなくなったのである。

魔王死す

成廉は普段通りの調練が済むと、白鈴と思しき渭陽公の屋敷に向かった。昨日とは別の門番が立っていた。

「ご用件は」

「中郎将呂布奉先麾下所属、成廉と申します。渭陽公にお目にかかりたい」

「承知しました。しばらくお待ちください」
門番が従者に取り次いだ。

大して時間はかかってないのだろうが、成廉にはこの時間がとても長く感じた。しばらくは従者は帰ってこなくて、成廉は門の前で行ったり来たりした。

ようやく従者がゆったりと出てきた。

「まことに残念ですが、成廉様とは面識が無いため、嵎城への引越しの準備を優先するとの事です」

「そう、ですか……」

つまり、これは本当に白鈴は渭陽公ではないかもしれないし、逆を言えば白鈴が自分の正体を晒したくないが為とも考えられる。

その言葉を求めていたのか、それとも渭陽公が白鈴だったら良かったのか、成廉は自分でも判らなかった。

——一体、僕はどうすればいいのか。

面会拒否された以上、ここは引き下がるしかない。

押し入っても白鈴に会いたい気持ちだったが、董卓誅滅の計画が進んでいる以上、大事を起こすわけには行かなかった。

董卓が成廉の身辺を取り調べれば、計画は露見されてしまうのだ。近くにいるかもしれない白鈴を前に成廉は何もする事が出来なかった。

渭陽公を含め、董一族が嵎城に移住した。

成廉は計画実行の新年が近付いても相変わらず白鈴の姿を求めて長安の街中をさまよっていた。

呂布や魏越らが密かに兵を手配している間、成廉は何も手伝わなかったのだ。

さすがに不審に思った魏越と張遼が呂布に許しをもらって成廉をつけてみると、成廉は特に何かするわけでもなく溜め息を吐きながら雷音とぶらぶらしているだけだった。

人の多い大通りを抜け、人気の無い裏路地に入り、北の貴族達の屋敷が立ち並ぶ中の一軒の前に着いた。

そこでもう一度大きく、成廉は溜め息を吐くのだ。

苛ついた声で魏越は成廉に呼び掛けた。

「おい！ 廉！」

成廉は驚いた様に振り返った。そして、魏越と張遼の存在に気付くときまり悪そうに俯いた。

「この間も聞いたが、一体全体何があったんだ？」

「俺達に相談出来ないことなんか無いだろう？」

渭陽公を含め、董一族が住んでいた長安の北、宮廷近くは臣官が多い。色々と話するには人が多過ぎる。三人は信頼でき個室のある、いつもの酒屋へ向かった。

「で？」

「で？　って言われても……」

成廉は苦笑いしながら二人を交互に見た。

「じつは……。ああ！　やっぱり言えない！

僕に構わないでくれよ」

魏越と張遼は顔を見合わせた。

——口に出来ないなんてよっぽどの事だよな？？

それでも二人は悩みの解決方法を考えてやらねばならない。ただでさえ董卓誅滅計画が近くてピリピリしているのだ。大きな悩みのあるような者が計画に関わっては支障をきたす。

「まあ、酒でも飲め」

魏越は店で一番強い酒を注いでやった。

漢の酒は余り強くない。後に曹操が新たな酒造方を発案するまでは子供でも飲める程度だ。この酒は西域より仕入れられたものだった。

成廉は勧められるまま杯を空にした。するとどうだろう。成廉は次々と酒を飲み始めた。少々酔ってくると、上機嫌に肴の鹿肉を口に運ぶ事に集中していた。

が、これは強い酒。いつもとは訳が違う。

成廉は急に白鈴の事を思い出すと声を上げて泣き始めた。これには二人とも驚いた。

普段涙を見せない成廉が声を上げて泣いているのだ。これは本当はただ事ではない。

二人は必死に慰めようとしたが、成廉は首を振りながら白鈴の名を連呼する。なかなか手をつけられる状態ではなかった。

「いつも最初に酔っ払うこの俺が誰かを介抱するなんて考えもしなかったぜ」

普段の酒屋での三人なら成廉と魏越は逆である。

「ところで越、廉の言う『白鈴』は誰なんだ？」

「うーん、誰だろう。どっかで聞いたことが……ああ、そうか」

魏越はいつぞやの成廉と二人、洛陽の酒屋で飲んでいたときやつて来た華美な服装の少女を思い出した。

「白鈴ってのは廉と仲のいいガキで……」

ん？ 待てよ、でも歳は十四で……あれ？

なんかお似合いで……」

・
・
・

「結局、成廉と相思相愛に見えてチャラチャラしたおなごって事だな」

長々、だらだらと魏越の説明が終わると張遼は結論付けた。

「まあ、そういう事だ」

「って事は……」

「事は……？」

「廉はそのおなごに振られたって事だ！」

張遼はニヤリとしながら推測した。

「でなきゃあ、ここまで泣くか？ 普通」

「廉は白鈴に本気で惚れてた訳か」

なるほど顔で魏越も頷いた。

二人は成廉を挟み込んで座るとそんな女忘れちまえ、と慰めた。

「子供なんか狙うからそうなるんだよ。長安にいい女は腐る程居るぜ」

しかし、魏越は大抵の器量のいい女は董卓に召し上げられている

事に気付かない。

「馬鹿越！ めばしい女はもういないぜ。それより廉、いい女が揃ってる店、知りたくないか？」

この際遊女でもいいんじゃないか？」

意外にも張遼は女遊びに手練れているようだ。

しかし、少し落ち着いた成廉は話がどんどん違う方へ逸れるのが我慢ならなくなってきた。

「……違うんだ」

酔いが手伝い、成廉は二人に全てを話す事にした。

「??」

「何が違うんだ？」

「僕は白鈴に振られた訳じゃない」

二人は成廉に耳を傾けた。結局、成廉は振られた事を認めたくないだけだという事を期待しながら。

「白鈴は……董卓の孫娘らしいんだ」

「……冗談だろ」

二人は成廉が酔いに任せておかしな事を言い出したのかと思った。

「絶対じゃないけど……多分本当だ」

「証拠は？」

「董一族の実家は隴西郡の天水だ。白鈴も隴西の南安から来たって言ってたし、姫って呼ばれてた。普通の身分じゃない」

「それだけで決めつけるのは……」

「それだけじゃない。董卓が孫娘に贈った爵位は？」

魏越は首を捻ったが張遼は答えた。

「……渭陽公」

「そうだ。この間白鈴の後をつけた時、白鈴は渭陽公の門をくぐって行った」

二人は真剣に耳を傾けた。どうやら本当の本当にただ事ではない。白鈴はこれから殺そうと計画している男の孫娘だというのだ。

成廉は更に付け加える。

「その後門番に今通った白鈴について聞いたんだ。……そしたら白鈴が渭陽公だ、って」

「……」

しばらく沈黙が続く。誰も何と言えいいのか分からなかった。

「それで、白鈴は今まで自分の正体を書いてくれなかったのか？」

「越だったら、わたしはあの人を煮殺す事が趣味の董卓の孫娘です、って言えるのかよ！」

「そう……だよな」

魏越は成廉の心の苦しみを少し感じ取ったのか下を向いて、黙り込んでしまった。

「まだ惚れてるのか？」

張遼は静かに聞いた。

「……………」

「やっぱり忘れちまえ！」

張遼は成廉に言い放った。

「そんな雑念は計画に必要無い。今ごちゃごちゃ考えたって、とにかく董卓誅滅を優先しなきゃいけないんだ！」

目を赤く腫らした成廉はゆっくり顔を上げた。

「俺達は董卓を放って置くのか？」

董卓を殺したら天下は乱れるかもしれない。でも、あんな奴を放って置いたら駄目なんだよ！

俺達は董卓を殺す！ そう決めたじゃないか」

少し張遼も酔ったのか熱っぽく語った。

「董卓を殺して天下を救うんだ！ その気持ちは廉も同じだろ？」
成廉は小さく頷いた。

「だったら……女なんて忘れるんだ」

「分かっ…………た」

その後はいつも通り三人とも飲んだが、最終的に歩けなくなる程飲んだのは張遼だった。少々董卓絡みの話になると熱くなってしまうからかも知れない。

今日は不思議と魏越は酔わなかった。

魏越は酔っ払った張遼を担ぎ、よろよろ歩く成廉を連れて店を出た。

「今日はありがとねん。色々話したら本当にすっきりしたん」

成廉はなかなか舌が回らなかったが魏越になんとかお礼した。

「いや、いいんだよ。いつも悪いな、俺がこんなに廉達に迷惑かけてると思っただけ」

そう言うのと魏越は背中で寝ている張遼を顎でしゃくった。

「それにしても……」

「んー？」

「本当にいいのか？ まだ惚れてんだろ？」

「……」

しばらく成廉は黙っていたが、ゆっくり空を見上げた。

「もういいんだよ。すっきりしたっていったろ。僕達にはやらなきゃいけない事があるんだ」

「……そうか」

それでも魏越にはそれが本心に思えなかった。

西暦一八二年、元日。

嵎城では盛大な新年の宴が催された。董卓は文武百官招待した。

もちろん、宮廷でも新年の宴が催されていたが、董卓に逆らう事を恐れた者がほとんど嵎城へと向かったので、淋しく静かなものと

なった。

しかし、時の帝・協はめでたい日にも限らず、心落ち着かなかった。

「王允よ、無事に事は進むだろうか」

「陛下、どうかご安心ください」

王允は猫なで声で協をあやす様に言葉をかけた。『事』とはもちろん董卓誅滅の計画である。

協はまだ数え年十二。あの人々から魔王と呼ばれる男を殺すのだ。明るみに出れば、董卓は帝と言えども容赦しないだろう。心配しないほうがおかしい。

この日、協は密かに王允としたためていた帝位禅譲の詔を董卓に送っていた。

臣下とは董卓が漢帝国を纏め、その数々の功を評価して禅譲するという事で申し合わせていた。この計画を知っている者はちょうど宮廷の宴に招待されている者だけだ。

「董卓は詔をすぐにでも受諾して長安に来るでしょう。後は我らにお任せください」

王允をはじめ、臣下のほとんどが董卓は己の権力に溺れて驕り高ぶっていると疑ってない様である。

しかし、協はそうは思わなかった。帝位について以来、董卓を近くから見てきた。

董卓は好き勝手、欲望の赴くままに振る舞っている様に演じているに過ぎない。どうすれば人々が畏れ、逆らう気力も失せるか、熟知しているようにも見えるのだ。

それもそのはず。董卓の裏には李儒が見え隠れしていた。相手にしているのは決して董卓一人では無いのだ。

「頼んだぞ」

協は食事にほとんど手をつけることが出来なかった。

「――以上、この詔が帝のご意志である。謹んで受けられくだされ」

一同は水を打った様に静まり返った。

宴もお開き、といった時に朝廷からの使者が董卓に禅譲する詔を報せたのだ。

帽城に呼ばれていた人々は皆、信じられないという顔だ。そして、所々から小さな嗚咽が漏れてきた。

帝が禅譲する。

それは漢帝国が終幕を迎える事を意味するのだ。詔が偽物と知らない者は涙を流した。

そんな中、董卓の護衛として招待されていた呂布は一人静かに成り行きを見守っていた。

董卓が詔を受けようと受けまいとも、長安へと誘い込まなくてはならない。とは言っても、董卓はすぐにでも長安に向かうだろう。

呂布はそう思った。

だが、董卓は詔を良しとしなかった。

「考えておこう」の一言を告げて、使者を帰したのだ。

宴が終わると董卓は李儒と共に個室に向かった。それを呂布も追った。

「相国！　なぜお受けにならないのです？　名誉ある事では御座いませんか」

呂布は董卓に考え直すように訴えかけた。しかし、董卓は普段よりも怯えた目をしながら首を振った。

「呂布よ、儂はあらゆる不徳に手を染めてきたが、己のした事を忘

れたことはないぞそんな儂に帝位を譲る者がどこにおる？」

魔王は命を狙われる小動物の様だった。まるで周りは全て敵だ！と言わんばかりの警戒心である。

「恐れながら私も同意見です。明らかに何か裏があるでしょう」
これだから腕っ節だけの武將は……と李儒は蔑んで呂布を見上げた。

——董卓の警戒心与李儒の頭脳が合わさって、董卓は頑なになっているのか……。

「それでは相国が直接帝を問いただすのはいかがでしょう？ 俺が護衛を務めます」

何としてでも董卓を長安に連れ出さなければ、と呂布は提案した。

「……ふむ」

董卓は腕を組んで目を閉じた。

「いけません！」

李儒は激しく反対した。

「相国、わざわざ帝に構う必要など無いのです。実質的に漢帝国を支配しているのは相国です。

崤城に籠もって天下が動くのを待ちましょう」

李儒の言うことは確かに天下統一への近道だ。群雄が互いに争い始めたなら、その背後を攻めればいいのだ。天下は既に董卓がほとんど動かずとも転がり込んでくる情勢だった。

董卓は迷っていた。命は惜しい。李儒の言うとおりが一番安全なのだ。しかし、欲を言えば帝位も欲しい。

董卓のこの迷いは実に三月に及んだ。

そして遂に董卓は李儒の反対を押し切って、長安へ向かう事にした。護衛には呂布と兵一万が同行した。呂布が直接指揮出来る兵が

五千だけだったので、これには賛成しかねた。

だが、新年を迎えると同時に董卓を殺す計画は大幅な遅れをとっていた。

策謀というものは時間が経てば経つ程、露呈する可能性が高くなる。もう、贅沢を言っている隙は無かった。

新年より三カ月経った、四月の事である。

一行は長安に入城した。

董卓の馬車を先頭に肅々と宮廷へと向かった。見守る人民は董卓を恐れて何も言うことなく、もちろん禅譲される新たな帝の誕生に喜びの声を上げる者など皆無だった。

この静かな都に董卓は一抹の不安を覚えた。

「やけに静かじゃ……」

だが三カ月も悩んで出した答えだ。帝に会わずして帰れようか。

董卓は不安を頭から追い出した。

馬車は宮廷の広場にさしかかった。ここから先はさすがに一万もの兵を連れては行けない。

「呂布と兵一千以外はここで待機せよ」

同伴を認められた一千は全て呂布の指揮下だ。呂布は密かにほくそ笑んだ。董卓誅滅計画、最後の仕上げは董卓自身がしてしまったのだ。

玉座へと続く道の両脇を朝廷の百官が列んでいた。董卓の出迎えである。

しかし、彼らにとってその『出迎え』にはもう一つの意味がある。

彼らは帝の御前、剣を腰に携えていた。皆、文官に変装した近衛兵なのだ。

彼らは最後の門をくぐる董卓の馬車を微動だにする事無く睨みつけていた。

「閉門せよー！！！」

王允の声が響きわたった。

唯一の出入り口である門が閉められた。

そして、変装した近衛兵が剣を抜く、物陰からもぞろぞろと湧き出る様に出てくる。

今や董卓は袋の鼠だ。

とっさの事に董卓は状況を掴みかねていたが、己が危機的状况に陥ってしまった事だけは理解出来た。そして、董卓の心を満たし始めたのは謀叛に対する怒りでも、李儒の言うとおりにすれば良かったという悔しさでも無かった。

それは諦めだった。

「散々、悪行してきた儂が死ぬ時が来たのか」

馬の操り手のいなくなった馬車で董卓は一人呟いた。

思えば己が命を惜しく思った故の非道とはいえ、今まで殺される事はなかった。

しかし、終わりとは必ず訪れるもの。今まで好き放題出来たからだろうか。不思議と董卓に地位も金も女も、はたまた己の命さえも惜しいとは思わなくなっていた。

「だが……」

董卓は馬車から飛び出した。

「儂はただでは死なんぞ！！」

董卓は最初に斬りかかって来た近衛兵の斬撃を掌底で弾くと、その頭を握り潰した。弾ける様に肉片が飛び散り、白い脳漿と血が噴

き出す。

頭を潰された近衛兵をしばらく手足を痙攣させていた。近衛兵達は董卓がぼろくずを投げる様に放った死体と血の赤に染まる手を交互に見ると、僅かにたじろいだ。

董卓はその一瞬の隙を見逃さない。一気に間合いを詰めると董卓は渾身の一撃で取り囲む一角を吹き飛ばした。

近衛兵達が慌てて応戦しようと、董卓にいくつもの刃が降りかかる。だが、董卓は短く雄叫びを上げ、近くの死体を拾い上げ全て受け止めた。

同時に死体が手に持つ剣を取ると、無造作に振り回した。剣がうなりを上げる度に首や手やら胴体やらが宙を舞う。

その様を見て近衛兵の包囲も少しずつ遠巻きになる。誅滅されるはずの董卓が近衛兵を虐殺する。計画は大きく外れていた。

董卓に手をつけられないという報せを受けて、呂布は成廉らを引き連れ、董卓の元へ急行した。

そこで一行は愕然と立ち竦んだ。

石畳の通りは血の海と化し、誰のものとも判らない首や手足が山の様に転がっている。その中央に魔王が立っていた。百名の近衛兵が全滅だ。

そもそも近衛兵はただの兵では無い。軍を率いる隊長や、校尉から選抜される。いわば全国から集められた精強な武人達なのだ。

近衛兵に選ばれるのは帝の護衛という誇りと栄光をもたらすと同時に漢帝国で選ばれし実力者と認められる事を意味する。力量だけなら蝗紅隊の兵を凌ぐ程だ。

それを全滅させるとなると『魔王』という異名もあながち間違いは無い。

成廉は初めて董卓に恐怖を覚えた。魏越、張遼も同じである。今まで董卓の行動には怒りを覚えていた。しかし、それは恐怖よ

りも行為に対する怒りが先行していただけた。

今の董卓を目の前に怒りを通り越して、恐怖が沸き起こったのだ。

——今の董卓に勝てる者はいない……！

呂布が横にいながら三人はそう思った。しかし、当の呂布本人は焦った様子も無く董卓に近付いた。

その顔に感情というものは貼り付いておらず、その無表情は成廉らに呂布と初めて会った頃を連想させた。

ぼうっと立っていた董卓は血の跳ねる音でようやく呂布らがいることに気付いた。

「呂布か……」

董卓は寂しそうな目で呂布を見た。

「ふふふ……かっはっはは」

痰の絡んだ様なガラガラ声では無く、かすれた声で董卓が笑った。

「護衛が聞いてあきれのう、呂布よ。最初っから儂には護衛など必要無かったのじゃろ？」

呂布らの服装に戦闘の後が無いのを見て董卓が話しかけた。その様子から董卓に抵抗の意志がないと見た呂布は方天牙戟を成廉に渡した。

「董卓、お前の首を頂戴しよう」

「それは構わんよ。だが、その前に儂の質問に答よ。これは最後の命令じゃ」

董卓は剣を棄てた。

「なぜ、儂を裏切るのじゃ？」

呂布は表情一つ動かさずに口を開いた。

「裏切るもなにも、俺は誰かに忠誠を誓った事など無い」

「では、何が忠誠心を起こさせなかった？」

「それはお前が臆病者だからだ」

董卓は表情を崩した。この事には成廉と張遼も薄々気付いていた。「董卓、お前は別に一つも魅力が無かった訳ではない。お前がただの暴君ならば俺はお前に一生仕えただろう」

成廉らは息を呑んだ。

「しかし、お前は自分の命ばかりを気にかけ、臆病心に従って暴君のふりをしていたに過ぎない」

「だが、暴君と臆病者の儂、たいして違いは無いと思うが？」

「大違いだ。暴君が暴君たる所以は自分の悪行をして人民を治める事。」

対して臆病者のお前はとことん暴虐の限りを尽くして『治め』られたのはお前の命だけではないか。

人の上に立つ者は従う者全ての命を背負う覚悟が無いといけない。全ての臣下の命を握っている自覚もない、自分の命だけ守るのに必死なお前は君主と呼ばれる資格さえ無いのだ」

「……そうか」

「お前はただの乱世の敗者じゃない。君主になりきる事も出来なかった敗者だ」

散々こき下ろされた董卓だったが不思議と晴れやかな気分になってきた。もう、己の命を守る為に目を光らす必要も無くなったのだ。

「お前が儂を殺す、悔いはない。………やれ」

呂布は躊躇いもなく、腰の剣を抜き放った。

一拍置いて董卓の首が地に落ちた。その顔は安堵感と充足感で満ち溢れていた。

長安出奔

「見事じゃ、呂將軍」

王允は悲惨な通りに表情を崩す事無く、満足げに言った。

「これより董卓の全権は儂がとる。すぐさま董卓の一万と長安の官軍を率いて崤城を襲撃せよ」

まるで呂布を部下の様に扱う王允に成廉らは怒りを覚えたがすぐに思い直した。

——どうせこの男は我々に見捨てられるのだ。

「承知した」

呂布は成廉に軍を召集するように命じる。すぐに宮廷前に五万の兵がかき集められた。

いざ出発という時に呂布はしばらく腕を組んで一考すると王允に文優を貸してくれないか頼んだ。

「文優なんかを連れて行ってどうするのじゃ？　彼は武勇はからきしだめぞ」

「いえ、官軍の構成を見るとどの将も武勇一点張りなもので、文優の様な知略の者も必要かと……」

「將軍も武勇だけでなくなかなかの将器だの。そういう事なら良かったら」

明らかに馬鹿にした様な口振りで王允は文優に同伴するように言った。文優は困惑した表情だったが承知した。

「どういうおつもりです？　呂布様」

崤城に急行する馬の上で文優は困惑しきった顔を呂布に向けた。

「文優、俺達について来い」

勿論、兵を解散させた後の話だ。

「しかし、」

「約束だろう？」

呂布は反論させない。

「この機に長安を出ておかと……死ぬぞ」

「……」

王允が政権を握れば治世は安定するかもしれないが、それは乱世でなければの話だ。すぐに涼州の李確ら四將軍に滅ぼされるだろう。呂布は文優がそのまま死ぬのが惜しかった。

何を考えているのか分かりづらく、天下を手に入れる為なら何でもしそうな男だが、それでも呂布は文優をそばに置いておきたかった。

「……しょうがないですね。呂布様について行きますよ」

「それでこそ俺の知っている文優だ」

ふっと呂布は笑った。

「どうせ王允様の元は退屈でしたしね。あの方は考え方が古臭い上に根拠の無い自信だらけです。君主としては下手したら董卓以下かもしれません」

「そいつはよっぼどだな」

文優も董卓から離れ、天下さえ手に入れば……と、最も天下に近かった王允に従っただけだったのだ。

王允は為政者としては優れてもどこか楽観的で天下が手に入れるのが当然としていたところがあった。

「王允様の滅びは内からかもしれません」

文優の予言と同時に先鋒から嵎城が近いことが報された。

おぼろげに嵎城が見えてくると官軍の兵達の胸は高まり、敵が見えてもないのに雄叫びを上げ始めた。

皆、この日を心待ちにしていたのだ。長安、洛陽と住んでいて董卓に虐げられ無かった者はいない。

嵎城にいる董卓の一族を殺すのは彼らにとって、今日限りの待ちに待った鬱憤晴らしだ。目をギラギラと光らせた官軍はさながら殺しを楽しもうとする猛獣の样だった。

変わって蝗紅隊の含む呂布軍はどちらかというと冷めていた。虐殺は董卓政権下で充分経験した。どうして董卓が死んだのにまた虐殺しないといけないのか……という消極的な気持ちが占めていた。

中でも成廉は消極的どころか顔は青ざめ、手汗が激しく、しきりに掌を雷音に擦っていた。

——白鈴があそこにいたら……いや、そんなはず無い。渭陽公の門をくぐったのは別の子だ。……でも、もしあれが白鈴だったら……。

成廉の頭は白鈴の事でいっぱいだった。

あの官軍にかかれば董卓の一族は皆殺しになるだろう。そのなかには勿論白鈴も含まれる。

成廉は白鈴が董卓の孫というよりも今の状況が信じられなかった。信じたくなかった。

嵎城の城門が迫るにつれて、成廉の胸は官軍の兵とはまた別の意味で高まる。

官軍はおよそ四万。彼らより先に白鈴を見つけるなどほぼ不可能に近い。運良く遭遇出来として、助ける方法が無かった。あの派手な服装の白鈴を連れ回せば官軍に見つかってしまう。

仮に嵎城から助け出せてもその後どうすればいいのか。

そもそも祖父を殺され、親族を虐殺された白鈴が生きる道を選ぶ

だろうか。自ら死を選ぶかもしれない。

軍が勢いに任せて城門を破っても、成廉は決断しきれずにいた。

兵達が城内に雪崩れ込む。

城という名の檻の中で猛獣達が解き放たれた。官軍は目に入る者を手当たり次第殺し始めた。

なかには董卓に仕えていた者、移民を余儀無くされただけの者、商人、無関係な者達までが手に掛けられた。

遅ればせながら李確所属の駐屯軍が迎撃し、各地区で戦闘が始まった。どこからともなく火の手が上がり、市民区が火に包まれる。

——早く見つけないと……！

「白鈴ー！！ どこだ！」

口が勝手に開く。躰が勝手に動く。成廉はただ白鈴の姿だけを求めて、雷音と共に宮殿目指して駆け出していた。

「廉！」

いくらか離れた所で魏越は成廉が単騎駆け去るのを見ていた。

「ついて来い！」

魏越は騎兵一千と追いかけた。

既に官軍は宮殿に侵入していた。

「白鈴ー！！ 返事をしてくれ！」

しかし、宮殿の中は逃げ惑う女官や文官で大混乱だった。成廉の必死の声も無数の悲鳴にかき消される。

官軍は女官にも容赦が無い。董卓と交わりがあれば子が成される。全てを根絶やしにするため腹が膨れているだけで殺される者も多数

いた。

董卓との関係が見受けられない女官に待っていたのは無数の獣による強姦だった。勢いに任せた官軍は敵兵を追い払うと始めたのは残虐な処刑と乱交騒ぎだった。

董卓が身辺に侍らせた著名人もまた問答無用である。修羅場と化した宮殿はその華美な装飾を血に濡らしていく。

昨日まで優雅な香の香りがしたはずの応接間は今や生臭い鉄錆の臭いが充満している。

昨日まで女官が楽しくおしゃべりした室は獣に犯された。

日々、董卓に脅えながら文官が書きとめ続けた竹簡は官軍に踏み荒らされた。

成廉は目の前で繰り広げられている光景にただ失望しかなかった。

——人は極限まで虐げられるところも残酷になるのか……？
それともこれが僕達本来の姿だと言うのか？！

成廉は白鈴が今にもこんな目に遭っているのではないかと想像すると背筋に氷の刃が突き立つかの様な気がした。

成廉はもう何も考えられなかった。

近くで逃げ惑う女官を捕らえると首に剣を突きつけた。

「渭陽公の室まで案内しろ」

「公主を売るような事ができるか！」

意外な事に董氏に忠誠心のある女だった。歳も白鈴と近い。

「……殺すぞ」

散々仲間がどうやって死んでいったか思い出したのだろうか。始めは勝ち気な態度だったが次第に脅えた表情になると三度目の脅しに屈服した。

成廉は官軍の兵と同じ様に見られたことが不本意だったが今はそれどころじゃない。

女官が案内したのは宮殿の中でも奥の奥だった。

「ここです」

小さく言った女官を押し退けて、成廉は室に飛び込んだ。

「そ……んな……！」

成廉は目を見開いた。

その室は荒らされた後だった。いくつか死体が転がり、床は血浸しだった。動くものは一つとしてない。

成廉は慌てながら死体を確認していく。

女官はその様子を冷たく見ていた。きっと手柄を逃して慌てる間抜けな将にしか映ってないのだろう。

全ての死体を調べたが、全て成人だった。白鈴ではなかった。成廉は女官に掴みかかった。

「おい！ 本当にこの室が渭陽公の室なのか！？」

「やめっ本当です！ ここです！」

女官は必死に訴えかける。

「くそっ！ じゃあどこにいるんだよ！」

……………白鈴

成廉は膝をついてうなだれた。

「もう、会えないのか……白鈴」

白鈴の愛らしくどこかすました顔が思い浮かばれた。

「僕は君を失いたくなんかないよ……」

「……………れん……」

何か聞こえた。成廉は幻聴かと思った。

「……………れん……………れん」

確かに白鈴の声だった。成廉は頭を上げて耳を澄ました。

「……れんれん」

「白鈴か!?? どこだ!?? どこにいるんだよ!!」

成廉は立ち上がって見渡した。

「ここ」

その小さな声は近くの死体から聞こえてきた。正確には死体の下の床下だった。

死体を退かしてみると方形に血が溜まっていた。よく調べると、指先がやっと引っ掛かるかというくらい小さな取っ手があった。成廉はすぐに引き上げた。

「白鈴……」

そこには脅えた顔を血に濡らした白鈴が見上げていた。

「嗚呼、良かった」

成廉は床下から白鈴を抱き上げると思いっ切り抱きしめた。

「……怖かった」

驚く程か細く白鈴が囁き、静かに涙を流した。涙は成廉の肩を濡らしていった。成廉の胸に白鈴の体温がじんわり伝わる。

二人は愛しい相手としばらく無言で抱き合っていた。

その様子を女官はポカンと見ていた。が、急に顔をひきつらせた。室の外がやたら騒がしくなり、廊下から兵が走り込んでくる音が聞こえてきた。

成廉は目を閉じた。この後どうするか考えていなかった。そして考えつかなかった。

ただ、白鈴を渡すわけにはいかない。成廉は反射的に剣を掴むと、扉を睨み付けた。

「ここで待機しろ」

成廉が外の声の主がよく知った者だと気付いたのは扉が開いた時と同時だった。

「越！」

入ってきたのは魏越だった。

「やっぱりな。廉なら渭陽公を捜すと思ったんだよ」

魏越は女官を一瞥すると二人に近付いた。

「で？ お二人どうするの？」

「それが……」

「オイオイ、俺だってなんも思いつかないぞ」

困った様に魏越は手を振った。

「せめて城からは出した方がいいだろうな……。そこの死んでる奴が着ている服に着替えて誤魔化せばどうだ？」

俺達が女官を攫ってみたくさ」

名案だった。

官軍は気に入った女官を連れて行ったりしていたので怪しまれる事はない。

しかし、彼らには時間が無かった。

白鈴が厭々服を取ろうとすると、また室の外が騒がしくなった。

「なんだ？」

魏越は眉を顰めた。

「そのの兵ら、何をしておる！？」

外から聞こえてきた声は官軍の大將、胡軫だった。

「まずいっ」

事情を知っている魏越と違い、官軍が白鈴を見つけたら問答無用で殺される。ましてや、功績や褒美に貪欲な胡軫である。阻んだら成廉らにも切りかかるか分からない。

決断の時間が迫っていた。

「何をしている！？ 上官は誰だ！？」

胡軫が問い詰める声が響く。白鈴の顔に恐怖の色が戻ってきた。

「くそっ！ どうすれば……」

成廉は部屋中を脱出路が無いか見回した。

だが、ここは宮殿でも奥まった室。籠城専用なのか窓は無く、出入り口の扉も一つだった。

「白鈴、その床下は？」

白鈴は涙を浮かべて、首を振っただけだった。そもそも床下が外に繋がっているのなら、白鈴がここに隠れていたのもおかしい事だろう。

成廉は歯噛みした。もう、何も思いつかない。万策尽きていた。

「越はなんか考えついた？」

魏越は答えなかった。ただ、静かに部屋の隅に怯える女官を見つめていた。

「越？ おいつて！」

「……思いついた」

成廉の顔に希望が射し込む。

「な、本当か！？」

魏越は静かに女官に近付いた。その手が腰の剣に伸びる。

「越！？ 何を……」

成廉が止める間も無く女官の首が跳んだ。その顔は何が起きたのか全く理解してない様だった。魏越は無造作にその首を剣に突き刺した。

「……どっ、どうして？」

「身代わりだよ」

成廉は口が閉まらなかった。

「今の状況を切り抜けるにはこれしか無い。この娘は白鈴に歳が近いし、渭陽公の顔はそんな知られてないだろう？」

董卓は孫で唯一女の白鈴をとても可愛がっていた。なかなか外に出さず他家とも交流させなかった為、白鈴を董卓の孫として知っていたのは世話をしていた一部の女官、従事と親戚だった。

そして、嵎城で虐殺が行われてほとんどが殺された今、白鈴が董卓の孫だと知っているのは成廉と魏越だけだ。

「俺だってこんな事……」

魏越は唇を噛んで、まだ鮮血の噴き出る首の無い女官を見た。

「でも、これしか方法は無い」

魏越は白鈴が首に掛けている渭陽公の印綬を引きちぎった。

「廉はこいつを担いで今略奪したかの様に嬉しそうに俺の後に続け。お前はとにかく嫌がれ。いいな、わかったな」

魏越が二人に念を押す。白鈴は突然の女官の死に驚きを隠せない様だが小さく頷いた。

「越……どうしてそこまで？」

成廉が尋ねると、魏越は扉に伸ばした手を止めた。

「その……白鈴って子、廉にとって大切な人なんだろう？」

成廉は力強く頷いて見せた。

「俺にとって廉の大切なものは俺の大切なものにもなるんだよ」

「……越……」

しばし静まり返った。

「ありがとう、越」

成廉は嬉しかった。こんな時に頼れる仲間がいて嬉しかった。

「フンっ、いくぞ！」

魏越は小さく鼻の頭を搔くと扉を蹴破った。

魏越を先頭に三人が廊下に出ると、ちょうど胡軫が中に入ろうとしているときだった。

「呂布軍が魏越、相国の御孫・渭陽公を討ち取った！！」

胡軫が何か言う前に魏越が叫んだ。兵達から歓声上がる。

胡軫は強欲な事で有名だ。これだけ足止め出来たのは魏越の兵達

のお蔭だろう。上官の手柄は配下の手柄でもある。兵達はてつきり中で魏越が誰か高貴の者の首をとっているだろうと考えたに違いない。

実際はそうでもないのだが、とにかく三人は彼らに助けられた。

「貴様ら、どうだわしに免じてその首を渡さぬか？」

胡軫の視線はただ魏越の掲げる首に注がれていた。女官の首とも知らずに。

「断る」

魏越は即答した。偽物と知られば、後々面倒だ。

胡軫はまだ三人の前から退かなかった。今度はその視線を暴れる白鈴の方に向ける。

「なかなか美しい娘ではないか。せめてその娘だけでも置いていけ」
暴れる白鈴は一瞬動きを止めた。だが魏越が許さなかった。

「お前は呂布軍に喧嘩を売ってんのか？」

この娘は呂將軍に献上するのだ。分かったらさっさとそこをどけ！
「！」

「ムムム……」

魏越の敬語を使わない粗暴な言い方が効いている様だ。胡軫は己よりも遥かに身分の低い将に道を空けた。

「行くぞ！」

三人は兵を連れて官軍の間を通り過ぎた。

今、軍で一番力を持っているのは呂布だ。胡軫は何かする事もなく彼らを見送った。

「將軍、これでほぼ全部でございます」

目の前に膨大な量の荷車が並ぶ。その中は煌びやかな金銀財宝で

占められていた。

呂布は配下一万のほとんどを動員して、嵎城にあるあらゆる財宝を収拾していた。

元々、洛陽や長安の民や富豪の物である。それを董卓が没収し、己の物とした。今回の嵎城襲撃はそれらの奪還も計画のうちだ。

だが、これらの財宝は結局持ち主の元へ還らない。呂布は全てを横奪するつもりだ。と、言っても私財にするわけでは無い。

兵を解散するにあたって、職を一時的に無くす彼らに分配するつもりなのだ。

解散させてから旗揚げまでどの位の時を要するか見当もつかない。追従させる蝗紅隊を差し引いて、約九千。それだけの兵を養うには充分な量が集まった。

「そろそろいいだろう」

軍を集結させろ、と呂布は成廉に命じようとして、初めて彼がないことに気付いた。代わりに張遼にさせると、魏越と一千の兵もいないことが分かった。

「あいつらどこをほつつき歩いてんだか……」

「捜してきましょうか」

「いや、そのうち帰ってくるだろう」

王允の計画では官軍は引き上げても、呂布はこのまま一万の兵と共に涼州の四將軍に睨みを利かす事になっている。そう急ぐ事も無かった。

「張遼、野營の準備をしろ。今日まではここに留まろう」

それから文優に押収した財宝は兵五千で後々届ける、と王允へ書簡を送らせた。

「さて、今夜は皆に酒でも振る舞うか」

成廉、魏越と一千の兵が野營地に帰ってきたのは、日も暮れて酒宴が盛り上がっていた頃だった。

魏越が董卓の孫を討ち取ったらしい。

酒宴に参加させようと使いを走らそうとすると、魏越が一人やって来た。

「お話があります。重大な事です。ついて来てください」

そう言って呂布、張遼、文優は幕舎の一つに案内された。

そこには成廉と血まみれの見覚えの無い少女がいた。少女はとても疲れ切った顔をしていたが、血に汚れた服のせいで、その容姿は際立って美しく見えた。

——董卓の女官の一人だろうか。

「どうした成廉、気に入った女官でも嫁にするつもりか？」

冗談混じりで呂布は言ってみた。すると張遼が何かに気付いた様にハッとしたり。

「まさか、……その娘が……？」

「そうだよ」

「でも！ 渭陽公は越が討ち取った……って」

「こっちはただの女官の首だ」

「待て待て！ 勝手にお前達だけで話を進めるな。どういう事か説明しろ」

成廉は魏越を見た。魏越は黙って頷いた。

「実はこの子が渭陽公、名を白鈴と言います」

呂布と文優は驚きの声を上げた。

「どうして渭陽公がここに？ いや、それより生きているとはどうした事です？」

文優が矢継ぎ早に聞き始めた。

「どこから話せば……」

成廉は初めて出会った時から話し出した。

「……という訳です」

成廉が話し終えた時には酒宴は既にお開きになっていた。

「それで……今後の事なのですが……」

成廉は一番話したい話題に移ることにした。

既に今後については白鈴と話し合っていた。

成廉は白鈴がそばにいて欲しかったし、手放すつもりもなかった。白鈴はついて来て欲しいという申し出をすぐに承諾してくれた。

成廉ははたして親族を手に掛けた自分達と行動を共にしてくれるか、心配だったが白鈴はそんな事全く表に出さなideくれた。一生成廉から離れないとまで言ったのだ。

その喜びの余韻が心地良く残る中、後は呂布らに同伴を認めてもらうだけだ。

「僕は白鈴を置いておく事なんて出来ません。どうか今後の同伴を許してください！」

成廉は膝をついて頭を下げた。

「俺からも、お願いします」

「俺も、反対理由は無いと思います」

魏越と張遼は賛同してくれた。

「私は特に問題無いと思いますが……」

文優は呂布の方を見た。

「……」

呂布は目を閉じ、腕を組んで黙っていた。

「良い、とは言わん」

「そんな……！」

「女を連れていると軍としては色々と面倒だ」

白鈴が足手まといになるのは明らかだった。

特に呂布が考えている軍の在り方に『女』というものはあつてはならないのだ。

本拠地が特定するまで呂布は気ままに放浪するつもりだった。幸い、資金なら腐る程ある。勢力から勢力へと渡り歩くこともある。そこに『女』というものがあると、いざ戦という時に戦場に連れて行けないとなると、『女』は養って貰う勢力に置いていく事になる。

それは人質を意味していた。後々面倒なのは必至だ。

「それにな、一番被害を受けるのは女なんだぞ」

ただ帰りを待つだけ、人質となる乱世の女。やむなく取り残され、勝者に陵辱されるのが乱世の習いだ。

「どうしても、と言うなら……」

「言うなら……？」

成廉は生唾を呑んだ。

「その娘が甲冑を着け、戦場まで同伴すると言うなら許そう」

「……！」

女が戦場に赴くなんて聞いたこともない。彼らのものさしでは有り得ない事だった。

「ほっ奉先さん！ 何を言ってるんですか！？」

『女』なんですよ?!」

「無理なら置いていけ」

「そっそんな……」

成廉はどちらも選択出来ない。

「あたし、」

不意に白鈴が口を開いた。皆の視線が集まる。

「あたし甲冑着てでもついて行く」

「なっ何いってんだよ」

「じゃあ廉々はあたしにここにいろって言うの？」

「そうじゃなくて……」

「あたし、足手まといにならない様にします。だから、お願いします」

白鈴は呂布を真っ直ぐ見て宣言した。

「あの董卓の孫にしてはなかなかの度胸じゃないか。せいぜい頑張れよ」

呂布は満足そうに頷いた。

「さて、それでは。この新たな戦の姫君に乾杯といくか。おい、成廉！ 酒持って来い」

「ちょっ、あの……え？」

「返事！」

「はっ、はい」

こうして白鈴の呂布軍参入が決定した。

翌朝――。

住人の消えた静まり返る城内に呂布軍一万が集結した。整然と列んだ兵達は何が発表されるのか、という疑問を抱いていた。

その応えを胸に秘めた呂布は兵達の視線を一身に受けて立っていた。

「漢帝国が興ってから四百年が経とうとしている。しかし、長年に渡って朝廷に佞臣が居座り、皇帝は宦官の言いなりとなり、漢帝国の威信は地に堕ちた」

静かに、だが深く響く声で呂布が話し出した。

「そして黄巾の徒が各地に蜂起した」

張角を中心に始まった黄巾の乱。それは漢帝国の現状を表していた。八年経った今でも残党が息を潜めている。

「朝廷に罷免されていた能臣が復帰し、宦官も何進暗殺を契機にほとんどが誅された」

黄巾の乱は混乱を招いたが同時にかつて宦官の策略で罪を着せられ、左遷されていた能臣が恩赦を与えられたのだ。

これで漢帝国は息を吹き返すはずだった。

「だが愚かにも朝廷は各州各地に乱の功労者を封じ、諸侯の団結力は弱まった。……その結果が董卓の専横だ」

全ては大河の如く連なっている。董卓が容易く政権を掌握出来たのも行動に移したその機の掴みが抜群だったからだ。

「董卓はある意味英雄だったのかもしれない。しかし、残虐が過ぎた」

董卓政権下、叛乱はことごとく鎮圧し反対勢力も潰された為、人々は恐怖に支配されていた。それでも、一応は董卓を中心に乱れた天下は一つになりつつあった。

そうは言っても、結局の所、人民が大切なのは自分達なのである。

「そして遂に……」

呂布は目を閉じ、董卓の最期を思い浮かべた。

「……我々の手により董卓は死んだ」

誰一人何も言わなかった。ただ城内に静寂だけがあった。

「さておいて、董卓の遺臣と一族を一掃した今、我々の次なる任務はここ帽城の駐屯であるのだが……俺は反古にしようと思う」

またも兵達の反応は無かった。皆、薄々気付いていたのだ。

「このまま王允に良いように扱われるのも癪だ。いっその事どこかで旗揚げでもしようかと思う」

呂布はまるで狩りにでも行くような軽い言い様だ。

そうは言っても各地には既に支配者がいる。旗揚げとなるとそう簡単なものでもない。

しかし、今の呂布には文優がいる。今後に関しての憂いはほとんど無かった。

「そこで、長安を出奔するにあたって一旦軍を解散する。ただし蝗紅隊は残れ」

さすがに兵達にどよめきが広がった。

「將軍！ どうしてそのような事を仰るのです!？」

「どうか我等をお側の置いて下さい!」

てっきり戦場から追放されたと感じた兵達は口々に同行の許可を願った。

彼らにとって呂布は将であり、上司であり、父である。そして彼らにとって戦場は生活の場そのものだった。

「鎮まれい!」

雷鳴の如く、呂布の声が響いた。すぐに静寂が戻ってくる。

「俺はお前達を見捨てはしない。旗揚げの際には兵を募る。それまで各自潜伏しろ」

兵達は呂布に熱い視線を注いだ。

「俺が旗揚げするまでの間は……これで生活するのだ」

呂布の示した先には昨日回収された財宝が山の様に積まれていた。

呂布らが長安を出奔する少し前、李確らは叛乱鎮圧の為、陳国に配下三万で出兵していた。

董卓の死が報せられたのは鎮圧が終了した時。突然の悲報に当然四將軍は動揺した。

「朝廷は完全に王允が掌握しておる。我等は降伏するべきではないか？」

李確が困った様に言った。王允が掌握している官軍と董卓の遺軍は十万を超える。しかも呂布も協力しているという。敵に回すのは無謀だ。

「同意見だ。王允の元には帝もいらっしゃる。刃向かえば逆賊とされかねん」

張済が神妙に答えた。

「相国には申し訳無いがここはひとまず降るしか無さそうだな」
郭「シ巳」もしようがなさそうに頷いた。

董卓配下の実力者とは言え、彼らは復讐戦を挑むよりも己の保身をとった。

こうして一行は長安へ向かい、帰順を申し入れる使者を送り込んだ。

しかし、王允の答えは使者の首と共に送り返された。王允は董卓に味方した者を全て赦さなかった。

嵎城より連行された李儒をはじめとする忠臣はことごとく打ち首となり、兵までも涼州出身というだけで暇に出された。

李確ら、董卓の将に軍を差し向け、更に賞金首にまで仕立てた。どうする事も出来なくなった李確らは身軽になる為に兵を解散させて、涼州目指して落ちのびた。

王允の目論見通り、このまま王允の天下になるはずだった。しか

し、天は王允にある男の存在を気付かせなかった。

その男は賈栩、李確軍の校尉である。

他の追隨を許さない頭脳を持ちながらも、昔から己の危機にしかその才を見せない事から余り知名度は高くなかった。

そこが王允の落とし穴でもあった。

「李將軍、今こそ兵を挙げる機です！」

その一言で王允の天運は尽きた。

「王允は政權を握ってからというもの、人民のご機嫌をとるような政策や反対派の誅滅にいそしんでいます。人民の心は掴んでも王允を擁護する将や士大夫は半々といった所でしよう。

將軍が今、兵を挙げれば王允を良いように思わぬ者が集まり、十万の兵を集める事も可能でございます。誰かが同じ様に兵を挙げるかも知れません。

先を越されますよ?!」

賈栩の言を聞いた李確の判断は早かった。

即ち、董卓の敵討ちを称して涼州への道を引き返したのだ。王允を快く思わない豪族もこれに協力し、兵を供出したので長安に至る頃には十万を超えていた。

二手に分かれた李確軍は一方は直接長安を攻撃、もう一方は迂回して呂布のいる嵎城を攻めた。

既に嵎城には誰一人としていなかったが、呂布が守備していると思い込んでいた王允は嵎城の対応はせずに徐栄、胡軫、楊定に迎撃させただけだった。

しかし、李確らは辺境で鍛え上げられた将才と精強な軍で容易くこれを打ち破り、がら空きの嵎城はあっさりと抜かれた。

長安はほぼ包囲されてしまった。

最後の決め手となったのは胡軫、楊定の裏切りだった。二人は王允が嫌いだった上に長安も陥落寸前という状況だったのだ。

王允の滅亡は必然だった。

守備に奮戦していた徐栄は胡軫らの誘いを断った。が、胡軫らが李確軍を引き入れた事により混乱に巻き込まれ、討ち死にしてしまった。

城内で戦闘が起きたため、人民の混乱はますます大きくなり脱出もままならない状況だった。

「なんと、……。儂の天下はこれまでなのか」

王允の最期は長安の混乱を収集する為に自らの首を差し出すというものだった。

李確らは王允を打ち首に処すと帝のいる宮中にまで攻め上がった。そして帝を確保した。

李確ら四將軍は帝に詰め寄って高官を手に入れると朝廷を我が物顔で執政した。

董卓の遺骸も手厚く埋葬された。

こうして四將軍の専横が始まった。

が、彼らは董卓程の大物でも無い。すぐに仲間割れが始まった。

樊稠は無実の罪で李確に殺され、張済は中央から離れた弘農に移った。

李確、郭「シ巳」はまともな政治を行わず、人民から搾取するだけである。更に度々仲違いしては長安城内で戦を行ったので戦死者はどんどん増え続け、無秩序状態だった。

董卓は権力と恐怖で抑圧してある程度秩序は保たれていた為、まだ董卓の方がましだ、という声まで上がる程だった。

こうして朝廷は諸侯に対する力を失い、天下は本格的な乱世へと突入していくのである。

呂布ら一行はかつての都・洛陽にたどり着いた。そこに昔の面影は少しも残っておらず、城壁までも崩れかけていた。

かつて人々が行き交い賑やかだった大通りはまっさらな更地となり、所々雑草が生えているだけだった。

城内に人影は無く、目に入るのは石造りの建物の跡とポツンポツンと見える雑草の群生だった。

「こんなに荒れているなんて……」

白鈴が哀しそうに呟いた。話には聞いていたのだろう。

だが、この荒れ様は予想外だったようだ。洛陽は成廉との思い出もある。

しかし、何十万もの人口を擁した漢帝国の帝都をこんな焦土としたのは他でもない呂布や成廉らなのである。白鈴はその事実を知らない。そして成廉は教えるつもりも無かった。

「ここから更に兵を二手に分ける」

荒れ地で一泊した次の日、呂布が言った。

「張遼！ 先日より言ったように本拠地の特定をお前に任せる。文優と高順も同行させるから良く話し合え」

「承知しました！」

張遼は嬉しそうに答え、蝗紅隊五百と早速出発した。

呂布としばし中原を放浪するのは成廉、魏越、白鈴と蝗紅隊五百

だ。

「まずどこに向かいますか？」

成廉は呂布に尋ねた。

「袁術の所なんてどうですか？」

魏越が提案した。

「董卓は洛陽に住んでいた袁家を皆殺しにしました。奉先様はその董卓を討ったのですから恩を感じているに違いありません」

成廉と一緒に雷音に乗った白鈴は『董卓』という言葉に複雑な顔をした。まだ、祖父の死と今の複雑な状況を克服出来ていないのだ。なんと言っても白鈴の周りは皆、祖父を殺した者達なのである。それでも成廉がいつもそばにいるだけましだった。

「それに配下だった孫堅が戦死したばかりですから受け入れてくれるでしょう」

虎牢で董卓軍を苦しめた孫堅は荊州刺史の劉表と幾度か軍を衝突させていた。全て劉表、孫堅の弱体化を図った袁術が裏にいるのだが、知ってか知らずしてか両者共に激しく争っていた。

そして遂に江夏の部将・黄祖に待ち伏せされ討たれてしまった。孫堅はまだ三七だった。遺軍は十七歳の嫡子・孫策が継いで、元上司である袁術の元に身を寄せた。以来、孫家は黄祖を目の敵にするがその悲願が達せられるのは十年以上先の話である。

魏越の提案は成廉にとっても頷けるものだった。しかし、呂布の顔は険しい。

「本当に袁術は俺達を受け入れるかな？」

袁術は道理の男では無い。己の事しか頭に無い上にすぐに裏工作に走る。

「俺は同じ袁家なら袁紹の方がいいと思うぞ」

袁紹は冀州刺史・韓馥から冀州を手に入れ、今最も勢いのある勢

力の一つだ。

「たまに垣間見せる大胆さ、袁紹はきつと大物だぞ。俺は袁紹に一度会ってみたい」

「じゃあ決まりですね」

「そんなんだったら最初から袁紹と言えばいいのに……」

魏越がボソツと呟いた。

結局、誰かの意見など無意味で呂布の意志が呂布軍の意志なのである。

飛將中原を駆ける

「もうやだっ！ 河でもいいから行ってくる！」

「そっそんなこと言っても……」

「だってもう五日間も湯浴みしてないんだよ！？ こんなこと初めてなんだから」

白鈴は頬を膨らませてだだをこねた。

「奉先さん……」

成廉は助けを求めるように呂布を見た。

事の始まりは呂布らと白鈴の習慣の違いにあった。呂布ら毎日野営する時には躰を拭いたりと当たり前前の事はしていた。

ただ、貴族暮らしに馴れていた白鈴には湯浴みは当たり前だったのだ。白鈴は幼く見えても年頃の女の子である。身なりに何かと氣を使うのであろう。

成廉は一緒に居てくれるだけでもうれしかった。白鈴の身なりなど気にもしていないのだが、白鈴の気持ちを考えると文句も言えない。しかも、うっかり口を滑らせて

「そもそも放浪する身分で身なりなんて気にしなくてもいいんじゃない？」

なんて言ってしまったのでなおさら不機嫌なのだ。遂に河に沐浴しに行くなんて言い出してしまった。

「とんだお荷物姫様だなあ」

魏越が苦笑しながら皮肉すると、近くで肉を頬張る蝗紅隊の者からどっと笑い声上がる。

「なによ！ あんた達こそおかしいんじゃない。そんな状態で五日間もよく生活出来るわね」

軽蔑の眼差しで白鈴が言い返す。

そうは言ってもその五日間はほとんど騎馬による移動だったので汗をかいた者など皆無である。

「つたく、やっぱあの時置いて行きゃ良かったな」

魏越が冗談めかして言った。あの時とは勿論嵯城の一件である。

途端に白鈴は口を噤む。舕に氷を流したかの様な冷たさが走った。兵達からまたも笑い声が上がるが、収まるとやってきたのは嫌な感じの沈黙だった。

「……」

「……」

「……なんだよ、お前らしんみりしやがって」

白鈴の目はいつの間にか溢れんばかりの涙目になっていた。

「……エック……ヒック」

「げ！？」

「白鈴？！ ちょっと！ 越、言い過ぎ」

はらはらと涙が流れる白鈴を見て、よく解らないが言い過ぎたと思っただけは慌てて立ち上がった。

「悪い悪い、安心しろって冗談だって」

「あーあ、魏越様が姫君を泣かせた」

「うるせー！」

ニヤニヤと兵達からちよっかいが飛ぶ。

不意に呂布が口を開いた。

「董白、俺は一度言った事を曲げはせん。いらぬ事に心を散じるな」
呂布の言葉ももつともだった。確かに呂布は有言実行の漢である。故にそれが美点でもあり、盲点でもあるのだが……。

「そうだよ白鈴……」

成廉が寄り添う様に肩へ手を伸ばすと白鈴はそれを振り叩いた。
「え……？」

こんな風に拒まれるのは初めてだ。胸に痛みが走った気がした。
白鈴は拳を握り締めて俯いていた。

「……解ってる」

白鈴の胸の奥に溜まっていたものが溢れ出した。相変わらず頬に
涙が光る。

「あたしは所詮、魔王の孫なんだ」

皆がハツとする。それは極力言わないようにしていた事だ。

「じいじがどんなに悪い事していたのか初めは分かんなかったけど、
今なら知ってる。じいじがそれで殺された事も分かってる」

睫毛にも涙の粒が光っていた。不謹慎だが成廉はそれがいたく美
しいと思った。

「みんなに受け入れてもらえた時は凄く嬉しかった。あたしは廉々
とみんなと一緒に居たいし、でも……でも……みんなはじいじを従
姉妹を媚城のみんなを殺したんだ……！」

兵達がうなだれる。それはしょうがなくも事実だ。

「いつ捨てられるか……いつ殺されてしまうか……ってどんなに怖
いかみんなに解りっこない！」

白鈴は踵を返して駆けだした。

「あっ！ 白鈴……！」

成廉はすぐに追わず、足踏みした。

「何をやってる？ 早く追いかけてやれ」

呂布が促した。成廉はその声を聞いて少しだけ心が落ち着いた。

「……はい！」

成廉は力強く頷いた。

成廉が後を追うと、白鈴は森を抜けた小さな川のほとりに佇んで
いた。

すすり泣きが聞こえた。それでも膝を突かずにしゃんと立ってい

るところが白鈴らしかった。

成廉は無言で後ろからそっと抱き寄せた。今度は拒まれなかった事が幸いだった。白鈴も顔を成廉の胸にうずめる。

「……どうしよう」

白鈴の涙声は弱々しかった。

「あんな風に怒鳴っちゃって、みんなに嫌われたらここに居れないよ……」

成廉の顔を見上げる。

成廉は愛おしい上目づかいにくらくらしながらも力強く抱き締めた。

「みんな嫌ったりなんかしないよ」

「でも、じいじは廉々達に……」

「確かにみんな董卓には怒ってたよ。でも、それは董卓個人であって董氏じゃない。ここに白鈴の事を憎んでいる奴なんて一人もいないよ」

白鈴を優しく撫でる。

「でも……でも、あたしみんなの足手まといだって……」

「越が言ってたのは本当に冗談だって。あいつはああ見えて皆の雰囲気とか気にするんだ。」

ただ冗談言って皆を和ませようとしたただけだって」

「本当に？」

「ああ、絶対。だから安心して白鈴はここに居ていいんだよ」

「……」

白鈴は嬉しいような申し訳無いような恥ずかしいような顔をして黙り込んだ。

「笑って白鈴」

成廉が笑いかけると白鈴はそっぽ向いた。

「ほら、笑って！」

「うるさい！」

白鈴は成廉から離れると河原に駆けていく。

「待てよー……うわたっ！」

追いかける成廉は河原の石で滑って転んでしまった。途端に笑い声が降ってくる。

「ばーか」

釣られて成廉も笑い出す。

以来、白鈴はちょっとだけ素直に、そして笑顔を絶やさなくなつた。

冀州に入つた呂布一行は黎陽に留まり、袁紹のいる州城・「業β」へ面会を求める使者を送つた。

この使者にはもう一つ、冀州に置かせて貰えるよう許可を願う意味合いもあった。しかし、十日経っても使者は帰ってこない。

「何やってるんですかね」

魏越はイライラと呂布に聞いてみた。

呂布は腕を組むと、恐らく……と口を開いた。

「公孫瓚と戦が始まるかもしれないからだろうな」

「コウソンサン？ どうして連合同士で戦なんですか？」

「もう、董卓もいないからな……乱世になれば連合なんて関係無い」

諸侯は二人の袁氏に分かれていた。南陽の袁術、「業β」の袁紹である。袁術は孫堅、公孫瓚、陶謙と、袁紹は曹操、劉表、韓馥と盟約していた。

袁術は孫堅が戦死したため、その軍を吸収して強大だった。その勢力範囲は荊州最北の南陽から東に揚州北部と淮河周辺にまで及ぶ大勢力である。対して、袁紹は先年、冀州牧の地位を韓馥より譲られたばかりでまだまだ地盤の固まっていない勢力だ。

北平の公孫瓚とは冀州をめぐって激しく敵対している。裏では袁術が支援しているだろう。いつ戦が起きても不思議じゃ無い情勢だ。

「……だから、袁紹もそれどころでは無いのだろう。だが、逆を言えば今は少しでも戦力が欲しいはずだ。確実に受け入れてくれるだろう」

州城に入れた時には冀州に入ってから一月経っていた。

「洛陽、長安も凄かったけどここも賑やかだな」
魏越が感嘆して唸った。

「業β」の城門をくぐるとすぐに広がる市場から威勢の良い声が飛び交う。冀州の中心である「業β」は河北の商業の中心でもある。北の州境では袁紹軍と公孫瓚軍が睨み合っているというのに、ここは全くその影響を受けてないようだ。

「政庁はこちらです」

袁紹の侍中を名乗る男が案内した。

政庁前で蝗紅隊を待機させると呂布は三人だけで袁紹の待つ広間に向かった。

成廉は一瞬迷ったが白鈴は留守番として残らせた。蝗紅隊の兵達はならず者や賊上がりばかりだが、白鈴に何かするような者達じゃない。

彼らは女より闘う事を喜びとしている。何かしたとしてもちよっかい位だろう。

それに、袁紹に女が居る事を強調するのはあまり思わしくない。侍女のような大した地位でも無いように見せるのが賢明だ。「どうぞ」

侍中が案内した広間の北に袁紹は座っていた。

まるで玉座の様な椅子に腰掛け、呂布を値踏みするように見ている。

「此度は有り難く存ずる」

呂布は礼をして言った。

「呂布よ、よく参った」

まあ座れ、と袁紹は顎をしゃくった。

成廉と魏越は袁紹の横柄な態度に腹立たしく思ったが、大人しく正座した。

が、呂布は違った。酒宴にでも来たかの様にドカッと胡座をかいた。

「ちよっ……！」

成廉から驚きの声が洩れる。袁紹も片眉を上げて、顔をしかめた。今の呂布らは袁紹の客将の身分である。客将は領主の好意で養ってもらえるのであって、とても対等とは言えない。

しかし、呂布はそんな舐められた真似をするつもりなど微塵も無かった。

最初のかしこまった礼とは打って変わって対等に話し出した。

「話は書状の通りだ、冀州公。少し世話になりたい。許可するか、否か？」

まるで脅しでもかける様に呂布は尋ねた。

「条件がある」

袁紹は負けじと睨み返すと口元だけ歪めた。

「我が方の将と対決せよ」

「!!？」

「我が軍は戦を間近に控え、本来なら客将を養っている余裕など無い。だが、我が軍の誰よりも強いと言うなれば……」

侍中が目を見開く成廉と魏越に説明した。

二人は呂布を見上げた。

「よかろう」

袁紹が更に口元を歪める。

「よい心意気よ。その方らの将が三人なればこちらも三人選抜しよう」

「は!？」

「俺達もかよ……」

「受けて立とうじゃないか」

呂布の予想外の答えに成廉は慌てる。

「そんな、奉先さん……」

「なんだ、お前ら充分強くなったぞ」

「でも……」

「廉、諦めろ」

「越までそんな事言う」

成廉は二人を睨んだ。もし、負けたらどうするのか。その時は拠る場所を無くすだけでなく、呂布軍は天下の笑い者である。

「日時は明日の正午、政庁前の広場だ。期待しているぞ」

袁紹はさっと立ち上がると奥の室に消えた。

「どーしよう」

「大丈夫だって!」

魏越が脳天気成廉の背中を叩く。対照的に成廉の顔は青かった。

翌日、広場に大勢の人集りが出来ていた。

誰が流したのか、噂を聞きつけた兵や民が押し寄せて来たのだ。

人の多さにかこつけて露店まで出す商人までいた。たった三回の対決の為に祭り騒ぎだ。

あの呂布の武が間近で見れるとか、文將軍の方が勝るに決まってるとか、それより呂布の隣りの二人は誰なんだとか、人々は言いたい放題だ。

そんなお祭り騒ぎを横目で見ながら成廉はそわそわしていた。

「ああ！　こんなに人が集まって！……負けたらどうしよう」

成廉は頭を抱え込んだ。

その様子を呆れた様に呂布は見下ろした。

「その弱気癖は何とかならんのか」

「……そんな事言われましても」

「だいたい、廉はあれこれ考え過ぎなんだよ」

越が溜め息混じりに諭す。

「真の武人とは何より己の武を解する。そんな風では成廉もまだまだぞ」

成廉は呂布の助言に反発した。

「じゃあ、具体的にどうしろと言うのです？」

同時に幕を分けて係らしき兵が顔を出した。

「準備が整いました。成廉殿、こちらへ」

最初の対決が始まりそうだ。

成廉はうむやむ一人愚痴りながら帷幕から出た。

「今まで何人殺してきたか思い出してみる」

成廉の背中に呂布の投げかけた言葉が染み込む。

――殺した人数……か。

だが外に出た瞬間、成廉は大勢の気に呑み込まれてしまった。

広場は四方を柵で囲まれ対決の準備が整えられている。成廉と対する方には既に対戦相手が待っていた。

その男は荒々しさを内に秘めていた。平静を装っているが、何か粗暴な印象を受ける。獲物を静かに狙う獣の様でもある。

ただ、成廉はその顔つきが気に入らなかった。

良く見れば、袁紹の配下のほとんどがそれと同様だ。その傾向は能力の高い者ほど顕著である。己以外を見下す癖は主と大差無かった。

「名も無き将よ、涼州の麴義とは俺の事よ！ 尋常に勝負！！」
成廉と相對する男、麴義が名乗った。途端、袁紹の兵達から歓声が上がる。

麴義は袁紹の部将の中でも実戦に実戦を重ねた勇猛の男である。本来なら冀州北部で公孫瓚と睨み合っているはずである。

予想外の名に成廉は僅かに気圧された。

袁紹軍の将と言えばまず顔良、文醜が上がるが、その次には麴義が上がる。

袁紹軍三位の男が目の前にいるのである。

ただでさえ乗り気の無いこの対決。次第に成廉の戦意は萎縮し始めた。

「勝負は両者どちらかが負けを認めるか場外にでる、あるいは続行不可能に陥るまで行こう」

上座から見下ろす袁紹が高らかに告げる。「始め！！」

合図の銅鑼が鳴らされる。勝ちの見えない対決が始まってしまった。

じりじりと迫る麴義に対し、成廉は下がるにも進むにも出来なかった。

麴義が近付くにつれて気の圧は更に増す。

とうとう何も仕掛けないうちに手を伸ばせば棍で撃てる距離にまで狭まった。

この対決で使用する武器は勿論刃物では無く、両端に布を捲いた棍である。とは言え、打撃には申し分なく、寧ろ危険なぐらいだ。そんな事を考えながら成廉は相手を油断無く見ていた。

「ガッ！」

つもりだったのだが、いきなり繰り出された突きを顔面に受けて

しまった。鈍い痛みが広がる。思わず額に手が行く。

「どうした、どうした！ 所詮、呂布軍はこの程度かあ？」

「……」

成廉は何も言い返せなかった。

そんな事はない。魏越の武は他軍に誇れるものだし、張遼の武も同じである。

——それに較べて僕は……。

魏越がこんな風に侮辱されたなら、頭に血が昇るだろうし、張遼なら実力を証明しようとするだろう。

成廉は何も言い返せない己自身が赦せなかった。

「くっそ！」

腹立ち紛れに振るった成廉の棍は虚しく空を掻く。すかさずその隙を麴義が突いた。

振っても振っても当たらない。

なぜだか成廉は全く判らなかった。普段の戦ならもっと動けた気がする。遂に容赦無く振り下ろされる棍を前に成廉は倒れ伏した。

「想像以下だな。本当に将かよ？ 兵卒並の武でよくここまで来れたな」

麴義が唾を吐いて罵った。背中に足が載せられるのを感じた。

麴義が棍を持つ手を高く挙げると勝利を確信した袁紹軍から大きな歓声が上がった。

「この程度なら呂布も大したことなさそうだ」

降りかかってきた言葉が成廉を突き刺した。袁紹軍からも嘲笑が洩れる。

——大……したこと無いだと……？

成廉は唇をきつく噛んだ。

——僕のせいだ、僕が至らないから。

己が罵られるならまだしも、幼き日に天命を見た呂布が馬鹿にされるのは成廉の生き方全てを罵るのに等しかった。

それは耐え難い屈辱だった。

「ほ……を……な」

俯せた成廉の呻きに麴義は顔をしかめた。

「ああん？ 聞こえんな」

麴義は嘲りながら踏みつけた足に力を入れようとしたその刹那、成廉は素早く反転して麴義に下から潜り出た。

麴義は慌てる事無く成廉の立ち上がった隙を突こうとした。しかし、それよりも先に成廉の突きが麴義の喉元を捉える。

「グクッ！」

麴義は堪らず二、三步退いた。

兵達からは驚きの声上がる。

成廉は先程とはまた異なった気迫を漂わせていた。

「僕を……舐めるな……！」

消えかけていた闘志が再燃した。

成廉は息吐く隙も与えず棍を振り回した。しかも、先程までの隙だらけの技とは異なりの確に麴義を押していた。

「くっ……こいつ」

麴義は受けるので精一杯だ。

——何なんだ！？ この様変わりは！ まるで歯が立たない……！

麴義はこれに至って初めて焦っていた。

成廉の隙を突こうにも隙が見えない。下手に手を出せば応じ技が

襲いかかってくる。

あつという間に形勢は逆転していた。

しかし、麴義とて袁紹軍の将としての自負が無い訳ではない。そこいらの一介の将とは格が違う。名も知られてない若造に退く事すら許すまじき事なのだ。

——負ける訳にはいかない。いや、負けるはずがない。

麴義が力ずくで押し返そうとした瞬間、成廉が視界から消えた。

「!!?」

すぐに擦れ違い様に水月を突かれた事を悟った。だが、もう遅かった。

腹部に激痛が走る。息が出来ない。

「かはっ!」

麴義は倒れた。立ち上がろうとしてそれが無理だと分かった。成廉が棍の先を麴義の首に据えて見下ろしていた。それでも麴義は抵抗して立とうとした。

「そこまで」

止めたのは苦々しい顔で見物していた袁紹だった。広場が急に静かになる。

「殿!? 俺はまだ闘えます!」

驚いた麴義が喘いで言った。

「お主の負けだ、麴義」

「何を仰る?! まだ……」

「見苦しいぞ! 麴義!」

袁紹は怒鳴った。後半の負けっぷりが相当頭に来ているようだ。「貴様は我が軍の将でありながら無名の将にここまで愚弄されたのだぞ!」

この袁紹の顔に泥を塗った罪は重い。早々に北へ帰れ。公孫瓚を討

ち殺すまで冀州に還ってくるでない！」

「……………」

麴義は開いた口が閉まらなかった。

そもそも北の守備に就いていた麴義をくだらない対決の為に冀州へ呼び寄せたのは他でもない袁紹である。

麴義の怒りが沸き起こる。

しかし、反論する事が出来ない。敗者に口を開く権利など無かった。

「連れていけ」

袁紹が命じる。

茫然とへたり込んで動かない麴義を兵が肩を支えて広場から連れ出す。

連れられる麴義は成廉の視線と目が合った。それが申し訳なさそうな、憐れむ様なものだったのでなおさら腹が立った。

麴義は公孫瓚を殺して、必ず冀州に還る事を心に誓ったのである。

「奉先さん、本当に僕達だけで行くのですか？」

「ああ、何だ？ 麴義なんかじゃ、まだ己の武が信じきれんか？」

「そうじゃないですけど……白鈴もいますし」

そう言う成廉は共に雷音に跨る武装した少女を心配そうに見下ろした。

「大丈夫だって、雷音に乗ってるんだから廉々が守ってくれるでしょ？」

呑気に笑う白鈴は意外にも甲冑が似合っていた。

今、呂布らは黒山賊の張燕討伐の為、再び黎陽に向かっていた。

呂布、成廉、魏越の対決はと言うと呂布らの圧勝だった。成廉が紙一重のところで麴義に勝利した後、勢いづいた魏越は幾重にも撃ち結んだ結果、対決相手であった文醜を気絶せしめた。

呂布に至っては猛将・顔良を当然の如く場外へ一蹴りして終わらせてしまった。

顔良、文醜と言えば河北にその名の轟く武人だ。この二人が河北で最強だった。

それを打ち倒したと呂布らの武名は否応無しに広まった。

こうして呂布らは袁紹が示した無理難題を見事にこなして見せたのだ。

面白くないのは当の袁紹である。

だが、ここで受け入れを拒否するのは愚行であり、天下の笑い物になるのは間違い無かった。

そこで袁紹はすぐに機転を利かせた。

己の軍の自慢の将を倒した、と言うことを根拠にまた無理難題を押し付けようと考えたのだ。

それが黒山賊の討伐だった。

失敗して還ってくれば罪に問い、追放、あるいは処刑すればいい。断れば――、客将の分際で断れるはずもなかった。呂布は袁紹の要請に一考する事無く即答で承諾した。

黒山賊の総数は十万を超える。普通、五百程度の兵で攻めればそれは自殺行為だ。勝てるはずがない。

全て袁紹の思惑通りに事が進んでいた。その事を呂布は知ってか知らずしてか気に留めた様も無く、全くの普段通りである。

毎度の事ながら成廉はこの些か無謀過ぎる主を頼もしく思いながらも勝算があるのか気になった。

「奉先さん十万もの賊を相手に勝算があるんですか？」

「……」

呂布は腕を組んで返事をしなかった。

「どうやら今考えている様である。しかし、すぐに思い付いた様だ。呂布は成廉を振り返った。

「無くは無い」

また突飛な事を言い出すのか、と成廉は身構えた。

「だが、勝利を掴むには黎陽の将の協力が必要だ」

「はあ」

呂布が他人の助勢を当てにするなんて初めての事だ。成廉は少し不安になった。

「それでは協力が得られない際には……？」

「その時はそんな時だ」

「はあ……」

腑に落ちない、と言うよりも先行きの暗さに不安を隠せない成廉の肩を魏越が勇気付ける様に叩いた。

「本っ当に廉は心配性だな」

「袁紹の将が協力するとは思えないし、」

「成廉は袁紹が嫌いか？」

吐き捨てる様に言う成廉を見て呂布が聞いた。

「……はい」

己の力を過信したあの顔達を思い出すと虫酸が走る。どうしても成廉は袁紹以下の者達を好きになれなかった。

それを見透かした様に呂布は笑った。

「擁護する訳じゃ無いが、袁紹は他者を見下せる程の実力を持ち合わせているぞ」

そう言えば袁紹に会いたいと言いだしたのは呂布だ。

「奉先さんは袁紹をどう見ましたか？」

「袁紹は……」

「袁紹は漢帝国の臣では無いな、既に帝の存在価値は無いものと考えているのだろう」

張遼が聞けばさぞかし怒りを露わにするだろう。帝を無いものと

振る舞うのは僭越にも程がある。

「しかし、その方が自由に政が出来るのも事実だ。中原は戦乱でどこも人が減っているというのに冀州はむしろ増えている。畠は肥え、諸商業も栄え、その上袁紹の領民は帝では無く袁紹を君として崇めているそうだ。

人民が困窮しているのを上手く利用して仁政で人を集める、まさに乱世の成功者だな」

いつに無く喋る呂布に成廉と魏越は目を丸くした。そもそもどうしてそんなに冀州内の様子に精通しているのか。

「何でそんなに知ってるんですか!？」

「ん？ ああ、俺も文優を見習って間者を使ってみてな……」
更に二人は驚きを隠せなかった。

「だが、やはりいろいろと面倒だ。雇うのはこれで最後にするつもりだ」

自嘲して呂布は微笑んだ。

「どうも性に合わん」

らしくない事はしない方がいい。

成廉はその言葉に頷きそうになって慌てて誤魔化した。

一行は黎陽に到着した。

呂布らを出迎えた将は名を張「合β」と言った。袁紹陣内にありながら誠実な物腰に成廉は好感出来た。

早速、酒宴でもてなしてくれた所が袁紹陣内の他の将と違った。

并州との州境を任されている割に聞かない名ではあるものの、袁紹以下、有名な者よりむしろ無名の方が親近感が湧くのは当の成廉が無名だからかもしれない。

「呂將軍、賊討伐に兵が必要でしたらいつでも申し付けください。

某の配下、五千足らずですが出陣の備えは出来ております」

酒宴の最中何を言い出すかと思えば、張「合β」は呂布に助勢させてくれ、と言うのだ。呂布に注がれるその目は熱かった。

「大変有り難いが、お断りしよう」

呂布は丁重に断った。

「お立場はお察しします」

どうして袁紹はこんな過酷な任務を与えたのか。それは呂布が断れないのを理解していたからである。

既に呂布の武名は古の飛将になぞらえて天下に轟いている。そして先だっては袁紹陣内の三強を打ち負かした。

拠る所の無い呂布らには今必要なのは天下の風評だ。

飛将の名を冠する者が戦を前にして退く事は赦されないのである。他者の助勢に頼ってはならないのである。

例え、それがどんなに困難なものである。

「しかし、」

そこらの事情を知っているであろう張「合β」は引き下がらなかった。

「某は將軍、あなた様と共に戦いたいのです」

すぐ目の前に最強の武人がいる。

共に出陣出来たらどんなに名誉な事か、と張「合β」は目を輝かせた。

「すまんが……」

呂布は再度断った。

張「合β」の肩が力無く下がった。

「左様……でございますか……。いえ、無理には申しません」

「だが、」

この者なら他の袁紹陣内の者と違って信頼出来る。

「俺の戦が出来るように協力してほしい」

張「合β」の表情がぱっと明るくなった。

黒山賊――。

冀州と并州の州境となる山である黒山から冀州の常山まで勢力を張り、張燕という者が前頭領の張牛角の姓を継いで率いている。

賊と呼ばれてはいるものの張燕を中心に一種の自治体として機能しており、総勢五万とも十万とも言われるのは、彼らが山奥で生活している為に正確な数が判らないからである。その為、具体的な軍事力も見えない。

黒山賊は山の民であるが故に食糧の確保が重要課題である。山で採れる食糧だけでは全ての民を養い切れないのだ。勿論、貯蓄も出来なかった。

結果、食うためには略奪しかない。黒山賊の勢力範囲に近い邑や県城はその対象となり、しばしば蓄えを強奪された。

それを袁紹ら代々の支配者達は黙っていなかった。しかし、何度攻めようと大した成果を挙げられなかった。むしろ被害の方が大きい。

黒山賊は略奪の際に攻撃されようとも、すぐに山へ退けば良いのだ。山という自然の要害が味方についている為、山の地形を熟知した彼らにとってみれば、追撃してきた者など蟻地獄に嵌った蟻に等しかった。

呂布らは皆騎兵。その機動力を生かせない山中では全滅も必至だろう。直接攻め滅ぼすのは不可能だった。

しかし、それなりの成果を出さなければ袁紹は満足しない。その為には彼らの主力を呂布の力を存分に発揮出来る平地におびき寄せる必要があった。

そこで張「合β」の協力である。

まずは州境に主戦場として適した平坦な地にわか作りの食糧基地を作る。これは守備を考えずにただ膨大な備蓄をする。

そして付近一帯の邑の守備兵には襲撃があつたら残りの備蓄を食糧基地に輸送するように指示した。

時期は収穫の秋を迎え、どこの蔵も有り余る備蓄だ。食糧を求めて黒山賊が山を下るはずだ。全ての指示を出すと、後は黒山賊がどう動くか待つだけだった。

そして――最初の襲撃が発生した。

黒山賊の規模は二千ばかり。奪われたのは五千の兵が一月間、食に困らない量。すぐに残りが輸送される。

そんな襲撃が二、三日おきに半月続いた。その間に無人の食糧基地は襲撃される気配が無かった。黒山賊もさすがに怪しいと見たのだろう。しかし、周辺の邑を襲えば襲う程、基地の備蓄は膨大なものになる。遂にその量は十万の兵、二月分に及んだ。

「なる程、これで食糧基地を襲撃する為に出て来る主力を奇襲するんですね？」

ここに至って成廉は呂布の作戦が見えてきて聞いた。

一度にこれだけの量が手に入るこの機を黒山賊が逃すはずが無かった。万全を図って主力で襲撃するはずである。

「いや、まだだ。出撃するのは黒山賊が食糧基地を占領してからだ」「でも、それでは……」

もし、失敗すれば備蓄は全て失う。この戦は呂布にとっても賭けであった。

既に袁紹から度重なる襲撃の問責の使者が三人も来ていた。「主力の出頭を叩いたところですぐに山奥へ逃げ帰るだけだ」

それでは大した成果は結局挙げられない。

「だから敢えて食糧基地は黒山賊にくれてやる」

「??」

「人間ってのは欲深い。手に入らない物を諦める事は出来ても、手に入れた物を諦める事は出来ない」

成廉は全て悟った。

黒山賊は自分達の生活圏外に守るべき物が無いから、攻撃されればすぐ山へ逃げ帰れた。

しかし、食糧基地を手に入れてしまうとそうは行かない。恐らく攻撃されようともそこに留まり、抗戦し、持ち帰ろうとするはずである。

必死に抵抗する黒山賊はこの上無く強いだろう。しかし、逃げられてばかりだったが故に討てなかった彼らを討つ好機でもあるのだ。

「後は俺達次第だ」

程無く食糧基地陥落の報せが訪れた。

黒山衰退の始まり

「飛燕様、食糧基地はただの兵糧庫の様です。守備兵どころか人の姿すら見えません」

袁紹軍の食糧基地を占領しに出撃した王当、杜長の伝令が告げた。

「分かった」

飛燕、と呼ばれる男が答えた。

その男は熊の皮衣を身に纏い、骨太でがっしりとした体軀、顔面は剛毛に覆われて眼光だけが光っている。

彼こそが盟友を含めて、袁紹、公孫瓚と河北を三分する黒山賊首領、張燕である。

張燕は元々、姓を「ネ者」、名を燕といった。黄巾の乱の折に賊を率いて拳兵し、当時黒山賊の首領だった張牛角に帰順した。

しかし、張牛角は敢え無く呂布に討ち取られ、「ネ者」燕はその後継ぎとなり、その際に改姓した。姓を継ぐ事で黒山賊の未来を担う覚悟と責任を自ら課したのである。

黒山賊を今ある勢力まで指導したのは張燕だ。

最初は本当に単なる賊の集合体であり、黄巾の乱が終結すれば滅衰するのは明らかだった。その天命とも言える必然を張燕は黄巾残党の吸収と移住でねじ曲げた。

かつてから根城としていた黒山は隘峽が走り、一度に通行出来る兵数は限られる。人の入山を拒むかの様な険しさは移住の際に身を持って理解出来た。まさに天然の要塞である。

足りない物資を支援しているのは張燕の故郷である常山郡だ。

張燕は貧しい出自ながらも、同郷の者から尊敬を以て遇される程の人格者であった。黒山賊の軍備面が賊の水準以上の理由はここにある。

討伐軍が苦戦しなかった事は一度として無い。その要因の一つに張燕の強さがある。張燕は武勇に優れているだけで無く、用兵にも精通していた。

張燕の率いる軍は険しい山内だろうと平地の如く素速く動けた。『飛燕』の由来である。戦場を問わない行軍が出来た黒山賊が勢力として勢いを衰えさせる事は無かった。

しかし、張燕のここ近年の悩みは食糧の確保だった。ただでさえ山の恵みのみでは補えきれないと言うのに、漢帝国は飢饉の最中だった。

とにかく収穫がほとんど上がらないのだ。各地では支配者が人民から搾取し尽くし、人が人を喰らう様だった。張燕は常山にそんな事出来るはず無かった。

そうになると、食糧を手に入れる方法は限られてくる。敵対勢力から蓄えを強奪する。それは自然な流れだった。

そして袁紹軍の食糧基地を占領した今、手に入るのはおよそ十万の兵が二月飢えない程の食糧。上手く配給を調節すれば三月も不可能では無い。

何が何でも欲しい。いや、既に食糧は手の内だ。肝心なのは本拠地の黒山まで運べるか、である。恐らく食糧基地の陥落は袁紹方に知られているだろう。そして討伐軍を派遣するはずだ。

そうなれば王当、杜長では撃滅されてしまう。彼らの戦場は得意の山岳戦では無い。平地では袁紹軍の騎馬軍が圧倒的に強かった。しかし、張燕に退く気など微塵も無かった。

——袁紹に損失を与えて、兵糧は頂く……！

「常山の騎馬駐屯軍に急使を。袁紹を叩く出撃じゃ！」

あの袁紹軍である。誰が攻めてきてもおかしくない。文醜か、顔良か。

張燕は総力戦を覚悟した。

黎陽から五千五百の兵が出撃した。陣容は呂布の蝗紅隊に張「合β」の五千だ。

勿論、袁紹の命令があるので直接攻撃を下すのは呂布のみで、張「合β」は本陣の守備である。

これは呂布のみでは黒山賊を釘付けに出来ないからだ。すぐに逃走されては今回の作戦が失敗である。張「合β」の五千をちらつかせて、無策に逃走すれば追撃を受けて、大打撃を受けるかの様に見せなければならなかった。

「白鈴、やっぱり本陣に残ったかない？」

成廉はまだ白鈴を戦場に同伴させるのに反対だった。

雷音は相乗りに耐えられる程の馬だが、戦場では何があるか判らない。危険だった。

「いい」

「張「合β」殿なら安心だって、きっと」

「そういう問題じゃないの」

白鈴は振り返った。

「あたしは一度でいいから廉々達が命懸けで闘っているのを見たいの。……うん、違う。ちゃんと見なくちゃいけないと思うの」

そこにはいつもの身勝手なお姫様はいなかった。

「白鈴……」

「廉々が命懸けてんだからあたしだけ安全な所にいる訳にはいかないでしょ」

言いたい事は解るのだが、と成廉は頭を抱えた。

白鈴は相乗りの騎乗を勘違いしている。兵が相乗りしても互いに足を引っ張ってしまうだろう。

成廉からしてみれば命懸けどころか、もう一つの命を護りながら闘わなくてはいけない。

――せめて、奉先さんに任せられたらなあ……。

呂布ならば可能だろう。

しかし、呂布の騎乗する赤兎の猛々しさと言えば、相乗りするどころか呂布以外の者に手すら触れさせない程だった。無理な話である。

そもそも、本陣だって危険なのだ。敵に襲撃されない保障はどこにも無い。食糧基地を占領している軍勢だけで約二万。こちらの四倍の兵力だ。増援がこないとも言い切れない。

そうなれば五千の本陣など風前の塵に等しい。……と、考えるうちに成廉は本陣に残す方が危険な気がしてきた。傍にいれば己の努力次第で何とかかなりそうだが、離れていてはどうしようも無い。

「分かったよ、白鈴」

成廉が言うと白鈴は硬い笑みを返した。

「ありがと」

「ただ、」

「？」

「兜もしっかり被ってね」

白鈴は下は甲冑に頭は結い上げた髪を簪で飾りたてた不恰好だった。

戦場について行きたいと言っているが、舐めている。

そうこうするうちに目標の食糧基地が見えてきた。

「これより速度を上げる。突撃態勢に移れ！」

呂布の命令が行き渡ると白鈴の顔が更に硬くなる。それを見て魏越がわざとらしく笑った。

「安心しろ！一刻後には全員無傷で還れる」

他の兵達も不敵な面を嬉しさに破顔一笑させた。

皆闘う事を生きがいとする者達だ。彼らにとって戦場で闘う事は息を吸い、肉を喰らい、睡眠を取る事と全く変わり無かった。日々訓練を欠かさなかった蝗紅隊は名実ともに中華最強の騎馬隊だという自負もある。

負ける訳が無い、と魏越は白鈴に言い聞かせた。

「そもそもよお、廉の心配性を真に受けすぎ。廉もいい加減にしるよ」

成廉も白鈴も小さくなる。

「分かった、みんなを信じるからね」

白鈴は腹をくくった。

「廉は？女の子の前だからっておしとやかにしてたら本当に討たれるぜ」

「わ、分かってるよ」

「お喋りはそこまでだ」

腹に響く呂布の声が遮った。

目前に迫った食糧基地の物見台から今更、警鐘を叩く音が聞こえる。警戒態勢では無かった様だ。

討伐軍が来ないとも思っていたのか。恐らくまだ張燕は出て来て無いのだろう。

守将が張燕だったら風評は偽りで、よっぽど間抜けな奴なのだろう。

迎撃しようと基地内から矢が降ってきた。しかし甲冑に当たっても、刺さる事は無い。黒山賊は動揺しているのか、呂布は弾く事も

しなかった。

門は閉ざされている。

しかし、脆い。

門は質の悪い木材で作っている。呂布はそれをよく知っていた。

——いける……！

呂布は門に赤兎ごと突っ込んだ。門は呂布が思い描いた通りに粉碎され、飛び散った。

「突撃！」

蝗紅隊が雄叫びを上げて黒山賊に襲い掛かった。まだ戦闘の準備も出来てない者もいた。それでも抵抗は強固だった。

一人突き殺すとその死体の死角から矛が繰り出される。黒山賊は味方の死を無駄にしなかった。

呂布には仲間の生を繋ぐ為に、一度獲得した食糧を守り切る執念とも呼べるものが見えた。

この軍は修羅だ、と呂布は思った。

事実、黒山賊の迎撃は混乱状態で全く纏まりが無いのに殺しても殺しても怯む事を知らなかった。

大抵の軍は先頭の呂布の一振りで陣形に大穴が空き、残りの兵もその光景におの退き隙が出来る。そこに成廉や魏越が突っ込み、兵達が後続く。それで敵軍は潰走する。

黒山賊はそうはいかない。突き殺そうが両断しようが吹き飛ばそうが無駄だった。すぐに味方の穴を埋める。死を厭わない、死に兵だった。

「まずいか……」

何をやっても怯まない相手を斬っても斬っても無駄だ。黒山賊が今の混乱を立て直しでもすれば包囲されてしまう。それでこの死に兵である。下手すれば全滅だ。

呂布は後方を振り返った。今のところ欠けた者はいない。余裕を

見せていた。

だが――、勝利を獲るには黒山賊と直接、長期に戦闘するのは危険だ。

呂布の決断は速かった。

「一旦、ここから脱出するぞ。討った首を拾うのを忘れるな」

袁紹への報告は討ち取った首が多ければ多い程いい。

兵達は皆戟の矛先に転がる首を突き刺し、侵入した門とは別の門に向かって駆ける呂布に続いた。

そして、来た時と同じ様に呂布は門を突き破った。

「行くぞ、突撃！」

呂布の号令と共に蝗紅隊が本日四度目の突撃を仕掛けた。五日目の事である。

強固な、それでいて人間離れの結束を見せる黒山賊を相手に、呂布がとった戦法は一日に突撃を幾度と繰り返すものだった。

今、食糧基地に居座る黒山賊は死をも恐れない、ある意味最強の軍である。

しかし、幾ら戦闘訓練を受けたとは言え、所詮は軍人では無く民である。彼らも日々の営みのある普通の人民だ。黒山賊の凄まじい精神力は呂布も理解した。まともにぶつかれば数の少ない蝗紅隊が敗れてしまう。

――だが、果たしてその精神力は長く続くのか？

精神力が強大になればなる程、その持続は続かない。長期に渡る厳しい鍛錬を行わなければ尚更顕著になる。

呂布はそこに目を付けた。

全力を尽くす必要は無い。元々、蝗紅隊は呂布と赤兎の能力に追いつける事を目的として結成、調練している。やろうと思えば三日夜通しで駆け続ける事も可能だ。

それだけ蝗紅隊と黒山賊には雲泥の差があった。苦戦するのはただ、相手が多過ぎるだけだ。

更に黒山賊は皆歩兵ばかり。兵科にも差がある。突破力も持久力もちちらが勝っている。

黒山賊が疲弊するまで突撃を繰り返し、絶え間無く戦闘しているかの様に錯覚させる。求めているのは精神的被害である。神経をすり減らせばすり減らす程、人は肉体の疲労に気付かない。

呂布が狙っている好機とは疲労の頂点に達した、その時である。実際に目で見えない所で度重なる突撃は黒山賊を蝕んでいた。

成廉は突撃の際、兵達に守られるかの様に周りを囲まれていた。前方を呂布、魏越。左右を屈強な兵達が固める。

白鈴が同乗しているので仕方無かった。そうなると使える武器は弓だけになってしまう。

気付けば成廉は弓の腕前において、呂布に次ぐ実力となっていた。成廉が弦音を発てれば敵の悲鳴が必ず上がる。

初めて戦場を経験する白鈴はと言うと、軀を震える事は無かったが沈黙して前をじっと見据え、成廉が射殺し伏していく者達を静かに目で追っていた。まるでその光景を焼き付けようとする様に。

いつからか、成廉は戦に密かな快感を覚えていた。他の誰にも言外した事は無い。

だが、何と無く蝗紅隊の皆も同じと感じていた。

戈も相手を刺突した手応えを味わえて良かったが、やはり弓である。

力一杯引き絞った弓を相手のその眉間に狙い、放つ。矢がゆっくりとその眉間に吸い込まれるかという刹那。そして、一拍置いて小

気味良い音を発てて矢は貫通した。

そうすると、何とも言えない充足を成廉は獲られた。

昔は人を殺すにもいちいち躊躇っていた。そんな者は戦場にいる資格など本来ならば無い。

いつ、何が成廉を変えたのか。それとも元々のそういう器質だったのか、成廉には解らない。言えるのは己の求める真の武人、呂布に一步一步確実に近付けられている、と言う事である。

この突撃でも成廉の冴え掛かった騎射が黒山賊に襲い掛かる。弦音と同じだけ命が貫かれていく。

上下する揺れに影響される事は無い。騎上と言う高みから射るのは選り取り見取りだった。どの兵が誰を狙って矛を突き出そうとしているか、馬の脚を引っ掛けようとしているか手に取る様に知る事が出来る。

そんな時、小さな旗を掲げた一隊が現れた。『王』の文字が見える。将らしき者も見えた。その隊はこちらに向かっていった。

すかさず成廉は矢をつがえる。

二人掛かりで作られる弓が音を発てて引き絞られていった。

将がこちらに斬り掛かってきた。隙だらけだ。

魏越が首を跳ねようと戟を振りかざした瞬間、成廉は矢を放つ。

矢は将の額に突き立っていた。

それを見て、魏越はあからさまに舌打ちするとその首を斬り飛ばした。

おびただしい数の物体が食糧基地の四門を塞いでいる。

近付いてよく見て初めてそれが人の死体と判る。目に付くほとんどに首が無かった。黄土にまみれた甲冑は全て黒山賊の物だ。

なぜそんな物が門を塞いでいるのか。それは入る者全てを拒んでいるかの様だ。

張燕は目の前の光景が信じられなかった。

常山の騎馬軍と手勢の一万を引き連れて、王当と杜長の応援に駆けつけた張燕だったが、こちらの軍は想像以上の被害だ。

「飛燕様、お待ちしておりました」

出迎えたのは杜長だけだった。

「王当は……？」

「討ち死に致しました」

「……そうか」

杜長は酷く衰弱している様に見えた。

「被害の詳細は？」

「袁紹軍は日に幾度と突撃して一度の犠牲は百人を超えます。怪我人も含めて五千余もの兵が被害を受けました」

張燕は深い溜め息を吐いた。

王当も杜長も無能と言う訳では無いが、戦での多少の被害は覚悟していた。だが、被害は予想を遥かに超えたこの有り様通り、甚大だった。

「申し：訳ございません」

杜長は跪いて地に額を擦り付けた。

「顔を上げよ。敵はどんな様子じゃ？ 率いる将は？」

顔を上げた杜長は怯えた顔を恐怖に凍り付かせた。

「約五千……」

「五千?!」

それでは僅か五千程の軍に黒山の精鋭二万が叩きのめされたと言うのか。

「しかも、実際に仕掛けてくるのはたった五百の騎馬隊です。残り は後方支援として待機しているだけでございまして……」

おもむろに張燕は立ち上がった。

「五百……？ 五百だと？」

「しかも敵軍は無傷です。我々ではまるで齒が立ちません」

張燕の顔中の毛が逆立った。

有り得ない。二万の兵を五百で破るなど。

「いったい敵の将は誰なのだ！？」

袁紹の下に、いや、河北にそれ程の者は居らんはずだ！」

張燕は思わず怒鳴っていた。

「誰かまでは定かではございません。ただ、黒ずくめに紅い肩当てをした軍で、白装束の将が率いております。旗印は『呂』と」

杜長がそう告げた瞬間、先程までの怒りは萎んでいた。代わりに恐怖が訪れる。張燕は氷の刃でも突き付かれたかの様に立ち竦んだ。

——呂布だ……。

七年前の黄巾の乱が鮮明に思い出された。

あの時、張燕は張牛角に従って黒山から并州へと兵を進めていた。始めは州兵より優勢だった。

それが急に現れた僅か三百余りの一隊により、形勢が逆転してしまったのだ。

それが呂布だった。

張牛角の軍の後方より奇襲を仕掛けた呂布を見た時、張燕は恐怖よりも畏怖を感じた。常人とは思えなかったのだ。

と言うのも、河郷の黄巾賊一万が呂布と言う新手の校尉に打ち破られた、との早馬が到着したその日の奇襲だったのだ。

早馬とほぼ同じ速度で進軍していた事になる。

奇襲してきた隊は騎兵が五十程度で残りは歩兵だった。要するに彼らは有り得ない進軍をしているのだ。

可能性としては三日三晩、一睡もせずに駆け続ければ歩兵の足で

何とか辿り着ける位である。

しかし、それからすぐに戦をしているのだ。

張燕は『呂』の旗印を掲げた一隊が張牛角の本軍を突破するのを見ながら、もしかしたら州の軍に呂姓の校尉が二人居るのでは、とも考えた。

それだけ目の前の光景が信じられなかったのだ。張牛角はその襲撃で討ち取られた。張燕は何も出来ずに救援にも行けなかった。

大いなる武を目の当たりにした気がした。足が動かなかったのだ。敗軍を纏めるので精一杯だった。

そして――、張燕の胸に刻み込まれた畏怖が一気に再燃する。

「あの、……あの呂布がどうして……？」

思わず口からこぼれた。

――どうして飛将と名高い呂布が袁紹の一介の将として我々を討伐しにくるのか？

「呂布?!」

杜長が聞き返す。衰弱した顔に恐怖の色が見え隠れした。

「敵将は呂布だとおっしゃるのですか?!」

「……恐らく」

「そんな……!」

杜長や従者が息を呑む。あの強さが納得と言えば納得だが、誰も

呂布なんかと闘いたくなかった。

またしても杜長が跪いた。

「飛燕様……撤退を……お考え下さい」

張燕は力無く腰掛けていたが、その言葉にサッと顔を上げた。

「撤退……じゃと?」

「呂布を相手に策も無くまともにぶつかれば被害が尚更甚大なもの

になり、」

「黙れ！」

図らずも怒鳴っていた。

「この基地で保ち堪えたとは言え、貴様は五千もの被害を出したのじゃぞ。偉そうに言える立場か！！？」

「もっ申し訳ございません」

杜長は小さくなって引き下がった。

「出撃する！ 呂布など畏れるな！！」

過剰に叫ぶのは己の畏怖を吹き飛ばす為か。

撤退しか道が無いのは張燕も解っていた。

しかし、二月分の食糧を目の前に、手ぶらで被害だけを出して黒山へ逃げ帰るなど、今の張燕にはしたくてもする事が出来なかった。

荒野に生温い風が吹き荒れる。空気が重たく感じられるのは単に雨天の前触れか、それともこれから始まる戦の悲惨さを暗示しているのだろうか。

荒野には二つの軍が対峙していた。

一方は一万を優に超え、もう一方は僅か五百だ。二つの軍、よりも一軍と一隊が適当だろう。

端から見れば『黒山』の旗印を掲げる一万が圧倒的に優勢だ。

しかし、対する白装束に身を包む将と黒ずくめの一隊の旗印は『呂』であり、それは様々な意味を表していた。

則ち、その隊の将は漢帝国最強の武人・呂布であり、その隊は彼に率いられる最強の騎馬隊であり、彼らに十倍二十倍で対峙したとしても勝算は有り得ないのである。

それでも『黒山』の旗印を掲げる黒山賊の兵は怯む事無く、ただ呂布を睨み据えた。黒山賊は呂布さえ倒せばよい。一塊の隊に手も足も出ないならば、残されているのは将を討ち取るしかない。

それが僅かな望みだとしても、彼らは闘い続けなくてはならなかった。背後の食糧基地がその覚悟を確固たるものにする。生きる為に、大切な者の生活の為にその食糧を持ち帰らなくてはならない。黒山賊の士気は静かに、しかし否応無しに上がっていた。

替わって張燕を始めとする黒山賊の将の瞳には精気が見えない。張燕は兵達の信じる僅かな可能性が在ると思えなかった。その身を以て呂布の本当の恐ろしさを知っているからだ。

絶対勝てない――、そんな考えが頭を占める。

「騎兵、前へ」

張燕は先に動いた。出頭を叩いて、少しでも呂布軍の勢いを削がなくてはならない。

雄叫びを上げながら黒山賊の騎兵が小さな黒い塊に突撃する。

中軍に居ながら殺気と共に食糧を護るため、という必死さもひしひしと伝わる。

この騎兵と対峙すれば、さぞかし恐ろしかろう。

しかし、小さな黒い塊は慌てる事無く、白い点を先頭に錐行の陣になった。

滑らかな、少しも乱れる事の無い動きだった。

まるで一つの生き物の様だ――、張燕はその動きに見入っていた。我に返った瞬間には騎兵と呂布の騎馬隊はぶつかっていた。

最初の衝撃で最前線から兵が舞い飛ぶ。

まるで藁人形の様だ。全て黒山賊だった。首だけ、腕だけ、半身だけ、馬までもが一直線の黒い騎馬隊の周囲を赤く彩る。重力を無視したかの光景は現実と思えなかった。

張燕は茫然と、また見入りそうになった己を見つけて頬を抓る。

呂布の騎馬隊が黒山賊の騎兵を抜けるまでであっという間だった。

「来るぞ！ 弓兵構え」

後方で控えていた弓兵が呂布ただ一点のみに狙いを定める。

騎兵の最後尾から白装束を鮮血に染めた将が飛び出した。

呂布だ。

続々と湧くように黒づくめの騎馬隊が出て来る。一人として欠けていない。

「放て！」

千を越える矢が呂布に襲い掛かった。

しかし、そのほとんどを呂布とその騎馬隊は叩き落としてしまう。命中したのも幾らかあったが、誰一人として落馬どころか速度すら落とさなかった。

黒山賊に恐怖のどよめきが走る。張燕は驚かなかった。

呂布一人が居るだけの軍でも強いのだ。彼と調練を共にする軍に適うはずが無いのだ。

そしてこの速さ。幾ら数が少なく操りやすいとは言え、呂布の騎馬隊は速過ぎる。

一直線な為か一本の矢にも見える。一度放たれば、的目掛けて真っ直ぐ飛んでいく。

止める術の無い呂布の騎馬隊と全く変わり無い。

――我が軍が的なら儂を射止めれば的中か。

呂布が張燕に向かった迫る。

親衛隊が主の身を護ろうと必死に壁を作る。

だが、奮闘虚しく呂布のたった一撃でその壁は消え去った。血飛沫が張燕にも降り懸かる。

呂布はもう目の前だ。剣を握る手に力が入る。

呂布の形相はまさに修羅だった。端正な顔が無表情のまま血に濡

らす様は神々しくさえも見えた。

——もう、いいじゃないか。

そんな言葉が張燕の頭に過ぎる。

——呂布に勝てる者などいないのだ。呂布に殺されるなら本望つてもものでは無いか？

どこぞの馬の骨の手で生涯を終える事と比べれば幸いじゃあないか。

諦めた様に張燕は構えた剣を下げた。

「……さあ、来い」

死を覚悟した——。

しかし、呂布は張燕に目もくれず、後軍へと通り過ぎていく。

「どうして……！？」

と、目の前に巨大な戟を振り上げた校尉が迫っていた。

戟が唸りを上げて張燕に襲い掛かる。寸でのところで避けた張燕だったが落馬してしまった。見上げると、さっきまで張燕が乗っていた馬に首は無かった。

それから後続く騎馬隊もまるで気にも留めない。己が存在しているのか疑わしくなる程だった。

翌日——。

散々打ち破られた張燕は最寄りの山内に逃げ込んでいた。付き従うのは僅かな手勢のみ。自責の念が募るばかりだった。

「飛燕様、ご無事でしたか」

そう言って幕内に入ってきたのは共に救援に駆けつけた孫輕だ。

「被害は……？」

「将は杜長が死にました。騎兵隊は千ばかり。歩兵、弓兵は三千を越えます」

「……」

「……それから、食糧基地が袁紹軍の五千に奪還されました」
「そうか」

張燕は何となく気持ちが楽になった気がした。食糧基地を奪還されたなら、もうここにいる意味は無い。

「退却する、全軍に通達せよ」

「承知しました」

孫輕は悔しさと張燕への同情を含んだ眼差しで張燕を見て答えた。それを見守ると張燕も幕内から出た。

張燕は退却の支度に勤しむ兵を眺めていた。皆、疲れ切った虚ろな顔をしている。

絶望感漂うこの陣からすぐにでも立ち退きたかった。兵達が絶望に打ちひしがれているのはその期待が大きかったからだ。

事実、全くの望みも抱かずに戦に臨んだ張燕は絶望とは別の事を感じていた。

希望を棄てずに己の可能性を信じた兵達は死んでいった。必死だった者程、死んでいった。

しかし、最初から負けるものだと言った張燕は未だその生を繋いでいる。

張燕の心を悲しいもので占められていく。希望を棄てなかった者が死に、希望を棄てた者が生き残る。それがとても理不尽で空虚の事に思えた。

西の空を見上げると一雨来そうな雨雲が垂れ込んでいた。これから帰還する方角である。

張燕にはそれが何となく黒山賊の行く末を預めているようで虚し

か
っ
た。
。

陳に抛りて立つ

呂布、張「合β」ら討伐軍が大勝利を収め、各地の黒山賊は一斉に息を潜めた。

張「合β」は「業β」に帰還する事になった呂布を見送る為、さやかな宴を催してくれた。

「將軍、またお会いする機会があるでしょうか？」

張「合β」が呂布の杯に酒を注ぎながら、ぽつりと呟いた。

「さてはて、天がまた巡り会わせてくれるかどうか」

その言葉で悟ったのか張「合β」は下を向いた。

「冀州を……出て行けますか」

「業β」に滞在するならば黎陽の張「合β」に面会など造作もない。

「まあ、そうなってしまいうだろうな」

呂布は豪快に杯を空にした。

「……残念です」

そう言って張「合β」は呂布を見つめた。それは呂布の『武』に心酔し切ったものだ。

「某は將軍の御武運を祈り続けます」

「俺の事は早く忘れろ」

呂布の言い様は自嘲気味だった。

「どうしてそんな事を申します？」

呂布は卓の杯から視線を外さなかった。やはり自嘲を顔に貼り付けたまま、である。

「張「合β」殿が俺の『武』に何を感じているのか知らんが、俺を目標にするのは止めた方が良い」

「それはまた、……なぜですか」

「成廉や魏越を見てみる」

呂布は離れた席で蝗紅隊と盛り上がる二人を目を細めて見た。

「俺に出会った事で天下に於いて『武』を俺の中にしか見い出せなくなっている」

「主を至高の武と仰ぎ、忠誠を誓うのは幸いな事ではないでしょうか」

張「合β」は眉を寄せた。

「それにそれは間違っています。呂布殿こそ最強の『武』です。まさに天下全ての『武』を具現化したものこそ呂布殿でしょう」

「張「合β」殿は何が真の『武』と心得る。やはりあいつらと同じで俺か？」

「はい」

「そうか……」

そのまま呂布は押し黙ってしまった。宴もお開きとなった頃、不意に呂布が口を開いた。

「……真の『武』とはな、」

呂布の視線は自然と穏やかに成廉、魏越の二人に向けられた。

「己自身しかその答えを持っていない」

「？」

張「合β」は良く解らないという表情を向けた。

「今の天下ならば俺は最強だ。だが、俺自身未だに己を超えて、真の『武』を見つけておらん。」

もし、天下に己の中に真の『武』を見つけ出した者が現れたならば、その時俺はその者に敗れてしまうだろう」

「その様な……ものなのですか、『武』とは」

張「合β」はまだ解らない、といった表情だ。

「そういうものなのだ」

呂布は最後の一杯を一気に煽った。

張「合β」との別れを惜しみつつ、一行は「業β」へと帰還した。州城の城門をくぐるのはこれで二度目となる。彼らを見る人民の目は明らかに変わっていた。

初めては天下に名高き飛将とはどの様な者なのか、といった好奇の目だった。しかし今はどうだろうか。冀州に入ってからまだ三月も経っていないというのに、その目は地元の名士を迎える如く敬意に満ちたそれである。否、畏怖ともとれる。既に黒山賊討伐の戦果は知れ渡っているのだろう。

——あの呂將軍とは言え、一千に満たない一隊で万を越す黒山賊を相手にまさか勝つはずが無い。

誰しもそう思ったに違いない。しかし、呂布はそんな予想を裏切って大戦果と共に還ってきた。驚愕と畏怖でもって受け入れられるのも当然だ。

それは袁紹も然りであった。

無理難題として押し付けたはずの黒山賊討伐をこうも容易く大戦果を収めるとは予想だになかったのだ。しかし、そこは袁紹。その驚愕を上手く隠し通した。

「……以上、戦果は賊の首級五千余に上ります」

成廉が代弁して報告をすると、袁紹はそれで当然だ、という態度だった。相変わらず座してふんぞり返っている。そして幾らか蔑む様に口を開いた。

「我が赴けば賊も平たく服するものを……。呂將軍、賊を殺すだけ殺して服属出来なかったのか？」

「？」

何を言っているのだろうと成廉は首を傾げる。黒山賊の『討伐』が命令だったはずだ。

「そもそも服属が目的とは初耳だぞ」

呂布が声を荒げたが、責める調子では無い。この砕けた態度を改める気は無いらしい。

しかし袁紹は聞こえないのか一人で話を進める。

「此度の戦では無駄な血が流れた」

袁紹は嘆く表情を作るとわざとらしく溜め息を吐いて見せた。

「賊を平らげるのに殺すのは必要な者だけでよいでは無いか。いずれ我が民となるのだ。為政者の威光を示せば民はたちどころに平伏すのだ。」

……と言っても戦に明け暮れる將軍には解らないかもしれぬが」

「王道か」

王道――。いわゆる徳治主義である。徳で以て人民を支配し、あくまで武力行使で治める霸道と相對する。袁紹の場合は名家の威光という点で若干の違いはあるものの、特に変わり無い。

「そうだ、我が求めるものは王道だ」

しかし、袁紹が言う様に王道を良しとするならば、先年の虎牢での強行進軍と矛盾してしまふ。あれは明らかに覇者の決断だ。

呂布は袁紹という器を見切った。袁紹には王道と霸道が混在しているのだ。それでいて雑念が無いので、王道にしろ霸道にしろその決断に迷いが無い。

敢えて彼が決断に迷うとすれば、それは王道、霸道の利害が衝突した時だけなのだ。

呂布はこれだけで満足した。

元々、袁紹とはどのような人物なのか知りたくて、天下の広さを体感したくて冀州に来た。

袁紹は天下を統べる器だろう。しかし、呂布の居場所はここではないのである。呂布は己自身を王者とも覇者とも思っていない。

呂布は武人なのである。古来から武人が政を行うのは道理に反するが、それでも武人として天下を統べる事が果たして出来るのか試したかったのだ。

それならばここに用はもう無い。呂布は既に冀州を出る方法を思

いついていた。

「話が変わるが將軍、公孫瓚との前線の緊張が高まりつつある。そこで南皮の方へ移ってもらおうか。先日の武をまた示せ」

袁紹の試す様な言葉。その内容はまさに呂布が待っていた言葉だった。

「断る」

呂布は顰めっ面を作って即答した。

——さあ、どうする？ 袁紹。

袁紹は包荒的な笑みを浮かべながら

「では、ここから消え去れ」

と言いはなった。

「こことはどこだ？ 冀州殿の前か。『業β』か。冀州か」

「天下だ」

袁紹の余りの無礼さに成廉と魏越が顔色を変える。死ねと言っている様なものだ。

「……と言いたい所だがここは私の広さを見せよう。冀州から出て行け。戦をせぬ武人など必要無い」

「承知した、今日中に支度して出奔しよう」

成廉と魏越は突然の決定に驚き、呂布を見た。

「そんな……。これからどうするのですか」

「いいから、行くぞ」

呂布は二人を相手にしないで政庁から退出した。

「殿！ 呂布を手放すとは如何なる考えあつての事か？」
初老の参謀が袁紹を諫める。

田豊、字は元皓、冀州別駕である。身分に拘らず讒言する者で、袁紹は他者の意見を吸収する上で重く用い、側に置いていた。しかし、最近では余りにも目に余る発言が多く、袁紹も次第に疎んじ始めている。

「呂布は目障りで危険過ぎる」

「何を情け無い、獣一匹飼ひ慣れせない様では天下は遠いはずぞ」
袁紹はジロリと睨んだ。

「天下にあの男を飼ひ慣らせる奴が居るとは思わん」

あるいは孟徳なら……、と袁紹は旧友を思い浮かべたが、あいにく曹操は青州黄巾賊を相手に苦戦している。

「呂布をどうするおつもりです？」

「殺す」

「お得意の無理難題がまたしても出ましたな」

「無理と言うか」

「飼ひ慣れない獣をどうして殺せるでしょう」

「しかし、やってみなくては分らん」

「では何故飼ひ慣らそうとは思わなかったのです？　いえ、当てましょう」

「言ってみよ」

暫し一考した後、田豊は口を開いた。

「主より強く、名声を博する部将は必要無いと考えてますな」

「……」

「二度も裏切りを犯した。しかも己より強い獣だ。確かに側には置きたくない。違いますか？」

「その通りだ。さすがは我の知囊よ」

表向きは褒めても腑は煮えくり返っていた。観察眼は認めるが、ずかずかと人の思考を読まないで欲しい。

「成る程、殿は畏れていらっしゃるのですな、呂布を」

「悪いか」

「いえいえ」

田豊は小さく首を振った。

「儂も呂布の武には驚かされましたよ。しかしあれは蛮勇の塊、まさに猛獣と変わりありません。

殺そうと考えるなら暗殺が宜しいでしょうな」

「私もそう考えておった」

呂布の武は正面から立ち向かって何とかなるものでは無かった。

「隙の大きい、そうですね……就寝時を見計らって襲わせるのが良いでしょう」

「出来れば冀州を出てからが良い」

袁紹の言葉に田豊は眉を上げた。が、すぐに主の心境を読み取り、悟った。

袁紹は己の名声に汚点が付くのが赦せないのだ。天下の飛将を殺ただけでなく、正々堂々でなく暗殺すれば、呂布を慕う者に怨まれる。下手すれば少なからず人民の心も離れかねない。卑怯者よ、と囁かれる事態だけは避けたかった。

「間者と我の親衛隊から三十人程選抜して小隊を編成せよ。くれぐれも直接戦闘しない様、命じよ。弩を携えさせるように」

承知、と田豊は答えたが袁紹を見ると退出しなかった。

「何だ？ まだ何かあるか」

「帝の件でございます」

畏まって田豊は答えた。途端に袁紹は嫌そうな顔をした。

「またそれか。何度も言っておるだろう、却下だ」

「良くお考えなされ。今しか帝を手元に置く機会は無いのですぞ。帝を保護すれば殿の天下は決まった様なものですぞ」

「ふんっ、帝を保護して名を馳せようとは思わん」

田豊は袁紹陣内でも数少ない、漢帝国に忠誠を誓う者だ。かつては中央にて従事していたが、宦官がのさばり始めた頃に下野した。そして今は袁紹に仕えているのだが、その忠誠心はまだまだ篤い。

田豊の献策は長安で董卓の遺臣・李確の傀儡となっている帝の保護だった。長安は李確らが支配してから荒れに荒れていた。仲間内

で小さな諍いが起きるとすぐに戦で決着をつけようとしていたので、死者の数は日増しに増えていた。

農商業も衰え、帝の日々の食事さえままならない有り様らしい。そんな帝を今保護する事は人道的にも政略的にも正しかった。

しかし、袁紹はそれを拒否した。帝は足枷にしかない。勢力の中に己より威徳のある者が在ってはならない。そして、袁紹は帝のその威徳を借りて天下に号令する己を想像して、それはあってはならないと考えた。

あくまでも天下は己の器で手に入れる。それしか頭に無かった。

一方、洛陽で呂布らと別れた張遼、文優、高順はエン州にいた。

黒ずくめの一隊が賊軍に殺到した。

「突撃！」

そう叫びながら白装束を身に纏う張遼も自ら大刀を片手に賊の一群に飛び込んだ。間髪容れずに大刀が振るわれると赤い軌跡が鮮やかに舞い上がった。賊の面々が引きつる。

どっと退き始めると、その目の前に同じく黒ずくめの一隊が立ち塞がる。先頭の高順は銀の甲冑を鈍色に光らせていた。

「お主らに逃げ場など無いぞ」

高順が剣を振り下ろすと黒ずくめの一隊、蝗紅隊はそれを合図に突撃した。

賊軍は抵抗も出来ずに刈られていく。そこら一帯は血を吸って泥濘と化していた。それでも蝗紅隊の騎馬は脚を取られる事無く駆け回った。

彼らの騎馬は全て選りすぐりの名馬なのだ。駿馬であり、農耕馬並みの踏ん張りもある。速さと馬力を兼ね揃える馬はそうそういない。漢の馬とは比べ物にならなかった。

全て、今は亡き董卓の下賜した馬である。本意では無いが、こういった場で張遼と高順はその有り難みを感じていた。

「張遼、そろそろ良かろう」

「そうですね。邑に帰るぞ」

張遼と高順は身分としては同格だ。しかし、張遼はあくまでも年長の高順に敬意を表していた。名は呼び捨てで、というのが張遼の意見だった。最初は渋った高順だが張遼の心遣いを無視出来ず、今では「高順殿」、「張遼」で呼び合っている。

張遼率いる第二の蝗紅隊はエン州陳留のある邑に滞在していた。旗印は『呂』のままである。これは文優の計略が込められていた。この一ヶ月、張遼と高順はエン州内を駆け回り、賊の討伐に尽力していた。

賊がいると少なからず県の蔵に影響が及ぶ。何より人民への被害が酷い。治安が行き届いてない証拠なのだが、賊討伐の軍を興すには各地が兵力不足だった。エン州牧の曹操が青州に残る黄巾賊と対陣中だからだ。

そんな時勢に張遼らは現れた。必要な兵糧を供出するだけで守備兵を動かす事無く討伐出来る。そして凄まじく強い。

蝗紅隊は各県令からとても厚遇された。大抵の県令は旗印を見て呂布と面会したがつた。その度に張遼は呂布は別隊と共に他の賊に当たっている事として説明した。

どうしてこんな事をしているのか。

全ては文優の計略だ。即ち呂布旗揚げの地をここエン州と定めたのだ。

とは言っても、初めは張遼も高順も反対だった。何故なら牧の曹操は一筋縄でいかない知恵者だからである。函谷関で一度は呂布と徐栄の軍に破れたものの、それは洛陽炎上という心理的要因があっ

たからである。あの時の董卓打倒という憤怒に燃えた盲目の曹操なら張遼が指揮しても勝てただろう。

文優の曰わく、言い替えれば、例え平生の曹操が打ち破るのに難き相手だとしても、心理的に何らかの揺さぶりを掛ければ必ず隙が出来る。その隙を先手で立ち直る余裕も無くなる程の迅速な攻めを行えば、優位に立てるのは確実だ。

それが可能なのが人、騎馬共に逸材の揃った蝗紅隊だけなのだ。そして優位に立つには各地の太守、県令、豪族の協力が必要だ。

賊討伐はそれだけで呂布の名を各地の支配者に刻み込んだ。エン州各地の町では呂布の武、賊討伐という無償の義、有能な部下を抱える徳が噂で持ち切りだった。

当然その話は曹操の耳にも入っているはずだ。登用か追放かはたまた討伐か。曹操がどんな対応をしてくるか張遼は予想も出来無かった。

「文優殿、もう時間が無いぞ」

張遼が遠くを見つめて呟いた。蝗紅隊が滞在する邑に文優の姿は無かった。

文優もまた蝗紅隊が思う存分暴れ回れる舞台を造る為、エン州各地を駆け回っていた。

文優は陳留の官舎を訪れた。ある男に会う為である。

その男は姓を陳、名を宮、字を公台、エン州東郡の人である。曹操軍の将だが、以前まで参謀として貢献していた者である。それが急に曹操の本拠地から幾らか離れた陳留に配置されたのだ。

文優は当然何かあると考えた。間者を放って暫くすると、見えてきたのは荀或という者だった。荀子の子孫であり、名家である。人材発掘に於いて曹操に貢献しており、知恵者として評判もある。どうやら名声や風評を含めて荀或を重用した結果、陳宮が本拠地から

外された様である。

使える――、文優はそう直感した。

不遇を囲った知恵者程扱いやすいものは無い。陳宮はエン州で顔が広いとの事だ。今の境遇にも不満を持っているに違いない。

呂布がエン州で旗揚げするに於いて、最大の協力者になるに違いなかった。

従者に案内されて一室に入った。

文優はそこでまた待たされるかと思っていたのだが、驚いた事に通された先は執務室だった。

卓に山積みされた竹簡を前に陳宮が待ち受けていた。

「お待たせして申し訳無い。多忙なもので、失礼を承知でこのままで用件を」

そう言つて陳宮は一瞬顔を上げて、すぐに手に持った竹簡に視線を戻した。

予想よりも遥かに若い。三十台後半といった所だ。文優より一回り若い。しかし、態度は尊大でいて自信に溢れたものだった。

「お名前は？」

「名乗る程の者ではありませんが人は私を文優と呼びます」

「聞かない名ですな」

興味無さそうに陳宮はやはり顔を上げなかった。

「それで？ 用件は？」

世間話から入っても時の無駄な気がした文優は单刀直入に本題に入った。

「陳宮殿の今後についてです」

「今後？」

ピクッと陳宮の頭が動いた。

「私の今後が何か？」

「どうなさるつもりですか？ 志をお持ちでしょう」

「これはこれは、異な事を仰る」

陳宮は竹簡を束ねて卓に置いた。

「私は曹エン州の臣下です。これから忠義を尽くすのが志ですよ」
「つい先日エン州を回りましてな、陳宮殿の忠節は耳にしています。
曹操殿がエン州を手に入れたのも陳宮殿あつての事とか」

いつの間にか陳宮は文優の話に耳を傾けていた。

「しかし、悪い事も耳にしまして……」

「ほう」

「曹操殿は陳宮殿の忠義に価する扱いを施して無い様で」

「何故そう思われる」

陳宮はまだ揺るがない。

「それは陳宮殿が一番ご存知でしょう。今の境遇は望んだものです
か？」

「……私は常に未来を見据えているのだ。曹エン州がいかなるお考
えあつて私を今の地位に置いたのかは知りませんが、留守を守るの
は信頼されている証です」

青州黄巾賊を降伏せしめた曹操は戦後処理と慰撫の為に未だ済南
に本営を置いていた。その背後を狙って袁術が動き始めていた。

現在、天下は袁紹派の曹操、劉表の連合と袁術派の公孫瓚、陶謙
の連合によって二分されていた。公孫瓚は平原に劉備を置いて曹操
の牽制とし、陶謙は軍備を整えている。形としては包囲された曹操
が今にも袁術に攻め込まれそうな状況にある。

そうなった場合、陳留は重要な拠点となるのだ。陳宮がそう信じ
るのも納得出来るし、恐らく曹操の信頼も本物だろうと文優は読ん
でいた。

しかし、己の才を過信する者が大した役職に就けなければ見えな
い所で不満は積もっているはずである。

もう一押しだ、と文優は直感した。

「本当に信頼されていると思いますか？」

「何度も言わせるな、人事的にも戦略的にも私は陳留に必要とされ
ているのだから、曹エン州の信頼は本物だ」

苛立ちを隠せない陳宮。それはしつこい文優に対してか、それとも己の不遇に対してか。

「それは赴任先が陳留で無ければの話でしょう」
「?？」

「陳留太守、即ち張藐殿は曹操殿にいざという時は互いの家族を養うと誓約する程信頼されています。その張藐殿の主簿にわざわざ任じられるという事が一体何を意味するか。さすがに陳宮殿も分かっ
ておろう」

「……」

暫くの間、陳宮は押し黙っていた。

「……文優殿は不思議とこの事情に精通してますな」

陳宮は急に弱々しい調子になった。

「仰る通り、私も急に陳留のしかも太守の主簿なんかを命じられて
おかしいと感じました。最初は私が張太守の監視役だと思ってまし
た。」

しかし、実際は私が監視されていたのです。私の周りに間者の影が
見え隠れしました。

しかも曹エン州は古参の私を差し置いて荀或殿を重用しているとか
……」

今にも泣き出しそうな陳宮は不平不満全てを吐き出した。

幾ら溢れんばかりの才があろうともまだまだ若輩の徒。根は純粹
な所があるのだろう。暫く吐露してから、漸く陳宮は氣付いた様に
付け足した。

「何者かも判らない文優殿にここまで明かしてしまうとは。どうか
此度の事は心の内にしまっ頂きたい」

「それには及びません」

「え？」

文優は正体を曝す事にした。

「私は呂布様の配下です」

「!?!？」

陳宮は開いた口が閉まらない様だ。

「今……何と？」

「私は呂布軍に所属しているのですよ」

「そんな私は他勢力に情報を……私は何て不忠者なのだ」

陳宮は頭を抱えだした。見ていて飽きない。先程の毅然とした陳宮とまるで別人である。

「まだそんな事を言っているのですか」

「……つまる所、私に裏切れと申すか!？」

さすが知恵者。冷静さを失ってもこういった頭の回転は早い。

「憤慨するのも当然でしょう。しかし、その感情は曹操殿にぶつけるべきではないですか」

「何!？」

「こんなちっぽけな役職を押し付けられてせいぜい出世しても県令止まりですよ。」

いいのですか？ あなたに志は？ 天下を統べる才を持ったまま持ち腐れするのですか？」

一気に畳み込む。陳宮は拳を震わせていたが力が抜けた様に下ろした。

「返答はともかく本日はお引き取りください」

へたり込んだ陳宮はまるで竹簡に埋もれた様だった。

「頭を冷やしてよく考えたい。この事は決して言外しません、安心してください。また後日」

そう言って陳宮はまた竹簡を手にも通し始めた。仕事でもしてないと落ち着けない程に動揺しているのだろう。

静かに一礼すると文優は室を後にした。陳宮はなかなか決断し切れない様だ。

——最後にきつかけが必要か……。

既に文優の頭の中には次の策が閃いていた。

それから数ヶ月。文優の姿をエン州で見た者はいなかった。文優は徐州にいた。

時勢は丁度、曹操と袁紹の連合軍が陳国で袁術を打ち破った頃だった。敗退した袁術は南陽を捨て、淮南の寿春を新たな本拠地に定めた。これによって天下は袁紹派にとって有利に傾き、曹操も次なる標的・徐州を眼中に軍備を進めていた。

徐州は州城の下「丕β」を中心に治める陶謙と各地に点在する豪族の連合体によって成り立っていた。豪族との信頼関係もそれなりで一致団結すれば侮れない州である。

曹操は本腰いれて戦に臨まなければならなかった。激戦になる事間違いなしである。

そこで曹操は父・曹嵩を迎える事にした。曹嵩は黄巾の乱の際、身の危険を感じて官を辞し徐州の瑯琊郡に隠居していた。父に被害が及ぶのを恐れた曹操は地盤も固まったエン州で共に暮らそうと誘ったのである。

曹嵩は息子の孝行を喜んだ。何せ曹操の青年期は遊んでばかりの放蕩者で曹嵩も将来を心配していたからだ。すぐにでも息子と再会したかった曹嵩は早速、引越しの準備に取り掛かった。しかし、この時既に文優の策が曹嵩に忍び寄っていた。

「本当に約束の物はあるんだろうな？」

「勿論です」

文優は男に宝物の一部を見せた。途端に男の目が卑しく輝く。

「絶対に超越せよ、いいな」

男は陶謙の部将、しかし山賊上がりで欲深かった。そういった類の者はすぐ分かる。貧相な身なりだろうと、甲冑を身に着けようと常に目は獣の様に怪しく光り、光り物を見せると決まって顔を輝かせた。

曹嵩の護衛の中からそういった者を選別する事など容易かった。どうして陶謙の部将が曹嵩の護衛をしているかというと、陶謙は袁術を裏切ろうとしていた。天下が袁紹に傾いた事もあり、密かに曹操との親好の証として護衛をつけたのだ。しかし、それはとんでも無い誤算だった。

——これで天下は大きく動く、私の手に拠ってだ……！

若干己に心酔したように文優はこれから起きるであろう事を思い浮かべた。

「では、そろそろお願いします」

男が兵を引き連れて、夜宮の中でも一段豪華な曹嵩の元へ音もなく殺到する。男達が幕内に消えてからすぐに曹嵩と思われる男の悲鳴が聞こえた。

従者も寝静まった頃、奇襲には最適……というより一方的な殺戮が始まった。

曹嵩の死を見届けると文優はすぐ様エン州に帰った。

エン州はいつもとは異なり、人民もそわそわと落ち着きがなかった。曹操が怒りに委せて徐州平定の軍を起こしたのだ。

総数十万、先年包括した青州黄巾賊より精鋭を選定した『青州兵』も導入された。その異様とも言える軍勢は怒濤の如く徐州に向かった様だ。

今の曹操は正に『盲目の曹操』である。怒りに委せて諸将の反感を買う様な事を何でもするだろう。

そしてエン州は空同然。舞台が整おうとしていた。

文優は最後の仕上げ、陳宮の説得の為に陳留へと足を運んだ。

「はあ……」

「どしたの廉々？」

白鈴が小さく首を傾げた。思わず漏れた溜め息を感じかれた様だ。

「これからどうなるのかな、僕達」

「奉先様だったらどこでも行けるんじゃないの？」

「それが出来たらどんなにいい事か……」

「？」

呂布軍は冀州を訪れて半年経たない内に放り出されてしまった。

白鈴の言う通り呂布は天下に誇れる武があるのだから、それを売りに渡り歩けそうである。が、そうもいかない。あの呂布なのである。

主殺しを二回犯し、今また袁紹から離れた。いや、全てが真実では無い。偶然が重なった事で偽りが広まった不本意な悪名がほとんどだ。時には呂布自ら偽りを広める事もあったとは言え、天下に於いて呂布は『最強且つ不義』の者として見られていた。

天下は、人というものは理不尽な程、風評に左右されやすい。己の目で耳で肌で、あらゆる感覚を駆使せずとも一度耳にした噂一つで知った気になってしまう。それは成廉一人が否、と叫んだところで聞き入られる事の無い、天下に於いて普遍の理なのである。

そんな天下に幾ら最強の武を備えていようとそんな男を側に置きたいと思える者がいようか。

成廉は腕を組んだまま赤兎を進める呂布に雷音を寄せた。

「これからどこ行くんですか？」

「もう考えてある」

お馴染みの即答に不安を覚えながら成廉はその先を尋ねた。

「張揚の元だ」

「張揚……？」

一拍置いてから成廉は思い出した。

呂布が丁原の元にいた頃の同僚だ。丁原を思わず斬り殺した男である。呂布がその汚名を被った後、故郷の并州に帰り、白波賊と協力して勢力を盛り返した。

今は河内太守の官に就いているらしい。河内といえば冀州に隣接している。行こうと思えばすぐだった。

「奉先！」

河内の城門をくぐるとすぐに張揚は駆け付けて歓迎してくれた。

「しばらく世話になるぞ」

「しばらくなんて言わんでもずっとここにいるのも良いのだぞ」

屈託無く笑う張揚を見て成廉はホッとした。張揚は呂布に借りがあるとは言え、今は状況が違う。

張揚は袁紹に敵対視されているのだ。それは冀州を荒らす白波賊を匿っているからである。賊を擁する者を放っておくはずが無かった。

状況を考えれば張揚が呂布を刺客と疑っても不思議では無い。正直受け入れて貰えるか心配だったのだ。見た限り『招かれざる客』というわけでも無い様だ。

張揚は早速酒宴を催してくれた。

「奉先に紹介したい者がおる」

そう言って張揚は一人の男を連れてきた。

「私の盟友の様なものだ」

男は堂々とした体格でなかなかの偉丈夫だ。ただ、見慣れない髪のかき上げ、服装をしていた。どこかで見た事があると思えば、匈奴の正装である。

成廉が男に匈奴出身か尋ねようと口を開きかけた時、呂布が声を上げた。

「於夫羅ではないか」

「久しぶりだな飛將軍」

その様子を見て張揚は目を丸くする。

「知り合いだったのか？」

「ああ、九原にいた頃の友人だ。それ以来全くだったが……。

最後にお前の噂を聞いたのは七年も前だ。於夫羅。確か白波賊を率いていると聞いたが、まだ率いているとは考えもしなかったぞ」

「賊と言うな賊と。これでもれっきとした傭兵だぞ」

「だが賊と言われようとも俺の悪名には勝てまい」

「ガッハッハ、お見それ致した。流石、飛將軍の仇名されるだけある」

酒が入ると三人の会話も更に弾む。愉しそうな様子を成廉はそつと横から眺めていた。魏越は白波賊の連中と意気投合したらしい。そちらはそちらで盛り上がっていた。

「それはそうと奉先、先の私達の約束を覚えているか」

「二人で天下を掴む事か？」

少し眉を上げて呂布が答えた。

「そうだ。見たところ奉先は行く宛ても無さそうだし、共通の盟友が三人揃った。ここ河内で旗揚げでもしないか？」

成廉は呂布が何と答えるのか、その返答を静かに待って耳をそばだてた。本拠地となりそうな土地を捜している張遼からは全く連絡が無い。答え様によってはここで旗揚げするに至るかもしれない。成廉は固唾を吞んで見守った。

「……ここで旗揚げは出来ん」

「そうか……」

残念な気持ちを紛らわすかの様に張揚は杯を煽った。

「お前との約束は忘れはしない。だが、俺は今旗揚げの地を腹心の一人に選定させているのだ。俺はそいつの努力に報いらなきゃならん」

感心した様に張揚、於夫羅は呂布の言葉に聞き入る。

「俺が旗揚げしてから、同盟して天下を掴むのも悪くはないだろう？」

勝手ばかりで悪いとは思うが腹心が本拠地を定めるまでの間だけここに置いてくれ」

張揚、於夫羅は互いに顔を見合わせると愉快そうに笑い出した。

「奉先！部下に報いてやるだなんて、まるで名君にでもなったかの様じゃあないか」

「昔のお前は兵の事など微塵も考えて無かったのに、人とは変わるものだな」

愉しそうな雰囲気已成廉も頬が緩んだ。

これでしばらくは河内に滞在することになるだろう。安心した成廉は隣りで大人しく食事する白鈴に手を回した。

しかし、天下は急速に流れる。

河内滞在がたった一週間で終わってしまうと誰しも予想だになかった。

陳留のとある室に四人の人影があった。

三人の意見が一つに纏まっているに対し、窮地の一人は未だその決定に反対していた。

「駄目だ、やはり孟徳を裏切る事は出来ない」

そう答えた窮地の男、もとい陳留太守の張藐は座した体を沈ませた。

それを見た陳宮がすかさず痛い所を衝く。

「曹エン州は張太守よりも袁冀州の方に肩を持つに違いありません」
張藐は一瞬言葉に詰まる。

「兄上、それだけではござらん。曹操殿のあの蛮行を赦しておけるとお考えなのか」

張藐の弟である張超も諭す。

そんな三人を文優は静かに見ていた。計画は全て文優の思い描いた通りに進んでいる。

全てに於いての決め手は曹操の徐州侵攻とそのやり方だった。曹操は怒りに任せたのか、それとも自軍の強さを誇示する為か、虐殺を行ったのだ。

当時、侵攻先で物資を略奪する事はよく行われていた。しかし、普通は住民までも虐殺したりはしない。民力の低下を招くからだ。それに人道的にもそんな事するのは非難の対象だ。

曹操の陣営からも主の蛮行に異を唱える者が続出した。それには陳宮も含まれていた。

『ただちに軍を退かletsし』

しかし、曹操は全てを却下した。そうしてようやく陳宮は曹操に絶望したのである。文優が改めて陳宮を訪ねた時には既に張超が同志に加わっていた。陳宮は素晴らしい敏腕の持ち主である。

文優は陳宮に目を付けて正解だったと再確信した。

後は陳留太守、張藐だけだった。

曹操の友人であるこの男は今まさに窮地に立たされていた。徐州での虐殺で曹操への信頼は半信半疑。それでも今までの交友を加味すれば裏切るなんて出来なかった。

しかし、実質的な軍権は既に陳宮に握られている。つまり、反対したところで実際は陳宮らに生死を握られているのである。それでも張藐は良しと言わない。

埒が飽かないと感じた文優は静かに退出した。そもそも張藐はエン州各地の諸将を信頼納得させるだけの役割しかない。

呂布の名が広まったエン州各地には陳宮が赴いて、呂布の挙兵を合図に叛旗を上げるように説得してある。

曹操は徐州でエン州は空同然だ。呂布を連れて来れば張藐も否応無しに従うしかない。

舞台は整った。

文優は最近河内入りしたという主に宛てて、一枚の書状を書き出

した。

極秘で使者が呂布の元を訪れたのは、何の前触れも無くいきなりだった。

丁度、呂布、成廉、魏越で曹操が徐州に侵攻した報せについて雑談していた時だった。夜も更け、そろそろ寝ようか、という時に従者がやって来た。

「成廉様、文優様から呂布様に書状が届いています」

「え？」

その事実は従者の長も務める成廉へと最初に伝えられた。

「どうした？」

驚きが伝わったのか呂布が尋ねる。

「文優殿からの書状が来たそうです」

成廉は紙の書状を渡した。直後、廊下から何か重たい砂袋でも倒れた様な音がした。

「??」

従者が滑り転けたのだろうか。成廉は立ち上がった。

「もしかしたら旗揚げ出来そうな土地が見つかったんでしょうか」

「だいいいな。さてはて、あいつらはどんな所を献上してくれるのかな」

魏越の問い掛けに呂布は封を開けながら少し愉快そうに答えた。

成廉はそつと戸を開けた。

突然、目の前を何かが掠める。矢が戸に突き立っていた。

次々と目に入る物が最悪の状況を成廉に告げる。廊下に横たわる従者。額に矢が生えていた。既にその眼に光は無かった。

官舎の周壁の上には月光に照らされた一個小隊分の弩が呂布の室

に向いている。

——まずい……！！

「二人とも伏せろ！！」

「は？」

成廉が飛び込んで床に伏せた途端に戸や衝立を突き破って無数の矢が飛んできた。音を発てて床や卓に突き刺さる。

一旦矢の雨が止むと室内は酷い有り様だ。弩は弓と異なり連射出来無い代わりに強さが半端では無い。胡床が粉碎されていた。

「何事だ！？」

呂布も魏越も無事だ。と、なると敵の狙いは矢の雨で障害物を除く事。周壁から続々と敵兵が降りてきた。此方は丸見えだ。

「敵襲です。数は三十余り、来ます！」

拔刀しながら成廉が睨む外を見て、呂布、魏越も剣を手にした。

敵兵は暗闇の中、音も無く此方に殺到する。刺客の類だ。かなりの手練れと見た成廉は狭い室内に入ったところを待ち伏せしようと考えた。

しかし、障害物が皆無だ。あれこれ考える内に敵兵が一人二人と侵入してきた。室内で剣を振り回すのは得策では無い。突きを繰り出した成廉だったが簡単にいなされる。こんな兵が一個小隊もいるのだ。

呂布は確実に二人程斬っていた。しかし、突然の急襲で三人は平服だ。対して、敵兵は完全に武装している。成廉の斬撃を受けた敵兵は一撃で仕留められない。

騒ぎを聞きつけた従者達を剣を手に加勢してから敵の攻勢に緩みが生じた。すかさず三人は反撃に転じた。成廉が敵兵の鼻に刃を突き立てた。そこしか急所が見当たらないのだ。

一方、呂布と魏越は首を飛ばしていた。

そうした方がいいか、と成廉は考えながら次の敵兵に向かうと突

然足を取られた。敵前にして成廉は豪快に倒れ込んだ。脳天まで貫いたはずの敵兵が足を掴んでいた。絶命しているはずなのにその手は離さない。

隙有りと敵兵が襲い掛かる。一人目の足を薙いだが次が届かない。立ち上がる前に敵兵の剣が成廉を捉えんと迫る。

成廉は思わず目を閉じた。

「うぐっ」

刃が下ろされる前に敵兵が声を上げた。恐る恐る目を開くとその首には剣が突き立っていた。

魏越の剣だ。

「ごめん、ありがとう」

魏越を見上げると恥ずかしそうに言った。

「いいって事よ」

魏越が剣を引き抜く鮮血が迸った。固く握られた手を切り落として立ち上がると室内には静寂が戻っていた。どうやら残りは呂布が刈り尽くした様だ。

三人とも返り血で赤く染まっていたが、目立った外傷は無かった。ただ、従者の被害が酷かった。五人も死んでしまった。手負いの者も十人を超える。敵兵はどうやら相当な武術の体得者だったようだ。

こんな兵を刺客に出せる余裕が有って、呂布と関わりのある者、恐らく袁紹の仕業だろう。

しかし、特に三人ともそれについて口にしなかった。口に出さなくても分かり切った事であるし、成廉はそれよりも聞きたい事がある。

「これから……どうするのですか」

袁紹に狙われるという事は自分達だけの問題では無い。張揚、於夫羅にもその被害が及びかねない。

「張遼達の元へ行くぞ」

そう言つて呂布は血に塗れた手で開いた書状を見せた。

そこには大きく二文字、『陳留』と記されていた。

螻蛄咆哮

冀州、平原――。黄河流域にあって肥沃ながらも、黄巾の乱以来、重税で生きる事に絶望した民衆が耕作を放棄して焦土と化していた。賊に身を落とす者や流民化で人口は激変した。

しかし、ある男が為政者となってからまるで恵みの雨でも降ったかの様に土地は潤った。人々が少しずつ帰ってきた。民衆に笑顔が戻り、田畑の耕作が再開され、半分以下に下げられた賦粟はしっかりと蔵に納められた。

民衆は男を慕い、巡察すれば子供達が集まり、邑の祭りには引っぱりだこだった。

この仁政の男、宗主を公孫瓚とする劉備玄德その人である。

「退屈だ」

劉備はブツブツ文句を言いながら竹簡を眺めていた。が、おもむろに竹簡の束を抱え上げると全て張飛の卓上に積んでしまった。

「後は宜しく」

鼻歌しながら劉備が室から出ようとした。

「オイ！」

「ん」

「どこ行くつもりだ」

張飛が低い声で問い詰める。

「ちよつと巡視に……」

「兄者の巡視は酒屋しか行かんのか」
関羽の突っ込みに劉備の目が泳ぐ。

「げ……知ってたのかよ」

「関兄の地獄耳を舐めんなよ。大兄のお気に入りのおなごだって知ってんだぞ」

張飛が恨めしそうに睨み付ける。

「大体、自分の仕事は自分でする決まりだっただろ」

「それはな、政が苦手な益徳君の為に沢山経験をさせようと思ったんだよ」

そう言いながら劉備はジリジリと出口にうごく。

「不謹慎な事を口にしない方がいいぞ」

「いいんだよ、なんか民草も勝手に懐いちゃうし。一旦豊かになると暇になるんだよなあ。」

戦でもないかな、戦」

「その手腕を生かして漢帝国を巡って天下に太平をもたらしてみたらどうだ」

「そうだな、そうするよ。そしたらまずは民心を掴まなきゃあな！

じゃ！」

「あ」

仕事の進まない関羽が少し目を離れた隙に劉備はあっという間に消えてしまった。

こうなつては翌朝まで帰ってこない。

「関兄、どうしようこれ」

張飛が卓上の山を示した。関羽は特大の溜め息を吐いた。

「半分よこせ」

劉備玄德——という男は実に面白い、と関羽は思った。初めての対面は今でも印象的だ。

あの時は黄巾の徒が乱を起こす直前だった。

関羽も張飛も別の手下を引き連れ、偶然、安冀県の酒屋で鉢合わせとなった時、部下が酔ってくだらない諍いになった。

険悪な雰囲気が出、三日続く中、関羽と張飛は話し合いで決着をつけようと会合を設けた。

そんな所にいきなり割り込んで来たのが劉備だった。

酒屋の一室に入って来た劉備は今の劉備と変わらず、煌びやかで飾りのついた簪に腰回りに璧をぶら下げ、二振りの剣を佩いていた。耳は大きく、腕は長い。異形と言えば異形だが不思議とそう感じさせない。悪戯を好みそうな童顔でありながら自信と正義感溢れる顔を垣間見せた。

——ただ者じゃない。

関羽を始め同席した者全てがそう感じた。皆知らず知らず背筋を正していた。初めは大分派手だが、郡の官吏と思った。今までこういった騒ぎを聞きつけた物好きな官吏が冷やかしに来ることが度々あった。

しかし、官兵は連れておらず、連れは女が一人。女は娼か遊女といった類だ。そして劉備は関羽と張飛の間に胡座で座り込むと膝に女を座らせて堂々と乳房を愛撫し始めたのだ。か細い声が女から漏れ出す。

異様な状況に誰もが口を開けない。劉備はその状況を楽しんでいる様だった。

関羽は先に口を開いた。

「貴公は何者だ、名を名乗れ」

「玄德」

劉備はそう短く答えた。そしてこう問いた。

「お前ら、帝に会いたくないか？」

皆、『帝』という言葉に反応したのか耳を傾ける。帝に謁見するという事はそれだけで名誉あるものである。

しかし、その後に続いた言葉に呆けてしまった。

「会いたければ俺様の下に来い」

嘲笑が広がる。むしろその僭越な言葉に怒りを露わにする者もいた。

「貴公は俺達に部下になれ、と申すか」

「そうだ」

劉備は対立する関羽と張飛の双方を丸め込もうと言い出したのだ。

「何を根拠にそう申す」

今度は張飛が口を開いた。この時の張飛はまだ二十を数えもしないのにも関わらず、侠として完成された青年だった。

「俺様の姓は劉で中山靖王の系譜、つまりは皇族だ。俺様の下にいるだけで名誉を手に入れられるのだ、悪い話じゃあ無いだろう」

これが本当ならば確かに魅力的な話である。侠とは己の信念に従い生きる者。

関羽は漢帝国に忠誠心があると言えばあった。だが、劉備の言葉に確証は無い。

しかし、徐々に劉備に惹かれていく己がいたのも事実だった。

関羽と張飛はその余りにも自信満ちた言い様に感化されていた。偽称とも判らないのである。

しかし、鈍感な者もいる。いや、劉備の漂わせる雰囲気が高過ぎると言うべきか。部下の一部、特に気の逸る者達が反発した。そもそも話し合いに納得いかず鬱憤も溜まっていたのだろう。

剣を抜いたのを見て酒屋の者がやはり一騒動起こすのか、と逃げ出す。関羽と張飛はお手並み拝見と決め込んだ。

主になりたいと言うならばそれなりの腕を見て貰いたい所だ。

此処で死ぬ様な者だったら、劉備にただならぬものを感じた関羽と張飛が間違いとなる。

しかし、劉備は動じた様子も無く、女を関羽に押し付けると立ち上がった。そして男七人を抜刀する事無く鞘で打ちのめしたのだ。早かった。力任せの攻撃を無理に受ける事無く流して、急所を一撃しただけで終わらせた。

さすがに関羽は唸った。雰囲気に負ける事の無い、武勇もかなりの男だ。

再び劉備は関羽、張飛、その部下達を前に演説した。

「こいつらは剣を向けたから仕方無く倒した。見たところお前らは皆腕っ節の強そうな男ばかりだ」

そう言って劉備は関羽、張飛を交互に見下ろした。

「だが、腕っ節だけじゃあ天下は渡り歩けん。

では知識か？ それもそれ一つでは有って無きに等しい。

英雄ならこの知勇を兼ね備え、更に加えなければならねえものがある。それは狡猾さ、だ」

皆息を呑む。

侠たる者は己の法、価値観で行動する。一般的に卑怯卑劣な事は赦されない諸悪の一つだ。

「お前らの持った原石一つ一つ、武勇、叡智、政才、仁徳、統帥。

全て俺様がどう天下に活用すべきか導いて満溢の光に変えて見せる。

どうだ、幾ら優秀な才を持とうと使いこなせなきゃあ空振りだ。俺様に全てを委ねようじゃないか」

しばらく誰も口を開かない。関羽は部下達を振り返り見て驚いた。一人二人と静かに深々と頭を下げ始めたのだ。

思わず向かい合っていた張飛と目が合う。驚きと確信の混ざり合った複雑な表情だ。恐らく自分も同じだろう、と関羽は思いながら劉備を見た。

もう一度張飛を見た。張飛はただ瞼を閉じて関羽に同意する考えを明らかにした。

そして関羽は両手について深々と頭を下げたのである。人に対してこんな事するのは初めてだった。しかし、不思議と違和感はない。劉備の命令だったら何でも実行出来る、そう感じた。

「我々、流浪の身ながら玄德殿の為なら手足となって働き、喜んでこの身を捧げよう」

それから関羽と張飛は劉備を主として定め、後の黄巾の乱より天下へと飛び出し今に至るのである。

酒屋の件の後日。一度だけ劉備が屋敷に招待したのは挙兵する前夜だった。そこで漸く明かされた事は関羽と張飛を大いに驚かせた。劉備は劉姓ではあるが中山靖王の子孫といえる確たる証拠は無かったのだ。

先祖代々土豪として支配していたが早くに父を失った事で家は没落し、劉備はたった一人で母を養わなければならない程だった。

屋敷は辛うじて手放さずに済んだが土地のほとんどを失ってしまった。お陰で一度は支配者の嫡子という立場にありながら、一人生計を立てる為、草鞋や筵を売り歩く羽目になってしまったのだ。

そんな辛酸を舐めた過去と生来の気質の為か表向き民衆には好感を持たれる方法を無意識に手に入れたのかも知れない。挙兵の際、劉備を見込んで大金を融資する商人が現れる程だった。それでいて遊興に目が無い点はある意味劉備の影の魅力とも言えた。

普段の劉備はごく普通の好青年だ。それでいて口から出るのは利己的だったり卑劣だったり、時に冷徹な言葉に関羽は薄ら寒いものを感じた事も良くあった。目の前の劉備が何か得体の知れない、油断なら無い化け物に感じられるのだ。

しかし、遊興にふける劉備はのびのびとして自然体だ。関羽はそれを見て初めて安堵するのである。

屋敷に訪れた時、関羽はどうして真実を打ち明けたのか劉備に尋ねた。

すると劉備は何時に無く寂しそうに『お前ら二人を信頼してるからだ』と答えた。

その時関羽は直感的に劉備は『人』に飢えている、と感じ取った。劉備は父がいない幼少時代を過ごし、本当に心細かったのだ。

もしかしたら普段の自信満々な態度は自信の無さの表れなのかも知れない。途端に劉備が頼れる主に見え無くなった。

関羽が兄弟として劉備を支えていこうと心に決めたのはそれからの事であった。

ふと気がつくとも全く仕事が進んでいない事に関羽は気付いた。

また、劉備の事ばかり考えてしまった。劉備が本当は頼り無いと
考えてから頭にあるのは何時も劉備の事ばかりだ。恋をしている訳
でもあるまいし、と苦笑した。

伝令が駆け込んで来たのはそんな時だった。

「報告！ 曹操が徐州侵攻の軍を挙げました」

「なにい？」

張飛が顔をしかめる。別に曹操を非難してでは無い。公孫瓚を通
してその報せが来るという事は出撃命令だという事は容易に想像出
来る。

戦があるという事は無茶をする劉備の尻拭いをしなければならな
い。張飛は劉備に振り回されるのにうんざりしていた。

「劉太守はすぐさま青州刺史田楷殿と徐州に応援されたし、との事
です」

そうなればすぐにでも劉備を呼び戻さなくてはならない。

「田豫」

「はい！」

関羽が声を上げるとひょっこりと別室から青年が顔を出した。

「兄者と呼んでこい」

「はい！……今日は何処の店ですか？」

終始劉備の事を考えている関羽には容易い質問だった。

「今日は気分的に北門近くの酒屋だ。子供が群がっているからすぐ
判る」

青年は元気良く飛び出していった。

「さて――、」

関羽は張飛を見た。無言で頷き合う。

すぐに二人は軍の召集に取り掛かった。

鈍色の甲冑で大地が埋め尽くされる。

半数近くの兵は他の兵と異なり、小柄で少々栄養不足に見える。

しかし、その眼光は爛々と輝き、飢えた猛獣を連想させる。

数多にはためく旗印は『曹』。済南より猛進した曹操率いる十万の軍勢である。既に侵攻された徐州の大部分は曹軍に蹂躪され、特に軍編成の半数を占める『青州兵』がもたらす戦果は曹操の予想を遥かに超えた。

元々、太平道を篤信する黄巾賊から選抜された青州兵は一端降ると、曹操に忠実且つ獰猛だった。そこに曹操の父を討たれた、という陶謙への怒りの感情が乗ったのである。

州城を包囲して漸く曹操が我に返った時には徐州は甚大な被害を露呈していた。彼らの進軍した後は命一つとして残らない。河川が進軍の妨げとなれば、虐殺した住民で流れを堰止めた。数万という命が此処に至るまで犠牲となったのである。

この傷痕は今後百年は響くだろう。

——やりすぎたか……。

そんな後悔が曹操の胸の隅に腫瘍の様に居座る。だが、本来の目標は目の前。己の犯した重罪を加味しても、ここで引き返す訳には行かない。

陶謙は州城に籠もり、援軍の到着を待つと決め込んだらしい。約三万の徐州軍はなかなか動きが無かった。強いて言えば曹豹という部将が細々と城壁に近づく兵に抵抗している位だ。曹操は動きがあるまで包囲を徐々に絞めることにした。

周辺の豪族達は脅えるように成り行きを見守っている。これは好都合でもあり、今の均衡が破られれば何時こちらに刃向かうか、と

いう危うい状況でもある。

しかし、豪族達が陶謙に協力したとしても、それでも彼我戦力はこちらが圧倒的に有利だ。

寧ろ、何か動きがあつてほしい、そう願った時現れたのは劉備の援軍だ。

報告に因れば後続で更に田楷がいるらしい。

こんな日が来るとは、と曹操は思った。劉備と敵対する日が来るとは。

劉備は賢い男だ。いや、知識という点では勿論曹操が優る。劉備は兵書も史書も学問という物に精通していると言ひ難い。しかし、世渡りという点で曹操よりも優っているのではないか。

先年、話をする機会があつた。

最初は凡庸な男と思つた。興味の対象は寧ろ付き従っていた関羽、張飛の二人だった。

しかし、互いに杯を傾け合う内に劉備は『凡庸』を演じている、曹操にはそう感じられたのだ。

尤も未だそれが意図的に発揮されたようには見え無いが。恐らく周囲に雰囲気や時勢を察知して、無意識にそうなるのだろう。

とにかく、劉備の印象は曹操と対等に話す時点で侮れず、認めざる負えないといったものだ。ただ、知ってか知らずしてか『天下』というものの己の存在意義を悟っていない。

劉備の能力は野放しにしておくには危険でいて、それでいて手元に置きたい魅力溢れるものだ。劉備は曹操の陣営にいて然るべきなのだ。そんな時、伝令が血相変えて帷幕内に駆け込んで来た。

「劉備率いる三千の軍が包围網をすり抜けて入城しました」

劉備の手腕が露わになる。大器の威は例え隠そうとしても滲み出る。ましてや己の能力に気付いていない劉備では尚更だ。

報告から前衛の異様さが容易く想像出来た。

劉備が入城したのは北門。周囲は夏侯淵率いる二万が固めていた。

それを『すり抜け』で進軍したのだ。

兵数三千。いかにも動き易そうな数ではある。しかし、夏侯淵もただ見ていただけではあるまい。夏侯淵は曹軍屈指の猛将である。勿論、通しまいと迎撃したはずだ。しかし、劉備は入城した。

「私には到底出来ん行軍だ」

「は？」

口から漏れた感嘆に隣りの夏侯惇が眉をひそめる。

「いや……。明日には敵軍は出撃するだろう。準備を怠るな、惇」

翌日、予想通り州城の門が放たれた。

しかし、駒を進めるのは『劉』の旗印の三千だけである。

「潰せ、劉備を捕らえて此処に連れてこい」

曹操の命令が行き届くと前衛が動いた。劉備の軍も進軍を始める。その小勢に向けて前衛は突撃をかける。襲い掛かる青州兵と小勢がぶつかるか、というその刹那、小勢が先頭の三騎を中心に小さく纏まった。すぐに前衛に覆われ見えなくなる。しかし、兵の層の薄い点から湧き出る様に小勢は突破していた。

無傷である。血飛沫すら付いてない。前衛の兵は何が起きたのか解らなかった。更に迫る軍勢に先頭の三騎は刃を向ける。手捌きは見事としか言い様が無い。返り血を浴びないように器用に首を刈っていく。

その光景は本陣の曹操にもよく見えた。恐怖よりも驚嘆が、そして印象は荒々しさよりも優美さが先行する。曹操は多勢の自軍を正に『すり抜け』る劉軍にただただ見とれていた。とは言うものの、次第に接近する劉軍に相乗するように危機感が湧き上がる。

——十万の軍勢をもってして留む事が出来無いのなら、如何にして対処すればいいのか！？

数を物ともしない進軍。それは大将の首を直接獲る事だって可能

だ。せめてもの救いは劉軍はこちらの軍勢を傷付けるつもりでは無いらしい。こちらが危害を加えない限り反撃は無い。余りに攻撃を掛け無さ過ぎだ。

思い切って曹操は道を空ける事にした。彼らが目指すのは曹操の所以外何物でも無い。

曹操は劉備の真意が知りたかった。降伏か、和睦か、はたまた予想を裏切る何かか、そして襲撃か。とにかく劉備と相対しなくてはならない。

劉備とその軍が本陣前で止まった。

幕を上げて曹操が帷幕から出ると劉備は剣の血糊を拭うと鞘に収めた。

「よお、曹操殿」

「久しいな劉備殿」

劉備は以前会った時と全く変わらず派手な格好をし、左右に関羽と張飛を控えさせていた。少し気になったのは劉備が下馬して待っていた事だ。こんな事するのは劉備の人物像に当てはまらない。

日頃己の身長を気にしていた曹操は悪い気がしなかった。

しかし、劉備の口から告げられる言葉で曹操の機嫌は最悪になった。

「曹操殿、エン州へ帰りな」

急に何を言い出すかと思えば、帰れと言う。曹操は鼻で笑った。

「孝行の志を留めんとするか」

此度の出兵は一応、父の敵討ちとなる。本心は徐州を望んでいるが、そうなっている。

「貴殿は己の立場を理解しているのかな」

「それはこっちの台詞だ」

ニヤリと劉備が白い歯を見せる。左右の関羽と張飛が得物を構える。その様子を見てすぐさま曹操の前に親衛隊による人の壁が作られた。

「貴殿の用兵は褒めてやろう。だが、一度止まり、包囲された時点

で此方が優位だ」

嘘だ。曹操は悟っていた。劉備は強い。関羽と張飛はもっと強い。呂布に函谷関で追撃された際、圧倒的な武威を前に人の壁など無意味だと気付いた。恐らくこの三人を一度に相手に親衛隊は容易く破られる。

しかし、そんな事実を表に出す訳にはいかない。態度まで弱気になればそれこそ敗北の一步だ。

劉備は周囲を包囲されても余裕の笑みを浮かべた。

「よく言うな。俺様の強さを直に見なきゃあ気付けない程曇った眼を持っている訳じゃあ無いだろう？」

「……」

言い返せなかった。だが、もう退くには遅過ぎる。余りに犠牲を出し過ぎた。曹軍の進軍した後を見ればそれは明らかだった。だから此処で退く訳にはいかない。

例え相手が劉備であっても。非道と言われようが、命が危険に晒されようとも退けないのである。

曹操が腹をくくって殺すように合図しようと手を挙げた時、背後が騒がしい。何事だ、と言う前に伝令がやって来た。

エン州からの急使だった。何だと想像がつかなかった。留守を守る荀或と程立は信頼出来て、命じなくても考察して最善を尽くす部下だ。よっぽどの事が無い限り、この様にいちいち使者を発した者達ではない。

曹操は劉備を含め全ての兵に待機するよう伝えて本陣の帷幕に戻った。

使者は顔色が悪い。

「一体何事だ？」

「陳留にて呂布が叛旗を挙げました」

「何い！！？」

夏侯惇が声を荒げる。

「張藐と張超はどうした？」

曹操はまだ冷静だった。だが、使者が続けた言葉に曹操は目眩がした。

「手引きしたのは張超です。更に前もって話が付けられていたのか呂布が兵を挙げると同時に各郡、県が蜂起しました。

現在、北部を除いてエン州の大半が呂布に付き従っていたおります。我が軍が押さえているのはケン城、東阿、范の三城のみです。

主、荀或様は速やかな援軍をお待ちしております」

たった三城。それ以外は皆、曹操に背いたと言う。曹操は絶望を感じていた。

しかし、頭だけは正確に働く。いや、働かさなければならなかった。同じく絶望に蒼く染まる幕内に次々と指示を始めた。

「惇、輕騎三千を率いてすぐに発て。手薄な城を死守せよ、私もすぐに参る」

「承知」

夏侯惇は勇んで幕内から消えた。

「劉備には和睦を受けるよう伝えろ。全軍に通達！エン州へ退却だ」
そう言って曹操も幕内から消えた途端、弾かれた様に諸将は慌ただしくなる。

曹操は漸く全軍が動き始めた頃には既に馬に跨り鞭打っていた。

并州晋陽のとある酒屋――。男二人が酒を飲みあっていた。

「大将！ 次持って来い！」

卓上には既に四つの酒瓶が空かされている。

「お客さん方、飲み過ぎは駄に悪いよ。だいたい勘定出来んのかい？」

酔った目で二人のうち下品な笑みを浮かべた方が懐から銭の束を見せた。身なりに不相応なこの大金は元々彼らが働き、手に入れた

物では無い。これらは金造りの簪と璧を換金したものなのだ。

ならば、なぜ彼らの様なごろつき同然の輩がそんな宝物を持っていたのか。

彼らはある男の下で戦士として生きていた。しかし、ある事情によりその軍は解散してしまった。宝物はその時の退役土産だ。二年程前の事である。

以来、郷里に帰ってから、今更耕す土地も無く、退屈な日々が待っていた。腕が鈍らないように狩りに向かうか酒屋で酒浸りになるしかする事が無かった。こうもなってしまうと辛かった日々の調練が無い事が物足りなさを痛感させる。

今彼らに残っているのは『最強』の名を冠した男と共に闘った、という誇りだけだった。後は何も無い。今の彼らは生きていても死んでいた。

男は必ずまた旗揚げすると言い残して行つた。必ず――。その日をどれだけ思い描いただろう。しかし、街中で流れる男の噂は輝かしいものばかりで、以前の身分を伏せて生活する彼らを惨めにさせる。

――あの方はやはり我々が邪魔だっただけなのか……？

そんな考えが頭を過ぎる。少ない兵で十分だというのは確かに納得だ。男は強い。まさに最強だ。匈奴の民からは古の李広になぞらえて『飛将』と仇名される程だ。

それでも、今まで、正確に言えば『魔王』より男の下への配属を通達されて以来、苦楽を共にしてきた。それなのにこの扱いは不当ではないか。彼らは更に杯を重ねる。惨めになっていく。いや、貧民にでもなっていく気がした。心が貧しいのだ。

男の下にいた頃と較べると潤いが無かった。

――このまま平民として埋もれていくのか。

そんな考えが頭を掠めた時、慌ただしく酒屋に男が一人駆け込んできた。挨拶する店主には目もくれない。

「魏統！ 宋憲！ 此処にいたか」

彼らの友人の侯成だ。同じく男に仕えていた。

「なんだ、騒がしい」

非難がましい視線が侯成に集中する。

「最高の報せが入った」

「最高を軽々しく使うな」

「俺が最高と言う事はお主らにとっても最高のはずだが」

「……」

酔った頭はなかなか冴えない。しかし、一拍置いて瞬時に思考が元に戻る。

「ま……まさか」

「そうだ！ 遂に奉先様が陳留で旗揚げだ！」

大人気も無く三人が飛び上がる。

「こうしちゃいらねえ！ すぐに行くぞ！」

「大将！ 釣りはいらねえ」

バンツと錢束を置くと三人は嬉々と酒屋を飛び出す。

店主はそれを唾然と見送った。

甲冑に身を固めた呂布の騎馬軍一万余が陳留を出立した。

騎兵と歩兵が混成するのが常識な当時、それは異様な進軍として人民の目に映った。ささやかな抵抗を示していた些少な県城もその姿を最後に旗を変える。

エン州で曹操の力が及ぶのは東北部の僅か三城のみ。しかも腹心が固める本拠地である。残り、つまり曹軍部将は尽く呂軍に与した

のだ。さぞかし曹操も無念に違いない。

「報告、援軍先発の夏侯惇が騎兵三千で濮陽に入城」

濮陽近隣からの伝令だ。しかし誰もその報告に慌てない。

成廉は笑みを浮かべて呂布を振り返った。

「文優殿の言った通りですね」

呂布は赤兎に揺られながら無言で頷いた。

「言った通りって？」

雷音に同乗する白鈴が聞いた。甲冑に身を包む少女は男だらけの軍中で浮いて見えるが蝗紅隊の者は皆慣れた。

「とにかく、僕達は戦をしないで濮陽に入城出来るってこと」

意味が解らず小さく首を傾げる白鈴を見て呂布と成廉は悪戯っぽく笑った。

濮陽城に入った夏侯惇だったが息吐く暇も無く急報が届いた。

「呂軍が動きました。陳宮率いる五千と呂布の騎馬軍一万余がケン城目指して進軍中」

夏侯惇は顔を歪めた。予想以上に速い。そもそも兵がこうも容易く集まるだろうか。

「不味いな……」

荀或は曹操が徐州より引き返すと聞くと各城の結束を固める為に程立を范と東阿に派遣していた。程立はそのまま故郷である東阿に籠城する事になっている。

今のケン城の戦力では危険すぎる。その上ケン城は曹操の居城だった。曹操の妻子はケン城にいた。親族の間柄としても戦略的にもケン城を奪われる訳にはいかなかった。

「すぐ出立するぞ、全軍だ」

副将の韓浩は驚いた。

「濮陽はどうするのです!？」

「棄てる」

「むざむざ敵軍に城をくれてやると申しますか」

「仕方無かろう。あそこは孟徳の妻子がおる。我が軍には荀或とケン城が必要なのだ。行くぞ!」

夏侯惇は濮陽を放棄してケン城へ急行した。

知り尽くしていたはずの東郡。夏侯惇は不意打ちの心配など全くしていなかった。夏侯惇だけでは無い。韓浩以下、配下全軍が奇襲など有り得ないと考えていた。会敵するのはまだまだ先の事で、そんな心配よりも敵軍との戦力差をどう覆すか、そちらに気が向いていた。

平地の中、森の近くを進軍していた。そんな時に伏兵が牙を剥いた。

「ッ! 何だ!？」

最初、夏侯惇は森全体が動き出したのか、と錯覚した。しかし、よく見ると甲冑に枝葉を付けてまで擬態した一軍だと気付いた。

駆けに駆けまくっていた夏侯惇の軍勢は縦に伸びきっていた。その横合いを突かれた事で軍勢は前後に分断されてしまった。伏勢が後方の兵に襲い掛かる。風上にいながら喊声が耳に響く。

「夏侯惇殿! 伏兵ですぞ!」

夏侯惇は一瞬迷った。

——このまま捨て置きケン城に向かうか。それとも一刻を争うケン城を目前に迎撃するか

夏侯惇は義よりも仁を取った。

則ち伏勢の迎撃を選んだのだ。例え、ケン城が落城寸前でも、夏侯惇はすぐ目の前で苦しむ部下を見捨てる事など出来なかった。

「迎撃しろ! 俺に続け!」

しかし、夏侯惇は馬首を巡らせた所で、ある致命的な事実気付かなかった。

夏侯惇の後方から土煙が上がり、『高』の旗がはためいた。

・
・
・

「久方振りでしたかな、夏侯將軍」

「裏切り者が面を見せるな」

「その様子では將軍の部下を説得だなんて無理そうですね」

夏侯惇が陳宮の前に引き立てられた。

不意を突かれた夏侯惇はあっさりと高順に捕縛されてしまった。今は十里程離れた所で副將の韓浩が残軍を纏めているだけだ。

そしてその背後四十里にケン城。遮る者は微々たるものだ。

「こちらの予想通りに動いていたき有り難う御座います」

陳宮の横に立つ文優の言葉に夏侯惇は反応しなかった。

「今頃呂布様の騎馬軍が濮陽に入城している事でしょう」

「ふんっ、敗軍の將に言う事はそれだけか？」

おちよくり詰るつもりだった陳宮は夏侯惇の意外にも淡泊な受け答えに片眉を上げた。

「ええ、本当は何も言う事など有りませんでした……」

「ならば、早々牢に戻してもらおうか。お主らの顔を見ていると虫酸が走る」

陳宮の微笑みが一瞬堅くなった。

呂布率いる軍勢が濮陽に入城した。

迎える目は恐々としている。呂布はとりあえず次の令までは今ま

で通りの生活をしろと城内の人民に通達した。

文優の描いた戦略通りに進めばこの後早々とケン城が陳宮、文優、高順の手で落城する事になっている。その後エン州に入った曹軍本隊と決戦である。

彼我戦力は三万余と八万だ。しかし、これは土豪が供出する兵力を差し引いたものだ。エン州の主な土豪からの協力を得られれば一気に五万まで膨れ上がる。そして、既に発生しているのが曹軍の脱走兵である。徐州侵攻に参加したエン州の土豪が皆帰るべき処へ帰ったのだ。これからも脱走兵は増えるだろう。

そして呂布自身の武。戦況は有利になりつつあるはずだった。

未明、城壁上のざわめきで呂布は目が覚めた。

呂布は何かあった時にすぐ出撃出来るように城門近くに己の館を構えていた。耳を澄ませば楼上の衛兵が城外の何者かと話している様である。暫く間があってから館に伝令が駆けつけた。

「どうやら陳宮殿達がケン城の包围を解いて帰還して来たようです」
床から出た頃には既に従者の長でもある成廉が取り継いでいた。
腹に響く、岩を搔くような音がした。城門が開けられた様だ。

呂布は彼らの急な帰還の真意が読めなかった。これも策だというのだろうか。気になった呂布は袍を着たまま陳宮と文優、高順を館に呼び寄せた。

「一体どうしたというのだ」

入室するなり陳宮と文優は跪いて謝り続ける。高順だけが冷静だった。

「実はケン城の救援軍を撃滅して、夏侯惇を捕縛したのですが……」

「おお、戦場で顔を合わせた事がある。お手柄だったな」

「逃げられました」

「は？」

高順が説明し始めた。捕らえられた夏侯惇は仮設の牢に入れられ、ある将が一人監視役として付けられた。陳宮が曹操に仕えていた時からの付き合いのある者だった。数ある土豪のうちの一人だ。呂軍に与する土豪を疎かには出来ないがその将は余りに戦が弱い。監視役位は出来るだろうと陳宮は配属させた。

しかし、将は夏侯惇の価値に目が眩んだ。

夏侯惇を解放する事を条件に曹軍から金目の物を手に入れようとしたのだ。軍令違反を犯してまで、である。将は密かに夏侯惇を連れ、五百の配下と共に残軍を纏める韓浩の下に訪れた。だがその目論見は失敗した。韓浩は夏侯惇が敵の手に在る事を知りながら、問答無用で突撃を敢行したのである。将は四散して三百に足らない軍に惨敗したのだ。

陳宮らが事実を把握した時には既に夏侯惇は曹軍に奪還され、ケン城は堅く城門を閉ざしてしまった。そこに曹軍本隊がエン州に入ったとの報せが届き、陳宮と文優は話し合った結果、呂布の本隊と一度合流する事にした。

曹軍本隊の到着よりも先にケン城を落とせなくなった今、配置の再編が必要だった。

「――という訳です。力足らず申し訳ありません」

高順は立ったまま頭を垂れた。

「陳宮も文優殿も責任を感じています。どうかお赦してください」

「ふむ」

陳宮と文優の二人は無言だった。

陳宮が任命した部下が軍令違反したなら勿論上官にも責任がある。文優は副官として就きながら部下の本質を見切れなかった事に責任を感じているのだろう。

董卓といい王允といい文優は些か人を見る目が無いのだろうか、と呂布は疑問に感じたが、その結論に至ると己も彼らと同じ道を進む気がした。文優の人を見る目について考えるのは止める事にした。

「二人とも顔を上げろ」

「ははっ」

顔を上げた二人がなんとも間抜けな顔で呂布は愉快だった。

「そう力むな。それより曹操がエン州入りしたとか」

呂布にとってはたった今知ったその情報の方が重要だった。

「はい、編成は先年手に入れた青州兵を中心に五万余と二万余に分け、本隊は直接ケン城へ、別働隊は豫州との州境の郡県を占拠するのが目標の様です」

文優がおずおずと説明し出した。

「相変わらず間者を回すのが早いな」

「既に曹軍に潜伏させております」

何時の調子を少しだけ取り戻した文優が胸をやや張って答えた。

「大戦は目の前だ。陳宮、失敗は誰にでもある、気にするな」

呂布はポンッと陳宮の肩を叩いた。

「皆、戦の準備を怠るなよ。成廉、朝餉だ」

「え……あ、はい」

呂布が引き戸を開けると眩しい朝日が差し込む。既に朝食の時間を迎えていた。

濮陽決戦

「曹操率いる本隊はケン城に入城し、東阿、范に兵力を分配。輸送路を強化した後、六万の軍勢で此処、濮陽に進軍中。」

曹仁率いる別働隊は迎撃する土豪を次々と下し、エン州東部の我が軍による影響力が弱まっています」

濮陽の政庁で軍議が行われた。

現在、濮陽の兵力は一万五千。次に多くの兵力を擁するのは陳留の一万である。残りは各城に点在していて、総兵力は四万を超えた。当初、脱走兵が相次いで兵力を減らすだろうと予測された曹軍だったが、八万を切った辺りから脱走兵がパタリと途絶えた。流石に曹操がエン州に帰還した事は大いに影響している様だ。

「曹操は兵站をかなり気にしている様ですね」

文優が分析して言った。

「そうなのか？」

文優は呂布の問いに頷く。

「はい、曹操が青州から黄巾賊を移民させてからエン州は戸籍が著しく増加しました。一時的には兵糧の収入は増えたでしょうが、地力に限界があります」

エン州は飢饉に見舞われていた。急激に増えた人口に対して人民の耕作が追いつかず、先年の徐州侵攻で食糧は徴発されて邑々の蔵に蓄えは無い。濮陽もまた然り。

厳しい状況だった。文官達は何処から徴収すべきか多忙な事だろう。

「文優、お前はこうなる事は分かっていたのだろう。どうしてここで旗揚げさせたんだ」

飢饉になると分かっている兵を挙げる者など普通はいない。

「曹操が恐らく一番天下に近い男だからです」

呂布は片眉を上げた。

「確かに叩いておいた方がいい相手だ。だが……袁紹ではなく、曹操か」

「曹操は努力の英雄です。学問を疎かにせず、常に陣頭に立って鼓舞します。」

己に無い才を敬い、重用するので曹軍の陣営は人材で潤い、勢力全体が一人の万能者として機能しているといえるでしょう」

「一人の万能者？」

「はい、分業し専門性を濃くする事で個の才が最大限に発揮されるので、全てに於いて万能を可能にしています。」

確か曹操は背丈が意外に低いとか？」

「ああ、俺の胸程しか無かった」

「恐らく己が小さい事を無意識に劣等感として抱く事で、己の分身とも言える勢力に『完璧』と『万能』を過剰に求めているのででしょう」

呂布は感心した。実際に会った事の無い男を間者からの情報だけでこうも冷静に分析出来るだろうか。

「そこで――、」

文優は卓上の駒を動かした。

卓上にはエン州北部が描かれた地図が広げられている。地形も詳しく精密な物だ。その上には千単位の木製駒が両軍の分が報告通りに布陣されている。

「呂布様には一万で出撃し、曹軍に負けていただきます」

黙って聴いていた魏越、張遼が荒々しく立ち上がった。

「奉先様に負けろだど！！？」

「はい」

「ふざけるな。作戦に於ける囧なら俺達だけで行えばいいだろう」

「駄目です」

文優は顔色一つ変えずに答えた。

「張遼も魏越も腰を掛ける、文優が説明する。……で？」

呂布は説明を促した。

「本来の曹軍ならば例え策の為でも一度の敗退が命取りでしょう。恐れながら我が軍と曹軍が同じ兵力、充分な兵糧で戦すれば惨敗します」

「うむ」

「しかし、今現在は状況が違います。信賴していた盟友の裏切り行為、叛旗の予想以上の広がり、そして飢饉による兵糧不足。全てが曹操を焦らせています」

室内は息をするのものはばかれる程静まっていた。

「そして曹操は我々を力しか能が無いと考えています。今回のエン州強奪も裏切りと運が重なっただけと考えているはずですし、絶対に謀略を練って戦に挑むでしょう。下手すれば此方が壊滅します。そこで曹操が計略を実行する前に負けます。一度ではありません、濮陽城に達するまで負け続けていただき、軍勢を城内に引き上げてください。拮抗状態を保ちます」

「それでその後は」

「後は私にお任せください。呂布様は曹軍を追撃するだけです」

「は……？」

「曹操が濮陽に達した頃には計略の心配などしていません。土豪に城門を開け放つと曹操に密書を送らせればすぐに飛び付くでしょう。城内に兵を伏せて、必殺の罠で曹操を待ち構えます」

「なるほど、城内に誘い込んで待ち伏せか」

呂布は合点したが魏越はまだ不満顔だ。

「やっぱり、奉先様自ら出撃する必要性が解らん」

「今回の作戦はあくまでも曹操の抹殺です。この機に討たなくては後々に禍根を残しましょう」

「それは解った」

魏越は苛ついて声を荒げた。魏越は呂布の戦績に傷がつくのがどうしても嫌だった。

「問題は、どうして奉先様なんだ」

「これは感情論になってしまいうのですが……」

「？」

「知恵者と言うものは己より格下と見なす者に出し抜かれた時に一番怒りを感じるのです。曹操で言えば呂布様がエン州を奪った事がそれです。」

だから、曹操は絶対に呂布様を殺そうと躍起になるでしょう。盲目的になって呂布様しか見えなくなるのです。別の将にこの囧を努めてもらっても、曹操は自ら出て来たりしないのです。

つまり、この作戦は呂布様無しでは成立しえないのです」

漸く納得したのか魏越は渋々、分かった、と小さく答えた。

「暗に俺を馬鹿にしていた気がしたが……まあ、良いだろう。作戦自体は気に入った」

呂布は口角を少し上げると愉快そうに言った。

「『英雄』曹操を狩ってやろうではないか。

成廉、魏越、張遼は俺と一緒に来い。囧以外の編成は文優に一任する。

皆、文優の指示に従うように。以上、解散！」

諸将が慌ただしく動き始めた。

「何で駄目なのっ？」

成廉が白鈴に留守番を任せると、伝えると駄々こねが始まった。

「何で今更留守番なのよ」

「当たり前でしょ、もう自分達の城が手に入ってたんだから」

今回はさすがの成廉も厳しく言いつけた。

「むゝ！」

濮陽城という帰るべき処を獲たからには、今まで通り白鈴を戦場に連れ回す訳にはいかない。しかし、白鈴はそれが不満そうだ。

一方、戦の度に毎回ひやひやさせられた成廉は安心だった。白鈴が傷付く可能性もあり、迂闊に戦鬪に参加出来ない。

蝗紅隊の兵達の好意で周りを固められると出来る事は騎射しか無かった。何となく兵達には申し訳無く感じていたし、一人だけ思う存分暴れ回れないのは少しだけ面白く無かった。

「一応、文優殿達がいるから安心だけど、留守番しっかり頼むよ」

成廉の念押しに返事は無かった。代わりに白鈴が飛びついてきた。腰に回される手が痛い位締め付ける。急な甘えに一瞬何も出来ない。ただ、締め付ける手から自分を心配してくれる暖かみが伝わった。

「絶対に……還ってきて。……絶対」

成廉は腕で白鈴を包み込む様に抱き締めて応えた。

真新しい戟矛が青空に向けて群れ立つ。戟矛の林は風を受けても整然としていた。それを手にする屈強の騎馬軍が濮陽城の南門に集結する。

「出撃準備、整いました」

純白の戦袍に身を包んだ成廉が報告した。頷く呂布も傍らに控える魏越、張遼も同じく白の戦袍に身を包む。漆黒の蝗紅隊の中なだけに際立っていた。

一万頭に及ぶ馬も鎧に固められ、銅製の祭器さながらである。重装騎兵は騎兵の長所であるその速さを打ち消してしまう。代わりに防御力は大きく補強される。

今回の作戦では始めから敗退が決まっている。そうなると如何にして被害を最小限出来るか、が重要だ。単純な兵力差なら呂軍は曹軍に劣る。

今は一兵でも生き残らせたい。呂布はその為に重装備を選んだのだ。

「開門！」

呂布の号令と共に十人掛かりで門が放たれる。白の四騎が飛び出すと漆黒の蝗紅隊、重騎兵隊が怒濤の如く地鳴りを響かせて続く。駆ける事一舎、遠目に土煙が立ち昇る。濮陽郊外にて呂布は曹軍と対峙した。曹軍の六万の軍勢、その先鋒が掲げる旗には『曹』の文字。

曹操自らが率いてきた軍勢は数に対して覇気に乏しかった。雑兵の中には甲冑が欠けている者もいる。無理も無い。曹軍は徐州侵攻から引き返し、補給さえままならずにまた戦を強いられているのだ。しかし、それは言い替えれば呂軍の有利だ。しかし、好機だからと言って撃滅する訳にはいかない。本気を出したい気持ちでぐっと堪えて曹操を濮陽城まで誘い込まなくてはならないのだ。

「皆の者、ほどほどにして怪我しないように」

全軍で突撃を開始する。呂布が最前衛の曹兵を方天戟で掬い上げる。三人が同時に宙を舞った。

成廉も手に馴染んだ戈で騎兵を引っ掛け落とす。魏越も張遼も無闇に敵を殺さない。蝗紅隊も然り。身の安全を保ちつつ器用に手綱を捌いた。雑兵が矛を繰り出すが難無くいなしてしまふ。

風評に名高い呂軍が意外にも圧してこない事に曹軍の兵達は拍子抜けた。本拠地を奪われ気概を奮い立たせるべき曹軍は大半が尻込みしていたのだ。

『呂布』『飛將軍』『最強の騎馬隊』、呂布に関する風評はそれだけで士気に影響を及ぼす程なのだ。

押すにも退くにも出来無い戦が続く。激突して二時が経とうとしても両軍の被害は微々たるものだ。戦況は拮抗していた。

「奉先様！」

張遼が呂布に駆け寄る。

「この戦況、不味いですよ。一体何時退けばよいのでしょうか？」

呂布は一騎で一隊を相手にしながら答えた。

「知らん」

「……ですよ」

曹軍は予想以上に弱腰だ。

本来、兵力は六万と一万という圧倒的に不利なはずであり、戦況が拮抗するのは此方の作戦上あってはならない。

——まさか文優曰わくの『曹操の計略』に嵌っているのか？

呂布に一抹の不安が過ぎる。

今までの戦とは違う。呂布一人の武勇では補い切れない勢力差が呂軍と曹軍の間にある。

文優の言う通り、曹操の裏をかく戦略で破らなくては敗北してしまうのである。曹操の考えている戦略より先に、曹操を此方の流れに乗せなくてはならない。

しかし、今は退けない。

少数の敵軍と拮抗していて、相手を侮る者などいようか。今退いては絶対に曹操は警戒する。もしかしたら追撃すらしなないかもしれない。

だからと言ってこのままでは数で劣る呂軍が全滅してしまう。この戦況では機を掴めない。

普段の戦で流す物とは異なった、粘つく厭な汗が噴き出している。呂布は少々焦りを感じていた。

そんなのだらとした戦闘が続く中、動かない戦況に曹操もしび

れを切らしたのかある将が呂布の前に立ち塞がった。

「我が名は典韋！ 名高き飛將軍と一騎打ちを所望する」

典韋は九尺はあろうかという偉丈夫で、乗馬が小さく見える。両の腕に収まるのは双鉄戟と大刀。明らかに豪傑の格だ。

「奉先様、俺にお任せを。典韋とやらこの魏越が相手だ！」

強者との手合わせを好む魏越が前へ出ようとする。しかし、呂布は止めた。

「俺が相手をする」

呂布は魏越に目配せした。途端に何か悟った魏越は悔しそうに下がる。

拮抗を破る者が飛び込んで来た。

典韋――。

元は張藐に仕える者である。豪傑と名高く、その膂力は牙門旗を片手で支えられる程。陳留を訪れた夏侯惇に目をかけられ推挙された。

以来、曹操からもその武勇を認められ、親衛隊隊長と校尉を兼任する。

太目の眉、見開かれた真円の眼。真一文字に結ばれた口を開けば鋭利な歯が垣間見れる。

容貌は極めて奇怪で伝説の饕餮を彷彿させた。

獐猛な見た目にそぐわず平生の典韋は慎ましく、曹操に絶対の忠誠心を持っていた。仕えて僅か数年足らずだが、典韋は曹操の股肱の臣として武勇と忠義心をエン州に響かせていたのだ。

勿論、呂布も典韋の武名を耳にした事はある。しかし、人並みはズれた豪傑、という事しか知らない。どの程度の武勇なのか、呂布は試す様に攻める事にした。

互いに馬を寄せ合うと、呂布が先に手を出す。唸りを上げる方天牙戟が目留まらぬ速さで襲い掛かる。

あくまでも小手調べ。それでも常人にとっては脅威である。呂布は典韋を侮っていた。

だが、典韋は呂布の予想を遥かに超えていた。典韋は斬撃全てを受けたかと思えば、反撃の一撃が呂布を襲った。呂布は落ち着いて受ける。

しかし、その怪力に呂布は目を見開いた。その衝撃は赤兎ごころめかせたのだ。典韋はその両腕以外、微動だにしていない。

——これは全力でいかねば、対等に渡り合う事も出来ん……！

方天牙戟を握る手に力が入る。風を切って突きを繰り出す。典韋が寸で避けた所を横に薙ぐが受けられる。返し技が迫るとそれに応じて技を返す。両者共にその繰り返しである。

典韋は力も俊敏さも備えていた。

暫く拮抗した一騎打ちが続き、僅かながら典韋の息が乱れてきた。対して呂布はまだまだ余裕を見せた。体力に於いては呂布が一枚上手だ。

荒い典韋の息遣いで呂布は今回の作戦をふと思ひ出した。呂布は己に匹敵し得る武を目の前にして、知らず知らず興奮していた。

しかし、あくまでも勝ってはならないのである。

——そろそろ潮時だろう。

呂布はわざと隙を作った。すかさず典韋がそこを突く。

「ぐっ！」

巧みに軀を操り掠り傷を作る。

「これはいかん。今日は出直した」

典韋は一瞬呆けた後、すぐに追いつくとする。

しかし、呂布の騎馬は赤兎。追いつけるはずがなかった。成廉ら呂軍の騎馬軍も主を追って敗走する。

「ちっ！ 天下に名高い飛將軍！ その名が泣いておるぞ！！」

肩で息をする典韋は目一杯叫んだ。

――曹軍先鋒大将本営。

「典韋殿と呂布が前衛にて一騎打ち。典韋殿は此度で四度目になる勝利を上げました。

我が軍は散々に呂軍を蹴散らし、呂布は濮陽城まで退却した模様です」

伝令が高らかに報告する。

曹軍と呂軍は激突する事、五回に及んだ。その度に呂布は敗走した。しかし、被害は殆ど出ていない。それでも曹操はそれを怪しく思う程冷静では無かった。

「よし！ ここも濮陽城前八里まで進めるぞ」

「殿！」

帰還していた典韋が前に進み出た。

「殿、呂布の撤退の速さは尋常ではありません。郭嘉が到着するまで動かないべきでは？」

郭嘉は新入りの参謀である。齡二十四の若輩だがその知謀は海淵の如く深く、曹操はその言に感心させられる事も度々あった。此度の戦では曹操の参軍として参加している。

しかし、突出した先鋒と本軍は分離してしまい、郭嘉が濮陽城に到達するまで二日は掛かるだろう。

濮陽城の兵力は呂布の一万余のみ。対して曹軍先鋒は二万を超え
る。曹操が檻に籠もった呂布を前に二日間も待機する事を出来るは
ずもなかった。

「その必要は無い」

曹操は余裕の笑みを浮かべた。

「何か策がありますか？」

籠もる敵を撃ち破るには倍以上の兵力が必要である。

しかし、曹操には自ら指導した間諜部隊がいた。潜入、情報収集、
変装、暗殺など普通の者では困難な任務を得手とする。

既に間者は濮陽城内に潜入している。

そして掴んで来た情報は兵の配置と城内の土豪・田氏からの密書
だった。

「守備配置を統括する陳宮は南門ばかりを固めて、東門は手薄らし
い。田氏は合図と同時に東門を開けると言って来ておる」

「では東門から攻めますか」

曹操は首を振りながらくぐもった声で笑った。下卑た、傲りを含
んだ笑いだった。

「濮陽城に詳しいのは嘗て領有したこの曹操だ。東門は城壁が半壊
している。財源不足で修復が充分では無かったのだ。そんなボロボ
ロの東門を手薄にするはずは無い」

「つまり……」

「罠だ」

曹操は看破した。

「そこで典韋、お主は明日、誘い通りに東門を攻めよ。私の替え玉
を用意させる。お主は罠に掛かった振りをして素速く反転、脱出し
ろ。」

呂布は必ず追撃する。その隙に空の城を私が占拠する」

「おお！ これならば例え呂布が相手でも殿の圧勝でしょう」

典韋の賞賛を曹操は一身に受けた。

「この曹操が相手になれば呂布など小者よ」

曹操は典韋に出撃の準備をするよう命じて下がらせた。

誰も居なくなつた帷幕で曹操は一人ほくそ笑んでいた。

勝利は確実だ。呂布は蛮勇だけの男なのだ。例え呂軍に陳宮が居ようとも遙かに曹操の知謀が上を行く。その証拠に陳宮の罠は一重の罠である。真の奸計とは二重三重と罠を重ねるものだ。

陳宮は基本に忠実過ぎる男だった。陳宮の立てる計略では曹操を倒せない。

曹操の思考は傲りに支配されていた。小癪な呂布がエン州を奪つた事は全くの予想外だった。しかし、それは天運に恵まれた偶然だ。そして天運は永くは続かない。

曹操は自分が負ける事など考えられ無かった。

ただ一つ、曹操は報告内容の一部に気掛かりがあつた。陳宮の傍らに常に控える知恵者がいると言う。

その者は幾ら調べさせても身元不詳だった。果たして自我の強い陳宮が誰かの進言を聞くだろうか。

——呂布も愚か者よ、陳宮がどんな人間かも見抜けんか。

曹操はその男、文優について思考する事を止めた。

翌日、曹操は自ら南門を攻め立てた。確かに守りはそこそこ固かった。被害が大きくなならない程度で曹操は軍を最寄りの山中まで下げた。

「典韋、用意は良いか」

「ははっ」

辺りが暗闇に浸かる中、夜陰に乗じて偽曹操を大将に典韋が一軍を率いて東門へ向かう。歩騎合わせて一万。これなら万が一罠から抜け出せなくなつても典韋が討ち死にする事は無い。

替え玉は間諜部隊の一人。その他にも三人程を典韋に貸し与えた。田氏に合図を報せる為だ。

出撃から二時ばかりで典韋は東門前に到着した。曹操の言う通り城壁は崩れが目立つ。それなのに守備兵は全く見受けられ無い。武に生きる典韋でも罨だと判る。

早速、城内と内通するとあっさり城門は放たれた。

「行くぞ！ 突入！」

典韋率いる一万が雪崩れ込んだ。

「掛かったな！！」

爆竹を鳴らして左右から『呂』の旗が湧き上がる。先頭の張遼と高順は雄叫びを上げて斬り込んできた。

典韋は数を把握しようと目を細める。肉眼で確認出来るのはざつと八千以上。この軍全てを引き付ければ城内に兵力は殆ど残らない。典韋は混乱を装って、軍勢を纏める事無く逃走した。同時に間諜部隊の一人を早馬として曹操の下へ駆けさせた。

「逃がすか曹操！」

敗走を始める囹の軍を追って張遼、高順は東門から飛び出す。続く騎馬軍の速さは凄まじい。五里と行かない内に追い付かれる。それがかえって曹操を討たんとする呂軍を釘付けにする。

張遼、高順の武勇は強烈だった。青州兵を赤子の様に扱う。

しかし、呂布はまだ姿を見せない。あの漆黒の騎馬隊も見当たらない。

——まさか……！！

「これはいかん！ 罨だ！ 付いて来い」

親衛隊を連れて典章は駆け出す。

——この罨は二重の罨だ！

典章の早馬が来たので曹操は意気揚々と東門に急行した。思わず馬を速めてしまう。まるで曹操の気持ちに染められる様に騎馬も脚を速める。東門が見えると曹操は剣を引き抜いた。

「さあ！ 曹軍の真の強さというものを見せてやろうではないか」

背後から怒涛の雄叫びが応える。曹操の一万が誰も居なくなった東門に殺到する。

何の抵抗も受けずに門をくぐった曹操は勢い付いて、政庁まで一直線に突撃——、と言う時、一人の男が駆け寄ってくる。

「曹様、曹様！ 留まり下さい！」

曹操は軍を止めた。男は典章に貸し与えていた間者だ。

「何だ？ 何があった？」

訳の分からない曹操は馬を寄せると問い詰める。

しかし、間者が答える前に曹操は己の置かれた状況を悟った。

辺りの家屋の上に弩兵。その矢先は全て曹操を射据えて微動だにしない。

周囲には情報以上の歩兵。

そして正面には蠢く漆黒。先頭の三騎はまるで発光している様な純白。

どの軍勢も掲げる旗印は『呂』。

「ば……馬鹿な」

獲物が罠に掛かった。

「曹操！ 己の才を過信した結果がこれだ」

屋上から見下ろす陳宮が合図する。上から矢の雨が降り注ぐ。千の弩から射撃される千の矢が曹軍の兵を次々に射殺していった。

同じく蝗紅隊も正面から騎射を開始する。

「ぐあっ！」

曹操も肩に受けた。だが、踏みとどまる。曹操は肩を庇いながら矢継ぎ早に指示を始めた。重装歩兵が大楯を構えて方陣を作る。

「守れ、守れ！ 脱出を図る」

しかし、それを陳宮は赦さない。松明を振ると、家屋に潜んでいた歩兵が飛び出す。接近戦で出来た方陣の亀裂を陳宮は見逃さなかった。

「將軍！ 今です！」

「よし、皆、俺に付いて来い」

呂布は赤兎の腹を蹴ると一直線に飛び出した。成廉と魏越がすぐ後ろに続く。蝗紅隊も弓を長矛に持ち替え続く。

目指すは曹操ただ一人。

——おお、天下が見える。曹操の賤しい体躯の向こうに天下が手招いておるぞ！

雑魚は目もくれない。人馬の群れなど取るに足らない。

ただ一閃すれば其処に道が出来る。首が、腕が、半身が、呂布の狩りを彩る。

誰一人として呂布を傷付ける事も留める事も出来無い。

修羅となった呂布はただ曹操に、天下に一直線。

「曹操！」

方天牙戟を闇に染まる天に突き立てる。

「ここが、」

曹操はもう目の前。引きつる貧相な顔が恐怖に歪む。方天牙戟を振り上げた。力み過ぎて躰が軋む。

「――貴様の死に場所と心得よ!!」

幸か不幸か、天の悪戯か。曹操を粉碎するはずの渾身の一撃は偶然振り上げていた曹操の剣になされる。曹操を喰らうはずだった方天牙戟は虚しく騎馬を肉塊に化した。

敵味方問わず一瞬時が止まる。

曹操は己が生きているのか死んでいるのかも判らないのか、呆然として動かない。対する呂布も騎馬を貫通した方天牙戟が大地に食い込み動けない。

今更気付いたかの様に、慌てて親衛隊が主を護ろうと駆け寄る。

それを見て成廉と魏越も呂布を援護しようと動いた。

「奉先さ、」

「来るな!」

呂布は援護を撥ね退けた。

――此处で、俺の武のみで曹操を討てないようなら……俺は天下を掴む機を見出せない。

曹操を逃す事は天下を逃す事。そしてこの有利な状況下で誰の力も頼らずに曹操を仕留められなければ、今後二度と好機は訪れないだろう。

呂布は方天牙戟を諦めて剣を抜いた。脇から突いて来た兵を三人纏めて叩き斬る。親衛隊が味方の血飛沫を浴びて怯むのを呂布は見逃さなかった。

「覚悟しろ」

正に曹操の首目掛けて剣を閃かせんという時、曹軍の一角が開けた。

「殿ー！！」

たった数十騎の救援。先頭は典韋。曹操と呂布以外何も見ていない。

「ちっ、こんな時に厄介な奴が」

やむなく典韋の相手をする。しかし、手にするのは剣一振り。対する典韋は双腕に戟を構えた。

「殿！ 早く空馬にお乗り下さい」

油断を見せない典韋が促す。腰が抜けた様子の曹操はそろそろと立ち上がった。このままでは脱出されてしまう。

呂布は陳宮に目配せした。こうなってしまうえば最終手段しかない。陳宮が素早く頷き、視界から消える。

「逃がすと思ったか」

呂布は一振りの剣のみで立ち塞がる典韋に攻撃した。典韋は踏み留まって斬撃を受け止める。尋常で無い臂力がぶつかり合う。

曹操を逃がそうと曹軍の兵達も呂布を取り囲んで矛で突いてくる。呂布は全身を錐揉みさせて擦れ擦れで避けた。しかし、半身が数多の矛に取り囲まれ身動きとれない。

その隙に曹操は典韋に支えられ馬の尻を打った。曹操が小さくなっていく。だが、呂布は慌てなかった。己を拘束する矛を纏めて弾き飛ばすとり囲む兵を一掃した。

「奉先さん！」

成廉と魏越は取り残された曹軍を一通り討ち散らしていた。

「曹操が……！」

「わかっておる」

「早く追いませんと！」

「陳宮が既に手をうっている。奴らは城から出られんだろう」

呂布の視線の先には夜空を赤々と照らす東門があった。

炎が城門を舐めていた。頬を焼くかと言う程の熱風が吹き付ける。曹操と典韋は馬上で呆然と東門を見上げていた。東門に至った時には城楼まで飛び火していた。先読みした陳宮が東門に火を放ったのだ。

「ぐっ……何処か抜けられる場所は」

立ち尽くす二人の周囲を喊声が包み込む。三方から呂軍が迫るのが目視出来た。

正に絶体絶命、此処は死地。曹操は唇を噛んだ。

——此処で曹孟徳の覇道は途絶えるのか。

曹操は弱々しく傍らの典韋を見上げた。

驚いた事にこの窮地に在って典韋は微笑んでいた。曹操の焦り、不安、絶望、全てを包む様に無言でただ、微笑んでいた。

——まだ死ねない。私には信頼出来る部下がいるじゃないか。

「典韋！」

「は」

「脱出する、追従せい！」

「承知！」

曹操は全ての余念を捨て去り、勢い良く燃え盛る城門に飛び込む。二人は炎に消えていった。

「凄まじい男よ」

溜め息を吐く様に呂布が呟いた。

曹操が東門を脱出した。燃え盛る城門からである。誰しも曹操が逃れられるとは考え無かっただろう。呂布も然り。

取り囲んだ報せを受け、東門に向かおうという時にこの報せ。ただただ悔しさよりも驚きだった。

「呂布様、驚いている場合では御座いません」

何処からか文優湧いてきた。

「高順と張遼は曹軍の第一派を破って待機してましょう。呂布様は合流して曹操を追撃すべきです」

尤もである。呂布は頷いた。

「文優、陳宮、此処は任せた」

呂布は五人掛かりで地面より引き抜いた方天牙戟を受け取ると、南門から蝗紅隊を率いて出撃した。

曹操と云う名の天下は遙か遠くへ駆けていった。

だが――。

呂布が跨るのは天下一の名馬・赤兎。そして最強最速の蝗紅隊。

呂布は一万の騎馬軍に重装備を施しても、蝗紅隊は別だった。蝗紅隊は呂布の手足である。重装備はその速さと攻撃力を相殺してしまう。

――まだ諦めるのは早い。

餓狼は追い掛ける。

――まだ追い付ける。

呂布に同調して赤兎もぐんぐん脚を速める。その速さは蝗紅隊をも引き離す程。

少し蝗紅隊が気になった呂布は振り返った。そして、その心配は愚考だったと気付く。

戦場に身を置いてこそ蝗紅隊。呂布を追い掛けてこそ蝗紅隊。何より戦を愛してこそ蝗紅隊。

成廉、魏越以下、千名の戦士は呂布に笑顔で応えた。

暫く駆けると高順、張遼の騎馬軍と合流した。

「曹操はケン城に向かわず東の本軍に向かった模様です」

張遼の放っていた斥候から報告が入る。すぐ様、呂布は騎馬軍一万に馬鎧を外して身軽になる様に指示した。東へ追跡を開始する。

夜通し駆けて辺りもすっかり明るくなった頃、曹操に追い付いた。しかし、その行き先には高く砂塵が上がっていた。一足遅かったのだ。

呂布はこのまま曹軍本軍に突撃を仕掛ける事にした。

「兵を分ける。高順、張遼はそれぞれ四千を与える。両翼から騎射しろ。残りは俺と共に中央を突破する」

「了解」

「お任せ下さい！」

騎馬軍は止まる事無く三分した。

「さあ曹操、これで全てが決まる」

曹軍の大軍に消える曹操を呂布は静かに見据えた。

曹操は本軍の中央に位置する本陣まで一度も振り返らず、止まる事無く逃げおおせた。

「おお、殿――！」

「郭嘉殿から聞いた時はまさかと思いましたが、ご無事で御座いましたか」

「手当てを。おい！ 誰か手当ての用意をせい」

帷幕に駆け込むと深刻な面持ちだった一同が声を上げた。

「戦だ！」

幕内が静まる。曹操の言葉に一同は何を言っているのか分からない。

曹操は呂布が此処に襲撃してきたという伝令より速く駆けてきたのだ。

「迎撃だ！！ 呂布はすぐそこだぞ！？」

平生が冷静な主の乱れ様に漸く本陣が慌ただしくなる。
しかし、前衛ではこの時既に両軍激突していた。

「報告！」

伝令が駆け込んできた。

「呂布襲来！ 騎馬軍二手で先陣に突撃を仕掛けております。その勢いは鬼神の如き様、突破は時間の問題です」

曹操は息を呑んだ。ジワリと背筋から昨夜の恐怖が忍び寄る。

——あの軍なら既に先陣は突破されている……！

「惇！」

呼ばれて夏侯惇が進み出た。夏侯惇は全軍の校尉の統率を任せている。

「夏侯淵、曹仁、曹洪、楽進を本陣に集めろ」

「っ?! かし」

皆、此度の陣容に於ける主力とも言える面々だ。

「ここでお主と典韋を含め六名で呂布を食い止める」

呂布らは高順、張遼の援護射撃で難無く中軍まで突破しようとしていた。曹操のいる本陣はもう目の前。大将旗が近付いた時、一軍が、いや幾隊かが行く手を阻んだ。

「？」

中央にいるのは曹操だった。

「呂布よ、天下無双の武が本当かここで証明して見せよ！」
途端に六人の将が呂布に襲い掛かる。

「小癩な奴よ」

呂布は不敵に端正な顔を歪めると応戦した。

同時に騎馬軍も止まる。敵中で騎兵が止まる事は自殺行為である。成廉は円陣をとらせる事で防御を高めた。

何にせよ進むも退くも呂布に掛かっているのだ。

呂布の闘いぶりは曹操の言う通り、天下無双だった。六方から同時に襲い掛かる戟矛を華麗に受け捌き、寧ろ六将を威圧する。

典韋と互角に近い一騎打ちをした呂布だったが六人を相手に更に奮い立ち、武威盛んになる。まるでそれは薪をくべればくべる程燃え盛る炎の如し。

遂に苛烈な猛攻に気を吞まれたのか、楽進と曹仁を方天牙戟の柄が捉える。呂布は落馬した二人にとどめを刺そうとするが典韋が阻止する。その怪力に呂布は一瞬手を止めたが、「諄い」の一言でその肩に一突き喰らわした。

苦痛に典韋が歪む。その様子で明らかに残りの三人の手数が減る。曹操はただ、色白の顔を更に蒼くして動かなかった。

——こいつらを片付ければ後は曹操のみ。

呂布の脳裏を天下が掠めた時。周囲がやけに静まった。円陣を組んだ呂軍も対する曹軍も手を止めた。そしてある方向を皆凝視して

いる。

両軍の兵、成廉、魏越、曹操、呂布を目の前にする夏侯淵さえも、皆北を見上げていた。

思わず釣られて呂布も見上げる。呂布は目を見開いた。

青々とした空を北から闇が近付いてくる。それは呂布が今まで見た事も無い程巨大で邪悪な程、黒い。

側にいた兵から

「飛蝗」

の言葉が漏れた。

——天はここにきて俺の前を阻むのか!?

見る見るうちに闇は接近し、曹呂共に呑み込んだ。

辺りが騒然となる。

両軍共に混沌たる様になった。周囲からは兵糧をしまえ、と悲鳴が聞こえる。戦闘どころでは無かった。

呂布はどさくさに紛れて後退る曹操を見逃さなかった。此処で逃せば呂布に天下は有り得ない。

だが、距離が有りすぎる。今日に限って弓を携帯してなかった。

「成廉! 手柄をくれてやる。曹操を射殺せ!」

「はっ、はいっ!」

慌てて成廉は弓を引く。

——どうか、天よ……、

「当たれ!」

矢が放たれた。

「孟徳!!」

儂くも矢は標的に到達する前に夏侯惇の眼球を以て止められてしまった。

そして曹操は自軍に紛れて、見えなくなってしまった。

——嗚呼、

呂布は力無く方天牙戟を下ろした。

呂布の天下は脆くも潰えた。

忠義越

「暇だな、成廉」

「はい？」

「棍を持てい」

「は？」

「それから魏越と張遼も連れてこい」

呂軍、曹軍の戦はかれこれ半年も戦線が膠着している。兵糧はどんなにかき集めても現状を維持するので精一杯だ。騎馬軍一万を除いて殆どの軍を各任地へ分割している。

曹軍もまた同じなのか去年の惨敗以来、曹操はケン城から一步も出ない。それは不気味な程だ。そんな訳で両軍共に次の一手を出せずにいる。

つまり、州治を文優、陳宮に任す呂布は暇なのである。

「破っ！」

魏越の大振りは呂布を捉えたかの様に見える。

しかし、呂布は涼しげな顔でそれをいなし、突きで逆襲する。

「こうやって稽古するのは何年ぶりかな」

呂布は成廉の難払いを受け止めながら聞いた。

「俺は五年以上手合わせしていません」

そう言って張遼は棍を振り回しながら打ち掛かる。

「おう、そう言えばそうだな」

相変わらず張遼は小細工の効いた技で攻めてくる。

「だが、まだまだだぞ」

的確な突きで成廉と張遼は同時に吹き飛ぶ。目にも止まらぬ二段突きだ。愛用の方天戟からしてみれば棍など棒切れに等しいのだ。

「奉先様！ 卑怯な手で向かわせていただきます」

三人は三方から同時に打ち掛かった。魏越の斬撃が喉元を捉えかける。呂布は笑って受け流した。

——三人とも強くなった。

成廉と魏越はともかく、張遼には別任を与える事が多かった。それでも三人の息はぴったりで、連携も上手くとれている。笑う余裕があるとは言え、気を抜けば負けてしまうだろう。

呂布は正直嬉しかった。自分が蒔いた『武』の種は着実に育っている。そう思えた。

それでもまだまだ彼らは若い。伸びしろは無限であり、将来の楽しみな三人である。

——この戦が終わったら、また本格的に稽古しようか。

「さあ、次々！ そんなんじゃあ最強は見えんぞ」

呂布の稽古は日が暮れるまで行われた。

陳宮が少し苛立った様に質問してきたのは軍議の最中だった。

「呂將軍！ 李乾の件、如何なさるおつもりです」

李乾とは土豪に影響力のある、エン州でも名の知れる名士である。しかし、李乾は呂布に非協力的だった。呂布は李乾への対応をエン州別駕の薛蘭、治中の李封に一任していた。

別駕、治中と言えば州治に於ける高官。曹操がエン州を支配する頃から着任するこの二人なら地元の事情に詳しいだろうと委任したのだ。

進言したのは文優だった。

呂布は忘れていた。文優は知謀に長けていても人物眼は皆無。

案の定、薛蘭と李封は蛮行に走った。何を思ったのか、強硬姿勢を採った二人は李乾を殺害してしまったのである。

李乾程の名士を呂軍が殺したとなると、エン州土豪との信頼関係も揺らいでしまう。陳宮はその処遇を質問しているのだ。

「お前はと思う」

「両名処断すべきです」

呂布は片眉を上げて、ぐっと陳宮に近付いた。

「土豪はそれで納得するだろう。だが、曹操時代からの官の筆頭のあの二人を殺してしまえば、他の曹操に背いた官に動揺が表れるのではないか」

「う……それはそうですが」

陳宮は困った様に目を泳がせる。

「ようは為す術無し」

土豪とエン州の官、どちらか一方を選ぶ事は出来ない。どちらもエン州を支配する上で必要不可欠だ。

「現状維持が妥当だろう」

「お待ち下さい」

黙り込んでいた文優が口を開いた。

「両名から官職を取り上げない事には賛成ですが、軍は合流させるべきです」

薛蘭、李封には兵四千を付けて鉅野へ駐屯させている。土豪を牽制させる為の治安兵である。戦闘には不向きな軍だ。

「出来ればすぐにでもご命令を」

「何故そう急ぐ」

「曹操麾下の腹心に李乾の甥がいます。報復戦を進言して曹操が承諾すれば、いえ、動きの無いこの戦況では絶対に曹操は攻撃して来ます。そうなれば薛蘭の軍は壊滅です」

人には得手不得手というものがある。薛蘭と李封は戦となると後方支援に回す程度の実力だ。

それでいて率いる兵は呂布の軍からすれば雑兵である。確かに今、彼らが襲撃を受ければ壊滅必至だ。

「分かった、二人を呼び戻そう」

しかし、伝令が退出する前に別の伝令が室内に飛び込んで来た。

「報告！ 薛蘭殿、李封殿の軍が曹軍五千と交戦。抵抗虚しく半数を討たれ、將軍の救援を求めています」

「遅かったか……！」

陳宮が声を上げる。曹操の即決即断が発揮されている瞬間である。「いや、まだ間に合う。俺が救援に向かおう」

呂布は立ち上がった。

「！」

「お供します」

「俺も」

魏越らも次々と立ち上がった。

「お待ち下さい！」

文優もまた立ち上がった。

「罨の可能性あります」

「罨？」

魏越は馬鹿にした様に見下ろした。

「罨だったら何だってんだ。奉先様は曹操などとつくに超越しているわ！」

「局地での戦を危ぶんでいるわけではありません。戦略的に兵力を分散させるのは危険だと言っているのです」

文優は冷静さを少し失った様に反論する。

成廉を除いて、この場に集う者全てが少し冷静さを失っていた。

陣内に苛立ちが募っている。それも先年から曹操に勝っていると言うのに、何処か思惑通り行かないからである。

一度降った土豪達は不利なはずの曹操に靡き始めている。減り続けるはずだった曹軍は踏ん張りを見せ、未だに七万を維持している。そして飢饉に重なる飛蝗の被害。兵を動かすにも先を見て計画的に動かさなければ兵糧は尽きてしまう。

決して呂軍は不利では無い。戦況も士気も寧ろ此方の有利だ。しかし、なぜか解らないが曹軍は揺るぎない何かを示しているのだ。成廉は昔から己の弱気を怨んできたが、今回ばかりは呂布が定陶を離れるのは賛成しかねた。

危うい、のである。薛蘭の軍を破ったのが曹操とは限らないのだ。もし、曹操が本隊に控えていれば、呂布のいない呂軍一万余は曹操率いる五万の軍勢に襲われるのである。

しかし、だからと言って主の意を曲げる事は不可能である。呂布は一度口にした言を必ず実行する。

——僕には何が出来るのか。

「勢力を保つ為にも薛蘭と李封は捨て置けん。

ただでさえ土豪との信賴関係は揺らいでおる、行動で示さねばならん。例え間に合わなくても、だ」

呂布は有無を言わず一同を見渡した。

「俺は蝗紅隊と騎兵二千で救援へ向かう。陳宮には文優と高順を残す」

呂布は踵を返し、室から出ようという時、成廉は告げた。

「奉先さん」

呂布は立ち止まった。

「僕は残ります」

「なっ！ 何言い出すんだよ、廉」

魏越は己の耳が信じられない様に詰め寄った。

「お前は俺の従者だろう。従者は何処であろうと付き従うものではないのか」

呂布は何の感情も見せなかった。ただ、問うた。

「主の留守を守るのも従者の仕事です」

「……」

呂布は真っ直ぐ成廉の瞳を見つめて動かない。一同、呂布の答えを息を吞んで待った。

「ふん。勝手にしろ」

「御帰還をお待ちしております」

成廉は深々と頭を下げた。呂布は瞳から何かを悟ったのかそれ以上何も言わずに室を後にした。

「正直、成廉様が残っていたき有り難いです」

文優は息を吐きながら言った。

「やはり、曹操は動きますか」

「其処まで考えてましたか、流石です」

成廉、文優、陳宮、高順だけになった軍議は続いた。

文優はエン州の地図を広げた。

「曹操はケン城に五万の兵で待機しています。このうち幾らかが鉅野に割かれたとしても、対する此方は騎兵八千」

圧倒的に不利だ。

「ただし、機動力で此方が遥かに勝るのでこの機動力を生かして策を組み立てます」

「して、その策とは」

高順は必要事項のみ聞いた。

「定陶の陣営を棄てます。南城まで退いて曹軍の兵站を延長します」

「兵糧攻めか」

「兵力差は縮まらず、士気が高いのも騎馬一万のみ。更に土豪の心

も離れつつある今、残された手はこれしか有りません」

「しかし、文優殿、」

陳宮が疑問をぶつける。

「それしか手が無いという事は曹操に予測されやすい事も意味しませんか」

「その通りです。ですから呂布様に進言する前に皆さんの意見が聞きたかったのです」

「……他に手が無いのだろう」

高順は表情を崩さない。

「俺は軍師の言う通りに動こう」

「成廉様は」

一同の視線が集まる。

「異論はありません」

定陶の陣では密かに撤退準備が進められた。

濮陽を棄てた際、白鈴も陣内で生活していた。無論、撤退準備は白鈴にも影響した。

「留守番しろって言ったかと思えば、今度は鎧を着ろって言うの？
！」

「うん、……ごめん」

白鈴は少し戸惑いながらも大人しく甲冑に袖を通してくれた。

「戦は……嫌い」

何を思ったのか急に白鈴はポツリと漏らした。

「白鈴、僕は戦場で生きてるんだ。これはしょうがないん、」

「分かってる」

成廉は目を瞬かした。

白鈴の瞳は何時に無く頼もしい。ここ一年、白鈴は留守番をする事で強くなった気がした。

「分かってるから、立派に闘って、無事で還ってきてね」

「……うん」

成廉は今なら誰にも負ける気がしなかった。
ただ、今回の戦は曹軍の攻撃を上手くかわす撤退戦である。文優と陳宮の指示通り動かねばならない。

「曹軍が動きました。定陶より東に約六十里を進軍中」
伝令が報じる。

「遂に来たか」

「高順様、成廉様。直ちに騎馬二千をそれぞれ率い、定陶まで十里の所で敵の先鋒を攪乱して下さい。囲まれた場合は無理をせず、軍をばらして南城を目指して下さい。」

本隊は敵軍の進軍が滞らせている間に撤退します」

「高順殿、行きましょう」

「うむ」

「文優殿、白鈴を頼みます」

「警護を固めさせます、ご安心を」

成廉と高順は幕内から出るとそれぞれの軍に向かった。
成廉は二千の騎馬軍の前で雷音を止めた。兵は皆、出撃準備は出来ているのだろう。成廉をじっと見ていた。

此度の戦は成廉が『軍』を率いる初陣である。常に呂布の傍らで闘ってきた成廉が率いた軍と言え、蝗紅隊の調練の時ぐらいた。今まで兵を率いた事が無い訳でも無い。しかし、殆どが呂布から一時的に兵を預けられたぐらいなのだ。

自分一人だけを兵が注目する今の状況に些かだが、高揚した。雷音も成廉に感化したのか、少し落ち着きが無い。

——こんなんじゃ駄目だ、雷音。

『武』を修める者が状況に流されちゃあ駄目だ。

いつも通り、ただ僕の武を振るうだけだ。

成廉は剣を抜いて掲げた。

「此度の戦は撤退戦であり、手柄を立てる戦に非ず！　ただ速さのみを求めよ！」

「応！！！」

「出陣！」

真白の戦袍を先頭に、若き将の率いる軍が解き放たれた。

「間もなく曹軍が来ます」

「別地で待機する高順殿にも報せといてくれ」

「御意」

軽装の伝令は音も無く駆け去った。

成廉は指示通り定陶を背に十里の所で兵を伏せさせていた。

炊事はさせてない。曹軍に気付かれる恐れがあるからだ。だが、それだけが理由では無い。そもそも携行出来る兵糧が呂軍には無かった。

やむなく成廉は兵に付近で調達するよう命じた。略奪である。成廉は抵抗があったが兵達はまんざらでも無い様だ。

蝗紅隊と違って董卓の頃からの兵は涼州出身の荒れくれ者ばかりだ。力のある者が物を手に入れるのは当然とするところがある。呂布に忠誠を誓う優秀な騎兵だが、どうやら根本的な気質が違う様である。

二千もの兵が伏兵しているというのに甲冑のぶつかる金属音どころか衣擦れ一つ聞こえない。

やはり優秀な兵だと成廉は改めて感心していた。彼らは当然な顔つきで待機しているが朝食を摂らせて今の状態のまま半日が過ぎようとしている。しかも、既に此処に伏せてから二日経っているのだ。

彼らを訓練するのは張遼、高順だ。厳しく命令だけを遂行する様に訓練されているのだろう。

個々の実力が高水準の蝗紅隊の何処か愉しげな、自由な雰囲気とは別なのだ。本来なら彼らの在り方が軍として正しい。蝗紅隊は呂布にしか率いれないがこの軍は汎用性があるのだ。

林内でも風が心地良い。初夏を匂わせる風は山々を吹き抜け、木々をさざめかせた。何処からか鳥の囀りが聞こえる。

成廉は何と言う鳥か判らなかった。ただ、のどかだった。ここらは先年の飛蝗から免れたのだろう。今から戦が始まるとは思えない程のどかだ。

「成廉殿、間も無くここは曹軍の斥候範囲になります」

最後の伝令だった。戦の合図。

成廉は擬態の枝葉を取り払った。

「行こう。後は街道沿いに駆けに駆けよう」

斥候よりも速く。斥候が此方を発見する前に、発見して引き返すよりも速く。

駆ける事三里、前方に『曹』の旗が見て取れた。向こうは此方が敵軍だと気付いていないのだろうか。のろろ進軍していた。

馬上に生きる成廉にとってそれは鈍牛以下。

「首級は打ち捨てろ。とにかく騎馬を止めるな」

曹軍はその兵の顔を目視出来る距離で漸く狼狽し始めた。次々と矛が此方に向けて突き立てられる。

成廉は手に馴染んだ戈で難無くないなすと先頭の兵の首を飛ばした。軍が激突する。吹き飛ぶのは曹軍の兵ばかり。

丁度、機を見計らって高順の軍も攪乱を開始した。曹軍の先鋒は二つの剣でずたずたになった。

指揮系統が混乱し、右往左往する。街道で軍が止まれば後続も詰

まる。――はずだったが曹操が兵を動かした。

左翼から曹仁、右翼からは夏侯淵が、中央を曹操が典韋と共に上がってきた。先鋒の兵とは明らかに力量が違う。新手の右翼へと突撃するが、容易く前進出来ない。先鋒と比べると末端の兵卒まで力強かった。成廉は違和感を禁じ得ない。

――後続の兵は飢えてない……？

兵力の劣る呂軍でさえ兵糧不足に陥っているというのに、全軍七万にも及ぶ曹軍が飢えている様では無い。

「おかしい……」

成廉は無造作に戈を振り回して、活路を見出そうとしたが、遂には突破も適わず、高順と混乱する曹軍先鋒と共に包囲されてしまった。

「高順殿！ これは一体……？」

「どうやら曹軍は我々よりも飯にありつけられるらしいな」

高順は額の汗を拭って吐き捨てた。

「囲まれました」

左右より上がってきた曹軍は回り込んで退路を塞ぐ形で攻めてくる。

退却しようにも前に曹仁、夏侯淵、後ろに曹操と、正に挟み撃ちだ。

「是こそ真の死地であろう」

高順が息を整え、前を見据えた。成廉もそれに倣う。退路を阻むのは約一万といったところ。

「己を信じて前進あるのみ」

「了解しました！」

死地に置かれようとも高順は成廉の知っている平生の高順だ。成廉と高順を先頭に騎馬軍は自然と錘行の陣へと移行し、退路を阻む

曹軍へその矛先を向けた。

「退けい！ 退けい！！ 我ら飛将の旗本、高順！」
「成廉なるぞ！」

鈍色の甲冑と白の戦袍が呼ばれる。

両軍、激突した。

曹操は隊列を組み直す先鋒の軍を見下ろした。傍らには郭嘉と典韋が控える。

「餌とは言え、派手にやられた。なあ、郭嘉」

凹だった先鋒のはたった四千の騎馬軍に散々掻き廻された挙げ句、二千余もの兵が死傷した。

「それだけでは御座いません。戦果が無かった訳ではありませんが敵将を取り逃がしております」

成廉と高順は辛くも包囲を突破した。しかし、騎馬軍の半数を失うと言う代償を払った。

「報告致します」

追撃した曹仁から伝令がやって来た。

「敵の二将は驚くべき速度で逃走、追撃は不可能とのこと。恐らく本隊と共に南城に向かったと思われます」

「ご苦労、仁には屯営出来る所を探し、布陣せよ、と伝えよ」
伝令は一礼すると来た道を帰った。

「さて、今頃呂布も無駄足喰って本隊と合流しているだろう。其処で郭嘉、策を示せ」

此度の戦で曹操は呂布の騎馬軍があの黒ずくめの麾下隊に負けず劣らず精強だと感じた。呂布が直接率いれば、その強さは何倍にも至るだろう。

「河北より兵糧の目処がついたとは言え、兵糧は充分に行き渡ってはいません」

曹操は兵糧不足の問題を袁紹の支援で辛うじて補っていた。曹操は始め、増援部隊を送ると申し出た袁紹の提案を断りながら、密かに済南経由で兵糧支援を受けたのだ。

全軍にはとても足りる量では無いが、この支援のお蔭で軍を維持出来た。

「彼方に長期戦の構えを採られれば依然として不利を否めません。策を用いて短期決戦は妥当で御座いましょう。」

しかし、相手はあの呂布、戦術戦略を超越した武の持ち主です」

「それで、お主の策は」

曹操は隊列の整いかけた先鋒から視線を逸らさず訊ねた。

「呂軍の強さとその源は呂布とその麾下軍。つまりそれらを何とかすれば我が軍の勝利です。」

直接対処出来ない武には『刺客』を使うしかないでしょう」

「刺客?？」

曹操は振り返った。

「刺客で何とかなる男だったら此処まで苦戦せんぞ」

訝しげな曹操に郭嘉は怪しく笑いかけた。

「殿に仕官する以前、私は河北を旅していました」

曹操は次を促す様に頷いた。

郭嘉は河北を一巡りした事があり、袁紹にも面識がある。

「その時に渤海沿いのある邑で私は一人の隠者に会いました。彼は密かに医術を修める者なのですが、医術を極める内に最強の『

刺客』を発見したのです。

興味をそそられた私はその『刺客』の造り方を大金を叩いて教授してもらったのです」

「最強だと？」

「はい、虎をも容易く殺します」

「して、その刺客とは？」

郭嘉は曹操に近付くと耳に口を寄せて何事か説明した。

見る見る曹操の表情は固くなる。

「成る程、確かに猛獣も呂布も殺し得る最強の『刺客』だ。

それにしても、お主は鬼畜の様な男だな。しかし、有り得ぬ進言をしてこそ曹操の参謀であろう」

郭嘉は軽く頭を下げてただけだった。

「如何為さいます」

「すぐに手配せよ」

「御意」

曹操は余りにも卑劣な郭嘉の策に半ば呆れながら典韋に顔を向けた。

「きつとこの『刺客』を用いれば私は天下から卑怯者呼ばわりされるぞ」

言に反して悪びれない曹操を見て、典韋は顔をしかめた。

薛蘭、李封の救援に向かった呂布だったが鉅野に到着した時には、既に薛蘭と李封は死んでいた。曹軍の姿も見当たらなかった。

どうしようもない、と思い、残兵の收拾を命じようとして、呂布は自分がまんまと誘い出されたと気付いた。呂布と蝗紅隊のいない騎馬軍は一万に満たない。そこに曹軍が攻め寄せればどうなるか。

「いかん！　すぐ引き返すぞ」

呂布は己の浅はかさを悔やんだ。形だけの救援を臣と土豪に示すのなら、一将に軍を与えて向かわせれば良かったのだ。何も呂布自ら出陣する必要は無かったのだ。

鉅野から定陶まで昼夜駆けても一日以上かかる。しかも蝗紅隊だったらの話であり、騎馬二千に合わせれば二日かかるだろう。

こうなれば軍を二分して先行するしかない。

「兵を二分する！　張遼は騎馬二千と普通に退却しろ。蝗紅隊は俺に付いて来い」

「ははっ」

張遼は何となく現状を察したのか、大人しく騎馬を下げた。

「一体どうしたんです?!」

魏越は戸惑いを隠せない様だ。魏越は騎馬を寄せて驚きと一つの不安の入り混じった顔を向けてきた。

「俺達は罠に嵌ってしまったのだ」

「それでは、廉達は……!」

「定陶は既に落ちているかも知れん」

蹄の音が騒がしい中、呂布には息を呑む魏越がやけに萎んだ様に見えた。

「將軍！　あれをご覧下さい」

兵の一人が小さな火の玉を見つけたのは、駆け続けて日が暮れ、辺りがどっぷりと闇に浸かっていた時だった。

何やら此方に合図している。

「あれは我が軍の伝令です!!」

呂布は蝗紅隊を振り返った。騎馬の息遣いが異常だ。赤兎も珍しく息が上がっている。

——流石に無理をし過ぎたか。

「全軍止まれ」

伝令が報告した内容は定陶が陥落し、文優らが騎馬二千余を犠牲に南城まで退却したとの事だった。

安心した様に魏越が息を吐くのが聞こえた。

「それでは南城に向かうぞ。張遼にも伝令を」

南城なら定陶より近い。呂布らは朝日が昇る頃、南城に到着した。張遼が正午過ぎに到着すると、今は使われていないボロボロの官舎で諸官が集まった。

南城はポツリポツリ民家があるだけの城だ。城壁は半壊してその機能を果たさず、兵糧の蓄えは皆無。しかも、定陶を曹軍に占拠された今、南城はエン州で孤立してしまった。

「申し訳ありません、定陶は守れなかったのでは無く、放棄しました」

軍議が始まって直ぐ、文優が跪いて額を床に擦り付けた。成廉も慌てて倣おうとすると呂布はそれを制した。

「頭を上げよ。お前達に責任は無い、全て俺の采配に責任がある」

「呂布様……」

「あの状況では定陶の死守は不可能だ。兵を生き残らせただけでも大手柄だ」

呂布は床の一点を見つめた。表情は変わらなかった。変えられなかった。どんな表情をすればいいのか分からなかった。

「成廉も高順もよく闘った様だな」

二人の戦袍はあちこち千切れ、まだ血がこびり付いていた。他の諸将も疲れ切った冴えない顔だ。

それでも現実を受け止めなくてはいけない。

「文優、現状を分析しろ」

「はい……まず我が軍の被害は二千余、兵糧も底を尽きます。

土豪は各個撃破され、無傷の軍は張藐の一万のみ、曹軍には兵力で劣る上に土豪も彼方に靡く事でしょう。圧倒的に不利です」

一同、悲痛な面持ちになる。

「対して曹軍は莫大な量の兵糧を消費します。しかし、間者の報告では曹軍は袁紹の支援を受けています。兵糧は定期的に輸送されている様です」

「成る程、それで俺達はどうすべきだ」

呂布の問いに文優は一瞬瞳を閉じた後、迷いを振り切る様に進言した。

「定陶を奪われた今、曹軍の兵站は延び切っています。則ち、軽騎兵による兵糧強奪と後方攪乱を繰り返し、転機を伺うしかありません。

曹軍の維持は兵糧が必要不可欠です。今は圧倒的に不利でも兵糧を攻めれば必ず隙が出来ます。

その時が好機でしょう」

苦肉の策か、そんな考えが皆を占めた。

しかし、反論する者はいなかった。それだけ呂軍は追い詰められていた。

魏越は決意した。

「文優殿、」

「なんでしょう？」

魏越が文優に声を掛けたのは遂に兵糧が尽きた日だった。

「俺に、兵糧強奪を任じて欲しい」

文優は予想していたのか、それとも誰かが名乗り出るのを待っていたのだろうか。特にこれと言って表情を変える事は無かった。

「四方に曹軍が布陣しました。それでも行きますか？」

「ああ」

魏越は即答した。

南城は古城で籠もるには難い。このままジツとしていても干上がるだけである。それなのに呂布も文優も陳宮もあの軍議以来、一度も強奪部隊を出陣させなかった。

と言うのも、此処南城がほぼ包囲されているからである。北は曹仁の五千、南は夏侯淵の五千、西は片目となった夏侯惇と程立の四千、そして定陶に曹操の四万だ。張藐のいる陳留とは分断され、援軍も期待出来ない。

「城外は極めて危険です、最悪、帰還出来ません。本当にそれでも行きますか？」

「しつこいな……」

魏越は齒痒そうに視線を逸らした。無意識に掌が拳になる。

「……俺は、あんな奉先様を見るに堪えられん」

原因は呂布の食事だった。

呂布はただでさえ少なくなった麦飯を食べず、更に少ない、しかも粟飯を食べ始めたのだ。

以前から呂布が極力兵卒と同じ様な食事をするのを魏越は知っていた。しかし、呂布の要求した量は並みの兵卒以下なのだ。

流石に魏越も成廉も止めたのだが呂布は聞き入れない。「俺の飯を増やせる位あるのなら、まずお前達が食え」と言い出す始末。

大将たる者が一番良い物を食べて、誰が非難するだろうか。日に日に呂布の頬が痩けるのを見て、魏越にはやるせない思いに駆られるのだ。

兵糧が少ないから食べない、と言うならば全体の兵糧を増やせば良い。魏越はその答えに至ったのだ。

「全軍に兵糧が充分行き渡れば奉先様の食事も自ずと増えるはずだ。だから、俺は行く」

「……分かりました。明日の軍議で進言すると良いでしょう、私からもそれとなく促します」

文優は魏越の決意が固い事を悟ったのか、諦めの色を覗かせながら言った。

「但し、進言理由には決して呂布様の食事について触れぬよう、単に兵糧不足を提言なさいませ」

「それ位解っている」

魏越は背を向けた。

「俺らの主はそういう男だ」

翌日夜半、軍議で魏越が強奪部隊として出撃した。

最初は渋っていた呂布だったが魏越の兵卒が飢えている、という言葉であっさりと出撃を許可した。

率いる兵力は騎兵千、そして空馬千。兵糧輸送の人夫は現地調達。目標は冀州から輸送される兵糧だ。済南を経由して定陶までの経路を狙う。

馬にも兵にも枚を咬ませている。移動は夜中のみ。間道を慎重に進み、とにかく曹軍に発見されない様に北東へ進軍する事、五日間。魏越は漸く曹軍の輸送部隊を発見した。目視した限りその数、牛車が千台余り。武装した兵は二百余りだ。呑気な事に欠伸びながらのんびり警戒する事無く街道を進んでいる。

襲撃は容易かった。魏越を先頭に騎兵は素速く敵兵を殲滅した。

人夫達は血の海を掻き分けたが包囲され、降伏した。

「雑魚は捨て置けい。牛車は捨てて兵糧を空馬へ、残りは焼き払うのだ」

空馬に十分な兵糧を載せ、人夫に誘導させた。

「さあ、あとは城まで突っ走るぞ！」

輸送部隊が襲撃されたと知れば曹軍の追っ手が来る。それに追い付かれれば元も子も無い。昼夜問わず全速力だ。

魏越は行きに五日掛かった道程を二日で帰還した。

夕陽が妙に禍々しい。もう直ぐ日没だった。

南城に辿り着いた時、既に兵達の限界が訪れていた様だ。騎馬が五百頭減っていた。

戦に於いて貴重な兵器である馬を食わざるおえない状況なら呂布はどうしているのか――。

魏越は即刻兵糧を全軍に配給すると呂布の分の麻袋を自ら担ぐと廃墟の政庁に急いだ。

「奉先様っ――！」

静けさの占める政庁を慌ただしく進み、室に入ってみれば案の定、呂布は以前に増して顔面の影を濃くしていた。

「なんとお劳しい姿に……」

魏越は麦の詰まった麻袋を音を発てて床に置くと礼をとった。

「魏越、曹軍の兵糧を奪い、只今帰還致しました」

「よく、戻った」

呂布はその肌だけで無く、声音からまでも張りを失っていた。

「先ずは兵達に飯を分け与えよ」

「既に配給しております、今頃炊事を開始している頃でしょう」

窶れ果ててもまだ兵卒を氣遣う呂布に魏越は若干の苛立ちを覺えた。

――こんな体になって……。あなたに何かあったら俺達がどうなのか考えているのか――！？

「成廉！ 早くこれを調理してくれ！」

「で、でも毒味しな、」

「そんなんよりも先ずは奉先様の口に何か入れなくちゃなんねえだろ！」

炊事が早速行われ、呂布に椀大盛りの麦飯が運ばれた。

「お前達は食わんのか」

「直ぐに食べます。さあ」

魏越としては兵糧の無い中、最初に呂布が食事をとれる事は当然だった。

呂布は箸に手を伸ばすと一口運んだ。ゆっくりと魏越の忠義を噛み締める様に二口。直ぐに呂布の箸は進む、進む。あっと言う間に平らげた。二杯目が装われる。

「俺達も夕餉に加わろうか」

「そうだね」

張遼の言に成廉も頷き、食事の準備が整われた。

不意に呂布が椀を落とした。麦飯が床に飛び散る。

皆の視線が集まる。

呂布も不思議そうにその手を見つめた。呂布の手は小刻みに震えている。次は箸を取り落とした。

「如何なさいまし……」

「っ!？」

魏越は呂布に駆け寄った。呂布は魏越の知っている顔をした。それは戦場で何度も見ている、敵兵が腹部を貫かれた時のそれと同じだ。

ただ、呂布の表情がそうなる事を魏越は一度も見た事が無かった。

「ぐおお ……」

「奉先様……!」

皆が呂布を取り囲む。誰も何が起きているのか理解出来なかった。呂布が苦痛に身を振る。軀の痙攣が止まらない。

魏越が励ます様に声を掛けながらさするが収まる兆しは見えなかった。

「ハァっ、……毒だ……越」

呂布が喘ぎながら魏越だけに聞こえる様に呟いた。直後呂布は血を吐瀉した。

魏越は全身に衝撃が走った。腹に底冷えする物が居座った。弱々しく首を横に動かしながら後退る。

「嘘だ……嘘だ」

口から己の物とも思えない声が漏れた。「……毒だ」
魏越の声に皆振り向く。

「一体、どうして」

成廉が目には涙を溜めて呂布を支える。そしてその視線は魏越に向けられた。それは疑惑の色だった。

「っ！ 俺じゃない！！」

「でも！ 毒味をしなくていいって言い出したのは越じゃないか！！」

成廉が珍しく吼えた。魏越は成廉からこんなに怒鳴られたのは子供の頃以来だった。

「二人とも止めろ」

張遼が割って入る。

丁度、報せを受けた文優と陳宮も駆け込んできた。

「ああ、なんて事だ……」

陳宮は似合わなくも取り乱す。

「静まらんかっ！！！！」

絞り出す様な声が室に響いた。何処にそんな余力があったのか、呂布だった。

「奉先さん！ 喋らないで下さい！」

呂布は成廉を無視した。血走る目が忙しく皆を捉える。

「早く兵達に通達せんか！！ このままでは全滅だぞ！？」

一番此処に居づらかった魏越は慌てて弾かれた様に飛び出した。

政庁から出ると炊事の煙があちこちから立ち昇っていた。馬に乗ると城内を駆け回った。

「兵糧に口を付けるな！！」

声が涸れるまで叫び続けた。

「食べた者は直ぐに吐き戻せ！！」

空は何時の間にかのっぺりとした暗雲がのし掛かっていた。

兵の半数以上が既に毒に口を付けていた。そこら中から苦痛に呻く声が広がる。魏越の叫び虚しく、兵達はバタバタと膝を突いていく。

「急報！！ 急報！！ 曹軍が四方より攻めてきます！」

伝令が報せながら魏越と擦れ違う。まるで呂軍がこうなる事を知っていたかの様な襲撃だ。

西門から火の手が上がった。火の番をしていた兵も毒に中つたのだろうか。闇に染まりだした城壁が煌々と照らされる。

——全て、俺が招いた結果だ。

魏越は手綱を持つ手を下ろし、頭を垂れた。体が、四肢が緊張して動かなかった。西門の火は勢いを増し、周囲の呻き声もまた大きくなった。

——何故、俺は一人だけ焦って食糧を手に入れようとしたんだ。奉先様も飢えを耐え凌いでいたと言うに、俺は奉先様への心痛を抑える事も出来なかった。良く考えれば皆だって、あんな奉先様を見て心を痛めていたはずじゃないか。それなのに俺は……。

迎撃態勢を執ろうと何処かで部隊長の号令が聞こえた。しかし恐らく指揮下の兵は微々たるものだろう。

——何故、俺は敵の輸送部隊に違和感を覚えなかったのか。曹軍にとっても貴重な兵糧がたったあれだけの護衛なはずが無い。やけにあっさりと発見出来たのはおかしいじゃ無いか。それなのに俺は……。

退却、と何処からか聞こえた。それも当然だろう。毒に冒された呂軍で闘えるのはせいぜい四、五千。曹軍は五万。多勢に無勢である。

——そして何故、俺は毒味をしなかったのだ。俺は何を焦っていたのだ。奉先様か？ 今の戦況か？ それとも何も出来ない俺にか？

「魏越様！ 大丈夫で御座いますか？」

伝令が魏越の肩を掴んで揺さぶった。気が付けば直ぐ側まで火の手が及んでいた。

「早く配下の方々に脱出の命を。南城は放棄されます」

「分かっておる」

上の空に答えた。

——俺は……

俺は兵達を殺した。

皆の希望と奉先様の天下を殺した。

そして今、奉先様は瀕死の状態だ。

俺は俺自身の目標を殺そうとしているのだ。

空を見上げると見えると予想していた星空は微塵も無かった。力の抜けていた拳が甦る。

——目標を殺せば俺も生きられない。

魏越は馬に鞭打つと自分の幕舎へ駆けだした。

毒に冒されなかった兵を中心に呂軍が東門から脱出を開始する。

「脱出します！ 隊列は密集陣形を採る！ 負傷者は陣の中央へ、騎馬を失った者は散って下さい！ 皆、生き延びるのです！」

矢継ぎ早に文優が指示を出す。

「呂布様、早く赤兎にお乗り下さい」

文優はそう言うが吐血の収まった呂布は全身の痙攣が収まらない。成廉と張遼は二人で呂布を支えながら赤兎に乗せた。

「文優殿！ 何処へ退却するのですか？！ 陳留ですか？」

呂布を乗せた成廉は既に白鈴も乗った雷音に跨って聞いた。しかし、文優は静かに首を振った。張遼が息を呑む。

「どう言う事だ！？」

「とりあえず泗水まで退きます」

「エン州を棄てるのか！！？」

「仕方ありません！！」

文優は責められて何かが吹っ切れた様に叫んだ。成廉も張遼も一

瞬、その気迫に圧される。

「私達の天下は消えて無くなったのです」

文優は顔を背けると兵の群れに紛れてしまった。

「文優殿……」

成廉は憐れむ様に文優を見送った。

「そういえば越は何処だ？」

張遼が辺りを見渡しながら呟いた。丁度、伝令が駆け込んできた。

「たっ大変です！！ 魏越殿が退却命令を無視して百騎余りで敵軍に向かって行ってしまわれました！」

「！！！！」

成廉は息が詰まった。

「あいつ！ まさか……討ち死にするつもりか！？」

張遼の言が胸に突き刺さる。

——越の奴、この責任を一人で背負い込むのか……！！

「奉先様！ 白鈴を頼みます」

「へっ？ ちょ……」

きょんとしている白鈴を抱き上げると無理矢理赤兎に跨らせた。途端に赤兎の毛が逆立つ。蹄で大地を蹴り、怒りを露わにする。赤兎は呂布以外の者に触られたがらない。

しかし今は緊急時だ。我慢してもらうしかなかった。

「奉先さんと一緒にいれは絶対安全だ」

有無を言わず白鈴の手に赤兎の鬣を掴ませた。兵達は命に代えて呂布を護ろうとするだろう。それならば赤兎の上は一番安全だ。

「我らが主・呂布に成り代わって命じる！」

呂布を取り巻く蝗紅隊は半減していた。よく知る顔も幾らか見当たらない。

だが、成廉には心を痛める暇が無かった。

「身命に代えてでも奉先さんを死守せよ!! 我ら、天下無双の飛将と共に在り!!!」

「御意!!!!」

「行こう、遼」

「ああ」

成廉と張遼はそれぞれ百騎程連れると、皆と逆方向へと駆ける。仲間の死を目の当たりにし、呂布もまた死にかけているというのに蝗紅隊は笑顔で二人を見送った。

腰の引けた歩兵一隊が意を決して目標に跳び掛かる。が、全員胴から上下に分離した。

魏越は白の戦袍が返り血を浴びて染まろうとも気にも留めなかった。呂布の方天戟を模した大戟を頭上で振り回して構える。

「どうしたあ! 曹軍は十倍の兵力で殿百騎も呑み込めんのか!?!」

追従してきた騎兵は全滅した。残って足止めしているのは魏越一人。しかし、負ける気がしなかった。武威が溢れ出す。曹軍の歩兵はそれに怖じ気づいていた。

曹軍の校尉の一人が迂回しようと別方向へ馬を鞭打つ。

「させるかよ!」

魏越は足下に刺さった剣を手にとると無造作に投げつけた。一拍置いて校尉の半身が宙を舞う。それを見て曹軍は尚更怖じ気づく。

「何をしている?」

曹軍が二つに裂けた。中央に出来た道を一騎の将が駒を進める。左目に当てがわれた布は血が滲んでいた。先の濮陽で目を射られた

夏侯惇だ。

「曹孟徳に従う者に弱者は必要無い。たった一人の男に恐れを抱くとは笑止千万、自害しろ」

淡々と告げながら夏侯惇は矛を構えた。

「片目で俺とやろうってか」

夏侯惇は鼻で笑った。

「片目を無くして漸く同じ力量だ」

「飛将の麾下を舐めんなよ」

魏越は駒を寄せると夏侯惇目掛けて戟を振り下ろした。一撃一撃に激情を乗せて。夏侯惇は隻眼とは思えない対応を見せた。

——確かにかなりの使い手と見た。

反応も一撃の重みも違う。あわよくば、と首を掻き斬ろうとする。

夏侯惇に励まされた様に曹軍の兵達も魏越の隙を狙い突いてくる。

脇腹を一筋刺し傷を許したが、魏越は夏侯惇と撃ち合いながら周囲の兵の首も飛ばす。

——強い。……だが、これならどうだ！

魏越は夏侯惇の左側から集中的に斬撃を繰り返す。虚と実を組み合わせながら攻撃すると、左側の視力がないせいかわ反応が若干鈍る。遂に夏侯惇の矛を弾き上げたその隙を捉えた。魏越の戟が腹部を挟む。しかし、浅い。

「ぐ……」

「覚悟！」

とどめを刺そうと戟を振り上げると左右から別の将が飛び出した。双鉄戟の切っ先が胴を掠る。魏越は飛び退いた。

「夏侯將軍、助太刀致す」

「惇、無理は禁物だぞ」

典韋と夏侯淵だ。相変わらず典韋は怪物の様な形相で怪物の様な戟を両手にぶら下げている。

「一角の将に御大層な事だ」

「軽口叩けるのも今のうちだぞ」

典韋と夏侯淵は同時に打ち掛かってきた。典韋の常人離れの膂力が襲い掛かる。

必死に受け止める魏越だったが次元が違う。騎馬ごと吹き飛んだ。地に投げ出される。夏侯淵の剣が魏越に向けられる。

「終わりだ、若いの」

——我ながら呆気ない最期だな。

魏越は静かに瞼を下ろした。

「越——!!」

成廉と張遼の声が聞こえる。喧しい蹄の音は雷音だ。魏越は目を開けた。

「来るな!」

来たら二人も死んでしまう。そうは言っても心の隅に嬉しさが込み上げる。

典韋と夏侯淵は新手に向かう。夏侯惇が成廉を見つけて殺気立った。

慌てて魏越も騎馬に跨る。

「越! お前は充分頑張った。奉先様はもう無事に退却した、俺達と還ろう」

「越! 早く!」

成廉と張遼は二人掛かりで典韋の猛攻を止める。そうこうする内

に軀を張って夏侯淵を留める騎兵はどんどん減っていく。

二人に駆け寄る魏越は擦れ違い様に典韋の騎馬の脚を薙払った。典韋が転げ落ちる。その隙に三人は曹軍に背を向け逃げ出した。夏侯淵は騎兵に阻まれ追う事が出来ない。

夏侯惇は――、三人目掛けて追いつがる。復讐心に燃えるその目が捉えているのは成廉ただ一人。

「片目の借り今返してやる！ 死ねい！！」

夏侯惇は矛を投擲した。唸りを上げて成廉に迫る。

――まずい、……。

考えるより先に軀が動いた。魏越は騎馬ごと雷音にぶつける。

「！？ 越っ！！？」

光の筋が魏越に吸い込まれた。

空模様が怪しい。今にも雨が降りそうな天気だ。

南城から脱出して一晩。朝陽が雲で見えない中、呂布は泗水の畔に佇んでいた。

周りに居るのは僅か千騎余りの兵のみ。黒ずくめの蝗紅隊もちろほら見える程度。辺りは疲れ切った脱力感に覆われていた。

文優、陳宮、高順は直ぐ追い付いてきた。しかし、成廉、魏越、張遼の姿は無い。続々と到着する兵達の中には呂布の元に辿り着いた途端、力尽きる者が少なくなかった。

それが呂布を不安にさせた。

——この胸に居座る異物感は何なのだ？ 毒の所為か？
それともこれが不安と言うものか……、この俺が不安だと？

初めての感情だった。

今まで自信に溢れていた訳では無い。ただ、不安を覚えなければいけない程、物事に重大性を感じた事が無かったのだ。

呂布は西の地平線に目を細めた。白鈴が気遣う様に呂布を見上げた。

「あっ！」

白鈴が西の一点を指差す。呂布にも見えていた。小さな砂塵が一筋。次第に大きくなり三つの点が確認出来る。呂布はほっと一息吐いた。

三人とも血塗れだ。真白の戦袍だった事が全く分からない程に染まっている。

ここで呂布は奇妙な事に気付いた。何か違和感が有るのだ。三人の顔が見てとれる程になって呂布の全身に衝撃が走る。躰が震えた。それは毒に因る痙攣では無い。

成廉は嗚咽を洩らしながら泣きじゃくっている。張遼は涙で頬を濡らしていた。

そして魏越の背には在ってはならない物が屹立していた。その顔に生氣は無い。

「なん……どうし……て」

呂布は赤兎を寄せた。上手く手綱を捌けない。

「越……！　しっかりしろ！」

「越、着いたよ、ほら！　奉先さんだよ」

魏越は騎馬から降ろされると横に寝かせられた。

「魏越！」

魏越の四肢は全く力強さが無かった。

魏越が弱々しく呂布を見上げる。口が微かに動いた。

「何？ もう一度言え」

呂布は跪くと魏越の顔に近付いた。

「至らぬ、……部下で申し……訳……ありません」

「馬鹿野郎」

掠れた声にヒューヒュー風音が重なる。矛は完全に魏越の肺を貫通していた。

「主に……毒を献……上するよ……うな部下……死んで当然……です」

「馬鹿野郎」

「ずっと……奉先様を追い……かけて、遂に追いつけ……ませんで………した」

「バカ野郎！」

騒ぎを聞いて兵達が集まる。皆決まって様子を覗いた後に誰もが魏越が絶望的な状態である事に首をうなだれた。

暫し沈黙が流れる。成廉の嗚咽と張遼の鼻を吸る音と魏越の気管の風音だけが響く。

「しょ、將軍！ あれを！」

兵の一人が声を上げた。空気が濁って定かでは無いが、明らかに軍勢の砂塵が見える。曹軍の追っ手だ。この速さでは残軍の回収もままならない。

「呂布様、お早めに……」

躊躇いがちに文優はそう言い残すと泗水を渡る手筈を整えに行ってしまった。

「奉……先様」

「何だ？」

「最後に俺の……願いを……聞き届け……」
魏越の口から赤黒い液体が湧き上がる。

「いいだろう、何だ？」

「剣を……奉先様……の剣を頂……きたい」
「分かった」

呂布は腰に佩いた一振りの剣を取ろうとした。しかし、毒で手が痙攣して紐の結び目を解く事が出来ない。

傍に立っていた白鈴が代わりに解き、魏越に手渡す。すると魏越の手が白鈴の頭に伸びた。

「廉を……頼んだ……ぜ」

「っ——」

魏越の口周りを拭いて、目に涙を溜めていた白鈴は遂に堪えきれなくなり、同じく泣きじゃくる成廉に飛び付いた。

魏越は剣を愛おしそうに抱えると、死ぬとは思えない安らかな表情となった。まるでその剣が己への『赦し』の証の様に。

「俺は……無理です……行っ……て下さい」

目を閉じたまま魏越は囁く様に言った。呂布が立ち上がる。何時の間にか雨が降り出していた。

「皆、行くぞ」

「嫌だっ！」

成廉は魏越に縋って動こうとしなかった。

「前……に進め、廉」

魏越が呟く。

「嫌だ！ 嫌だ、いやだあ。越、一緒に行こう」

魏越は返事をしなかった。張遼が思わず顔を背ける。

呂布は成廉の肩に震える手を置いた。

「武人らしく、『武』の終焉を受け入れてやるんだ」

呂布の頬を雨が伝った。

泰山に臥す

泰山。

それはエン州、豫州、青州、そして徐州の州境に跨る山々の中心にある。深林と断崖が広がり、此処ら一帯は古来から仙人が住んでいると噂されてきた。

人を寄せ付けないこの泰山を根城に独立する勢力があった。

朝廷は彼らを『泰山賊』と呼ぶ。

任命された訳でも無いのに土地を領し闊歩しているのだから、叛逆として扱われて当然だ。

勿論、朝廷は太守、県令に捕縛するよう命じた。しかし、泰山賊は付近の県令を言いくるめ、泰山の東・瑯邪郡開陽を勢力下に収めるに至ったのだ。

全て泰山賊頭目の仕業である。姓を臧、名を霸、字を宣高と言う。

臧霸は泰山の西、泰山郡華県の出自だ。若い頃から武侠で名を馳せた。齢十八の時、父親が太守に罪を着せられ逮捕された。臧霸は当時から手下を百名程抱えており、官舎に連行される前に父親を救い出した事がある。臧霸は父親と青州東海郡へ逃れた。太守は臧霸らの行方を調べたが、地元の人でその行く先を密告する者は一人としていなかった。

黄巾の乱が勃発した際には徐州刺史、陶謙に属した。そこで功を上げた臧霸は陶謙に認められ、その地位を確固たるものにしたのだ。徐州は各地に点在する土豪の力が他の州に較べて強い。その中でも臧霸の泰山賊は強大だった。

一九四年、エン州で曹操と呂布が争う中、徐州牧に昇進していた陶謙が死んだ。

陶謙の息子は主の器では無かった。そこで牧を代任したのが徐州に援軍として屯営していた劉備だった。

臧覇は陶謙が死んだ事で完全に独立した。

劉備との関係は中立が保たれたが、他の土豪は劉備に従おうとしなかった。劉備は度々土豪との仲介を臧覇に依頼したが、臧覇の対応は一貫して中立だった。

そして翌一九五年。正に徐州内の勢力図が群雄割拠となる中、ある客が泰山に辿り着いた。

エン州の覇権争いに負けた呂布である。

「呂布殿、医者が参りましたぞ」

呂布の帷幕に臧覇が医者を伴って、やって来た。

「すまない。奥へ」

剣の鞘を突いて立ち上がる呂布を見て、成廉は直ぐに肩を貸そうとした。

「よい、皆此処で待機しろ」

成廉は毒に冒されながらも愚直なまでに補助を断る呂布に少しばかり呆れながら、奥の寝台に向かう呂布を見送った。

魏越が死に、泗水を渡った呂布らは徐州に入った。

そこで遭遇したのが泰山賊だった。呂布らが誰なのか判らなかった彼らは丁度良い獲物と言わんばかりに金目の物を奪おうとしてきた。

しかし、弱っていても呂布は呂布。十人程を斬り捨てると頭目に面会を求めた。そこで臧覇と出会い、更に呂布と名乗ったのである。臧覇は部下の愚行を詫び、呂布に出来る限りの協力を約束した。お蔭で食糧物資と寝床を提供してもらい、医者まで呼び寄せてもら

えたのだった。

成廉はどうして臧覇がここまで手篤くもてなすのか理解しかねた。呂布を匿うという事は則ち曹操に敵対を表明した事になる。

徐州は先年曹操に攻め込まれている。青州兵と呼ばれる黄巾残党の中でも精強な若者で編成された先鋒の猛攻を、曹操は敢えて御さなかった。

結果、十数を超える城を落とし、徐州側の被害は住民を含めて万を超えた。死体で泗水を堰止められる位だった。

勿論、臧覇もその有り様を目の当たりにしているはずである。曹操の強さも十分理解しているはずなのである。

——なのに何故……？

成廉は絶望で頭を抱えて座り込んでいる皆の中、ぽつんと立っている臧覇に近付いた。

「臧覇殿は、」

「うん？」

臧覇は組んでいた逞しい腕を解くと好奇の目を向けた。此方から話し掛けるのが初めてだからだろう。

「臧覇殿は何故ここまで協力してくださるのですか？」

「そうさなあ……」

臧覇は呂布とほぼ同年代だ。筋肉質な体格と漂わせる空気は荒々しい。本質は明らかに『武人』だった。そして、目は際立って柔和だ。

成廉は何となくこの優しい目が無ければこの男は人の上に立っていなかった気がした。

「部下の責任を取るのが主ってものだろう」

「それだけの些事でここまで出来ますか？ 兵達の食糧から寝床ま

で世話してくれる程に？」

臧覇は驚いた様に目を開けた後、目で笑い掛けた。

「儂は君の主を尊敬しているよ」

またか、と成廉は思った。

最強の『武』はこの乱世に於いて呂布の一番の美点だ。しかし、逆に言えば呂布は『武』の一面しか見られていないのだ。

「天下の人々は奉先さんの武しか見ません」

「儂は少し違うぞ」

成廉は顔を上げた。

「確かに武を見ているが、儂は呂布殿の武の『在り方』を見届けたのだ」

臧覇は成廉も促しながら胡床に腰掛けた。

「北の辺境に最強と称され、匈奴からは飛将の再来と畏れられる武人あり。それが儂の初めて知った呂布殿だった。

洛陽で丁原を殺し董卓に仕えたかと思えば今度はその董卓を殺し、」

「それは、」

臧覇が口に指を当てた。

「天下に号令するかと思えば都を棄て、放浪した果てには曹操に喧嘩を売る」

臧覇の目が輝いた。それはやはり今まで呂布を見る群雄と変わり無く感じた。

「自分勝手に破天荒で天下を飛び回る、別の意味で正に『飛』将と言えよう。だが、それが呂布殿という人間であり、それが呂布という名の武なのだ。

儂は今まで呂布殿を見続けてきたし、これからも最後まで見続けるつもりだ。そんな存在である呂布殿が傷付いて儂の下に辿り着いたのだ。誠心誠意を尽くすのが当たり前だろう」

自分とはまた別の視点で呂布を見ている者がいる。それはごく当

たり前の事で意外にも気付きにくいものだった。

「要は己のやりたい事をやっているだけなのさ。これが答えでは不服かね？」

「いえ……」

成廉は目を逸らした。

「急に無礼な事を聞いて申し訳無いです」

臧覇は不思議そうに成廉を見た。

「君は……」

何かを臧覇が言う前に奥の幕間から医者が出た。
一同顔を上げる。

「奉先様は！？」

張遼が駆け寄ったが、医者は静かに首を振りながら言った。

「成廉様と文優様はいらっしゃいますか」

「成廉は此処です。が……文優殿は」

「崖の方におったぞ」

高順が帷幕の外を示した。

「將軍様は診断をお聞きなさって、最初に参謀長と従者長のお二方に説明を聞いてもらいたいとの事です」

張遼は戸惑いと疑問の入り混じった視線を成廉に向けてきた。

——どうして張遼を抜かしたんだ……？

「あの……文優殿、呼んできます」

よく分からないまま成廉は帷幕を飛び出した。

文優は暫く林を抜けた開けた所で崖を見下ろしていた。

「文優殿、」

風が強い。崖っぷちで揺れる文優は今にも落ちるのではないかと思えた。

「文優殿！」

成廉がその腕を掴んで漸く此方に気付いた様だ。成廉を見る目もどこか虚ろだ。

「あ……何でしょう？」

「奉先さんがお呼びです」

「そうですか」

文優は直ぐには動かなかった。

「大丈夫ですか？」

「少し考え事を……」

二人の間を沈黙が駆けていく。崖から見える景色は森が続いていた。朧気ながらその先には畠も見える。しかし実りは無く、焦土が広がっているだけだ。

「成廉殿は何故、呂布様に仕えているのですか？」

不意に文優が口を開いたかと思えばそう問うてきた。

「何故って、今更……」

そこでよくよく考えてみると文優に呂布に仕える理由を話した事など無い事に気付いた。

「それが天命だからです」

「天命？」

文優は虚ろに景色を眺めたままだった。

「奉先さんに仕える事だけではありません。『呂奉先』という存在自体が僕の天命なのです」

「天命……フフ、ハハハハッ！」

乾いた馬鹿にした声で文優は笑い出した。こんな文優を成廉は見ただ事が無かったが、戸惑いよりも己の生きる意味を馬鹿にされた気がして怒りが先行した。

だからと言って感情を露わにしたりはしない。成廉は昔と比べて随分と己を抑えられる様になった。

「可笑いですか」

「ええ、可笑的い。いや、愚かですよ！」

天命にのみ従い、生き、そして死ぬ。人間とは本当に愚かだ」

今度は文優の自嘲を含んだ笑みに何となく自分だけに向けられた言では無いと成廉は感じた。

「それなら文優殿は何故奉先さんに仕えているのですか？」

「……」

文優から表情が消えた。まるで吹けば飛びそうな位に覇気が失せてしまった。

「……天下」

ぽろりと文優の口から零れた。

「私は天下を統べる為に生きてきた」

「でも、奉先さんの天下は潰えてしまった、そう文優殿は言いましたよね」

文優はその場にへたり込んだ。

「ならば董卓や王允の時の様にまた別の主を仰げば良いじゃないですか」

言っただけじゃない。そう良心が止めるのに成廉の口は動きを止めなかった。

「今の奉先さんは決して天下への近道ではありませんよ」

文優の唇が震えている。成廉は自分が自分で無い様な気がした。

「そうだ、その通りだ！」

文優の表情が崩れた。

「それなのに私は、私はただ天下を統べたかったはず、なのに……今は呂布様との天下しか見えない」

文優は弱々しく呟いた。文優は自分に敗北した。

——そうか、……文優殿も奉先さんに天命を見出してしまったのだ。

平生の文優はずっと天命を信じ、従う者を心底嘲笑ってきたのだ。それなのに己の志を超える程の天命の出会ってしまった。自責自虐、戸惑い、後悔、……、沢山の葛藤が文優を襲ったに違いない。

「呂布様は天下を治むる器では無い。その上に猛毒に冒されこれからどうなるのか見当もつかない。……それでも、望みは薄いと解つていても頭に描かれるのは呂布様の天下だ」

文優は今まで誰にも打ち明けずに独り自問自答を続けてきたのだろう。

「私は、私は……どうしたらいいのだ」

「……」 遥かに年長の者が足に縋りつく。

成廉には文優にとつての『答え』など解るはずも無かった。それでも成廉はへたり込む文優に手を伸ばした。

「行きましょう。僕達の天命を受け入れに」

成廉が文優を伴って帷幕に入ると皆の視線が集まる。張遼と目が合った。ぎこちなく頷くと成廉と文優は奥へと向かった。

呂布は寝台に横になっていた。成廉が思っていたよりも毅然としている。診断が思わしくなければもっと気落ちしていると思っていた成廉は一安心した。弱気など一欠片も無い、晴れ晴れとした顔つきだ。

「掛けろ」

呂布が顎でしゃくった胡床に腰掛けると医者は神妙な面持ちで口を開いた。

「宜しいですか？」

「構わん」

「では、単刀直入に言わせていただきます」

医者が生唾を呑む音が聞こえる。医者の口から出た言は予想に反していた。

「將軍様は……保って一、二年の命です」

成廉の世界が急に歪み始めた。

「將軍様は河豚の毒に冒されております」

「……ふぐ？」

冷静になろう、そう心掛けても声がうわずった。

「河の豚と書いてふぐと言います。黄河で漁師が発見したのが最初で、猛毒が有り食用に全く適さないために我々が目にする事は殆どありません。私も河豚の猛毒を目の当たりにするのは初めてでございます」

医者と言が機能しなくなった頭蓋に響く。

「私の師は修行の為、全国を巡回されております。師が申すには渤海の河豚の肝を乾燥させると、僅か一匙であらゆる生物を死に至らしめるとか。

恐らく兵糧にはこれが混入していたと思われます」

成廉も文優も口を開けなかった。

——曹操の仕業か……！！

成廉はきつく唇を噛み締めた。文優は既に放心寸前だ。

「河豚の毒は四肢と筋肉を司る器官を蝕みます。本来なら犠牲になったと言う兵達の様に苦しんだ後、心の臓に毒が達して死んでしまいます。」

が、將軍様は強靱な肉体と運に恵まれました。摂取した毒は致死量以上と思われませんが、臓腑の何処かにて毒が滞っていらっしやる。奇跡的に命を取り留めてはおりますが毒が心の臓に達すれば即死で御座います」

成廉は吸う空気が重たく感じた。胸が苦しい。

「何時、心の臓に達するか判りません。しかし、奇跡的に毒が心の臓に達しなくても毒は時間と共にジワジワと全身に広がります。ですから余命は長く見積もって一、二年で御座います」

「解毒方法は？」

「有りませぬ」

聞かなければよかったと成廉は後悔した。

「それでは奉先さんは……死ぬのですか？」

「遠からず」

そんな、と言ったつもりだったが口からは重たい息しか出て来なかった。

「すまんが」

呂布が口を開いた。

「三人にさせてくれるか」

「畏まりました、くれぐれも激しく体を動かす事の無い様にしてくださいませ。これは気休めにしかありませんが四肢の痙攣を抑える丸薬で御座います」

呂布は頷いた。

「代金は陳宮に請求しろ」

「それでは……」

医者 は 憐れみを含んだ目で成廉と文優を見ると静かに帷幕を去っていった。

帷幕内に沈黙がのし掛かる。成廉は直ぐにでも大声で叫びながら飛び出したい衝動に駆られた。が、抑えた。

——越の次は奉先さんか……。

まるで大切な者が次々と離れようとしている様だった。

——天よ、これも僕の天命だと仰るのですか？

「なんだ、二人とも。この世の終わりと云わんばかりの顔だな」

呂布は全く変わらず、何時も通りの調子で言った。

「人は何時か死ぬ。俺だって人間だ、この死は早いとも遅いとも思
つとらん」

呂布が微笑んだ。それはついさっき死の宣告をされた者の表情と
は思えなかった。

「でも、僕はまだ……何一つ奉先さんから学べておりません」

「前も言っただろう、最強の武の答えは己自身しか見つける事は出
来ん」

呂布は小さく息を吐いた。

「二人にこんな遺言じみた話の為に呼んだ訳では無い。今後の我が
軍についてだ」

呂布は成廉と文優を見比べた。

「お前達はどうする？」

成廉にとつてそれは愚問だった。

「僕は死ぬまで奉先さんの従者です」

呂布はそうか、と小さく呟いて、今度は文優に促す様な目を向け
た。

「文優、俺の未来は見えん。天下統一の志は果たすなら俺の下から
去っても良いのだぞ」

「私も最後まで呂布様に従います」

力の抜けた、しかし何処か揺るぎない決意を匂わす口調で文優が
答えた。

「天下を諦めるのか」

「いえ。……呂布様、天下を狙いましょう」

「俺はお前の人生を食い潰すつもりはない」

「人は何時か死ぬ。そう仰ったのは呂布様ではないですか。戦場に生きる呂布様は常に死と隣合わせだったじゃないですか。今更何時お亡くなりになるか、だなんて大した問題じゃありません。これまで通り、私は呂布様の軍師で御座います」

「確かに己の死に場所は戦場と心得ている。だがその死に様の為にお前達の未来まで奪いたくないのだ」

天下に武のみ取り柄と謳われる最強の武人の言とは思えない。

だが成廉は解っていた。呂布は最強が故に己が皆に無理をさせてないか、と周りを密かに気遣う男だ。

成廉は初めて呂布に出会ってから今までの経験からそれを感じていた。それが常に呂布が軍の先頭に立つ理由でもあるのだ。

「お前達は俺に最後まで追従すると言う。それならば俺が死んだらどうするつもりなのだ」

成廉は文優と顔を見合わせた。そして静かに微笑む。

「その時には共に戦死します」

「!!?」

「奉先さん、奉先さんは僕の天命なんです」

「……天命……」

「奉先さんに仕え、奉先さんのために生きる、それが僕の天命なのです。そして天命を失えば生きてはいられません」

「だが、」

「奉先さんを一人で死なせたりはしません。安心してください、僕達が勝手に死ぬと言っているのです」

「全く……勝手だ」

苦い物噛み締める様な顔で呂布は吐き捨てた。

「どうせ俺が死んだ後の話だ。もう死んだ後は知らん」

少し諦めたのか呂布はそれ以上止めようとはしなかった。

「またしても話が逸れた。俺が話したいのは我が軍の今後だ」

「分かりました」

文優は姿勢を正した。

「まず、呂布様の命に関しては別状無し、毒に冒されたが時と共に全快すると通達します。我が軍は呂布様を中心に成り立っていますからこの事が洩れれば士気に大きく関わります。外部なんかには洩れたなら元も子も有りません。どうか味方にも内密にお願いします」

念押しする文優に成廉は頷いた。

「して、これから何処に向かう？ 何時までも泰山で世話になる訳にもいくまい」

「この絶望的状况で天下への光が見えるのは一つだけ、」

あくまでも文優は呂布の天下に拘った。

「州牧が代わったばかりの徐州。そこが次なる旗揚げの地です」

「徐州だと？ しかし、その牧はあの劉備だ。一筋縄ではいかんぞ」

「重々承知しております。劉備は土豪からまだ支持を獲られてないのか徐州は混乱の様子。更に南からは寿春の袁術が北上の期を窺っています。徐州に隙が出来る事は間違いございません」

目に静かな光を宿して文優は言った。

「呂布様、もう一度天下を狙いましょう」 「……いいだろう」

それはこの上無く愚かで虚しい行動だった。それでも敢えて誰も口にしなかった。

騎馬四千全軍に呂布の偽りの容態が通達された。

勿論、張遼も例外では無かった。十年以上苦楽を共にしてきた戦友がそれを知らない事はおかしい。成廉は告白するべきだと訴えたが、呂布がそれを許さなかった。

・

・
「あいつはそんなに強くない」

「そうでしょうか？ 少なくとも遼は僕よりは強いと思います」

「俺の言う強さとお前の言う強さは違う」

武勇が、では無く心が、だ。張遼は繊細過ぎる、多感な心の持ち主だ。魏越の死を目の当たりにしてあいつの心は弱っている。

今、俺の命があと一、二年と告げれば、それがあいつにとってどれだけの衝撃になるか……」

「越の事は……僕だって」

「張遼の心は孤独だ」

「え？」

「辛い時、頼れる者が側にいたとしてもあいつは絶対頼ろうとはしない。辛さや悲しみ、心の弱みがあれば寧ろそれを隠そうと必死に普段通りを装おうとする」

「そう……なのですか」

「多感が故に張遼は将として良く気付く資質がある。何時だって本音や弱音を吐かない、我慢強い男だ。だが人の心にも限界というものがある」

「……」

「俺は……怖いのだ」

「えっ？」

その時の呂布は何時に無く情け無かった。

「成廉、お前は俺に死ぬまで付いて行くと行った。だが、張遼はどうだ？」

「……」

「俺の命が少ないと知ればあいつは俺の下を去るかもしれん」

「そんな事……！」

「張遼が何故俺に仕えるか、お前は知っているのか？」

「それは……」

「お前と魏越は純粹に俺の武への羨望からだろう。だが、張遼は何を思い、俺に仕えるのか分からんのだ。あいつはなかなか本心を見せないからな」

「……」

「馬邑でお前達に出会って今まで当たり前の様に過ごしてきた。魏越が死んだ時、悲しかった。胸が張り裂けそうだった。が、しかし恐れなど抱かなかった。

人は何時か死ぬ、魏越は最期まで俺の部下だった。だが、張遼はどうだ？

あいつが俺から離れるとしたらそれは死ぬ時では無く、呂奉先を見捨てた時だ。だから怖いのだ。共に過ごした時が長ければ長い程、恐怖は大きくなる」

「遼はそんな男じゃありません!!」

叫びは届かなかった。

・
・
・

張遼が呂布に仕える最初の動機は至極単純で、成廉と魏越が呂布に仕えるから、というものだった。

それは成廉も重々承知している。問題はそれが今でも変わらぬのか、である。

魏越が死んで、特に張遼は変わらなかった。少なくとも表向き成廉にはそう見えた。表面上何の変化が無ければ無い程、ますます内心何を思うのか分からない。

それを知る方法は簡単だ。本心を普通に訊ねれば良いのだ。幼い時から家族同然に育った仲で聞けない事などあるはずが無い。が、なかなか話を切り出せない。

意識すればする程に切り出せなかった。それが何故か己にとっての張遼の存在を表しているようで、情け無く悲しかった。

成廉もまた、怖くなったのだ。

もし、張遼に呂布への忠誠心を問い、その答えが呂布の想像する様なものだったら、その時はどうすればよいのか。

成廉からしてみれば呂布も張遼も家族同然なのだ。

――もし、遼が奉先さんを離れると言ったら……僕は……。

成廉に答えは判らなかった。

「……れ……ん、廉々、廉々ってば！」

「へっ!？」

白鈴が裾を思いつきり引っ張っている。

「隊列からはみ出しちゃうよ」

周りを見渡すと確かに雷音は街道から外れようとしていた。どうやら考え事に没頭し過ぎた様だ。

「大丈夫？」

「う、うん、ありがと」

「本当に大丈夫？」

心配そうな大きな瞳が見上げる。

「大丈夫、心配要らないよ」

そう、と少し落胆した声が返ってきた。

呂軍は徐州に向かって泰山を発った。突然の出立に臧霸は驚き、まだ滞在する事を勧めたが呂布は丁重に断った。そしてエン州から辿り着いた騎兵四千余と徐州を目指す。

成廉は未だ張遼の本心を知る事が出来なかった。

名も無き軍師

徐州、州都・下「丕β」。

「はあ？　呂布だと？」

「はっ！　泰山方面から街道を進軍しておりますが武装は解いております」

「なんでだ？」

劉備はとにかく不機嫌だった。悪い事ばかりが頻発するからだ。

陶謙は先年に曹操が徐州より撤退してから劉備を豫州刺史に推薦し、劉備は小沛に駐屯していた。しかし陶謙は間もなく病死してしまった。

陶謙には息子がおり、てっきりその息子が州牧を継ぐと思っていた。そんな時、政庁に召集させられた劉備に待っていたのは徐州牧の代任という大役だった。

州牧という官職は州刺史とは比べものにならない。州刺史の任務は各郡の太守の監督。兵も持てるのは私兵のみである。

対して州牧は州全体を統轄し、州兵を率いる権限まで有する。思ってもいない話である。この乱世に於いて天下に名乗りを上げる一番の近道である。

しかし、問題はそこが徐州だと言う事だ。劉備からしてみれば迷惑極まりなかった。

何故なら徐州は土豪の力の強い州。陶謙が死んだ途端に叛乱、とまではいかずとも連絡の途絶える城が相次いだ。要するに新たな州牧に見知りもしない新顔が就任するのが気に入らない、と言う訳である。

それでも陶謙が遺した遺言は

『劉玄德以外に徐州は治められない』

と言う物だった。

この遺言を直接承った者が徐州別駕であり、土豪の中でも数少ない劉備の協力者である糜竺である。字を子仲、代々商業でも富を得て、小作人は一万も抱える大土豪である。

文武に長けた糜竺に対して弟がいた。名を芳と言う。糜芳は統率力があり、将として劉備に仕えた。

この二人の協力と劉備の人柄もあって、土豪の件は約一年の歳月を掛けて解決した。ある者は劉備の人柄に惚れ込み、ある者は糜竺の説得に応じた。

しかし、半数の土豪は中立という立場止まりで積極的に協力する者は少なかった。劉備の魅力を理解出来ない者も勿論いたのだ。それでも敵対勢力が足元からいなくなっただけましだった。

州の外を見回せば厄介な事は沢山あった。その中でも一番大きなものが直ぐ南に居座る袁術だった。

袁術は陶謙が死ねば徐州が己が物になると考えていたのだ。

二つの『袁』で分かれるこの乱世で袁術は陶謙の宗主だった。

袁術は劉備が徐州牧を継ぐという報せを受けて激怒した。劉備はまだ名の知れた群雄として数えられていなかった。そんな劉備が州牧に就任するのは異例であり袁術は己に州を献上して当然としていたのだ。

更に袁術を怒らせたのが劉備の対応だった。袁術を宗主として仰がない、と通達してきたのだ。袁術からしてみればそれは叛逆行為だったのだ。徐州と揚州の州境では袁術の兵が展開され、緊張状態が続いていた。

呂布出現――。

下「不β」の政庁はその報せだけで慌ただしくなった。ただ、劉備だけは冷静だった。と、言うより面倒だった。群臣が飛将だ飛将だ、と騒ぎ立てるのを鎮める気にもならなかった。土豪の件だけで

劉備は疲れていたのだ。

土豪達と宴会を開き、杯を傾け合い、音曲を奏でるのは楽しいが、宴会に招くだけで土豪が協力してくれたら苦勞しない。

「州牧様、呂布は危険です、早々に討伐の軍を上げなされ」

「何を言う！ 呂布は天下に轟く武神。殿、触らぬ神に祟り無し、様子を見守る方が宜しいでしょう」

「いや、寧ろ此処で保護し、恩を売っておくべきです。あの男は使い様によっては強力な武器となります」

「それは使い方を間違えば破滅を導きかねん！」

「いやいや、殿の器量なら為せるはずだ」

皆、言いたい放題になってしまった。関羽は臣達を放っておく劉備に呆れ、張飛はどうすればよいのかオロオロするばかり。糜竺は静かに顰めっ面の劉備を見つめていた。

その時一人の男が声を上げた。

「黙らんかい！！！」

どら声に群臣は一斉に声の方を見て、あから様に厭そうな顔をした。

声の主は簡雍だった。

字を憲和、幽州の拳兵の頃から劉備に付き従う男である。劉備は深い信頼を置いていて、簡雍にだけ字で呼び捨てする事を許していた。

簡雍は人情味溢れ、洒脱な言動から劉備同様、民や将からは人気がある。ただ、元来劉備と共にごろつき同然の生活をしていた為か礼儀というものを知らなかった。お蔭で知識人からは顰蹙を買っている。

「憲和、勝手に言わせとけよ」

劉備の言葉に群臣はムツとする。

「そうじゃない。玄德、続報だ」

簡雍が指差した先には困惑した伝令が立っていた。群臣の喧騒に吞まれて気付かなかったのだ。劉備は指で招くと報告させた。

「報告！ 徐州南部にて袁術軍が侵入！

確認されているだけで三手一万に及びます。各地の土豪が抵抗して凌いでおりますが既に食糧庫が二カ所落とされ、救援を要請しております」

群臣にどよめきが広がった。

「北に飛将、南からは袁家、一体どうすれば良いのだ」

ただ、愚痴を吐くばかりで大した策も生まれない群臣。

その様子を見て劉備は溜め息を吐いた。

「今は呂布より袁術が厄介だ。誰か我こそはこれを討たん、と言う者はいないか？」

劉備が問うと、一同黙り込んだ。

「……だろうな」

攻めて来たのは一万とは言え、袁術は十万を超す軍を抱える大勢力。明らかな罠である。ノコノコ討伐軍を出せば叩き潰されかねない。

「大兄、俺が行こう」

名乗り出たのは張飛だった。だが劉備は首を振った。

「いや、俺様が行く。雲長は付いて来い、益徳は城に残れ」

「だが……」

張飛の言は群臣の反論に掻き消された。

「州牧ともあろう方が自らご出馬とは、お止めください」

「そうでございます、誰ぞ他の者にお命じください」

劉備はジロリと群臣を見渡した。

「ではお前らが行くか？」

「そっ、それは……」

「ふん、」

どうやら自分は智に生きる者達とは気が合わないようだ、と劉備

は思った。口だけは達者だが己は動こうとはしない。苛立ちと相まって群臣がこの上無く目障りに思えた。

とにかく劉備はこの城から離れたかった。

「では玄德、呂布はどうするのだ？」

簡雍が尋ねた。

「下「丕」に招待する」

またも群臣が騒ぎかけたが一睨みで黙らせた。

「糜竺、糜芳に留守を任す。憲和は呂布の応対しろ」

「ははっ」

「曹豹には州兵を一時委ねる、守りは抜き無いうように。益徳は丹陽兵一千を委ねる、遊軍として呂布を監視しろ」

「分かった」

曹豹の返事が無い。

「いいな？ 曹豹」

「……承知した」

劉備は立ち上がった。

「俺様は丹陽兵四千で各地の救援へ向かう。後の者達は糜竺の指示通りに動け。以上、解散」

「たった四千で行くのか」

関羽が訝しげに聞いた。

「俺様が出るんだ、寧ろ多い位だぞ」

劉備は屈託無く笑いかけた。

「どけどけいい！ 劉玄德様のお通りだ！」

劉備が先頭に立ち、馬上で双剣を振り回しながら『袁』の軍勢を突き崩す。後に続く丹陽兵も勢いづいて盛り上げる。

後方の関羽は血飛沫の中、戯れる様な劉備を見て目を細めた。

「兄者とは不思議な人間だ」

関羽が思わず口にした言葉に傍らの青年・田豫も同意した。

「はい、最初は丹陽兵四千だけで出陣などと申されたので心配しました。ですがたった十日程でこれです」

そう言って田豫は後方を見た。

兵は一万を超えていた。劉備が自ら救援に来た事により、感じ入った土豪が多かったのか次々と兵を供出したのだ。

土豪が馳せ参じる様子を見て、劉備以外の者達は成る程これを見越して防備を割かず救援に来たのか、と納得したものだった。

が、不思議な事に誰よりも驚いていたのは劉備本人だった。劉備は本気で一万に四千で勝つつもりだったのだ。

勿論、この様に兵が増大する事など予想しているはずなど無く、直ぐに兵糧不足という大きな障壁が現れた。

それで困惑するかと思えば、今は平気に兵を率いて、袁術軍と闘う。

——自然体でいて人が集まり、率いる。こんな大器が天下に二つとあるはずが無い。

兵糧不足で苦しい状態のはずなのだが、関羽は己が兄として慕う男に誇りを感じていた。

「しかし、」

田豫は眉をひそめて唸った。

「玄德様の人気は寧ろ此度の戦では障壁となっています。兵糧然り、袁術軍を警戒させて後続が投入された事で劣勢は否めません」

「……」

関羽の感心した様な驚きの視線に気付き、田豫は慌てて謝った。

「もっ申し訳ありません！ 出過ぎた言でした」

「いや、お前の言う通りだ」

関羽はポンと田豫の頭に手を乗せた。

「お前はきつと良い将になれる」

田豫はまだ幼さの残る顔を赤く染めた。

——だが、しかし……。

関羽は袁術軍に険しい目を向けた。袁術軍の狙いが判らなかつた。劉備の率いる丹陽兵。これは陶謙が編成した揚州の賊やごろつきを束ねたもので、徐州の軍の中では絶大な攻撃力を誇った。纏まりとして弱い面があつたが、陶謙が丹陽兵を劉備に与えて以来、関羽と張飛を中心に訓練し今や最高の軍勢である。

そこに土豪の協力が加われれば劉備軍が圧倒的に有利で袁術は早々に軍を引き上げさせても良いはずなのである。

しかし、袁術軍はめげずに後続を投入し続け、その軍は三万にまで膨らんでいる。明らかにおかしい。まるで戦を長引かせようとしている様なのだ。

確かに長期戦で構えられては劉備軍は苦しい。しかし、関羽には何か別の目的があつて長引かせようとしている様に見えるのだ。

そして関羽の心配は一月としないうちに的中した。

劉備軍の本陣に夜半、密かに一軍が辿り着いた。

「何い!!!? 曹豹が下『丕β』で謀叛だあ!??」

曹豹謀叛の報せを告げに来たのはボロボロの張飛と丹陽兵一千だつた。

「すまねえ! すまねえ! 大兄!」

張飛が跪く。

「何も益徳が謝るこたあねーだろ。お前には呂布の監視を頼んでた

んだしな」

「いや、それが……曹豹はもう死んだんだ。……呂布が殺した」

「はあ？」

劉備だけでなく関羽も訳が解らず首を捻る。

「呂布が混乱を収集して下「丕β」を奪っちゃったんだ！」

糜兄弟も簡雍も大兄の女達もみんな捕らわれた。………本当、申し訳ねえ」

重苦しい空気が漂う。遂に張飛は啜り泣き始めた。そこに劉備が明るく声を掛ける。

「そっか、そっか、益徳のお蔭で助かったぜ」

「うえ……？」

「徐州の統治は面倒臭いし、腹も減ってたし、丁度良かった。呂布とこに行こう」

「何言ってんだ兄者！ あの呂布だぞ！？」

関羽は憤慨して問い詰める。

「分かってるよ。だがな、あっちには糜竺も簡雍も居るんだ。あいつ等が良いように取り計らってくれるって」

劉備の樂觀視に関羽は一瞬、目を見開いた。

——そうだった、この男はこういう人間だったな。

関羽は太い笑みを浮かべた。

「そうだな、兄者がそう言うならそうしよう」

「か、関兄！？」

張飛は勿論、劉備に反対するであろうという予想を裏切る関羽に叫んだ。

「よし、そうと決まれば重たい荷物は置いていかなきゃな。雲長、土豪に通達だ、領地に帰って別命あるまで待機。さあ、みんな、下「丕β」に還るぜ」

こうして劉備は軍を解散させて丹陽兵四千のみ従えて下「丕」に帰還した。

――下「丕」城政庁。

呂布と四人の男が集っていた。

一人は物を知らないのか、半ば強引に徐州の主となった呂布を前にたじろぐことなく跪く事もしない。横の二人はそんな男をとがめる事無く呂布を見据える。

「玄德を保護しろ」

立ったままぞんざいに提言する男、簡雍だ。

「ご無礼をお許し下さい。しかし、この簡雍が申すように玄德様を即刻保護すべきでございます」

跪く糜兄弟の内、糜竺が請い願った。

「ふんっ、そう言って我が軍と袁術軍を敵対させる魂胆でしょう」
すかさず文優は呂布の傍らより見下ろした。

「將軍、軍師殿が疑いになるのも致し方ありません。が、玄德様は徐州牧に就任して以来、各地の豪族と誼を結び、既に玄德様無しでは徐州の統治は難しくなるでしょう。どうかお考え直し下さい」

「残念ですが、」

文優は勝ち誇った表情をした。

「軟禁されているあなたの方の耳には届いていないでしょうが、土豪達は呂布様が此処を占拠した報せを受けた途端、次々と服従を申し出ております」

糜竺は苦々しく顔を伏せた。

「だが、保護が出来んのなら、せめて和睦の仲介役だけでも引き受けてもらわなければならん」

前線から撤退した劉備だった。が、退くこと十里程で袁術軍の猛

将・紀霊の伏兵に遭った。まるでそれを待っていたかの様なものだった。

不意を討たれた劉備は丹陽兵を崩しつつ下「丕」郊外二十里の所まで逃げ延びた。しかし、執拗に追撃する紀霊もまた、徐州の奥深くまで侵入してきている。

呂布とは争うつもりは無いらしいが既に紀霊の軍は万を超し、対する劉備は一千足らず。絶望的である。

もう、呂布の協力無しでは手も足も出ない。呂布の行動次第で劉備の命がどうなるかも決まるのである。

「こんな所で玄德は死んではならんのだ」

簡雍の言に文優は嘲笑った。

「あなた、自分の立場を把握出来てますか？」

「解つとる、そこで俺の首だ」

「え？」

「俺の命と引き替えに劉玄德を救ってほしい」

「!!？」

「憲和殿！ それは……」

麋芳が声を上げる。

「いや、あのお方は必ずこの乱世を治める為に闘い続ける。その為に俺が出来る事はこれなんだ」

「しかし、……」

終始黙っている呂布は軟禁されていながらも面会を求めた三人をまじまじと見つめた。

——何がこの者達を突き動かすのか……。

呂布は劉備に会った事がある。戦場で敵として、僅かだが手合わせもした。その時の印象は強烈だった。

しかし、大器としての印象では無い。戦場にあるまじき華美な服

装、装飾。明らかに意味の無い騎馬の曲乗り。まるで軽率な言動。何処の賊か、と見紛うた。

同時に劉備の軍は群を抜いて動きが良かったのも事実だ。兵には烏丸族が混じっていた。兵の質が良いだけと言えればそれまでだが、質の良い軍を率いるのもそれなりの力量が要求される。

そして何よりも二人の豪傑、関羽・張飛だ。劉備もかなりの武人だがこの二人は呂布が出会った武人の中で最も強い。何故これほどの者が劉備の様な者に仕えているのかと思った。

しかし、呂布は一太刀切り結べば理解した。関羽と張飛は主従として劉備に仕えていない。主従という形を壊し、それでいて己の固い信念を以て劉備の左右に侍っているのだ。

成廉は呂布が天命だと言った。

それならばこの二人も劉備に天命の様なものを感じているのかもしれない。己の志を劉備を通して見ているのかもしれない。

そして今、目の前で呂布に請う劉備の臣。彼らもまた関羽や張飛と同じなのだ。

——彼らを其処まで突き動かす劉備はどんな男なのか。

死ぬ前に少しで良い。劉備という類い希な者の胸の内を見てみたい。

呂布は無性に劉備に会いたくなった。

「分かった、劉備を助けよう。あの男は死ぬには惜しい」

呂布の言に文優は目を白黒させた。

「なりませぬ！ 徐州を拠点に曹操に対するには袁術の協力が必要です。今関係が悪くなるような行動は慎むべきです」

「分かっておる、それは俺が何とかしよう」

「何とかって……！」

「もう決めた」

こうなると誰も呂布を止められない。文優は諦めた。

「成廉！」

呂布が呼ぶと成廉が入室した。

「はい、何でしょうか」

「蝗紅隊に出撃命令だ」

「?……はあ、了解しました」

訳の判らぬまま成廉は直ぐに退出した。呂布も立ち上がる。そこで簡雍が呼び止めた。

「おい、俺は……?」

「劉備を助けるのだからその家臣を殺してはだめだろ」

少し考えてから呂布は答えた。

「一応、貸しとしよう」

太い笑みを浮かべて呂布は退出する。

その後ろ姿に簡雍は深く頭を下げた。

呂布は成廉と蝗紅隊のみを率いて下「丕」郊外へと向かった。

蝗紅隊は僅か四百余騎にまで激減していた。勿論、先年の曹操との決戦にて呂布をエン州から脱出させる為に犠牲となったのだ。騎馬軍は早々に解体して敗走させたので兵糧の毒の被害を免れた者は殆ど生き残れた。

しかし、蝗紅隊は呂布の麾下軍であり、盾でもある。呂布を曹操の追撃から最後まで死守するには僅かな犠牲だけでは済まなかったのだ。

呂布が毒に冒され、日々の調練は専ら成廉の任務となった。そして成廉は誰しも抱くであろう感想を呂布に知らせた。

以前は呂布が率いれば黒く巨大な闇が後に付いている様だった。

それが今では赤兎の立ち上げる砂塵の様なのだ。

明らかに見劣りするのである。

一千騎だった軍が四百騎になったのだからそれも当然だ。成廉は直ぐに兵の補充を提案したが、呂布は拒否した。死を待つばかりの主は兵の補充は必要無いと言うのだ。

蝗紅隊は言わば『呂布信者』とでも呼べる者の集まりである。呂布を己の目標として定め、崇める。闘えと言えば闘い、殺せと言えば獣の様に虐殺し、守れと言えば命を賭して死守する。そして死ぬと命じれば喜んだ首を差し出すのだ。成廉もその内の一人である。

呂布はそんな人間を増やしたくなかった。

呂布を守る為だけに蝗紅隊の半数以上が死んだのだ。蝗紅隊の兵は呂布から厳しく訓練されている。力量で言えば、何処の勢力で軍を指揮していても不思議では無い。

呂布は自責の念に苛まれていた。どうしても彼らの蝗紅隊以外の道を考えてしまう。何処か他の勢力に居れば今頃は校尉を勤めていたかもしれないのだ。

その為、呂布は所謂『私兵』を徵募する事は無かった。

そんな五百にも満たない兵を呂布は率いて何をするのか。成廉には見当もつかない。やがて、呂布が軍を停止させた。丁度、劉備の陣と紀霊の陣の中間地点だった。

「帷幕を張れ」

普段から携帯している本陣用の資材が組まれていく。そしてそこに準備されたのは宴席だった。丁寧の下「丕β」の蔵にあった美酒まで揃えられている。

「奉先さん、これは……？」

劉備を守る為に紀霊の軍と戦をすると思っていた成廉は驚いた。

成廉が蝗紅隊に指示した訳ではないので、これは呂布の命令だろう。「見ての通り宴会の準備だ」

「一体誰を招くと言うのです？ 劉備ですか」

「ああ、あと紀霊もだ」

成廉は耳を疑った。

「正気ですか！？」

「文優が言うには袁術軍とは争わない方が良い様だ。しかし、劉備を見捨てる訳にもいかん。そこで宴会でも開こうと思ってるな」

「そんな事で紀霊が手を退くとも思っているのですか」

呆れ顔の成廉は主の考えが読めない。

「そこでだ…」

呂布は密かに成廉に何事か言い含めた。

「…どうだ？ 何とかなりそうじゃないか？」

「確かに成功すれば両者共に納得はするとは思いますが…ご自分の軀の事分かってるんですか？

失敗してどうなっても知りませんよ」

「決まりだな、劉備と紀霊に使者を遣わせろ」

呂布は悪戯っぽく笑った。今までに無く楽しそうだ。

こんな表情をした事があっただろうか。成廉は首を傾げながら使者の手配をした。

「一体どういうつもりだ」

劉備、張飛が少数の者と呂布の帷幕にやって来た。

・
・
・

「てっきり助けてくれると思えば出した兵はたったこれだけか」

がっくりと劉備が肩を落とす。それを見て傍らに立つ張飛が励ました。

「大兄、呂布の軍は強い。それ位知ってるだろう」

「解っちゃいるけど……、」

五百に満たない軍では心許ない。

「ところで飛將軍殿よお、一体何時になったら酒宴始めんの？ 俺様もう待ちきれないよ」

劉備は駄々を言う子供の様に尋ねた。

「まあ、もう少し待て。あと一人、客人が来る」

呂布は上座に鎮座したまま微かに笑う。

「おい、益徳。あと一人って誰だと思う？」

声を潜めて尋ねる。

「んー、憲和か麿兄弟のどっちかじゃないのか」

「やっぱ呂布が動いたのもあいつらのお蔭だよな」

「だろうな」

「再会出来たらいっぱい褒めてやんなきゃな」

そこで帷幕の外が騒がしくなった。

「どうやら来た様だな」

呂布が立ち上がる。

その時、劉備は呂布が何気無く劍の鞘を突いて立ったのを見逃さなかった。が、特にそれに気付いた素振りも無く呂布に倣った。

「酒宴の招待、誠に有り難く存ずる」

入って来たのは紀霊をはじめとする袁術軍の将だった。

「!!!!??」

「なっ?!?! なんでこいつらが来るんだよ!!!!」

一瞬、軀を強張らせた後、劉備と張飛は柄に手を掛けた。紀霊は早々と劍を抜きはなっていた。

「呂將軍、これはどういう事なのか説明していただきたい」

そう言いながらも袁術軍の将は嬉々としている。ちょこまかと逃げ回る劉備を容易く討ち取る好機だ。

「呂布!! てめえ、俺様をこいつらに売るつもりか?!?!??」

劉備は目線を紀霊から逸らす事無く、怒りを露わにした。張飛に至っては先程の爽やかな面影は息を潜め、化け物じみた形相で紀霊では無く呂布を睨みつけている。

「両者共、剣を収めて気を鎮められよ」

「うるせえ！　まずは説明からだ」

「呂將軍、説明せずともよいわ。これで袁呂の関係は永遠に良好だ」
紀霊がじりじりと距離を詰めると劉備と張飛は遂に剣を抜いた。

張飛はその切っ先を呂布に向ける。

「裏切りを繰り返す卑劣漢は潰す」

幕内の空気は最悪だった。劉備側も紀霊側も此度の宴会は劉備を誘い出す罠と勘違いしている。

「とにかく座れ」

呂布は落ち着いて諭すが両者共に聞く耳を持たない。

「失礼します」

あわや斬り合いかと言う緊張が最高潮の時、幕内に入って来たのは成廉である。しかし両者共に眉一つ動かさない。

「準備が出来ました。……酷い雰囲気ですね」

何事かの準備が整った事を告げると小さな溜め息も付け足した。

「両者共に此度の宴会の説明する。俺に免じて剣を収めてくれ」

紀霊は訳が分からないといった表情で剣を収めた。劉備も渋々半歩下がって剣を収めた。張飛だけは抜刀したままだった。

「それで、これはどういうつもりなんだ？」

劉備は疑惑と怒りの目を向ける。呂布は皆の視線を物ともせず口を開いた。

「お前達は『天意』と言う物が存在すると信じておるか」

劉備と紀霊は意表を衝かれた様子をみ開く。張飛も片眉のみ上げて驚きの意を表した。

——呂布の口から『天意』だと……?!

皆の胸の内はそれで一致していた。

『天意』という言葉程、呂布という男からかけ離れたものもないだろう。呂布が呂布なのはその破天荒で非常識な行動故である。

「まあ、俺は信じてはいない。お前達がどうかは知らんが」
劉備も紀霊も脱力した。

しかし、と劉備は思考を巡らす。

——『天意』とは一体何なんだ？

俺様は今まで自分に天意があると信じて止まなかった。だが、本来の天意は本人も気付かないのではないか？ 無意識に従ってしまうのが天意ではないか？

劉備は以前見えた時より些か寝れた呂布の顔をまじまじと見つめた。

——そうならば呂布は既に天意を己が物としている……！

「お前達、両軍は現在敵対中だ。俺は劉備に死なれては正直困る。が、紀將軍と争うつもりはない。そこでだ……」

呂布が手で合図すると一方の幔幕が開かれた。

「天の意思に委ねてはどうだ」

「……？」

二百歩はあろうかという距離に一本の戟が直立していた。他に何も無い。淋しい景色だ。

「これからあの戟目掛けて矢を射る」

呂布は弓に弦を張りながら言った。

「外れば、各自陣に戻り戦をするがいい。俺は下「丕β」に還る。だが、もし戟の枝刃に当たれば……、両軍和睦をし軍を退け」

「なんだそりゃ！」

「何と！！」

劉備も紀霊も憤然と見やった。命のやり取りを賭博の様な方法に託すと言うのである。

「これだけの距離だ。天がお前達の戦を望まねばもしも、と言う事もあるかもしれん」

幕内が騒然とした。紀霊の部下はそんな方法では劉備に逃げられてしまう。張飛はと言うと己の戦を侮辱されたかの様に益々青筋を立てた。

そんな周囲が目に入らないのか、呂布は劉備と紀霊しか見ていなかった。周りがどう言おうが最終的に決定するのは大将である二人だ。

最初に胡床に腰掛けたのは劉備だった。

「この話、乗ったぜ！！」

張飛が軽く飛び上がる。

「なっ何言ってんだ大兄！？」

「大丈夫だって、俺様博打は負けた事ねえだろ」

「だが、」

「儂も乗った」

紀霊もどかっと腰掛けた。

「將軍！ 軽々しくそんな事をしてはなりません」

「そうです！ 呂將軍は神性を備える武神。こんな申し出を自らするという事は相当な自信あつての事に違いありません」

紀霊の部下は口々に反対する。しかし、紀霊はお手並み拝見を決め込んだ様だ。

「どんな弓の名手でも胸を張って百発百中と言うのはせいぜい百歩だ。二百歩の距離でも的中を自在に出来るならば、是非とも見せてもらおうじゃないか」

呂布は満足げに笑った。余裕の笑みだった。

「両者共に相違無いな」

そう言うのと戟に目を向ける。

空気が変わった。

呂布の目つきが戦場のものに、獣の目に切り替わった。空気がじわじわと鋭くなる。まるで時が止まった様である。

急に誰も声を発する事も、大きく息を吸う事も出来ない。呂布の集中力が気となって発せられているのか。一同の肌を突き刺す。

矢一本のみが入った矢筒を取ると矢をつがえた。弓を構えると徐々に引き絞る。弓がその臂力に耐えかねて悲鳴を上げた。

呂布は気にしない。弓は真円を描いて止まった。

時が止まった。誰もがそう思った刹那、呂布の手から矢が消えた。一拍遅れて高い金属音が響く。

幕内に畏怖にもとれる沈黙が流れる。紀霊は目の当たりにした光景が信じられないのか、しきりに目を擦っている。

救われた劉備までも喜ぶどころか身動き一つしなかった。

「的中だ」

呂布が振り返って宣言した。

戟の枝刃は折れ吹き飛んでいた。

一方、曹操は李確の暴政から逃れて長安から脱出した時の帝・協を保護した。帝を招き、新都として創建が決定したのが許である。後に許都と改称される。

長安の李確、南陽の張繡、寿春の袁術、河内の張揚、そして徐州の呂布。外敵に四方を囲まれている曹操だが今は漢帝国の権威を手に入れた。青州兵の十万を抱え、飢饉で荒れてはいるものの、エン

州、豫州は地力は未知数である。

領内に叛乱分子は点在しているが土豪の大半は曹操に協力的だ。何より各地の名士が仕官してきたのが曹操にとって有り難かった。

権威、領地、兵力、人材と揃った曹操が次に行ったのは屯田だった。毛「王介」の献策である。

田に常主無く、人民に常居無しと言われたこの時勢。賦穀を効率良く納めさせる為、所有者の居なくなった土地を全て国有化し、流民に貸し出したのだ。

この政策は成功した。一度は郷を捨てた人民が少しずつ帰ってきたのだ。荒野が耕されていく。しかし、長年放置されていた土地は痩せ、十分な収穫が望めるのはまだまだ先である。

次に行った張繡征伐。これは失敗した。完敗を喫した。

曹操は張繡を討つ為に荊州北部の南陽を攻めた。しかし、張繡は特に抵抗する事も無く降伏した。兵力差が二倍あった上に外敵の多い曹操は疑う事も無くこの降伏を喜んだ。

南陽には雛氏と言う美女がいた。張繡の伯父、張済の妻であり、未亡人である。張済は荊州に入った際に土豪との戦で命を落とした。その為、勢力を張繡が継いだのだ。

曹操はその噂を耳にして早速、雛氏を召し上げた。曹操は大層気に入る、館に籠もる事、十日に及んだ。

しかし、それは罠だった。

張繡の下には賈栩がいたのである。

李確の暴政に嫌気がさしていた賈栩は長安を離れる張済に従っていたのだ。稀代の策士は雛氏を餌に曹操の気を逸らし、夜襲を仕掛けた。主がその餌に敬慕の念を抱いていたのを知りながらである。

賈栩の策は大成功だった。三万の征伐軍の内二万以上を討ち取り、曹操の股肱の臣・典韋、長子の曹昂、親族の曹安民を始めとする多くの臣を戦死せしめた。

曹操が心に刻み込んだ大敗北である。

——豫州、新都・許。

「……徐州の呂布は更に小沛に劉備を配置。領内の土豪も手懐け、袁術とも関係は良好で御座います。以上、間者の諸州の報告で御座います。続いて、……」

曹操は無気力に伝令の報告を聞いていた。その様子を見て郭嘉が前に出た。

「もうよい、残りは別室で私が聞きましよう」

そう言つて郭嘉は曹操を見た。曹操は無言で頷いた。

「司空、傷心も解りますが軍議にまでそれを持ち込まない様にしてください」

郭嘉を見届けると荀彧が言った。司空は現在の曹操の官職である。三公の一つであり、曹操は最高職の一つに就いた事になる。

曹操は何処か一点を見つめたまま動かなかった。荀彧には南陽での戦以前と比べるとかなり年をとった様に見える。皺が深くなっていた。肌も張りが無い様に見える。

だが、一見すると虚ろな目はまだ瞳の奥の光を失っていない。

「傷心していた訳では無い」

曹操が呟れた声で答えた。

その言が本当なら真に冷徹な人だ、と荀彧は思った。南陽の一件で曹操は息子を失っただけでは済まなかった。息子を犠牲に帰還した事に正妻が激怒し、遂に引き留めも虚しく故郷へと帰ってしまったのである。曹操は酷く傷付いているに違いない。

曹操は立ち上がると窓際へと進んだ。外には急造される宮殿や施設が見える。労働者の熱気が乗り移ったかのように慌ただしい。曹操は本当に別の事を考えていた。

「今すぐ兵を挙げるとしたら何万集まる？」

荀或は驚き、呆れた。

「復讐戦ですか?!」

お止めください、兵も休めなくてはなりません。そもそも兵糧の蓄えが底を付いております」

荀或は曹操より主に内政に於いて一任されている。まだ、屯田制を行っても収穫は充分では無かった。兵を動かせられる兵糧が無かった。

「少なくとも半年は軍を動かせません。小規模な叛乱も捨て置くことはありません」

「やはり、そうか」

曹操が考えているのは己を惨敗せしめた憎き敵の事である。張繡、賈栩に敗れた。そして呂布と陳宮。では無く、文優と呼ばれる謎多き軍師。

濮陽での戦は自覚する事も出来ずに罠に嵌った。何にも気付かなかった。初めての事である。怒りは深かった。まるで心を見透かされている様な感覚は陳宮では味わえない。

呂布の表向きの軍師は陳宮であり、真の軍師は文優なのだ。つまり曹操を出し抜き、遣り場の無い怒りを生み出したのも文優なのだ。文優がいては呂布を倒す事は皆無である。

——呂布の所に潜ませている諜報部隊は十四人。呂布は殺せなくとも文官一人を殺すには十分な数だ。

後は……決戦の切り札に、と思っていたが……使い時は今か。

「郭嘉を呼べ」

奸計と言えば郭嘉。曹操は兵を動かさずに呂布を弱体化させる事

にした。

何処までも暗い青が続く。空の蒼とは別物で、いつぞや見た地平線に広がる蒼ともまた別物である。

成廉は重厚な色に今、己の立つ場所が呑み込まれる様な錯覚を覚えた。事実、それは白い泡を起てながら浜辺を舐めている。

「これが……海か」

隣りに立つ張遼がぽつりと呟いた。

「血の匂いがする」

海は戦の匂いがした。

今、成廉と張遼は兵の調練がてら、広陵の海西に訪れていた。

十年以上も昔、成廉は呂布に連れられ草原を見た。荒涼とした并州の更に北、馬上に生きる民族の国は景色からして力強かった。見ているだけで力が湧いてきた。そんな光景に幼い三人は歓喜したものである。

しかし、今、成廉の横には一人しかない。

海は力強さよりも何か胸の奥がざわざわとする感覚を覚えた。巨大な物を目の前にする己が変わったのか、海がそういった性質なのかは成廉には判らない。それが畏怖だと気付くには少し時間が掛かった。

そして、匂い。吹き付ける風は生臭い。これだけ巨大でこんな匂いを発する物を成廉は戦以外に思いつかなかった。

匂いのせいか否か、海と対峙すると精気が吸い上げられる様だ。頭が朦朧とする。その場に座り込んで何もせずに永遠に動きたくない気持ちになった。

「雷音は楽しそうだな」

張遼の視線を追うと、確かに兵達の騎馬と共に雷音は海に入り、波にじゃれていた。彼らはこの巨大な物を前に畏れを抱かないのか、成廉は思った。

——違う、抱かないんじゃない。

海は自然で雷音達も自然の一部なんだ。何を畏れると言うんだ。

そしてふと思う。

——それならどうして僕達は、僕は海がこんなに怖いんだろう。

それは人が自然から外れた異端者だからか。成廉にはやはり解らなかった。

暗い青は日が傾くと闇の上を炎が揺らめく様に赤く染まっていく。太陽が海に交わっていた。

「そろそろ暗くなる、還ろう」

張遼が言った。海西の土豪が寢床を提供してくれる。しかし、まだ成廉は動かなかった。

「廉……？」

「越と」

成廉は振り返った。

「三人で来たかったね、海」

夕陽が二人を柔らかく照らす。

「……そうだな」

水面で反射する光が眩しかった。

成廉が半月の調練から下「丕」に帰還すると辺りはどっぴりと闇夜に浸かっていた。

直ぐに呂布の邸に向かった。毒に冒された呂布が何時容態が悪くなるかも見当がつかない今、その秘密を知る成廉は従者として万全の構えでいなければならない。

成廉が下「丕」を留守にする間は文優が呂布の側に付いていてくれている。

「文優殿、只今帰還しました」

「これは成廉様、お疲れ様です」

「後は僕が引き受けます。どうぞ休んで下さい」

文優は微笑んだ。

「そっくりそのままお返ししますよ。成廉様こそ調練でお疲れでしょう」

そうは言っても体力を使って精神を擦り減らしているのはお互い様である。

「ですが、」

「大丈夫です、政庁は陳宮様にお任せしていて、私もそう忙しかった訳でもありません。それに……」

文優が悪戯っぽく笑う。

「大分、白鈴様が寂しそうですね。早く帰ってあげてたらどうです？」

成廉の邸は呂布の邸に隣接した所に与えられていた。と、言うよりも廊下で繋がっており、ほぼ一棟に近い。邸は呂布のものも、成廉のものも質素だ。呂布がそれを好み、自然と成廉もそうなった。だから白鈴の室まではあっという間だった。

白鈴は成廉が訪れると飛び跳ねて飲んだ。そして、自分の振る舞

いに気付いてから頬を赤らめて居住まいを正した。

「お帰りなさいませ」

無邪気な少女は少しだけ成長していた。

「驚いた、何時の間にそんな事言える様になったの」

それを聞いて白鈴は頬を膨らます。

「ちよつと！ これでも貴族だった事あるのよ」

相変わらず華美な簪を揺らす。

笑いながら成廉は白鈴を抱き寄せた。こうすると白鈴はとても小さくて壊れやすく感じる。

「寂しかった？」

「すつごく」

大きな瞳が見上げる。少し潤んだ、成廉しか見ていない瞳が愛おしい。成廉はそつと口付けした。白鈴もそれに応える。

口付けは激しさを増した。もう止まらなかった。成廉は服をはぎ取りながら寝台に押し倒した。

「んんっ、あ……」

白鈴から切ない吐息が洩れる。

・
・
・

成廉の全身を脱力感が覆った。白鈴は傍らで小さな寝息を發てている。二人は何時の間にか恋仲に發展していた。どちらからか言い出した訳でも無く、自然とこうなった。

白鈴の寝顔を見つめる。この瞬間が成廉の至福の時でもある。

長い睫毛にきらきらと宝石の様に光る涙。少しだけ拗ねた小さな鼻。柔らかな薄紅の唇。少し火照りの残る頬。幼さの残る顔立ち。

艶やかな黒髪。

全てが美しい。

こんな美女は天下に二人といない、そう感じた。それは呂布への敬愛とも張遼、魏越への友愛とも異なる感情。言葉にするならば愛

憫の情だった。成廉は白鈴が愛おしいと同時に憐れみを感じていた。白鈴はきつと夫婦になる事を望んでいるだろうし、成廉も同じだ。皆に報せれば反対する者など一人もいないだろう。しかし、それはあつてはならないのだ。

成廉にとつて呂布が死ぬ時が己の最期と決めている。それが天命だと信じている。天命に従い生きる事が成廉の人生なのだ。

だから白鈴に永遠の愛を誓う事は出来ない。その手に抱きながら傍にはいられない。痛い程、残酷な生き方ではないか。

——なんて自分勝手な生き方なんだろう。

「ごめんな、」

聞こえないのは分かっているのに消え入る様に懺悔する。少し視界が霞んだ。

遠くから破鐘の音が聞こえる。その金属音が寝入りそうな成廉の脳漿を揺さぶった。

——敵襲……!!?!

夜が更ける下「丕β」を警鐘が叩き起こした。

——馬鹿な!

下「丕β」は隣接する敵対勢力や土豪はいないはず。どうして何にも阻まれずに襲撃など出来るんだ。

焦る頭が出した答え。

——謀叛……!!!!

そうならば早く呂布を信頼出来る軍中に移動させなくてはならない。

寢台から飛び起きた成廉は一瞬、呂布の母屋と寢息を発てる白鈴を見比べた。

「白鈴！ 起きろ！」

「ん……ふぁ？」

揺さぶると白鈴は寢ぼけ眼を擦りながら起き上がった。

「まだ夜じゃない……」

白鈴は警鐘に気付いて顔を強ばらせる。

「……何？」

「分からない。とにかく服を着て」

何処からか喧騒が聞こえる。敵は既に城内に侵入している。

ゆっくり羽織る白鈴に苛立ちが募る。時間がとてつもなく長く感じた。

「もう、身なりはどうでもいいから早く！」

「あっ、ちよっ……」

成廉は白鈴の手を掴み、剣を一振り無造作に引き抜き母屋へと駆け出した。

「奉先さん！」

呂布の寢室に飛び込むと、丁度文優に支えられて立った所だった。半月以来の呂布を見て、成廉はその急な衰弱ぶりに驚きを隠せなかった。当の本人は一人で立てると嘯いているが怪しい。

「成廉様、一体何が」

「襲撃を受けているのは判るのですが。敵の詳細についてはまだ判りません」

白鈴は脅えて辺りを見回した。謀叛なら此処が呂布の邸と知られている。攻撃を受けるのも時間の問題だ。

「文優殿の間者は？」

「それが毎晩報告する時刻になっても誰も訪れないのです。恐らく

……」

成廉は息を呑んだ。

文優の間者は董卓時代からの精鋭だ。非力な文優の代わりに影で闘う者達でもある。

それが全滅、或いは阻止されているのならば……。

――敵は今襲撃している軍だけではない。

何故なら呂布軍中で最も優れる隠密部隊は文優の下の間者なのだ。それを全員押し留められる部隊が呂布軍にいるはず無いのである。即ち敵には支援者がいてその勢力の同じくする隠密部隊が侵入していると考えた方が良い。

「不味いな」

呂布は状況が思わしくない事に焦りを感じた。己の死に場所は戦場であって邸では無い。しかもその相手は因縁の曹操以外有り得ない、と考えていた。

――こんな所で犬死にする訳にもいかん。

呂布は懷から以前、診察してもらった医者がくれた丸薬袋を取り出した。中の丸薬を適当に飲み下した。丸薬がどの程度効く物なのか判らなかった。

だが無いよりは良い。せめて自力で走り、剣を振れば十分だ。

「とりあえず此処から脱出して合流しなくてはなりませんね」
文優の言に成廉が頷く。

「門から出るのは危険です。廁の横の垣根が低くて政庁に近い」
「では廁へ」

丁度、呂布に肩を貸す文優が中庭に背を向けた。

その瞬間、呂布は風を切る音を聞いた。

文優の動きが止まる。文優の背を見ると矢が突き立っていた。

「文優！」

「敵襲です！」

成廉に突き飛ばされて呂布は白鈴と共に物陰に隠される。

その間にも文優の躰を更に三本の矢が襲い掛かる。堪えかねて倒れ込んだ文優は何事も発さない。それが不吉な結果を予測させる。

呂布は直ぐにその手を掴むと物陰に引き入れた。何時の間にか躰の自由が利いた。

「しっかりしろ」

先程と代わって今度は呂布が背負う様に文優を支える。白鈴は脚が竦んで立てないのか柱に縋っている。

「奉先さん、一人で立てるんですか？！」

「丸葉だ。何時まで保つか分からん」

成廉は目に入った戸を開けると埃を被った弓矢一式を取り出すと使えるか調べ始めた。

廊下の角から静かに駆ける足音が近付く。音から兵の数は判断し兼ねた。

「援護します。早く廁へ向かいましょう。白鈴をお願いします」

「分かった」

そう言うとき白鈴を片手掴み、文優を背負った。毒の害が嘘の様に躰がいう事を聞く。

兵の一人目が角を曲がった。が、待ち受けていた成廉が放った矢が頭蓋を貫通する。敵の後続はそれに一瞬怯む。

その機を逃さず呂布と成廉は駆け出した。

――下「丕β」政庁前。

騒ぎを聞きつけた高順は部将の侯成、魏統と手勢四千と共に政庁へ駆け付けた。

「陳宮殿、現状はどうなっている」

騒々しい政庁で陳宮は一人、右往左往する文官を取り仕切っていた。

「これは高將軍」

陳宮は少し安堵の表情を見せた。

「現状はあまり思わしくない。指揮系統がズタズタにされてしまった」

予想はしていたが状況は最悪だった。何者かが伝令を阻んで各軍と連絡が取れないのだ。その為城内の軍が続々と集結してきたのだが、それは謀叛の軍を隠した。

どの軍が敵で、どの軍が味方なのか判断のつかない状況なのだ。

「敵に関する情報は」

「全く掴めない。それどころか……」

陳宮は言い難そうに口を開いた。

「呂將軍との連絡も途絶えている」

「なんと！」

「文優殿の隠密部隊と常々連絡をとるようにしているのだが、それすら……」

「敵の隠密部隊が暗躍しているのか」

「敵勢力は未知数。背後に支援者がいてもおかしくない」

「では、すぐさま將軍を救わねば」

「いえ、既に張將軍を向かわせています。……無事、脱出している
とよいが」

陳宮はゆっくりと歩きながら思案した。

「問題は謀叛の軍です。城内が混乱している今、此方は迂闊に動け

ず、敵にとって好機。早く手を打たなくては手遅れになる」

陳宮の言う通り、混乱した軍程脆いものは無い。今の城内は彼我兵力に関わらず危険だ。

「一度軍を城外へ出してはどうだ」

そうすれば少なくとも敵軍を見つける事が可能だ。

「駄目だ。それこそ敵に容易くこの城を与える事になる」

「しかし、このままでは……」

手を出そうにも敵が見えない。無理に戦鬪を起せば今の城内では同士討ちもしかねない。手も足も出ないとはこの事である。

と、そこへ陳宮が周囲の様子を調べさせていた兵が血相を変えて走り込んできた。「大変です！ 我が軍があちこちで同士討ちを始めております」

「！！」

「恐らく敵の隠密部隊に偽の情報吹き込まれたのだろう」
唇を噛みながら陳宮が答えた。

高順は閃いた。

「攻撃を受けてない軍が謀叛の軍だ」

「成る程！ おい、攻撃を受けてない軍は？」

希望の光が差した。陳宮はその兵卒に尋ねた。

しかし、兵卒は少し困った表情をした。

「此処です」

「何っ？」

「確認出来る限り、攻撃を受けてない軍は此処の軍のみです」

「くそっ」

陳宮は苛立った様に近くの卓を蹴り飛ばした。

「落ち着け！」

それでは一方的に攻撃を仕掛けている軍はどうだ？」

「櫓の見張りによれば張將軍の騎馬軍、宋將軍の軍と「赤β」將軍の軍です」

その軍のどれかが謀叛を起こしたと考えられる。

だが、張遼は別だ。高順は確信していた。張遼の呂布への忠誠心は篤く、謀叛など有り得ない。宋憲も董卓の時代から呂布に付き従ってきた。彼も裏切るとは疑わしい。

——となると怪しいのは「赤β」萌の軍。

「赤β」萌はエン州にて呂布に仕え、司隸出身の兵三千と州兵二千を預かっている。兵力的に謀叛を画策し得る数だ。しかも、元曹軍である。益々怪しい。

そこに高順の予想を裏付ける報告が入った。

「最初に攻撃を受けたと申す兵を見つけました」
連れられてきた兵は肩に矢傷を負っていた。

「敵の旗印は？ 数は？ 何処で襲撃された？」

陳宮が矢継ぎ早に問い詰める。

「あの、えと……数も旗印も分かりません。襲撃は白門です。ただ

……」

「ただ、何だ？」

陳宮は苛立ちを隠せない。

「ただ、敵の会話は河内で聞いた訛りでした」

兵の言で高順は確信した。

「「赤β」萌だ。あの者は河内の出自の兵を抱えている」
陳宮も同意した。

「謀叛の首謀者は「赤β」萌でほぼ確定だ。高將軍、頼みますぞ」
「承知！」

高順は手勢三千に弓を携帯させると政庁を後にした。

「赤β」 萌の陣に高順が到着した時、既に所属不明の軍が戦闘していた。

「どうやら留めを刺すだけの様だな」

「赤β」 萌の軍の混乱ぶりに此方の勘違いかと少し戸惑った高順だった。が、可能性として最も疑わしい軍を討たなくてはならない。これ以上、状況が悪化する事態だけは避けなければならない。

「弓を構えよ」

数多の兵が矢をつがえる。

「放て！」

無数の矢が「赤β」 萌の軍に降り注ぐ。突撃する前に「赤β」 萌の軍は瓦解した。我先にと最寄りの門から脱出を図る。

高順は掃討を開始した。

瞬く間に血が花開く。逃げる兵を背後から討つのは藁束を相手に矛を振るうのと何ら変わらない。

と、高順の視界に魚鱗の甲冑が目に入った。大将の鎧、「赤β」 萌だ。

負傷したのか腕の無い肩を押さえながら兵卒に混じって逃げ惑っている。直ぐ様距離を詰めた。

「ッ!？」

「赤β」 萌が背後の脅威に気付いた時、既にその首は高順によって斬り飛ばされた。

「高將軍！」

高順が「赤β」 萌の首級に矛を突き立てると五百に満たない軍が近付いてきた。どの兵も傷だらけだらけで、声を掛けてきた先頭の

将もまた返り血で戦袍を赤く染めていた。

恐らく「赤β」萌の軍にいち早く攻撃していた軍だろう。将は高順の前に来ると倒れ込む様に跪いた。

「曹性か」

高順は警戒を解かずに答えた。

曹性は「赤β」萌の副官として就いていた将だ。謀叛後、「赤β」萌の軍を脱出しなかったところを見ると謀叛に協力していたとは思えない。

高順は兵に顎でしゃくって見せた。

途端に兵が曹性を取り囲む。抵抗は無かった。曹性は縄で拘束された。

「現状で事態を説明出来るのはお主しか居らん。が、しかしだ、お主に疑いがある事も事実だ。殿の元まで連行させてもらう」

「承知しております。全てを説明しましょう」

「文優、気を確かにしろ」

呂布は文優を空いた寝台に横にすると、慎重に矢を抜いた。抜く度に文優の躰が弱々しく痙攣する。

辛うじて政庁まで辿り着いた呂布らだったが、文優の意識は半ば飛びかけていた。

「医者を手配してくれ」

成廉は兵に指示しながら考えた。

——もし……もしも、文優殿が今死ねば、呂布軍はどうなってしまうのか。

呂布が帆なら文優は舵。

武の才無く、兵を率いる才も無ければ、人を見る才も無い文優だが、その戦略的指針だけが呂布軍の支えだ。文優が死ねば、呂布軍は舵を無くして乱世という大海原に迷う事になる。

その上、帆は毒に冒されている。正に未来は天のみぞ知る状態だった。

しばらくすると兵に引っ張られる様に医者が室に入った。

「診断を頼む」

呂布は成廉と共に退室すると政庁の広間へ向かった。広間では曹性の尋問が始まろうとしていた。

呂布が入ると集合していた主だった将は立ち上がった。

「呂將軍、ご無事で何よりです」

陳宮は座していた上座を譲ると呂布の傍らに立った。成廉はその横に控えた。

「現状は」

「既に高將軍の活躍で謀叛の軍を撃滅しました」

「やはり、謀叛か。陳宮、ご苦労だった」

「いえ、お褒めに預かる程ではありません。丁度、これから詳しい経緯を知る為に尋問をするところです」

陳宮は無感動に答えた。それに眉を顰めながら、呂布は引き立てられて来た将に目を向けた。

——曹性か……。

曹性はそれなりに有能な将だ。

ただ、主の武が目立ちすぎて高順、張遼が霞む位なので曹性や侯成といった将は軍中でもかなり地味である。

それでも「赤β」萌の副官ではなく「赤β」萌と肩を並べても良い実力の持ち主だ。副官という職は曹性が自ら望んだものだった。

今回の件はこういった実力のある将に兵を与えながら、それを軽

視した結果でもあった。

「それでは、これより曹將軍の尋問を始める」
進行は陳宮が担った。

「では曹將軍、謀叛の発端から此処に至るまでを知る限り話しても
らおう」

「しょ、承知しました」

動きづらそうに曹性は立ち上がった。

「縄を解いてやれ。縛られてると出る物も出て来んぞ」

呂布は陳宮に命じた。

「はあ」

直ぐ様、縄が解かれる。

「有り難く存じます」

曹性が深々と礼をする。

「それでは……、事の発端は「赤β」將軍の周囲で見え隠れした間
者の噂です。彼は州兵と麾下を多数擁していましたが、某は密か
に探る為に彼の副官を志願しました」

陳宮が問う。

「何故その時点で報告しない？」

曹性は当惑して眉を寄せる。

「その……その時点で「赤β」將軍の叛意を確認出来ず、濡れ衣だ
った場合に責任を取れないと判断したからです……」

「続ける」

「は……それからしばらく目立った動きは無く、普段通り調練の毎
日です。」

しかし、ある日唐突に謀叛を起こす事を告げられ、意見を求められ
ました。急な話だったので勿論、反論しました。ですが、背後に指
示者がいて既に日時が決まっているとの事で、どの軍を襲えば効率

良く打撃を与えられるか問われました。判らないと答え、再度引き留めようとなりましたが翌日には謀叛を起こされ、不本意ながら軍に組み込まれ、また、充てられた兵も少なくて迂闊に動けなかったのです」

「その黒幕は何者だ」

呂布には陳宮の問いに曹性は相当焦って見えた。先程まで毅然とした態度で話していたのに、陳宮が問うと動揺する。

曹性は陳宮の問いに答えなかった。

「遂に軍を挙げた『赤β』將軍は政庁に向けて周囲の軍に偽報を流布しながら進軍を開始しました襲撃は成功し、某は極度に心配したのですが急に進軍を止めてしまいました。どうやら指示者の合図と共に政庁に突撃する手筈にも関わらず、その合図が無く立ち往生してしまっただけでした。そこで『赤β』將軍が焦るその時しか裏切る好機は無いと考え、某は『赤β』將軍を斬りつけ、片腕を奪いました。」

その後は高將軍が駆け付けて、後は高將軍が知っている通りです」

「それで……その指示者とは誰なのだ?!」

陳宮の問いに曹性は驚いて目を見開いた。

「ま、誠に答えて宜しいのですか」

その問いは陳宮に向けて発せられた。

「当たり前だ。知っている事を全て話さなければ尋問にならない」
困り果てた曹性は驚愕の名を口にした。

「……………陳將軍です」

「何っ?」

呂布は陳宮を見た。一同の視線が一斉に陳宮へと向けられた。

陳宮は何も発さなかった。ただ顔を赤く染まらせて曹性を睨み付ける。

さすがに呂布が笑いながら確認する。

「曹性、冗談が過ぎるぞ」

「確かに「赤β」將軍は陳將軍の指示と言っていました。合図があれば陳將軍は政庁内から兵を挙げる手筈になっていました」

「……」

軍師として文優に次ぐ陳宮が裏切るとなれば誰が味方で敵なのか。今この場に敵勢力が混じっていても不思議ではない。一同が騒然となる。当の陳宮が何も答えないので益々疑いは深まる。

呂布は正直、困った。こういった状況に於ける対応を持ち合わせて無い。

「静まれ！ 静まれい！」

とりあえず場を收拾する。

「陳宮……」

呂布が声を掛けようとした時、廊下から慌ただしい足音が聞こえた。兵が一人駆け込む。

「文優様が……！ 早くお越し下さい！」

兵の報告にまたしても広間は騒然となる。

「曹性の件は保留、追って通達する。陳宮は不問に処する。以上、散会」

そう告げると呂布は立ち上がり広間に背を向けた。

文優の室へと急行する。

文優――、という言葉で呂布は嫌な予感がした。そしてそれは的中した。

「文優！」

戸を吹き飛ばす様に開けた。最初に目に飛び込んできた文優は弱々しく微笑んでいた。

医者に目を向ける。医者は俯きながら小さく首を横に振った。

「手遅れで御座いました」

その言葉が呂布に突き刺さる。

——何故だろうか、己の死の宣告に比べてこの衝撃の違いは何だ。

重い足取りで寝台横の胡床に腰掛けた。

「二人にしてくれ」

医者が退室する。

文優はゆっくりと首を呂布に向けた。

「申し訳、御座いません」

「何故謝る」

文優は喋るところか呼吸するのにも難渋している様に見える。

「共に天下を穫る夢は叶いそうありません」

「端から期待などしとらん。俺がこんな駄だからな」

「ですが、あなた様ならもしや、と私は信じておりました」

「所詮、夢なんてこんな物だ。成廉の言う通り、人は天命に抗えない様だ」

「そんな事は御座いません。私は今でも信じております。呂布様は天下を掴める才をお持ちです」

「だが天下を統べる才は無い」

呂布の言葉に虚を突かれたのか、文優は少し眉を上げる。

「仮に天下を穫った後、統べるお前が居なくては何にも成らんではないか」

「……本当に申し訳御座いません」

「責めている訳ではない。寧ろ謝らなければならないのは俺だ」

「何を仰いますか」

「俺はお前を死なせるのだ。俺がお前と出会い、共に来いと誘い、危険に晒した。俺は毒に冒された時点で軍を解散させるべきだったのだ。そうすれば……」

「そうすれば私は死ぬ事など無かった、そう仰いますか」
「……そうだ」

暫しの沈黙が室を満たす。

「まさか私の死を契機に軍を解散するなんて言わないでしょうね」

「そのつもりだ」

「駄目です」

「何故だ」

「あなた様は本当に下々の事を思い遣りながら、私達の真意にお気付きになりませんか」

「……」

「あなた様は何者ですか」

「呂奉先だ」

「あなた様は何者ですか」

「……」

「あなた様は天下無双の武を持ち、最高の将が忠誠を誓い、精強なる騎馬軍に愛され、今徐州に割拠する呂布軍の君主・呂奉先です」

「……だからどうした」

「あなた様が中途半端に軍を解散すれば彼らはどうなるのですか」

「何処ぞの勢力でそれなりの位を得よう」

「本当に分かっておられない。……いえ、これは仕える者にしか解らないのかもしれないね」

「？」

「彼らの事を本当に思いやっているなら、呂奉先ならば死ぬその時まで闘い続け、その至高の武を天下に示し続けて下さい」

「……文優」

「それが、一度天下に名乗り挙げた君主の道であり、最強の武人が生きる道であり、私の信じるあなた様の道です」

「俺がそうする事で更に死ぬ者が増えてもか」

「この乱世、誰だって死の覚悟があります。呂奉先の為に死ねるな」

ら皆、本望というものです。この軍はそういった者ばかりです」

文優は少し笑った。

「まあ、陳宮様はどちらかと言うと曹操への怨みで仕えるているようですが」

文優は大きく息を吐いた。

「少し、……疲れました」

呂布は立ち上がった。

「休め」

「そうさせてもらいますよ」

呂布は退室しようとした。

「残りの命、使い方はあなた様の自由です。が、もし死ぬその時まで天下を諦めないのなら、陳宮を私の後任に」

戸に手を掛けた時、文優が投げかけた。

「己が何者か忘れないで下さい」

「……」

呂布は戸を開けた。

「お休み」

「はい、またいずれ」

呂布が退室する時、文優はその目が光を湛えているのを見逃さなかった。

「本当に……疲れた」

名も無き軍師、その名を歴史に刻む事無く散る。

偽帝立ち騒乱

それは突然だった。

袁術が帝位を僭称した。

時世は二つの袁家に分かれていた。袁家の嫡流にあたる袁術と冀州にて勢力を拡大する袁紹である。その趨勢は袁紹に傾きつつある。

袁紹は黒山賊を除き、并州を併呑。更に北方最前線の麴義が公孫瓚を北平に追い込んだ事により袁紹の勢力は一気に拡大し、河北の大部分を治めるに至った。袁紹は後漢末期において最大の勢力を築き上げたのだ。

そこで巻き返しを図った袁術はこの様な愚挙をとった。

何を根拠に袁術が帝位を語ったのか、その真意は諸侯には誰一人と理解出来る者は居なかった。大義があらうと無かろうと袁術の傘下に入っていた勢力は次々と離叛した。

友好関係を築いていた呂布もまた例外では無かった。

下「丕β」政庁――。

「呂將軍、袁術の元から使者が来ています」

「そうか」

呂布の気の無い返事に陳宮は眉をひそめた。

「お会いにならないのですか」

「捕縛しろ」

「はい？」

陳宮はひっくり返った声で聞き返した。

「獄に放り込んどけ」

「御冗談を！ 曹操に対抗する為には袁術との同盟が不可欠です」

呂布が向けてきた目はやけに冷めていた。

「陳宮、お前は噂を知っているか」

「噂？」

「伝国の御璽。今は使われない大昔の御璽を手に入れた、ただそれだけであの袁術は帝位を僭称してるのだぞ。そんな者、同盟するだけ時間の無駄だ」

「……」

不気味さしか感じられないその無表情を陳宮は今まで見た事が無かった。

呂布に出会って二年。それより以前の事は全く知らない。だが、その二年で陳宮は呂布の大きな変化を垣間見た。

子飼いの腹心・魏越の死、そして軍師・文優の死。段階を経る毎に呂布は陽とした笑顔を失っていった。いや、表情の変化に乏しくなったと言うべきか。

その意志を汲み取れず、陳宮は苦勞していた。

「それでは、袁術とは敵対するとても仰るのですか」

「そうだ」

呂布は平然と答えた。

「徐州が血の海になります」

呂布が友好関係を築けないなら、袁術は必ず徐州を攻める。袁術は陶謙が牧を勤めていた頃から徐州を狙っていた。

「そこでだ……お前を大将に任命する」

「え……!!?」

今話しているのは対袁術の外交についてだ。つまり、袁術との戦に於いて陳宮を総大将に任ずる、という事だ。

「將軍、私には……」

「文優は、」

呂布は陳宮の反論を止めた。

「文優は死ぬ前にお前を後継に推薦した」

「私……ですか？」

意外かつ納得だった。

陳宮は戦略よりも内政と戦術に長ける両極端の男だ。軍師というには少し役不足である。その上、先日はあらぬ疑いを掛けられ、諸將の信頼は崩れた。

徐州は優秀な文官が数多くいる。しかし、軍事面にまで精通した者がいないのだ。呂布軍に内外共に進言出来そうなのは陳宮しかないのである。

「とは言え、俺は文優の言を信じてない。人物評はともかく、あいつが推薦した者でまともな奴はいないからな」

それは陳宮も体験済みだ。

「それなら尚更、」

「だからこそお前を大将に任命する」

「？」

「文優の、最後の進言だ。俺は信じたい」

「つまり、汚名返上の機会を与えると同時に使えるか判断する、という訳ですね」

呂布が少し満足そうに笑った気がした。

「そういう事だ。俺達の目標は打倒曹操だ。それと較べれば袁術など粕だろう。俺の軍は精強だ、負けるとすればそれは將の責任だ。抜かるなよ」

陳宮は返事をする前に一つ引っ掛かった。

「我々の目標は天下ではないのですか？」

「お前は曹操が憎くないのか」

「それは私個人の念願であって勢力の目標ではありません」

「ならば打倒曹操は俺の念願だ。それに沿った進言を心掛ける」

「戦略に私情を交えますか」

「天下統一もまた支配者の私情でしかない」

「……魏將軍の敵討ちですか」

呂布は黙った。が、徐に口を開いた。

「そうだ、家族の仇を討とうとして悪いか」

「……」

呂布が不可解だった。

——呂布はこんな男なのか。

陳宮の知っている呂布はこんな者では無かった。最強の武を持ち、それを誇り、傲慢で私利私欲の塊の様で、平気で人を裏切る。それが陳宮の知る、天下を駆け巡る呂布の姿である。

陳留にて対面して以来、呂布とこんなに深く話すのは初めてだった。だから新たな発見が出来た。

呂布は部下思いの男だ。

これまでその行動から何となく感じてはいた。だが、まさか部下の仇の為に勢力を挙げて対抗しようとは思っても寄らなかった。

「曹操を討つ、それならば尚更、袁術との協力が不可欠です」

「駄目だ、単独で望まなければ天下を語る事も出来まい」

——どっちなのだ！？　やはり最終的には天下を狙うのか？

その支離滅裂な主張に陳宮は混乱する。どちらにしろ一度に對する敵は少ない方が良い。陳宮は何度も説得を試みたが無駄だった。

呂布は決して口に出した言を撤回しなかった。

そうこうしている内に一月以上が過ぎ、遂に袁術が進軍を開始したとの報告が入った。

「陳宮を大将に高順、張遼、曹性、侯成、宋憲、魏統をつけ、州兵

二万に俺の騎馬軍三千を委ねる。州境にて防衛線を張り、袁術軍を撃退せよ」

呂布から正式に指令が下った。

「呂將軍は如何なされるのです？」

「私用がある、後は任せた」

陳宮は呂布の言に首を捻った。相変わらずその無表情からはその真意を図る事は出来なかった。

自室に戻った呂布は途端に崩れ落ちた。待機していた成廉がそれを受け止める。

「すまん」

「いえ」

呂布は支えられながらもなんとか寝台に辿り着いた。

呂布の症状は更に悪化していた。医者より処方された丸薬は初めこそ呂布の力を取り戻す為に大いに働いた。しかし、服用する量は日に日に増えた。少ない量では効果が小さくなってきたのだ。効果の続く時間も比例して短くなっていった。

一度、宴会の最中に軀の痙攣が再発した時があった。酒豪の呂布が酒に酔ったという言い訳が通用するはずも無く、一同からは疑惑の目を向けられた。

このままでは皆に毒の事が知られてしまう。そう危惧している頃に丸薬が切れてしまった。

「奉先さん、やっぱりみんなに、せめて遼や高順殿にだけでも……」

「駄目だ」

「どうしてですか!？」

呂布の目が鋭利なものに変わった。

「俺はお前の何だ」

妙に低い声で呂布が訊ねた。

「……僕の天命です」

「では天命に従え」

何時に無く厳しい。

「せめて理由くらい説明して下さい」

「張遼については以前話した」

「ですから、遼は奉先さんを捨てる様な奴じゃありません！」

気まずい空気が流れる。

「この話は止めよう。それより例の手配は？」

はぁ、と溜め息を吐いて成廉は答えた。「出来ております。赤兎と雷音を邸内に繋いでいます。衛兵には賄賂を渡しておきました。従者には二十日程、泊まりがけで狩りに行くと伝えてます。

万が一皆に知られても臧霸殿の元へお忍びで外交していた事にすれば良いんじゃないんですか」

「ご苦労だったな、今夜発とう」

成廉は医者診察と新たな処方箋を呂布に勧めた。すると医者を訪ねるのにも内密で行う様に指示したのだ。あらゆる手を尽くして手配した。

しかし、諸将の中には必ず怪しいと気付く者が現れるはずだ。特に張遼は勘が良い。袁術との戦の最中に君主が狩りなど普通に考えて異常だ。呂布は臧霸の元へ行ったなどの苦し紛れの言い訳で上手くいくと考えているのだろうか。

夜。

夜陰に紛れて赤兎と雷音の元へ向かった。やはり呂布は成廉の補助無しでは歩けない。

近付くと二頭は嘶きながら騒いだ。

「しっ、静かに」

考えてみれば赤兎は主を乗せるのは久方振りである。鈍らないように蝗紅隊の調練の度に駆けさせてはいたが、やはり馬にとっての喜びは主を背に駆け回る事なのだろう。

「どうした？ 寂しかったか」

成廉に助けられながら跨る呂布は赤兎の鬣を震える手で撫でながら呟く。それに応える様に赤兎はゆったりと目を閉じる。

「大丈夫だ、お前も死ぬ時は共に在る」

実際の軍馬の最期は殆どが戦場ではない。戦の最中に馬に何かあるのは、則ち騎乗者の死に繋がる。だから大抵の馬は衰えが見えれば直ぐに引退となる。優秀な駿馬ならば種馬としても高く売られたりする。

だが赤兎は別だ。彼は誇り高い馬である。呂布以外の者に触れる事さえ赦さない。

最近は年月を重ねただけあって成廉には慣れ始めた。赤兎の世話には専ら成廉が雷音のついでで担当している。それでも跨ぐ事は赦されない。試そうとも思わせない何かがある。赤兎にはあった。

そしてその闘争心。赤兎をやわな馬と同じ囲いに入れると彼は馬を蹴り殺してしまう。戦に出れない所為でもあるが、どうやら漢の馬は同族として認識していない様である。西域の汗血馬と漢の馬では体格からして別物なのか。

当に戦の為の軍馬。『馬中の赤兎』と評されるのも納得である。

だから、そんな赤兎も己の最期は主と共に戦場で、と覚悟があるのかもしれない。

「お前はどうか？ 雷音」

そう訊ねながら跨る。雷音は何を訊ねられたのか解らない様に耳を振っただけだった。

それを見て成廉は何故か笑みが零れた。

——お前も赤兎と同じなくせに。

雷音もやはり普段から呆としているだけに戦場では活き活きとしている。

「行きましようか。泰山まで夜通し駆ければ明後日の夕方には着きます」

成廉を先導に二騎は駆け出した。

——徐揚州境、呂布軍前線。

「張遼、お主最近の殿の事どう思う」

高順がさり気無く張遼に訊ねたのは袁術との戦も正念場といった時だった。

張遼はわざわざ帷幕を訪ねて来た事にも驚いたが、それよりも話の内容の方が大きかった。

「不自然と思います。何か隠し事をしている様な、そんな感じがします」

「実は下「丕」を留守を守る王楷殿から密かに書簡が届いたのだ」

王楷は陳宮と共に曹操から離叛し、呂布に仕えている文官である。曹操の性質には予てから嫌っており、呂布が陳留にて旗揚げした時に喜んで従った。

「書簡？ 紙を使うとはよっぽどですね」

紙は貴重である。同時に機密性が高い。竹簡に較べてかさばらず、

処分も容易だからだ。

「それで何と」

高順は張遼に顔を寄せた。

「今、下〔丕β〕に殿はいらっしゃらないらしい」

「っ！ 一体何処に」

「それが従者は狩獵に出掛けたと言っているらしいのだが……」

それは有り得無い。

そこまで呂布が呑気でない事くらい二人は承知している。つまり、他言出来ない何かを行っている。

「この事を大将や他の者は？」

「陳宮殿は先日のもあってか報せなかったらしい。他の将も同じだ。それから……」

確かに今の軍中は誰が敵で味方が定まらない。王楷が一番信頼出来るだろう、と考えたのは古参の高順と張遼だけだったのだ。

「それから？」

「陳親子に怪しい動きがあるとか」

陳親子とは陳珪、陳登の事である。

陳珪は陶謙に仕えていた男だ。劉備、呂布と徐州の主が代わっても動ずる事無く重鎮に収まっている。劉備が牧だった頃はその不品行を堂々と諫言していたらしい。

陳登はその息子だ。文武両道の男で将としても有能。既に一千の兵の指揮権を持つ。父とは対照的に劉備の人柄に惚れているらしい。両名とも現在は呂布に仕えてはいるが不気味なまでに控えた動きしかなかった。

陳珪は徐州に於いては大きな力を持っているはずが、軍議にて全く発言しない。

陳登もまた、委ねられた兵の調練を普通にするが書記官以上の官位を求めない。

そんな二人が何事か行動しているなら益々怪しい。

「陳登も殿と同じで行方知れず。陳珪は密かに家財を売っていると噂だ」

「また謀叛でしょうか」

「決めつけるのはまだ早い。が、殿の行方だけでも気になるものだ」張遼はある事に気が付いた。

「廉は？ あいつはどうしているのです？」

「成廉……については何も書かれてなかったが」

——廉が奉先様を放っておくはずが無い。となると、あいつも絡んでいると考えた方がいいな……。

「とりあえずこの戦を終わらせましょう」

呂布と成廉は当初の予定を大幅にずらしてしまった。

泰山までの道のりは二日どころか一週間もの時を要した。今の呂布には休憩無しの出掛けは負担が大きかったのだ。

以前と同じ医者庵を特定すると、直ぐに呂布を連れて行った。

「むう……」

「どうですか」

医者が呂布の躰を隅々まで診察する様子を見守りながら成廉は訊ねた。

医者は無視した。診察が終わるまで診断はしないようだ。隣室から得体の知れない植物の根や動物の干物を持ってくると摺り鉢に放り込み、音を発てて摺り潰し始めた。

そこに沸かしていた熱湯を注いだ。湯気と共に鼻腔を刺激する匂

いが室内に充満する。医者はその液体を呂布に差し出した。

「飲みなされ」

黙って受け取った呂布はその匂いを直に嗅いで顔を顰めた。

「何だ、これは」

「薬湯です」

「それは見れば分かる」

「発汗と利尿作用があります。老廃物を排出するのを手助けします」

呂布は試しに口を付けてみた。途端に口に独特の香りが広がる。

「これを全部飲むのか」

「はい」

悪戦苦闘した呂布だが何とか飲み干した。

「あの、診断は」

成廉が訊ねると医者は座るように促した。

そして二人の顔をそれぞれ見て口を開いた。

「奉先様、酒をお止めください」

「それは出来ん」

「奉先さん」

成廉が窘める。

「酒は病状の進行を促します。自覚されてないようですが肝の臓に毒が蓄積しております。白目の部分に黄色味が掛かっているのはその為です」

言われて成廉が見てみると、成る程確かに黄色味が掛かっている。

「一年保ったのはお見事ですがこれ以上を望めません」

「そんな事はどうでも良い」

どうでも良くない。が、呂布は延命したいとは考えていなかった。戦に出た時に己の力を発揮出来れば良かった。

「以前、処方された丸薬をもっと貰いたい」

「これ以上はお渡し出来ません」

「もう使い切った」

「まことですか」

医者は驚きの声を上げた。頻繁に服用してはまずかったのだろう。案の定、医者はその丸薬が使い方を間違えれば劇薬となる事を説明した。

「あの丸薬は全身の神経に直接調節する効果があります。その為に効果が切れてからの副作用が大きいのです。あれを全て飲み干したとなれば絶対にお渡し出来ません」

「そこを何とか頼む」

医者はなかなか良しとしなかった。

「ならば二回分、二回分だけ処方してくれ。頼む」

呂布は頭を下げた。慌てて医者が止める。

「お止めください。そんな事をして渡せない物は渡せません」

その様子を見ていた成廉も居ても立ってもいられなくなった。

「先生、どうか僕からお願いします。奉先さんの最期が掛かっているのです」

成廉は医者に土下座した。

遂に医者が折れた。

「知りませんよ。毒で毒を制しているだけなんですからね！」

そう言って医者はそっぽ向きながら薬袋を手渡した。

「感謝する」

「ありがとうございます」

呂布は心から感謝した。成廉の言う通り、この丸薬には呂布人生の最期を飾る為に不可欠なものだ。最後の戦で症状が悪化するようでは意味が無い。

「あのお代は……」

成廉が訊ねると医者は知らん顔した。

「何の事ですか？ 何も処方してませんよ」

「……本当にありがとうございます」
深々と頭を下げた。

「さて、」

早速、薬湯の効果が現れたのか、廁から戻ってきた呂布は清々しい顔をしていた。

どうやら既に丸薬も服用してしまった様だ。

「もう飲んでしまったのですか」

「おう」

「それはまたどうしてですか」

貴重な二回分である。

「少々予定を変更する」

「？」

「下「丕β」には戻らず、小沛へ赴く」

「はあ？」

驚くのも当然だ。泰山から小沛などに寄れば二十日で帰還なんて不可能である。

そもそも行きに時を要しているのでこのまま直行しなくてはならない。

その状況下でのこの言は、やはり成廉を惑わす以外の何物でもなかった。

「どうして小沛なんかに寄るんですか。それよりも早く下「丕β」に戻り、袁術との戦に集中すべきです」

「それは陳宮に任せて大丈夫だろ」

面倒がって呂布は答える。確かに守備に必要な州兵二万と蝗紅隊以外の兵権は陳宮に委ねられている。

「今頃、奉先さんが居ない事が前線にも伝わる頃です。皆、帰りを待ち詫びているに違いありません」

成廉は不思議でならなかった。

どんな時でも『戦』というものに執着していた呂布がこうも無関心なのは奇妙である。

が、成廉は呂布の本心だけは理解していた。

「俺はな、」

「曹操以外の戦は興味無い、ですか」

面白がって呂布は成廉を見やる。

「なんだ、解ってるじゃないか」

「解りませんよ。何で曹操と戦がしたいのに小沛なんかに行くんですか」

小沛には現在、劉備が駐屯している。

劉備は豫州牧に任命された。帝を手元に置いているのは曹操なので、即ち曹操が任命した様なものだ。

小沛はエン州と徐州に挟まれる所に位置する。大方、徐州から追い出された劉備を取り込もうといった魂胆だろう。だが、だからと言って劉備は曹操に味方する訳でも無く、また、呂布に味方する訳でも無かった。

天下に流布する風評こそ未だ地味だが、劉備は人を惹き付ける魅力が有る様だ。その兵力は日に日に増え続け、一万を超えた。

呂布はこれを懐柔しようとも考えたのだろうか。

——違う、奉先さんはあくまでも曹操とは単独で挑むはずだ。

呂布は楽しそうな表情を一変させて答えた。

「劉備に喧嘩を売りにいく」

「……」

成廉は何も言えなかった。

呂布の突飛な言に慣れたからではない。真顔で言う内容に呆れたのだ。

「おい、貴様、何者だ？」

二人は小沛に到着した。

甲冑に、上から戦袍を羽織り、しかも帯刀している。門番に止められるのも当然と言うものである。

本当に来てしまった、と成廉は頭を額を押さえた。

咳払いをして呂布が応える。

「我々は城から城へ流れる武人。此処に手柄と金子を求めて参ったに過ぎん」

どうやら傭兵にでも扮しているらしい。だが呂布がその武威を抑えようともそれが

が強過ぎる。

何よりも騎馬でばれてしまった。

もう一人の門番が赤兎に気付いた。

「お、おい。あいつが乗ってんのって……」

「ん？……あ……」

「燃える様な赤の体毛に漢に無い巨軀……」

「……と、……いう事は……」

・
・
・

直ぐ側の路地に足音が響く。約十人余りといったところだ。

「どこに行った？ 本当に呂布がいたんだろうな」

戦場で聞いた事のある声。劉備の腹心・張飛だ。

「はい、この目でしかと」

「とりあえず大兄にも伝令を。……今日も南門の酒屋だろう。最近、お気に入り娘がいるしな」

「はっ」

そんな会話を二人は物置の中から聴いていた。

「おかしいな。何でこんな事になった？」

呂布が不思議そうに尋ねる。

「それはあなたが呂奉先だからですよ」

「まあ、歓迎されないのは予想してたが」

赤兎と雷音は門外に放しているから安心として、問題は今の自分達である。

「とりあえずその南門の酒屋に行ってみるか」

「本気ですか？」

「ああ」

短く答えると呂布は人気が無くなったのを見計らって戸を開ける。成廉は小さく溜め息を吐いて、呂布に続いた。

「なあ、俺様と遊ぼうぜ、な？」

「ご自分の身分をわきまえたらどうです、玄德様」

本日十回目になる劉備のしつこい誘いを酒屋の娘は軽くあしらう。

——くう、堪んねえ。仮にも只の町娘のくせに俺様の誘いを断るなんて、落としがいがあるぜ。

実際は牧という地位を武器にそこの女を召し上げる事くらい、何の造作も無い。

が、昔からの癖とやり方は変わらない。

地位に頼らずとも全ての女を虜に出来る自信が劉備にはある。勿論、根拠など無い。

「じゃあさ、じゃあさ。酒注ぎ足しあって先に酔った方が言う事聞くってのは、どう？」

「私はお酌しかしません。そう約束しましたよね」
なかなかの強敵である。

「琳ちゃん、手厳しいなあ。どうしたら抱かせてくれんの」
「ですから、玄德様には興味ありませんってば」

——じゃあ、躰に直接聞いてやる。

「俺様我慢出来ないよお」

酔った振りをして娘の胸元に寄りかかる。

「ちょっ、玄德様！」

駄目なもんは駄目です！ いい加減にして下さい！」

娘は拒否しながらもそこまで押し退けようもしない。

——ん？ さっきは拳で殴ってきたのに。……いける！

「琳ちゃん」

劉備の手が胸元に伸びる。

「……楽しそうだな」

「おう、楽しいぜ。誰だか知らんが、邪魔するな」

「俺も混ぜてくれるかな」

「はあ？」

劉備は振り返った。

「また会ったな、劉玄德」

「……は……？」

劉備は目の前に立っている巨体が一瞬、誰だか理解出来なかった。

あっさりと劉備を見つけた呂布は成廉が止めるのも聞かずに話しかけた。

丁度、張飛の言っていたお気に入りの娘と話していた劉備だったが、しばらく呆けた顔で呂布を見上げた後に絶句した。

「おまつ……呂布じゃねーか!!」

声を荒げる劉備を訝しんで店内の視線が集まる。傍らの娘など今にも悲鳴を挙げそう。

「しーっ、少しは察しろ」

呂布が目配せする。

柄に手を掛けていた劉備だったが呂布の他に成廉しかない事を確認すると大人しく座った。

「何の用だよ。こないだの借りなら返す気なんてさらさら無えからな」

ちびちびと酒を舐めながら劉備が小さく毒吐く。

「内密に話がある」

劉備は溜め息を吐いた。

「普通は書簡なり送って断りを入れておくのが礼儀ってもんだ」

「これは俺の個人の独断なのだ」

呂布が答えた途端に劉備は声を出して笑った。

「何時だってお前は独断で天下を渡り歩いてきたんじゃないか？」

「とにかく、内密なのだ」

呂布が劉備を見つめる。普通の者だったら見つめられる、と言うより睨まれているように感じる様な視線を劉備はしかと受け止めた。

「ちっ、分かったよ。琳ちゃん、盗み聞きされない個室はあるかい？」

「あ、ありますが……危険過ぎます玄德様」

震えた声で娘が答えた。

呂布が劉備を手に掛ける事も十分考えられる。

「大丈夫だよ。俺様を誰だと思っているんだよ？ 天下無双の劉備様だぜ？ ささ、案内しちゃって」

劉備の言に成廉は眉を上げる。呂布は愉快そうに笑みを浮かべた。

三人は店の奥、恐らく私用の客間に通された。

「足、悪いの？」

劉備が杯に酒を注ぎながら訊ねた。

「何の事だ」

呂布は普通に返したが、いきなり質問に成廉は肝を冷やした。

「先年の紀霊との一件の時。戟を射る前に剣を支えに立っただろ」

「ああ、」

成廉は掌が湿っていくのを感じた。呂布が毒に冒されている事は味方のみならず外部に洩れる事も絶対に避けなければならない。

——この男、やはり油断出来ない。

「まさか気付いていたとは……さすがとしか言わざる負えまい」

「まあね、俺様くらいになると些細な事でも目が行くようになるんだよ」

自慢げに語る劉備の様子を見て、成廉は少し安心した。少なくともその呂布の様子から何かを察した訳では無いらしい。

「ま、飲みな」

劉備が酒の入った杯を呂布に回した。

「忝ない」

受けようとする呂布を成廉は止めた。

「ちよっと、奉先さん」

酒は医者に止めるよう言われたはずだ。

「ん？ お前が先に飲みたいか？」

不思議そうに劉備が聞く。平生の劉備は身分に拘らないともっぱらの噂である。

「どうやら本当の様だ。」

「いえ、そうではなくて……」

「何だ？ 成廉？」

呂布までとぼける始末。成廉は諦めた。

「何でもありません」

早速、一杯交わした呂布と劉備だったが、直ぐに劉備は本題に入った。

「で？ 内密の話ってのは？」

「ふむ……」

呂布は腕を組んだ。

「まさにお前の言った俺の足に関係する」

「?？」

「!?!?」

成廉は開いた口が塞がらなかった。呂布は毒の件を劉備に明かさ

んとしているのだ。

「劉玄德、」

「うん？」

「小沛を棄てて曹操の元へ行ってはくれまいか？」

「冗談は止せ」

「冗談抜きだ」

「はあ???！ お前の足と俺が小沛から出るのと、どう関係があるってんだ?!」

劉備は驚き半分、怒り半分といった表情で吼えた。怒るのも当然だ。徐州を横取りされた上に、今また居城から出ていけと言われたのだ。

「まあ、もう少し話を、俺の願いを聞け」 「駄目なもんは駄目だ」

「……俺は……毒に、」

「奉先さん!!!!!!」

成廉は思わず叫んだ。

呂布の秘密を知られる訳にはいかない。天下に名高い飛将が弱っているとなれば、今の隙を狙う者は山程いる。

「駄目です、帰りましょう」

「お前は黙っておれ!!」

戸が振動する程の大声が客間に炸裂した。

呂布は劉備の方に向き直ると居ずまいを正した。

「玄德、俺は先年に曹操に撃ち破られ、腹心を亡くした」

成廉ははっとする。

呂布がその胸中を語らんとしている。その相手が劉備という事が気に入らなかったが、成廉は止めたい気持ちを抑えた。

「俺は復讐戦を誓った。曹操もまた、今は俺を目障りと思っているだろう」

「だから、それは俺様には関係無いだろ。戦がしたいなら勝手にしてくれよ!」

と、劉備の目つきが豹変した。

「それとも、その楽しそうな祭りに俺様も交せてくれんのか？」
獣の眼。血に飢えた軍人の顔だった。

「違う、お前には関与してもらいたくない」
劉備が固まった。直ぐに為政者の顔に戻る。

「俺か曹操が果てるその時まで此処から離れて欲しいのだ」
今度は劉備は驚きも怒りもしなかった。ただ、問う。

「どうして、そこまで……？」

「死んだ腹心は家族同然の者だった。俺が死ぬ前に敵に一矢報いた
い」

「そんなんだったら尚更退けねえな」

劉備も腕を組んで呂布を睨み付けた。

「俺様は曹操は好きじゃねえ。だが、嫌いでもねえ。それはお前も
同じだ。だからどちらにも友好を示さなかった。

……それでも一応はこないだの事を感謝はしている」

この間の宴に於ける戟を射た事だろう。「だから退けねえ。
お前は間違ってる。戦で苦しむのは民だ。本来なら戦は民の為にや
るものであって、私怨でやるもんじゃない」

呂布は黙って目を閉じた。

劉備は卓を叩いた。杯が倒れる。

「ここでお前の言う事を聞けば民を裏切るだけじゃねえ。道を誤っ
た者を見ているだけなのは義に悖る！」

劉備は一息吐いた。

「それでもまだ、」

「否、と言うなれば」

呂布は目を開いた。劉備を捉える。

「武力を以て排除する」

劉備は少し焦りを見せた。

「ちよっ、ちよっと待てよ。どうしてそんなに急ぐ？ 仮に曹操を
倒す為に軍を起こそうってなら力を蓄えてからでも良いだろ？！」

「俺には時間が無い」

「はあ？」

「俺の躰は猛毒に冒されている。……曹操の仕業だ」

「……！！？」

「本来ならば即死の量を盛られたが、天命なのか奇跡的に死なずに今に至る」

——『天命』……そんな言が俺の口から出るとはな。

「……じゃあ、あの足は……」

「毒の影響で躰の自由が利かなくなってきた。今も丸薬で症状を抑えているに過ぎん」

劉備は半信半疑の様だ。

「これは俺の人生が、いや、天下に轟く最強の武の最期がかかっているのだ。……頼む、お前を巻き込みたくない」

成廉は劉備を見た。何を思うのか。迷っているのか。劉備は口元を一文字に結んでいた。

そして漸く震える声で答えた。

「……出来ん」

決裂だ。

呂布の肩が僅かに揺れた。

呂布は分かっていた。劉備が言う事を聞いてはくれまい事を。

ただ、劉備はそういう男なのだ。民の為——それは勿論、大義名分でしかない。己の信念を貫き、それに違う者は正そうとする。それが劉備という男の魅力だった。

「ならば、」

呂布と劉備の視線が交錯する。

「次に相見えるのは、」

「戦場で」

呂布と成廉は酒屋を後にした。

劉備の好意なのか、小沛から出るのは容易かった。

追っ手も無い下「丕」への帰路。

成廉は訊ねた。

「奉先さん。奉先さんは劉備の事をどう思っているのですか？」
のんびりとした農道を進みながら、呂布は蒼天を見上げた。

「劉備は俺に似ている」

「どこですか」

「不器用なところだ」

「不器用？」

「そうだ、不器用だ。俺もあいつも」

「どんな風に」

「俺は戦と己の武だけを支柱に生きている。あいつは信念と義侠を
支柱に生きている」

呂布は自嘲の混じった笑みを見せた。

「だが、あいつの方が一枚上手だ。俺はあんな風に天下を渡れない」

「確かに、奉先さんの世渡りは危険でいっぱいでした……」

「……迷惑ばかりだな」

成廉は呂布の横まで駒を寄せる。

「そんな事ありませんよ。なんとって天命が示す世渡りですからね」

「天命か……」

「僕は今までもこれから後悔しないです」

「そうか」

二人は笑い合う。

「成廉」

「はい」

「次で最期の戦だ」

「……はい」

「曹操が死のうが俺が死のうが、最期だ」

「……」

「返事！」

「はいっ」

「行くぞ、ついて来い」

「はいっ!!」

二人は終わりへと駆け出した。

袁術との戦は呂軍に軍配が上がった。

大軍を頼りに多方面に渡って展開した袁術軍だったが、陳宮の策と張遼、高順の働きにより脆くも崩れた。

袁術軍には楊奉、韓暹という将がいた。

彼らは李確の元部将である。帝が長安を脱出する際に全面的に協力した。今、帝が生きているのは彼らのお蔭と言っても過言ではない。

しかし、曹操が現れた事で彼らの扱いは地に落ちた。別に帝が愛想尽かした訳では無い。曹操が政権を握った事により、目障りな彼らが追放されたのだ。

そうして流れに流れた二人は袁術を頼った。名家の下でなら、また帝に取り入る

機が有るかもしれない。楊奉と韓暹の動機は軽いものだった。

そこで袁術の僭称だ。彼らの忠誠心は皆無なのは誰が見ても明らかだった。

愚かにも袁術はその二人を先鋒に任じた。驕りが頂点に達すると見えるものも見えなくなる。

陳宮は有り難く楊奉、韓暹を使わせてもらうことにした。

陳宮にとって二人を裏切らせる事は造作も必要無かった。

楊奉と韓暹がそれぞれ叛旗を翻せば袁術軍は混乱した。そこを総攻撃した。

張遼や高順からしてみれば、敵と呼ぶにも憚る程の弱さであった。寿春まで帰還出来た袁術軍は半数以下とも報告された。

特に高順の戦功は大きなもので、攻め立てた陣は全て陥れた。その為、『陷陣營』などと言う異名まで出来る程だった。

陳宮らが下「丕」に帰還した時、呂布と成廉は丁度到着した。

直ぐ様ら臨時の軍議という名の質疑会が開かれた。

「聞いたぞ陳宮、圧勝だったそうだな」

「……」

陳宮は答えない。形の整ったその眉を釣り上げるだけである。

「此度の戦功は次回の禄を加増する」

「……將軍」

陳宮の声は静かだが怒りが込められていた。

「無礼を覚悟で諫言し申し上げます」

怒りの中に失望も見え隠れする。

「ご自分の立場を把握していますか?！」

自軍が戦の真っ最中だというのに行方を眩ますなど、古今東西何処を見たってそんな者はいません!!

大体、」

呂布が手で制す。

呂布は最初からこの問責を真面目に受け止めるつもりは無かった。「陳宮、曹操と戦をするならお前は どうする?」

突飛な問いに諸將の目が点となる。陳宮に至っては何を聞かれた

のか解らない様な顔をしている。

成廉は眉間を押さえた。普通はこの機に言うべきではないだろう。何て言ったって戦が終わったばかりだ。誰が賛同するだろう。

「……いいですか、私と將軍は会って五年も満たないですが、」

「俺の質問にのみ答えよ」

呂布が一睨みする。が、他の諸將が大人しく下を向く中、陳宮は引き下らない。

「將軍が何時だって御自身の判断で天下を渡り歩いてきたのは存じています。しかし、これだけ身勝手で、かつ配下を顧みない様ならば、誰も將軍に付いてきませんよ!？」

「俺は曹操の攻略を問うている！ お前が君主だとしてどうするか答えよ」

「いい加減にして下さい!!」

二人の劍幕に周りにはただただ見守るばかり。陳宮の叫びと共に重たい沈黙が漂う。

呂布と陳宮は睨み合った。

成廉は何もしなかった。曹操との戦は呂布の求めるものだ。戦にどういった形で臨むのか、それは呂布次第だ。

「今一度問う、質問にのみ答えよ。曹操と戦をするとしてその戦略を言え」

「……」

陳宮は答えない。ただ呂布を睨み付ける表情は思い通りにいかない駄々っ子にも見れる。

呂布は長い、長い溜め息を吐いた。

「陳宮、思い出せ。お前は どうして曹操に背いた」

「それは! ……私を用いなかったからだ」

なんて自己中心な考え方だろうか、と諸將の表情が微かに曇る。

「お前の主がその憎き曹操を討たんと諮問しているのだぞ」

「……」

「陳宮だけではない！」

諸将が身を竦める。呂布は見回した。

「長年、俺に従った者はエン州での敗戦、徐州の者はあの進軍を思い出してみよ！」

諸将が明らかに動揺する。

毒の混入によりまともに闘わずして散った者。呂布を或いは同僚、友を守るべく大軍に消えた者。

徐州では青州兵によって罪無き民、一族、愛する者が黄土に臓腑を晒した。

それぞれの思いが諸将を駆け巡る。

「次なる戦は曹操への復讐戦

これは決定事項である」

有無を言わさぬ調子で呂布は言い放った。

対曹操の攻略が始まった。

曹操は強大な兵力を擁する。青州兵である。その数約十万。そして正規兵、土豪の供出を含めれば総兵力十八万に及ぶ。

対して呂布は騎馬軍五千、州兵四万、土豪の供出を含め総兵力は七万。敵総力の半数にも満たない。

その上、袁術との戦直後だ。兵の疲労も取れていない。

更に兵糧の問題もある。輜重隊を展開するにも兵站を伸長するにも、総じて備蓄が無かった。

そこで陳宮の示した策は曹操を徐州まで引きずり出し、討ち取るというものだった。

意外にも文武諸官が渋る中、陳珪はその策に賛同した。曹操を倒すにはそれしかない、策が成る為に全力を尽くすと宣言したのだ。

曹操をおびき寄せるには生贄が必要だ。呂布が示したのは小沛の劉備だった――。

そして小沛攻略の軍が下「丕」を発つ前夜。

張遼は高順と共に密かに成廉の邸を訪ねた。呂布の邸と連結されている邸を前に張遼は気を鎮めて、大きく息を吐いた。

門番の従者は四人もいた。先日 of 謀叛の後では当然かもしれない。だが、あの呂布がそこまでして住まいを固めるだろうか。

「呂將軍に面会願いたい」

張遼らに気付いて従者は軍礼をとった。

「誠に申し訳ございません。將軍は面会謝絶でございます」

予想通りだ。この頃、呂布の姿を月一の軍議以外で見た者は殆どいない。どういう訳か邸に籠もって飛将の名を腐らせている。

「では、従者長に取り次いでくれ」

従者長とは成廉の事だ。呂布が語ろうとしないなら成廉に聞くまでだ。

張遼は近頃の呂布を理解しかねていた。前までは例え離れようとも何となく呂布の考えている事を知る事が出来た。周りも己も一時は惑わされようとも、呂布の真意を信賴してその言に従う事が出来た。

それが急に見えない壁でも在るかの様にぱったりと無くなったのだ。呂布を理解出来ない。全幅の信賴を持ってない。

張遼と高順はそんな状態で戦に臨みたくなかった。せめて今の呂布の考え一欠片でいいから知りたい。それが二人の正直な気持ちな

のだ。

暫く待つと奥へと通された。

簡素な客間で待機していると白鈴が白湯を運んできた。

「初夏と言っても夜は少し冷えませんか」

「これはありがたい」

高順が受け取る。

「遼様もどうぞ」

「え、ええ」

白鈴とは数年前までは言葉遣いも知らないかの様に屈託無い会話が出来た。その上我が儘なお姫様だった。それがすっかり様変わりしている。

「ごゆっくり」

退出する白鈴を張遼は白湯を啜りながら見送った。

入れ替わりに成廉がやって来た。

「遼も高順殿もお待たせしました」

張遼はまじまじと見た。しかし、白鈴同様、成廉は張遼の知る成廉より遥かに成長した。その表情からは何も読み取れない。

「驚いたよ、白鈴が客の世話なんか出来るなんて」

「ああ、従者も付けてないし、身の回りの事を自分でやるのにも慣れたみたい。最近はすっかりして余裕も出てきたよ」

「そうか、良かったな。そろそろ娶るのか？」

冗談交じりに訊ねる。しかし、予想と違って成廉は少し寂しそうな色を見せた。

「いや、……それは多分無い」

「そう、か。まあ、俺は何時でも応援してるよ」

「……ありがとう。ところでどうしたの？ 高順殿まで」

成廉の方から話を振ってくれるのは好都合だった。張遼は座り直

すと成廉に向いた。

「奉先様の事だ」

成廉の肩が僅かに揺れる。堅い笑みを浮かべると成廉は訊ねた。

「奉先さんがどうかした？」

「どうもこうも、このところ邸に籠もりがちじゃないか。先日、諸将に吐いた気炎に比べて心配なんだ」

「それなら大丈夫だよ。そもそもあれだけ元気なんだから心配いらないよ」

「……」

沈黙していた高順が突然口を開いた。

「將軍は病でも患っているのではないか」 成廉は目を逸らした。

「根も葉も無い噂です。病だったら戦なんて出来ますか」

「あの方ならやりかねん」

張遼も同意見だった。呂布は常識から僅かばかり外れている。

「……」

成廉が返答しない事で、室内は沈黙に包まれる。

「奉先様自身の事だけじゃない。今回の戦も疑問を抱かずにはいられない」

「と言うと」

「第一に早計過ぎる。第二に戦力差がありすぎる。第三に軍内部に不審な動きがある」

「特に陳珪、陳登。彼らの動きは余りに不自然だ。こんな状況で戦を始めようなんて負けようとしている様にしか見えない」

張遼は目を閉じた。

「つまり、奉先様が何を考えているのか、全く分からないんだよ」
成廉は俯いた。何かを答えようと必死になっているようだが、口を動かすだけで何も発しない。

「……それでも、僕達は奉先さんについて行こう」

ようやく発したのはそれだけだった。

張遼は高順と顔を見合わせた。

——これ以上聞き出すのは無理か……。

「そうか、そうだな。俺達はただ己の務めを果たすのみ」

「邪魔したな、廉。戦場で待ってる」

張遼と高順は邸を後にした。

「どう思う、張遼」

「やはり、何かあると思います。しかし……」

高順は足を止めた。

「しかし？」

「考えるのは止しませんか。例えば、奉先様が道を踏み外しても俺達が引っ張ればよいのです」

高順は満足げな笑顔を見せた。

「同感だ」

翌朝、高順、張遼率いる歩騎一万が小沛に向けて先発した。

「本当に、本当にいいんですか」

『高』と『張』の旗が小さくなる。城門から次々と吐き出される先発軍を楼上から見下ろしながら成廉は訊ねた。

「何がだ？」

「全部です」

「……ああ、戦は始まれば何人にも止める事は出来ん」

「最後の薬は飲まれましたか」

「ああ、これで最後だ」

呂布は成廉の横まで来ると地平線に消える砂塵に目を細めた。

「陳珪、陳登が怪しいとの事です」

「内密に調べられるか」

「難しいです、直接問い質すしか……」

つまり、尻尾を出さなければ彼らが何を企んでいるのか見当もつかないと言うことだ。そして、相手は徐・揚州に聞こえる大物。尋問したところで体のいい言が返ってくるだけだ。

——文優とあの間者が生きていれば。

「俺は本当に惜しい男を失った」

呂布がしみじみと呟く。

文優とその間者がいないだけでも思う様に事を為せない。あの間者は文優だけでなく呂布にとっても重要なものだった。

先年の謀叛以来、一人も帰還しないところを見ると本当に全滅したのか。はたまた、主の死を前に解散してしまったのだろうか。

「陳親子の件は尋問するしかなさそうだな」

翌月の軍議で陳親子の尋問が行われた。しかし、予想した通り二人の言い分は公正な物だった。

陳登が行方を眩ましたのは袁術との戦の策略で楊奉、韓暹を説得するため。陳珪が家財を売ったのは身を軽くするためではなく二人への贈与のため、と答えた。

計略の贈与なら州庫から出せばよいと追い詰めると、陳宮の指示、と答えた。

陳宮も戸惑いながら認めた。まさか、己の指示で陳親子を守る事

になってしまふとは予想もしていなかったのだろう。
結局、非がある訳でもなくどうしようもなかった。

小沛陥落の報せが下「丕β」に齎されたのは、更に一月を数え、
残暑の中だった。

「……高將軍は劉備の軍勢万余を散々に撃ち破り、小沛を占拠。
続いてエン州から劉備の要請により夏侯惇の増援が来襲。これも撃
ち破り、我が軍は小沛に待機中で御座います」

さすがは陥陣営、と諸将から賞賛の声上がる。

「直ぐ様、備蓄と共に彭城まで退却するよう伝えよ」

陳宮の命を受けた伝令が退出すると、入れ替わりにエン州の間者
からも伝令が着いた。

「曹操！ 東征の軍を起こしました！
その数、およそ十万！」

広間の空気が引き締まる。

「来たか」

陳宮が呂布に目を向けた。頷くと呂布は立ち上がった。

「俺達も彭城へ赴くぞ」

その一声で諸将は慌ただしく準備を開始する。その命令は下「丕
β」に広がる。

蝗紅隊の調練を行っていた成廉にも早馬が訪れた。

「成廉様、出撃命令が発令されています。直ちに準備されたし」
成廉は指揮鞭を掲げる手を下ろした。

「遂にこの時が来ましたな」

蝗紅隊の一人が言う。

「そうだ」

「腕が鳴るぜ」

蝗紅隊の誰もが曹操へ敵の念が強かった。飛将に率いられる最強の騎馬隊。それが蝗紅隊だ。

それを傷付けた罪は重い。四百騎まで討ち減らされた蝗紅隊はこの日を心待ちしていたのだ。

「では、みんな行こうか」

成廉の呼び掛けに皆、笑顔で応える。どんなに復讐の修羅になろうと、戦を唯一の楽しみと捉えるのが蝗紅隊。

四百の黒塊は駆け出した。

曹操、東征。呂布、これを迎え撃つ。

天下に飛将の咆哮が響き渡る。

それは河内の張揚、泰山の臧霸にも届いた。

だが、張揚は袁紹の相手で手一杯だった。輩に手を貸すにも司隸と徐州では余りに遠い。

一士官からエン州、司隸、豫州に跨り、帝を手中に置く英雄・曹操。

騎馬民族から飛将の再来と謳われ、誰一人適わない神性を備える

武人・呂布。

両者の闘いを天下が固唾を吞んで見守る中、臧霸だけが只一人、呂布に加担した。

飛将失墜

「これより配置を命ずる」

軍師として陳宮が諸将を前に次々と通達する。

曹軍は二手に攻め寄せてきた。

まず、泰山に程近い拠点が兵站線の強化として狙われた。

寄せ手は約三万。

しかし、この周辺は嶮しい山内で守りに有利。少数でも十分だ。

「私が行きます」

陳宮はこの拠点の守備を五千の兵で買って出た。同時に臧霸との共同戦線を張る事が出来る。北の侵攻は問題無い。

下「丕」には秦宜禄、王楷らに州兵五千を残し、彭城の守備に陳珪を任じた。

陳珪の嫡子、陳登の知勇は本来ならば前線にて發揮されるはずだが、造叛の疑いがある以上、下手に前に出す訳にいかない。

監視役として曹性と一万の兵を付けた。これで彭城の守りは十分だ。

そして彭城の西八十里の所に大本営が設置された。左翼に高順の一万、右翼に張遼の一万、本軍に呂布の二万。侵攻されながら攻める様な陣容。これで曹軍本隊約十万を迎え撃った。

曹軍先鋒は留まる事が無かった。虐殺こそ無いものの、数多の歩兵が街道を埋め尽くす様は徐州の民に先年の惨劇を連想させる程だった。

遂に先鋒が大本営の西十里の所まで迫る。

呂布は出陣した。

騎馬を中心に歩兵で編成した一万で先鋒に襲い掛かる。勿論、その周囲は蝗紅隊が固める。

曹軍の先鋒は楽進。校尉から戦場を生き抜き、叩き上げられた軍人だ。曹操に負けず劣らず小柄だが、体格に相対して攻撃性は激しい男だ。

呂布は徐州の兵を率いるのが初めてとの事もあり、いきなり突撃はしなかった。

歩兵と騎兵の連携で上手く捌きながら、騎射で攻撃した。特に呂布と成廉は百発百中の腕前で、弦音が響く度に敵兵が崩れ落ちる。それを目の当たりにした敵兵の最前線は畏れおののく。呂軍は勢いづいた。

そこに戦況を開きようとして楽進が自ら出て来た。

呂布は相手にせず軍を引き返した。直ぐ様、好機、とばかりに楽進は追撃する。

戦とは逐う者に有利だ。無闇に背を向ければ多大な被害を出す。しかし、それは時と場合による。

大本営まで五里を切った時、呂布は指揮旗を振らせた。左右の山腹より高順、張遼の軍が現れる。それを楽進が視認する前に襲い掛かった。

猛進する軍は急に止まらない。曹軍先鋒は横っ腹に杭を打たれ、身動きがとれない。更に混乱した曹軍に呂布は引き返すと突撃を繰り返す。

楽進は潰走した。大地を埋め尽くすのは曹軍の兵ばかり。

「上手く行きましたね」

成廉が嬉しそうに言う。

曹操を打ちやすくするには極力此方の流れに持ち込まなくてはならない。

その上、短期決戦で臨まなければならない。長期戦に構えられれば疲弊している此方に不利だ。

その為に陳宮は緒戦の戦術を呂布に残していた。

あくまで単純、基本の伏兵法だったが、大軍という精神的安心感にとらわれた曹軍には有効だったのだ。

曹軍との緒戦は陳宮の戦術勝ちで終わった。

「死傷者は二千に上ります。以上、先鋒からの伝令です」

楽進敗退の報せを受けて曹操は苦い顔になった。

「やはり先の叛乱で陳宮も始末しておくべきだったのではありませんか」

そう訊ねるのは参謀の郭嘉。

「あの程度の揺さぶりで混乱する軍です。あの者達を使って内から崩せば宜しいのでは」

軍師祭酒、つまり参謀長の荀攸が提案した。

荀攸は荀或の甥にあたる。しかし齡は八年上である。過去に董卓暗殺を計画し、死刑となった事がある。しかし、執行前に董卓が呂布に殺された事により命を取り留めている。

その為、荀攸自身は此度の呂布征伐は乗り気がしない。良策は呂布を降伏させる事だ。

その意見に曹操は揺れ動いていた。

「まだ、あの者達を使うべきでは無いだろう。陳宮も殺すべきではない。彼の者は我が軍に必要な人材だ」

「此度の戦はそれも目的の一つでございましょうか？」

「そうだ」

曹操は陳宮を気に入っていた。

基本的に曹操は『使える』人材が好きだ。その能力を愛し、性質は二の次だ。郭嘉などその筆頭である。荀彧、荀攸の様な上流階級の名士はその性格品行は目を覆う程。司空府ではよく監督役、程立の激昂が炸裂していた。

陳宮もまたその部類に入る。いや、近いと言う方が妥当だ。

陳宮は品行に問題は無い。性格にかなりの癖がある。精神が幼いのだ。

他を凌ぐ能力はある。しかし、捻りが足りない。基本に忠実、と言うより不器用と言うべきか。その上、内心では己は誰よりも優れていると信じている傾向があり、他者が賛美される事に憤りを感じている様な男だ。

実際、優れているのだが上には上が居る。呂布がエン州で挙兵する以前、そう戒める意味で曹操は陳宮をわざと張邈の下に遣わした。それが発端となったのか、陳宮は拗ねた。逆効果だったのだ。

――私の能力を理解出来ぬなら凶刃を向けさせて頂く。

そんな声が聞こえてきそうな裏切りだった。曹操は張邈の裏切りに驚きながら、陳宮の行動には苦笑いしたものだ。

まだまだ青い。率直にそう思った。

だから、陳宮は今でも青いのだ。呂布に忠誠心などだろうはずも無い。ただ、曹操に意地でも従わない、右と言えば左を進む様に逆らっているのだ。

――陳宮は我が軍に戻って初めて成長するのだ。

曹操はそう信じていた。

文優とか言う謎多き呂布の知囊は間者と共に始末した。その時点で呂布は死んだも同然だ。もう曹操に障壁など無い。

敢えて注意するなら呂布の人外の武。隠密部隊の報告によれば毒に冒されているはずの呂布の武は未だ健在らしい。だが、それだけだ。

既に呂布の軍を破る為の下準備も進んでいる。

例え、甚大な被害を出そうとも絶対負けられない、絶対勝てる自信が曹操にはあった。

「陳宮を取り返しに行こうか」

曹操は本陣を更に東へ動かした。

曹操自らが本軍を率い、本格的に前線へと兵力が投入された。

曹操を討つ絶好の機会。そして恐らく最後の好機である。呂布は必殺の突撃の為に諸將を大本営に召集した。

「皆、今日まで長かった」

呂布の朗々とした声が幕内に響く。戦を求める獣が猛々しさを抑えている様にも、また、感激を言葉に表す詩人の様にも見える。成廉だけで無く、諸將の目にも呂布は何時に無く感傷的に見えた。

「全力を出し切れ。目標は曹操只一人。それで戦は終わる」

成廉は呂布の言に耳を傾ける諸將を見回した。

高順は呂布の一言一句を噛み締める様に目を閉じている。その部下の宋憲らは呂布の言に目を輝かせ、戦意は最高潮の様だ。

そして、張遼は表情を崩す事無く、静かに呂布を見つめていた。

呂軍が今、一つになる。そう成廉には感じられた。元々、将の殆どが古参ばかり。連携は間違いないだろう。

——これが飛将の軍。

そして成廉は毒の影響を微塵も見せない呂布を見上げた。

——これが飛将の生き様。

ふと、成廉は己の目頭が熱くなっている事に気付いた。それが何を意味しているのか成廉にも見当がつかない。ただ、何かに感化された。

これが最後の戦と臆が教えているのか。

呂布の秘めたる感情が他方に昇華されているのか。

——どれでもいい。

諸将の視線が呂布に集まる中、成廉は微笑した。

——僕はただ、天命を追いかけるだけ。

「この大本営を放棄する。我々に帰る場所が必要無い」

呂布は変わって淡々と告げる。諸将の戦意は高揚する。

「下「丕」」に帰る時。それは曹操の首級を挙げた時のみと心得よ！」

「御意!!」

呂軍は呂布と蝗紅隊を中心に守備に回した兵力を除いて、全軍を動かした。

斥候の報せを受けた曹軍もまた、軍を動かした。

呂布は成廉と蝗紅隊と共に先頭に立った。その後ろに歩騎二万、左右に高順、張遼は布陣する。

今、遙か霞む曹軍を前に呂布は大きく息を吸う。

「成廉」

「はい」

「俺は生きているのだな」

「……はい」

「敵を前にした時、生きていると実感出来る」

「そうですか。それなら奉先さんはまだまだ死ねませんね」

「？」

呂布は振り返った。

「天下に奉先さんの敵は曹操一人どころじゃありませんからね」

途端、破顔一笑する。内心、その言に隠される呂布に死なないで欲しいという願いも受け止めた。

「ハハハッ。その通りだ、成廉。そうと決まれば早く曹操を一捻りにしてやらねばな」

赤兎に跨る。

「お前も俺も老けたものだ」

一瞬、赤兎もしみじみとした表情になった気がした。

「では、皆、行こうか」

蝗紅隊は何時もと変わらない笑顔で応えた。

両軍激突した。

呂布を先頭に蝗紅隊は曹軍に突撃する。

曹軍の兵士は下手に前進せずに突っ込む呂布を待ち受ける。

深紅の巨馬が、それに跨る真白の戦袍が迫る。まるで喪服、天よ

り舞い降りた死者の様な装束に畏怖の念が広がる。

最高潮に達する恐怖と闘いながら、絶対的な距離で曹兵は呂布目掛けて戟を一斉に繰り出した。

戟の刃が鈍く光る。しかし、どの兵も手応え一つ伝わらなかった。そんな、と声にならない叫びが口々から漏れる。

次に瞬いた時には最前線の曹兵五人分程の手足首が宙を舞う。次列の兵は何が起きたのかも知る間も無く、次々と駆けてくる蝗紅隊に斬り飛ばされる。ひいと言う息吸い、目を見開く曹兵は為す術も無く呂布の戦場を赤に染める。

呂布に誰一人、触れる事も出来ない。

呂布と蝗紅隊が通った後に続く隊にとっては戦にもならなかった。恐怖でおののく曹兵を討つだけ。それは動かない的に矛を突くのと変わりなかった。

とは言え、曹軍も精兵揃い。他の軍もそう上手く突破出来るはずがない。直ぐに呂布は単独突出してしまう。

呂布は繰り出される戟を弾きながら敵の軍容を目視する。眼前に広がるのは無数の甲冑。そしてぽつりぽつりとそれぞれの敵将の旗がはためく。

曹操の牙旗はまだまだ霞んで遠い。

見回す事、周囲に約三万余り。遠くの高順と張遼も一、二万程の軍と激突していた。

一見、無秩序な曹軍だが、指揮系統がしっかりしている。曹操の指揮の元、更に一隊が既に軍中に食い込む呂布の背後に回った。敵に後ろを取られては危険だ。

「高順と張遼に伝令！ 俺が両翼の横を削る

その隙を見極めて攻めるよう伝えよ」

伝令が勢い良く放たれた。

同時に呂布も現前線に沿って軍を滑らす。呂布の軍は前線に触れる度に血飛沫を作り出す。

曹軍の前線は呂軍を留める事が出来ない。

暫く北へ進むと砂塵が近付く。高順ともあろう者が拮抗している様だ。

呂布は高順と交戦する曹洪の軍に殺到した。高順の軍の反対。丁度、挟み撃ちする様な形で攻め込む。目に見えて曹洪の軍は狼狽える。

容赦無い攻撃に自然と曹軍の兵力が呂布側に偏る。そうしないと呂布の猛攻を支えきれないからだ。蠢く曹軍に僅かだが亀裂が入る。それを高順は見逃さなかった。

「続け」

騎馬隊で小さな曹軍の切れ間に飛び込む。途端に曹軍は竹を割る様に容易く分断されていく。

その様子を見て、呂布は攻め手を止めた。これ以降は高順の手腕で十分だ。

「次は張遼だ、行くぞ」

馬首を返すと来た経路を引き返す。

再び曹軍の中軍に会敵しようという頃、呂布の前に巨大な陣が現れた。

小さく纏められた小隊が密集している。

「これは……魚鱗の陣！」

成廉が声を上げる。

魚鱗の陣。

その名の通り、一隊を一枚の鱗と見立てて、幾重にも並べられて

いる。一枚の鱗が剥がされようとも、直ぐに待機している別の鱗が穴を埋める。

大軍だから布陣出来る、ただ守る事にのみ特化した陣だ。軍としての進軍は極めて難しく、大抵は防御力を求める本陣に用いられる。

——まさか曹操が出て来たか。

魚鱗の陣を運営するのは高い指揮能力が求められる。末端まで自在に動かすのは本当に困難なのだ。

しかし、呂布の予想に反して中央の旗には『夏侯』と印されていた。

報告に因れば張遼が交戦する軍は夏侯淵が率いている。

つまり、——。

「盲夏侯の方か」

曹操に旗揚げの頃から従う、股肱の臣・夏侯惇。

先年、隻眼になってからは命知らずの誰かから一族の夏侯淵と区別する為に『盲夏侯』などという仇名を献上された。夏侯惇はこの不名誉な仇名を良しとせず、鏡をみる度に映る己が気に入らない様に放り投げている。

隻眼となった今でも曹操の信頼は絶対のものだ。前線に出る事は少ない代わりに指揮官として軍を束ねたりとなかなかの大將ぶりという噂は呂布の耳に入っていた。

「お手並み拝見とするか」

一声上げると、呂布は赤兎を締め上げた。それを合図に成廉、兵が続く。呂布が方天戟を一閃すると鱗が一枚、消し飛んだ。

しかし、次の鱗が矛を突き上げながら迫る。難しい。思う様に進む事がままならない。

少しずつ大魚に刃を突き立てる様に呂軍は進んだが、最後尾が陣に飛び込んだ途端、呂軍は包囲された形になってしまった。

出口が無い。辺りは矛を携えた無数の鱗しか見えない。突破しようと斬り込んでも、次の鱗が邪魔する。次第に呂布は己が陣の何処に位置しているのかも定かでなくなった。

そんな時、思わぬ助け舟が現れた。夏侯惇が正面より現れたのだ。則ち、張遼の交戦地点は右方となる。夏侯惇のお蔭でどの方向へ抜ければ良いかは分かった。

問題は夏侯惇をどうするか、である。

夏侯惇本人は何かする訳でも無く、幾層か離れた所に麾下を引き連れて呂布の奮迅を眺めているだけである。

不敵な笑みを浮かべつつ、夏侯惇の指示が飛ぶ。呂布らを包囲する魚鱗が徐々に締め付ける。

呂布自身、遮二無二斬りまくれば突破出来ない訳でも無い。只、追撃の心配だけがそれをさせない。

——こうなったら僕が……。

成廉は決意した。

「奉先さん」

「何だ」

振り返らずに呂布は聞き返す。

「先に行って下さい」

「……しかし、」

呂布は一瞬手を休める。

「兵を千程貸してくださいれば暫く足止め出来ます」

「信じて大丈夫か？」

足止めの件では無い。足止めして生還出来るのか。

その意を込めて呂布は訊ねた。

「早く遼の援護を。あの旗の下で落ち合いましょう」

そう言って成廉は砂塵に霞む『曹』の牙旗を指差した。

二人は頷き合った。

「死ぬな」

「はい」

「二手に別れる！ 蝗紅隊と騎兵千を残す。残りは突破を図る」

呂布と兵一万余が魚鱗に突っ込む。

呂軍のいた空間に成廉と騎兵千のみが残された。追撃の軍が呂布を追わんと動いたが成廉が行く手を阻む。

成廉には如何にすれば呂布が易く抜けられるのか、それだけを考えた。

辿り着いた答え。それは――。

「盲夏侯殿に一騎打ちを所望する！」

呼ばれて夏侯惇が鱗群から現れた。

地味な戦袍。しかし、曹軍で統一された鈍色の甲冑と相まって、堅実な強さが滲み出る。

「飛将の側に常に侍る驍将あり。成廉と言ったか」

余裕の笑みで成廉の挑戦を一蹴する。

「片目の借りを返したいところだが今回はそうはいかんだ」

しかし、成廉はその笑みが一瞬固くなるのを見逃していなかった。夏侯惇は片目を奪い、『盲夏侯』などと言う仇名の生みの親・成廉を八つ裂きにしたくて堪らないのだ。挑発を繰り返せば乗ってくと成廉は読んだ。

「盲夏侯の意味は隻眼を表していると聞いたが、聞き違いだったかな？

まさか、度胸の盲い事とは思わなかったぞ」

「勝手にほざくがいい」

言い返す夏侯惇の腕は震えている。

「そうか！ 盲夏侯殿は呂軍に味方してくれているに違いない。小

沛でも倍の数で高順殿に負けてくれたんだな。

だから、一騎打ちなんてとんでも無い訳か」

「貴様あ、言わせておけば……。望み通り捻り殺してやる！」

夏侯惇は徐に剣を抜いたかと思えば騎馬を飛ばして迫る。

「来い！」

成廉は左手より繰り出される矛を軀を捻って避けた。そして横薙を浴びせる。戈に付属させた小型の片刃が風を切って夏侯惇に食い込まんとするが、寸でのところで剣に阻まれる。

直ぐに刃を返すと柄で撃ち合う。

頭、首、胴、腕。先に仕掛けるのは成廉で夏侯惇は一拍遅れる。

それでも反応してからが速い。どんなに攻めても夏侯惇に届かない。

成廉の額に汗が滲む。粘着いた厭な汗だ。

夏侯惇の殺気は苛烈である。

片目でどれ程の者か、と些か侮っていた成廉にとって夏侯惇の殺気は焦りを助長した。攻めだった攻撃が次第に受けに回っている。

——くっ……。まずいか。

呂布が突破するには充分撃ち合った。

しかし、如何にしてこの窮地を脱するか。成廉は思いつかない。

普通に夏侯惇に背を向け、突破しようとするれば呂布の時と同じ様に追撃と言う問題がある。蝗紅隊を含む騎兵千とは言え、背後を突かれればひとたまりも無い。

そして、力任せに夏侯惇を討って魚鱗の陣を崩壊させるのは難しい。討つには成廉は力不足だった。予想外に夏侯惇は強い。

援軍もまた無い。せめて、援軍の一つでもあれば、立ち回り次第で互角にやり合える。少なくとも生還は可能だ。

そんな時、示し合わせた様に一騎打ちする空間の曹軍右手に道が出来た。

「成廉！ 無事か?!」

矛を振り回しながら駆けてくるのは高順。

「高順殿！」

「馬鹿な……！！」

互いに二、三步離れると夏侯惇は驚きの声を上げた。

当初の成廉の読みが当たった事により、魚鱗の陣は夏侯惇の指示が行き届かなくなり、その固さが削がれた。呂布が突破し易くなったと同時に呂布の残した陣の亀裂の修復も停滞していたのだ。

そして曹軍左翼を破った高順が偶然にも曹の群れに埋もれる『呂』の旗を見つけ、呂布の通った跡を辿ったのだ。

お蔭で高順も激しい抵抗を受ける事無く、中軍の中央まで来れたのである。

夏侯惇が啞然としているうちに高順の引き連れる軍は成廉らを包み込む様に回収する。そしてそのまま来た方向へと脱する。

「夏侯將軍！」

夏侯惇の副将は追撃の命を求めて駆け寄る。夏侯惇の顔は陰しく、しかし、目は諦めが表れていた。

「追撃はせんよ。孟徳殿の指示通り、次の態勢へ移行する」

魚鱗の中、消えていく呂軍を見て夏侯惇は溜め息を吐いた。

「もう、会う事は無いだろうな……。なあ、孟徳殿」

夏侯惇の向く方角は本陣の牙旗では無く、北。泰山の方を見つめながら、眼窩が疼くのか、しきりに眼帯を弄った。

泰山麓拠点。

陳宮は五千の兵で斉南方面より進軍する曹仁の二万を受け止めていた。

この拠点は両方を山に挟まれ迂回するにも辺りは隘路だけ。險阻な山々に囲まれ、天嶮の地である。

陳宮は緒戦を大勝利で飾った。

進軍する曹仁を砦に取り付ける距離まで手出しせずに引き付けた。そこで泰山の盟友、臧霸の出番である。足場の最悪な山を容易く進軍出来た彼の私兵は正に神出鬼没。曹仁の軍を後方から幾度と無く攪乱した。左右が深い山な為、何処から攻められているのかも把握出来ない曹軍は遂に混乱した。

それを待ち受けていた陳宮は自ら率いて出撃する。挟み撃ちに遭った曹軍は半壊した。道を埋め尽くす死体は曹軍の進軍を阻む程だった。

——ざまあ見ろ。

陳宮は心底喜んだ。曹軍を、曹操を撃ち破ってやった。自分の力を見抜く事も出来ずに左遷した男を嘲笑う。

——この戦は呂將軍の言う通り、私を用いなかった曹操への復讐戦。

いや、そんなものではない。罰だ。私を用いなかった罰なのだ。

曹仁の軍は拠点に近付く事も出来ずに二十里程北で動かなくなつた。

——曹仁の報告を耳にすれば曹操はさぞかし悔やむ事だろう。だが、私は負けても二度と与しない。

それに、……私が負けるはずが無い。

一つ気掛かりがあるとすれば、楽進を破ってからの本営と連絡が途絶えた事だった。

しかし、勢いは呂軍にある。あの無双の主が負けているとは陳宮に想像出来ない。

大方、彭城の定期伝令が勝利に酔って怠慢しているのだろう。全てが自軍に傾いている。陳宮はそれしか考えられなくなっていた。

顔面蒼白の見張りが飛び込んで来たのは臧霸に祝いの酒宴を設けようとしていた時だった。

「南方に……」

報告を聞いた途端、陳宮は立ち上がった。見る見るその顔が赤紫に染まる。

陳宮は物見櫓によじ登り、彭城への街道を見て硬直した。

「こんな……馬鹿げた話が……」

眼下には街道を埋め尽くす鈍色の甲冑。『曹』の牙旗が風にはためいていた。

成廉の足止めにより中軍を脱した呂布は高順の時と同じく、張遼と交戦する曹軍一万に突撃を仕掛けた。

夏侯淵は奇襲を得意とする将。攻撃を受ける事は不得手としていた。呂布と張遼に挟撃された形になった曹軍は奮戦虚しく瓦解した。散る曹軍を呂布は追撃しなかった。

直ぐに進軍態勢を整えると、張遼と共に『曹』の牙旗を目指す。中軍の右側を駆けていると丁度、高順の部隊が曹軍の尻から突破してきた。その軍中に真白の戦袍を赤く染める一騎と黒光りする騎兵隊を見て取れた。

どうやら成廉らも何とか窮地を脱した様だ。

「三方より攻撃する、曹操を逃がすな」

「御意」

速度を緩める事無く、高順が左翼、張遼が右翼と陣容を變形する。呂布はそのまま直進した。

曹操は本陣を馬防柵と塹壕で何重にも囲い、即席の砦を築いていた。陣門に千程の一隊が布陣していた。

立ち塞がる将は若い。子供の様な澄んだ目をしているが乗馬していないのにも関わらず、目線は同じ高さだ。

呂布は何処かで見た覚えがあった。軍を止める。

「お前は確か……」

「許「ネ者」だ」

呂布はエン州で曹軍の将と闘った時を思い出した。辛くも曹操を逃し、夏侯惇が片目を失った時である。

「典韋はどうした」

曹操の護衛として、親衛隊を率いていたのは典韋だった。しかし、その親衛隊は今、目の前に許「ネ者」と共に此方を睨みつけている。

「……漢武猛殿は死んだ」

漢武猛校尉は典韋の最後の官位だ。

「それは残念だ」

——つまり、こいつが典韋の後継か。

「成り代わって俺が此処から先は通さん！」

許「ネ者」は拳を突き出し宣言した。手に持つ武器は見覚えがあると思えば、典韋が愛用していた双鉄戟だ。

呂布は笑った。

「良い度胸だ。典韋の代わりにお前が死ね！」

呂布は方天牙戟を高く掲げた。両軍ぶつかり合う。許「ネ者」の相手を呂布が務めた。二人が得物を振るう度に風が切れる。

許「ネ者」は典韋の後継なだけあって、その臂力は並み一通りではない。五十斤はあろうかという双鉄戟を軽々と振るう。

何より油断ならないのは、許「ネ者」が騎乗していないのにも関わらず、対等に打ち合ってくる事だ。

その周囲の親衛隊もまた、圧倒的不利な形勢でありながら良く保ち堪えている。

——こんな所で時を費やしている場合では無い。

呂布は焦りを感じた。想像以上に許「ネ者」は勇猛な将だった。早く撃退して先へ、と気持ちが生じる。

呂布は更に息吐く間も無く打ち据える。馬上からの攻撃はそれだけで優位になる。許「ネ者」は防戦一方になった。

次なる斬撃に備えて許「ネ者」が双鉄戟を構えた瞬間、呂布は手綱を精一杯引きながら赤兎の腹を蹴った。

赤兎が掉立ちになる。蹄が双鉄戟を蹴り上げた。

「終わりだ！」

許「ネ者」は目蓋を閉じて、竦む。呂布はその首目掛けて一閃する。

瞬間、時が止まった。

「……何っ？」

呂布は理解不能になった。

許「ネ者」の首は何事も無く、胴と離れない。代わりに宙に舞ったのは髻だった。

勿論、許「ネ者」は微動だにしていない。絶対に打ち損じる事など有り得ない状態。

「？」

討ち死にを覚悟した許「ネ者」も訝しげに呂布を見た。

「馬鹿な、」

そう言って己の拳を見て、呂布は愕然とした。

拳が小刻みに痙攣を起こしている。

丸薬の効果はまだ切れてない頃だ。普段なら一月は保つ。最後の一粒を下「丕β」で飲み下してから、まだ半月もたっていない。

幾度と薬を使用すれば中毒を起こす。薬に慣れた体が更なる量を求めているのだ。当に今の呂布はこれだった。

呂布は己の目が信じられなかった。嘆息が漏れる。

——俺に曹操を討ち殺す事など出来ん。
天命というものが存在するなら、そう初めから決まっていたという事か。

何度、曹操を討とうとしただろう。その度に呂布はその武を全て出し、部下達の協力までもあった。それでもあと少しというところで取り逃がす。

曹操本陣から銅鑼の音が響く。許「ネ者」はサッと表情を和らげた。

「孟徳様も無茶をさせてくれたわ」
そう言って親衛隊を纏める。

「……」

呂布は追うべきか迷った。このまま曹操のところへ行ったところで討てるのか。

「それでは飛將軍、次に会うのはあの世だ」
そう言い残して許「ネ者」は退却していく。
成廉が近付いた。

「奉先さん！」

呂布の震える手を見て、一瞬顔を強張らせる。

「……最後です。これで最後なんですよ！
飛將がこんな所で足を止めるんですか」

「だが、……いや。お前の言うとおりでな」

呂布は本陣への突撃態勢を整えた。

さあ行かん、という時。何故か曹軍本陣から呂軍の伝令が駆けてくる。

「何だ？」

高順からの伝令だ。

「報告！ 我が軍は南方から突撃。しかし、曹軍本陣はもぬけの殻です！」

「！！」

——しまった！ 謀られたか。

呂布は目の前の『曹』の旗にとらわれ過ぎていた。撃破した軍の事など何も考えていなかったのだ。

案の定、斥候を四方八方に放つと全ての兵が曹軍を発見して来た。西より曹洪と許「ネ者」の五千と楽進の一万。

南より夏侯淵の一万。

北より夏侯惇の二万。

総勢約五万の曹軍が罠に掛かった呂軍二万余目掛けて猛進していると言うのだ。その上、肝心の曹操率いる本体が見当たらない。

そして最も呂布を驚かせたのは東より帰ってきた斥候の報告だった。

「彭城が陥落だと?!?!」

呂布だけで無く、集結して来た高順、張遼も耳を疑った。

「確かな情報なのか!?!」

普段、私情を面に出さない高順もさすがに我を忘れる。

「詳しく話せ」

「城の旗は……『劉』、と。どうやら陳親子が劉備を手引きした様でございます」

まさか、と一同騒然となる。

成廉だけが唇を噛み締めた。

先日、小沛に赴いた時、確かに劉備は呂布を止める、と宣言した。劉備は高順に撃ち破られて行方不明になっていたが、呂布も誰も斥候を放とうとはしなかった。曹操との決戦で一杯だった事もあるが、西に向かわず南に下りながら東へ迂回するなんて誰も予想しなかったのだ。

そして、陳珪、陳登。その怪しい動きを誰もが曹操との内通と疑っていた。いや、劉備が曹操に汲みしていれば結果としては同じである。ただ、曹操にばかり目のいていた呂軍は見えなかったのだ。そして次なる不安が生じる。

曹操の本軍はその大軍で何処へ進軍しているのか。

陳親子が曹軍側となると彭城を中心に情報は操作されている。陳宮の安否も不明だった。

「曹（性）將軍は斬首。守備兵一万余も大きな抵抗も無くその下に降伏しました」

重苦しい空気が漂う。周囲の曹軍はこうしている間にも呂軍目掛けて迫っている。一番近い曹軍の喚声が風に流れてきた。負けを見越した兵は既に後退りしている。

「如何します、將軍？」

俯き加減の呂布に視線が集まる。呂布は答えない。

「奉先さん！」

成廉が揺さぶって、ようやく虚ろな目の焦点が定まった。

「……土豪の私兵と州兵は散れ。散ってそれぞれ帰還するのだ。お前達の戦は終わった。曹操を討てなかった、それだけ謝っておく。」

……すまなかった」

諸將、息を吞む。

確かに此度の戦は徐州の兵にとって復習戦にならなくも無い。だからと言って呂布が謝る事では無い。呂布も皆も全力を尽くした。

しかし、負けたのだ。

徐州の民は泣く泣く解散し、それぞれ元の居場所へ還り始めた。

責任は上に立つ者に否応無しにのし掛かる。

呂布は残りの兵を無事に下「丕」まで撤退させなくてはならない。蝗紅隊、将に配属する軍も含め、騎兵約五千。歩兵は残った州兵も含め一万五千といったところだ。

「陳宮を回収し、下「丕」への撤退を図る。軍を小さく纏めろ、俺が先頭を切る。矢の陣を採用する」

直ぐ様、軍が動く。

「追撃を避ける為、夏侯惇の軍を突破する。続け！」

赤兎の腹を蹴ると呂布は駆け出す。その後を皆、追いかけた。

夏侯惇の前衛が迫る。

曹操は呂布の凶悪な騎馬軍の対策として槍を装備させていた。

槍は矛と違い、突く事しか出来ない。しかし、楯を持っても扱える軽さがあり、横に振る動作が必要無い為に柄の長さは倍以上ある。騎兵を相手にする為に絶好の武器なのである。

夕日に赤く染まる無数の槍を前に呂布は怯まなかった。速度も落とさない。

貸せ、と言って後ろの兵から矛を取り上げると、前衛目掛けて無造作に投擲した。唸りを上げて矛は楯を掲げる曹兵を貫通し、その後ろも巻き込む。曹兵の軀は余りの勢いに爆裂し、その臓腑は周囲

の兵に降り注いだ。

怯む前衛だが、まだ足りない。変わらず槍先は呂布に向いていた。呂布は剣を抜き放った。そのまま横薙に投げつける。回転する剣は幾つもの首を飛ばす。

前衛はさすがに怯んだ。槍先が僅かだが上に反れる。呂布は見逃さなかった。槍を弾き上げると曹兵三人を掬い上げる。その穴を次々と呂軍は駆け込んだ。だが、態勢を整えた夏侯惇は左右から槍と弩を打ち込む。

ようやく呂軍の最後尾が脱し、曹軍が見えなくなった頃には兵が半数になっていた。

沈む太陽が駆ける呂軍を照らす。

夕陽に赤く光る甲冑が血に染まった戦袍と同化する。辺りは自軍の蹄の音しかない。

――負けたのか。

戦場では頭が興奮していたのか、今になって現実がのし掛かった気がした。

初めて曹操と対峙した虎牢。まさか、生涯賭けて闘い続ける事になるとは予想しなかった。

あれから七年。幾度と曹操を死の淵まで追い込み、そして逃した。天命という言葉は便利だ。それを一度口にすれば、どんな事にも諦めがつく。

――俺の勝利は始めから何処にも無かったのか。

「將軍！ あれをご覧ください」 兵の一人が前方を指差した。

『陳』の旗。陳宮である。

「無事だったか」

諸将から喜びの声が上がる。が、直ぐにそれも止んだ。

必死に此方へ駆けてくる陳宮の軍はせいぜい千余り。しかし、その背後には天にも昇らん程の砂塵があった。

長年、戦場を駆け回れば砂塵だけで敵軍のおおよその数は判るものである。

夕陽に照らされる程の砂塵は三万を超える数を示していた。誰もがその光景に声を失う。

更に合流した陳宮の報告に意気消沈する。

「無事だったか陳宮」

ぼろぼろの戦袍で陳宮はやって来た。恐らく陳宮自ら剣を手に闘ったのだろう。

「報告します」

陳宮の声は酷く萎びていた。

「緒戦で我が軍は曹仁率いる二万を臧霸との連携で撃ち破りました。しかし、砦の背後に突如出現した軍により潰滅致しました。臧霸は泰山の奥へと一時退却した模様」

「その出現した軍が曹操か」

「はい。……率いるは青州兵三万。更に後続に曹仁の一万」

消え入る様な報告が終わると陳宮は無気力に自軍に戻った。

諸将の顔から次々に生氣が抜けていく。その間にもその総勢四万の曹軍は此方に向けて猛進している。

「帰ろう、下『丕』へ」

呂布はそれだけ告げると退却を再開した。

辺りがどつぷりと闇に浸かった頃、伏兵が現れた。前方の左右にそれぞれ五千。

暗闇で旗印が視認出来る距離まで肉迫する。その距離では率いる

将も確認出来た。

関羽と張飛。

呂布は感覚が麻痺して驚きもしなかった。ただ、ぼんやりとする頭で一瞬、劉備を捜した。最後に戦場で会えなかった事が悔やまれる。

呂布は方天牙戟を成廉に押し付けると、成廉と己の剣を抜き放った。それを認めて関羽、張飛も身構える。少し微笑む。

——悪いが今は撃ち合えそうも無い。

擦れ違う一拍前に剣を関張の騎馬に投擲する。刃が騎馬の胸に吸い込まれる。擦れ違う頃に騎馬は爆散した。

そのまま左右の伏兵の間を抜ける。兵が歩兵を中心にごっそりと減る。

赤兎の息が今までに無く荒い。足並みもかなり乱れている。

呂布は振り返ってみた。何とか追い付いているのは成廉だけ。蝗紅隊でさえ、遅れをとっている。呂布は少し速度を落とした。

それだけではない。ほぼ休憩無しの騎馬は限界が訪れていた。遂に曹軍の追撃部隊に最後尾が捕捉される。

張遼が一人上がってきた。

「奉先様」

呂布は虚ろなまま無言で張遼を見た。

「兵を募って殿を勤めさせてもらいます」

それだけ言って張遼はまた下がり始める。

「遼！」

成廉が悲鳴を上げる。呂布もまた、急に慌てだす。

「駄目だ！ 張遼！ 行くな！」

「大丈夫です。必ず帰ります。
奉先様を頼んだぞ、廉」

それだけを残して張遼は馬首を返した。
見る見る小さくなり闇に消えてしまう。

張遼は帰ってこなかった。

天命果てぬ

一九八年、冬。下「丕β」城。

彭城郊外で大敗した呂布らは何とか下「丕β」に辿り着くと籠城した。

暗雲が城の者にのし掛かる。氷の如く鋭冷な雨が容赦無く兵に突き刺さる。雨は止まる事を知らず、遂には泗水は溢れ、「シ斤」水は堤が崩壊した。その為に僅かに低地である下「丕β」城は河川の氾濫により、膝下丈まで水没した。

そんな孤島の下「丕β」城に向けて一艘の小舟が近付く。小舟は北門の前で停止した。

「我は曹軍の使者である。呂將軍にお目通り願いたい」

およそ文官とは思えない声が呼ばわると、暫くの沈黙の後、のっそりと門が開いた。

使者は政庁まで案内されると待合室にて待機された。政庁に人気はほとんど無い。各門の守りに人が割かれているせいだが、人不足を示してもいる。

「お待たせしました。従者長の成廉です」

面会を受けたのは呂布では無かった。

使者はぶつきらぼうに礼をとった。

「初にお目に掛かる。豫州牧劉玄德が家臣、」

「簡憲和殿、で御座いますよね」

簡雍は不思議そうに成廉を見た。その若者には見覚えがある。

「ああ、以前会ったな」

急に砕けた調子になった簡雍はくつろぎだした。

「本日来たのは他でも無い。曹軍として將軍に降伏を勧めに参った。降伏すれば兵と將軍の命は保証するとの事だ。將軍は？」

「奥にいらっしゃいます」

「……正直なところ、」

簡雍は座り直しながら成廉に向かった。

「將軍には生きてもらいたい。」

俺は、俺個人として將軍は嫌いじゃない。曹軍の使者としてではなく、簡雍として將軍には降伏していただきたいのだ」

「それは……無駄な行為と言うものです」

伏し目がちに成廉は答えた。

「何も討ち死にだけが武人の道では無いだろう。」

玄德も俺も、不本意にも將軍から恩を受けた。恩返しには程遠いが助命の為に全力を尽くす。お主からも何とか言ってくれんか？」

簡雍は諦めない。

「出来ません」

「何故だ？ お主は主に死んで欲しいのか？」

「それは奉先さんに会えば分かります」

「？」

成廉は簡雍を呂布の室まで案内した。

「おいおい、私室に籠もっているのか？」

「……」

全くと言って良い程、人がいない。簡雍はいないのではないかわれる程の静かな室に通された。

そこで簡雍は鋭く息を呑んだ。

「ッ……、これは……」

呂布は寝台に横たわっていた。頬は痩け、目は落ち窪み、肌には張りが無かった。

毒に冒された呂布は末期を迎えていた。

「し、將軍はどうなされたのだ!？」

呂布は薄く目を開けて簡雍を見た。僅かに口角が上がる。

「その様子だと劉備は誰にも言っていない様だな」

「何だ? どうしたのだ! 何故医者に診せない!？」 簡雍は成

廉に詰め寄る。

「医者には何度も診せました。奉先さんは猛毒に冒されています。余命は一年保つか、と診断されました。

これでもかなりの年数保ったのです」

「治療法は?」

「ありません。症状の進行を抑える丸薬がありました」

「何時から……?」

成廉は顔を背けた。

「エン州で曹操に負けた時からです。

実は……毒を盛ったのは曹操です。恐らく曹操は今の奉先さんの状態は承知かと」

「そんな……!」

簡雍は呂布は見下ろした。呂布の四肢は時折、小刻みに痙攣した。

——それではこの男はこの軀で戟を射て、玄德を救ったと言うのか。

簡雍は信じられなかった。しかし、目の前の、天下に名高い飛将は正に瀕死である。

「簡雍」

呂布は目を閉じたまま言った。

「何だ」

「おおかた、降伏を勧めに参ったのだろう」

「あっ、ああ。そうだ」

呂布の姿に衝撃を受けた簡雍は己の使命をすっかり忘れていた。

「降伏は断じて出来ん」

「……」

「この戦は俺にとって最後の戦であり、俺の人生の価値を問う戦いなのだ」

瞼を開いた呂布は真っ直ぐ天井を睨んだ。

「例え一人になろうと、俺は命果てるその時まで闘い続ける」
かすれた声が宣言した。

「……分かった。長居はせん」

俯き加減の簡雍は踵を返した。

「待て」

簡雍は足を止めた。

「どうか降る部下には丁重に扱うように取り計らってくれないか。それから曹操には水が引いたら相見えよう、と伝えてくれ」

「飛将の部下はきつと主と生死を共にするでしょう」

簡雍はそう答えた。呂布の軍はそう脆弱では無い。降るならとつ
くに降っている。

「どうかな。取り敢えず近日中に降るように触れを出すつもりだ。
後はこれを、」

呂布が目で合図すると、成廉が一つの書簡を簡雍に差し出した。

「劉備に届けてくれ」

簡雍は受け取ると、大切そうに懷にしまい込んだ。

「しかと、承った」

呂布と簡雍の目が合う。呂布は小さく頷いた。それを合図に簡雍
は退出した。

下「丕」城北門、高順軍兵舎。

三人の校尉が密かに集まっていた。

「昨日の使者はやはり降伏を勧める使者だった様だ。しかし、奉先様は受諾しなかった」

侯成が言った。

「どうする？ このままでは……」

「ああ、さすがの奉先様でもこの戦は勝ち目が無い。」

「くそっ、俺達はどうすりゃいいんだ！ どうすればあの方を生かす事が出来る？」

侯成、宋憲、魏統の三人は焦っていた。

下「丕」を包围する曹軍は十万を数える。対して城内には州兵が離散した事により一万に満たない。城外の味方と言えば泰山から駆けつけた臧霸だけだ。その軍も曹軍の厚い包围網の為に近付くに近付けない。

城の内外には水。糧秣は湿り、急遽楼閣や政庁内に運び込まれたが、使えそうな物は少なかった。

「こうは考えられないか？」

侯成は思いついた様に言った。

「我々が奉先様の足枷になっている、と」
「？」

「どういう事だ？」

「ついて来る者がいるから降伏に踏み切れないとは考えられないか」
「何故だ？」

「いや、なる程……」

宋憲は顎髭に手を伸ばした。

「人の上に立つ者は下々の者を最優先に考えるのが道理だ。だが、同時に示しをつけなくてはならない」

「戦を臨む軍を率いる者が降伏など示唆してはならん、と言う事か」
理解した様に魏統は組んでいた腕を解いた。

「だとして、どうするのだ？」

侯成は声を落とした。

「兵を連れて降る」

「なっ!!?」

「我々だけでは無い。高將軍、陳軍師にも同行してもらう」

宋憲、魏統は驚きで思わず立ち上がった。

「正気か? お前」

「ああ、奉先様が意地になって降れないと申すなら、全軍で降り、促すまで」

「しかし、だな!」

侯成は二人を手で制すると座らせた。

「奉先様が討ち死にする事だけは避けねばならん。奉先様の武は漢帝国の宝だ。降った奉先様を誰が殺すだろうか。」

あの方は生きてさえいればやり直せる。生きてさえいれば兵を与えられ、飛将の戦は続く。お前らはもう、奉先様と共に闘いたくないのか?」

宋憲、魏統は侯成の言も一理あると思った。

呂布は何時だって兵への思い遣りを欠かさない。だが、もしそれが最強故に歩みを合わせているものだとしたら、その行為は責務を全うするだけの苦痛だったかもしれない。

確かに率いる兵がいなくなり、肩の荷が降りれば、降伏勧告に応じるかもしれない。

三人の脳裏に一人になってしまい、苦笑を混じらせながら大手を振って門をくぐる呂布が映った。

そう言えば三人はもう一月近く呂布の姿を見てない事に気付いた。呂布は誰とも面会せずに室に籠もりっぱなしだ。

——奉先様に会いたい。また共に闘いたい。

郷愁にも似た感情が三人を占める。

「分かった、その方法に賭けよう」

「先ずはどうすれば良い?」

「中途半端に兵を残してはいかん。高將軍と陳軍師は…」

未明、無垢な謀叛が実行された。

「何だ？ 三人揃って」

高順は襲れた顔をしかめた。

連日の包囲の重圧は想像を絶する。鈍色の群れは眼だけを光らせて包囲する。城壁から幾らか距離があるのにも関わらず、その気の圧は心の隙を突く。

休んでも疲れが取れない。眠れば寧ろ起きた時の疲れが増す。その上、規律が厳しく、何より己に厳しい高順は酷い心労だった。

そんな高順が三人掛かりの将に勝てるはずが無かった。問答無用で縛り上げられた。

「貴様ら、謀ったな！」

「申し訳御座いません、將軍。ですが、暫しの辛抱です」

「奉先様を生かすには下々の我々が降るしかないのです」

宋憲が高順の口に猿轡を掛ける。

——嗚呼、……。殿が例え一人になったとして降るだろうか。

全ては儂の掌握不足。

高順は出血する程、固く拳を締めた。

・
・
・

「よし、白旗を掲げよ。西門より進軍する」

陳宮も同様に捕らえた三人を先頭に城内のほとんどの兵が西門より出た。

皮肉にもこの時に呂布から降伏命令の伝令が放たれていた。しかし、その命令が侯成の元に着いたのは曹軍の陣門をくぐろうかとい

う時だった。

「しまった!!」

三人は下「丕」城を振り返った。

こんな命令を出しておいて、呂布は一向に城から出ない。部下の命を救い、己は決して降らぬという意志の表れ。

三人は崩れ落ちた。

——我々は何て愚かなのか。

悔やんだところで遅過ぎた。

飛将の残党は曹の大軍に包囲された。

降伏命令を出して、次の報告が返ってくるのは驚く程速かった。「侯成、宋憲、魏統を先導に城内の兵のほとんどを率いて降りました」

閑散とした政庁に兵の声が響く。送り出した伝令では無かった。

「早いですね」

成廉は意外だ、と僅かに眉を上げた。

「いえ、命令によるものでは御座いません。謀叛と思われます」
「!!」

——まさかあの三人が……!

三人は丁原の下からの仲間であった。

最初は兵卒だった。蝗紅隊に選抜されない代わりに校尉として成長した。高順が蝗紅隊から将に格上げした時からその下にいた。兵からは陷陣營の『左右中將軍』と仇名された程の側近である。

——そんな三人がどうして……？　どこですれ違いがあったと言
うのだろう。

呂布は笑っていた。

「賢いな、あいつらは。それに比べてお前は馬鹿だ」
胡床を寝台に近付けた。

「そんな事言うとな本当に置いて行っちゃいますよ」

「……そうしても良いのだぞ」

呂布の表情は変わらなかった。

「冗談ですよ」

呂布は成廉に目を向けた。

「本当に良いのか？　お前には白鈴が、」

「奉先さんの生き様を」

成廉は呂布の気遣いを揉み消した。

「奉先さんの生き様を誰も邪魔出来ません。僕の生き様も然り。天
命に従うまでです」

呂布は天井に視線を戻した。

「そう、……だったな」

呂布は静かに瞼を閉じた。

「成廉、」

「はい」

「俺は、俺の人生は正しかったのだろうか」

呟きに成廉は一瞬、息が止まる。

「人の人生に正しいも誤りも無いのではないのでしょうか」

「答えになつとらん」

呂布が顔を向ける。その双眼に有り得ない物が浮かんでいた。目
尻から一滴が零れる。

「俺は正しかったのか」

聞いた事の無い声が呂布の口より漏れた。
成廉は思わず呂布の頭を抱き寄せた。以前では考えられない程に弱々しい。

――何時の間にか奉先さんが小さい。

泣くまい、と思った。だが、意に反して成廉の涙腺は壊れた様に涙を吐き出した。

「正しいに、……決まってるじゃないですか」

「魔王に仕えていたのにか」

「はい」

「氣分に任せて主を変えたのにか」

「はい」

「留守を狙って城を奪ったのにか」

「はい」

「曹操に勝てなくてもか」

「……はい」

「この城でお前を巻き込んで死んでもか」

「……はい！」

安堵したかの様に呂布は微笑んだ。

「そうか」

「そうです」

呂布はその双眼に飛将の光を灯した。

「夜明け前に出撃だ。夜襲を仕掛ける」

「はっ」

「その前に」

「？」

「白鈴のところへ行行ってやれ」

「……ですが、」

「七年も共にした仲間でもあるだろ」

成廉の言わんとする事を悟って、呂布は促す。

「……直ぐ戻ります」

成廉は音も無く退出した。

それを見送った呂布は息を吐いた。軀に力が全く入らない。

「なる程な。あの文優が最期に休みたいと言う訳だ」

呂布は眠る様にゆっくりと目を閉じた。

成廉は政庁内の一室に避難させていた白鈴の元に訪れた。

そっと戸を開けると白鈴は此方に向いていた。しかし、焦点が定まっていない。

少しだけ開いた口を灯火がちらちらと照らした。呆けた顔のまま動かない。きっと、寝る事も無く帰りを待っていてくれたのだろう。

「白鈴？」

「あっ！」 途端に命が吹き込まれたかの様に飛び上がった。

「お疲れ様。休憩の時間？」

「いや……、今から曹軍に夜襲を掛けてくる」

直ぐに白鈴は黙り込んだ。

沈黙が二人にのし掛かる。

何も言わなかった。ただ、見つめ合う。次第に白鈴の大きな瞳に涙が溢れる。

手を伸ばすと素直に飛び込んできた。

「私も連れて行って。もう、置いてきぼりは嫌！」

白鈴が縋り付く。優しく頭を撫でた。

「……駄目だよ。外は危険なんだ」

何度口から吐き出した言葉だろう。その度に白鈴は愛しい頬を膨らませたものだ。

しかし、今回は何かを感じ取っているのか。柔らかな頬は涙で濡

れている。

「行かなきゃ」

「駄目！」

行かせまいと白鈴は袖を掴む。

「……放して」

白鈴の小さな手を包んだ。

「僕が行かなきゃいけないんだ。奉先さんの為、……僕の為に」

「じゃあ、約束して。必ず還ってくるって。絶対還ってくるって！」

「分かった」

「信じて……いいの？」

「……」

成廉はどちらを答えるか迷った。信じろと言うか、己を忘れろと言うか。

「ねえ！」

「……信じて、僕を」

そう言って、まるでそれが呪縛の様な口付けを額にする。

決して叶わない、最初で最後の嘘。最悪の嘘。

白鈴がゆっくりと手の力を抜くと、成廉は指の間をすり抜けていった。

成廉は呂布の寝室に戻った。

室内の光景を見た途端、息が止まる。

呂布が室の中央に両手を広げて仁王立ちしているのだ。

遂に最後の出陣。呂布の背中中は甲冑を着ける、と言っている。

既に室の隅に甲冑は準備している。戦の度にする様に成廉はそれらを掴むと呂布に装備しようとして近付いた。

「っ！！」

思わず籠手を取り落とした。

呂布の双眼は敵を前にした時と同様に開かれている。しかし、その眼に光は無い。何処を見据えているのかも判らなかった。

「奉先さん……」

涙はもう出ない。甲冑を着けながら、僅かに残っていた呂布の温もりが徐々に逃げていくのが感じられた。

呂布は闘志だけを遺した。いや、これが呂布だったのだ。余計な不純物が除かれた呂布が遺ったのだ。

その証拠に呂布の開かれた右手に成廉が方天牙戟を差し出すと、それが最後の希望の様に反射的に握り締める。

呂布は闘いを求めて歩き出した。

厩に向かうと赤兎と雷音が主を待ち受けていた。

呂布を確認すると深紅の躰が喜びを発した。呂布はしなやかに赤兎の鬣を掴むと颯爽と跨った。ここ何年も見ていない一番の雄姿だ。

——やっぱり奉先さんはこうじゃなきゃな。

「お前は残るか」

雷音に語り掛ける。途端に怒った様な嘶きが応える。そして額を胸に擦り付けてきた。

「……分かったよ」

成廉は渋々、雷音に跨った。

先導しようと赤兎の手綱を掴もうと呂布の前に出た途端、何の前触れも無く方天牙戟が襲い掛かった。寸でのところで戈で受け止める。呂布の臂力は成廉を雷音ごと後退させた。

「何を！」

そこで気が付いた成廉は小さく微笑む。

——そうでした。先頭は奉先さんですよ。

赤兎の尻を軽く叩くと白門に向けて進んだ。

雷音に揺られながら、ふと夜空を見上げた。東の空は既に紺に染まっている。しかし西は無数の光が瞬く。

——結局、僕の星は判らなかつたなあ。

馬邑にいた頃、今の様に冬の夜空を見上げた事を思い出す。今頃、馬邑は雪でも降っているのだろうか。視線を前に戻して自嘲した。

——いや、僕の星なら此処にずっとあつたじゃないか。

成廉の一步前に常に煌々とした呂布がいた。ただそれを追いかけた十五年だった。

成廉は一人、思い出に浸っていたがそれは背後の気配に中断された。

振り返ると黒ずくめの一隊が笑っていた。

「抜け駆けはいけませんよ」

「お前達……」

よく見ると百を切った蝗紅隊の後ろには二百騎程の騎兵も集まっていた。

人中の呂布、馬中の赤兎。そしてその後ろに漆黑精強の騎馬隊あり。

揃う者は揃った。

ただ、成廉の左右に頼もしい友がいない事だけが悔やまれた。

呂布は開け放たれた城門で一旦停止した。

大分、水が引いている。静寂の城外は見事に澄んでいた。曹軍の幕舎が良く見える。

本来なら呂布が呼ばわって彼らを叩き起こすべきなのだが、恐らくその声帯は機能していないのだろう。無言のまま呂布は曹の旗を睨んでいた。

代わりに成廉が声を上げる。

「飛将・呂奉先より曹孟徳に申し上げる！」

直接見えに向かうついでに天下無双の武威を此処に示さん！！其処を動くな！！」

しんとした大地に成廉の声が響きわたる。同時に朝日が顔を出す。陽の光が水溜まりに反射して戦場は穢れも無く輝いた。

呂布が馬腹を蹴った。赤兎が駆け出す。

「行くぞ！ 我らは飛将共に在り！！」

「応！！」

若き指揮者に寡兵が応じる。

真白の先導を二騎に減らした最強の騎兵隊は最期の戦に飛び込んだ。

曹軍の対応は速い。敵陣に到達する前に迎撃部隊にぶつかる。

だが、呂布の武威は遂に修羅を超えた。

曹軍の騎兵は近付こうとしない。只ならぬ殺気に騎馬が怯えているのだ。

距離を詰めると呂布の方天牙戟が炸裂した。寝起きの曹兵は夢見心地のまま昇天する。倒れ伏す曹兵は蝗紅隊に踏みつけられ、肉塊に化す。

細い細い刃が鈍色の巨体に突き刺さる。だが、進めど進めど、牙旗は遠い。

曹の波を掻き分ける様に小柄な歩兵が呂布を目指して殺到する。

青州兵。

その動きは明らかに周囲を凌駕する。所持するのは長剣のみ。三人が多方向より呂布へと跳び掛かる。鋭利の刃が閃くより速く、方天戟が呂布を中心に一蹴する。三人の青州兵は驚愕を顔に貼り付けたまま四散した。

それでもめげずに青州兵は次々と襲い掛かる。

成廉も応じる。

高みから戈を振り下ろす。小気味良い音と共に伝わる手応え。兜ごと頭蓋を貫通する。素早く引き抜くと次の兵。軽やかな動きで充分、劣勢を撥ね退けた。

不意に左右の軍が引く。

同時に右方は何処からか出した大楯を隙間無く立て並べる一軍が押し出される。そして左方には数え切れない無数の弩。ご丁寧な歩兵も竹槍を手に投擲態勢だ。

――さすが曹操。この奇襲に対して此処まで応じるなんて……。

また一人、青州兵を屠りながら成廉はしたを巻いた。

直後に空気を揺るがす弦音。

矢の雨は横殴りに降ってきた。雷音を守らんと必死に成廉は戈を振り回した。

しかし、無情に矢は降り注ぐ。

全滅。飛将の随従は一騎のみ。

呂布も成廉も矢を受けた。赤兎は矢が額より生えている。それでも駆け続けた。

雷音もまた、尻に一本、矢を受けていた。

それを認めるや否や、成廉は手綱を引いた。雷音が急停止し、成廉は反動で転がり落ちる。

立ち上がると、振り向く事も無く駆け出した。

——ありがとう雷音。さようなら雷音。

雷音を巻き込む事は出来ない。成廉にとって雷音は只の騎馬では無くなっていた。

置いていくな、という悲痛な嘶きを背に成廉は駆け続ける。

牙旗はまだ遠い。

呂布はまだ進む。

——僕の天命はまだ消えちゃいない。

隻騎と随従は曹の群れに埋もれていった。

狼を追いかけて

徐州は例年稀に見る大雪に見舞われていた。積もる雪は深い所で足が半ばまで埋まる。

騎乗する騎馬は漢の馬に較べて巨大な蹄の持ち主だが、それすら雪に食い込む。辺りは一面の銀世界で一里先の距離感も掴めない。少しばかり後ろから追いかけて来る少年は寒さで鼻の頭と耳だけを紅くする。騎馬が雪に脚を取られたのか、下馬して手綱を引っ張っている。

「虎、やはり残っている」

振り返って、まだ視界に残る彭城を示した。しかし、少年は瞳を子供特有の執着心に染めると首を振った。

「やだ」

「それじゃあ、その馬は置いていくか」

さすがに寒さに強い馬も雪に足を取られている状態で放置すれば死んでしまう。

「やだ」

苦笑いしながら降りる。

「ったく……。それなら虎が雷音に乗れ」

少年を軽々と持ち上げようとして僅かに負荷を腕に感じる。

「お？ 少し大きくなったか？」

そう言って老馬に乗せる。

「少しじゃない」

ぶっきらぼうな声が降ってくる。この老馬以上の巨馬にはまだお目に掛かってない。

少年の顔は見上げる様にしないと見えなかった。

「……そんなに会いたいのか」

その言葉で少年は憤然とする。

「父上が母上以外の妾に毎年会いに行くのが悪いんだ」

「だから、妾じゃあ無いと言っただろう」

雪で脚を取られる馬を慎重に支持しながら答える。

「父上は昔から女癖が乱れていたんでしょ？」

「誰から聞いたのかは知らんが、それは遠い昔の事だ」

馬の片脚が抜けると予備の草鞋を応急処置として括り付ける。

「張文遠ともあろう者がそんなで恥ずかしくないの？」

一瞬、手を止める。そしてぎこちなく笑いかけた。

「悪かったな。恥ずかしい親父で」

冗談を認めるとは思ってなかったのだろう。少年は二の句が継がない様だ。

「本当、恥ずかしい人間だ。俺は」

小さく独り呟く。

草鞋を結び終わると立ち上がった。思ったより雪が深い。この調子では泰山まで十日は掛かりそうだ。

「よし、行くか」

張遼は生きていた。

呂布が曹操に敗れ、その殿軍を務め、曹軍に特攻した張遼だったが、手勢が全滅すると下「丕」目指して落ち延びた。

しかし、騎馬が脚を折り、早い段階で徒歩となった。困った事に追っ手から必死に逃れる為に手近の山に逃げ込んだところ、迷子となってしまうのだ。あちこちに矢を受けて重傷だった張遼は遂に崩れ落ちた。

目が覚めるとそこは付近の住民の寝台。徐州の民は呂布が自分達の敵である曹操と闘った事に感謝していた。そのお蔭で敢えて落ち武者狩りを行おうとする者は居なかったのだ。

張遼は己が先の敗戦から半月近くも気を失っていた事を知ると、完治を待つまでもなく礼を残して恩人を後にした。

馬も無い帰路。手負いの張遼には少しばかり遠かった。

ようやく下「丕」に辿り着いた時、白門楼には『曹』の旗がはためいていた。

夢でも見ているのではないか。そう思い、張遼は何の躊躇いもなく政庁へ向かい、拘束された。そして、曹操の前に引き立てられた。政庁に見知った顔ぶれがちらほら窺えたが、親しい者達は一人として居なかった。

「これは夢か」

張遼は曹操にそう訊ねた。曹操は答えなかった。

代わりに二つの首級を持ってこさせた。どちらも人間の首とは判るが原形を留めていない。勿論、誰の首か判断出来るはずもない。

「呂布は死んだ」

聞けば呂布と成廉は籠城の末、侯成らの降伏を契機に玉碎したと言う。

張遼は笑った。

有り得ない。呂布は史上最強で、常にその傍らに侍る成廉は安全が保証されているのだ。張遼は曹操が嘘を言っている様にしか聞こえなかった。

だが、続いた言に自信を無くした。

「陳宮と高順は殉じて死んだ。……お主はどうする？」

目の前が真っ暗になった。全ての物から輝きが消失した。

張遼は殉死を選んだ。

刑場に連れて行かれ、曹操の面前にて刑が行われる。

「刑吏が斧を振り上げた時、不意に恐怖が湧き上がった。縛られ、身動きがとれない経験が今まで無かったせいか、自由が効かないという現実が尚更恐怖を掻き立てる。」

「止め」

見かねて曹操が刑を中断した。

「何か言い残す事でもあるのか」

張遼は頭を垂れた。

「……死にたくない」

刑吏が耳を疑い、息を吸うのが聞こえた。

「曹公に降る」

見上げると有能な将の仕官を喜ぶ曹操の顔があった。

一瞬、それが嘲笑に見えた。実際に心底嘲笑っていたに違いない。

首級は替え玉で呂布と成廉は生きている。陳宮と高順は真実を知らずに殉死を選んだに違いない。

そう己を納得させた。そうしないと曹軍の幕下で生きる事が出来なかった。

以来、張遼は曹軍の将として数々の戦に参加する。これまで通り漢帝国の為、飛将の配下だった事だけを頼りに呂軍の残軍を率いた。そこに宋憲、侯成、魏統の姿は無かった。

張遼が彼らと再会したのは河北の袁家平定戦役の際、并州に赴いた時だった。彼らは故郷で自警団を組織し、引き連れていた。

そこで初めて張遼は呂布が毒に冒されていた事を知った。

彼らもまた、降伏してから曹操から明かされたと言う。

それを聞き、自分達の降伏は呂布を救うものでは無かった、と悟った。尊敬して何時だって気を配っていたはずなのに、そんな重大な真実に気付けなかった。己に失望した彼らは下野し、歴史の表舞台から消えた。

「お前は どうするのだ」

その問い掛けに張遼は毒の事を信じなかった。

「それは曹操の嘘だ。」

俺は奉先様と廉が還ってきた時、居場所を確保する為に曹操に仕え続ける」

と答えた。

しかし、返ってきた言葉は無情だった。

「毒を盛ったのは曹操だ。お前は主の敵に仕えると言うか」

「俺はあの方を尊敬していた。死んでもそんな事は出来ん」

「結局、己が可愛いのだろう」

彼らは冷ややかな視線を突き刺して去っていった。

張遼は言い返せなかった。

もしかしたら、それが事実なのかもしれない。だが、呂布と成廉はもしかしたら生きているのかもしれない。そんな考えにとらわれ続けた。

そして、その愚かな考えに縛られた者がもう一人。

泰山は更に雪が積もっていた。その様はさながら銀世界に山が侵攻されている様にも見える。

深い雪を掻き分け、小さな邑に宿泊しながら辿り着いたのは簡素な、しかしそれなりの敷地を有する邸である。周囲の垣根は低い為、雪に半ば埋まっている。

張虎が指摘した様に張遼は毎年、冬に此処を訪れる。

門を叩こうにも出来ない為、張遼は邸に向けて呼ばわった。

「誰ぞ居らんか、遼だ」

「お待ちください！」

直ぐに母屋の戸から張虎より少し年長の子供が一人飛び出してきた。雪に足を取られながらも二人の元まで来ると、嬉しそうに笑った。辺りの景色の様に白い齒が眩しい。

「お久しぶりです。文遠様」

「君も大きくなったな」

その言に張虎はあから様に警戒の目を少年に向けた。まるで、己の存在を脅かすものを対したかの様な視線に少年も気付いた様だ。

「？ この方は？」

少年が張遼に訊ねる。

「俺の息子だ。名を虎と言う。君の母上の是非お会いしたいそうだな」

「そうなんですか」

少年は張虎の礼儀正しく礼をとった。

「越です。宜しく」

「よ、宜しく」

まだ警戒を解かない張虎を見て、張遼は苦笑いした。

「俺も戦に出てばかりだ。良かった礼儀の一つでも教えてやってくれ」

「じよ、冗談ですよね？」

その切り返し方が一瞬、呂布の言に困惑する成廉と重なる。

「あっ、申し訳ありません。立ち話なんかさせてしまつて。……どうぞ中へ」

母屋の奥の室に案内された。

中に一人の女が待ち受けていた。艶やかな黒髪に吸い込まれそうな瞳で張遼を見つめている。齡は全く予想出来ず、ともすれば少女

にさえ見える。

かつて呂軍に追従した董卓の孫娘・白鈴である。

「お変わりありませんか？」

張遼が優しく声を掛けると白鈴はふんわりと微笑んだ。

「何時もお世話になっていきます。遼さ……ごめんなさい。字を改めたんでしたね、文遠様」

「どちらでも構いませんよ。……それにしても酷い雪ですね」

「ええ、本当に。屋根が潰れないか心配です。……あら？」

白鈴の視線を追うと戸口から覗く張虎がいた。

「何だ、まだ其処にいたのか？入ってこい。お前が会いたがっていたのがこの方だ。」

失礼、息子の虎です」

「ああ、この子が」

そろそろと張虎が入ってきた。

「私に何か用でもおあり？」

微笑む白鈴を張虎は直視出来ない。

「？」

暫しの沈黙の後、問い掛けられたのは張遼の方だった。

「さっきの越って子、僕の兄上なの？」

それを聞いた途端に張遼と白鈴は目を大きくした。そして互いに顔を見合わせた後、大笑いした。

「違う違う。あの子は成越、姓は成だ」

「じゃあこの人は」

そう言って白鈴を指す。

「だから俺の親友の妾だと常々説明していただろう」

「言い訳だったんじゃないの？」

白鈴は悪戯っぽい笑みを浮かべ、張遼を見た。

「余程、信用ならないお父上ですこと」

「何処ぞで昔の噂を拾ってきたようでしてな」

「あら、文遠様は本当に何処の城へ行っても女子の評判が良かったではありませんか」

「それを言わんで下さい」

白鈴が成廉の子を宿している事に気付いたのは、呂布と成廉が曹軍へ特攻した翌日だった。

下「丕β」が落城した後、噂を聞きつけた曹操は庇護を受けるよう提案した。聞こえは良いが、要は妾の一人になれば、と言っている様なものである。

白鈴は頑としてそれを固辞した。

あくまでも成廉の子は一人で育てる。

それが白鈴の決意だった。

結局、曹操は手を引いた。これはとても幸運な事だった。何故なら、曹操は人妻だろうと美女に目が無く、直ぐに召し上げてしまうような男だからだ。

それから白鈴はずっと徐州から離れなかった。

生活の手当は張遼が世話した。下「丕β」の中でも大きな邸が提供され、従者も沢山つけられた。

やがて、白鈴は元気の男児を産んだ。名は成廉の親友であり、白鈴自身も大分助けられた魏越から貰った。

しかし、成越の出産を境に泰山へ移ると言い出した。張遼には求婚の誘いが煩わしいとの理由が届けられた。

白鈴は幾つになっても少女の様な可憐な容貌を維持した。その美しさで独り身と聞いて地元の土豪達が黙っていなかったのだ。

以来、従者も家財も売り払い、泰山の麓に簡素な邸を求めると、そこで母子二人でひっそりと生活している。

成越が茶を持ってきた。こういう細かいところでは贅沢している様だ。

退出しようとする成越に白鈴が言った。

「越、阿虎と遊んできなさい」

『阿虎』と聞いて張虎は反発的な目をする。成越は首を傾げた。

「でも、外は雪が積もってますよ」

「だからよ。雪がこんなに積もるのは滅多に無いのよ。普段、一人では楽しくなくても、二人ならきつと楽しいわ」

「……」

首を捻りながら成越は振り返った。

「それじゃあ……外に行こうか、阿虎」

「阿虎って呼ぶな！」

張虎は先に飛び出す。慌てて成越も続いた。

「ああ！ 待ってよ」

その微笑ましい様子に張遼と白鈴はまた笑い合う。

「ごめんなさい。『遊ぶ』って事がよく解らないのよ、あの子。長い間、従者みたいな事をさせてしまいましたからね」

少し悲しそうに白鈴は呟いた。

「それで、」

張遼は改めて向き直った。

「何かお話があるのでしょ？」

二人だけにしたのだからそれなりの訳があるはず。

「あらあら、さすがは張將軍でございますね」

白鈴は適いませんと肩を竦める。

「実は越の事ですの」

「？」

「あの子に四歳から従者として申し分無い様に教育している事は見ての通りです」

「ええ」

「最近は何の棒切れですが素振りもさせています」
張遼は見た目に違う荒い教育に驚いた。

「どうしてそこまで……？」

暫く俯いていた白鈴は急に両手を付いた。

「っ！？ 何を？」

「戦場でも足手纏いにならぬよう、最低限の事は教え込んでいます。
どうか、越を遼様のお供に加え下さりませんか」

「何故そんな事を」

訳の分からない張遼は狼狽した。

「廉々は、あの人は奉先様に忠義を尽くし、漢として生き通しました。
今も何処かで付き従っている事でしよう。

あの人も息子に『漢』として生きて欲しいと願っているはずです」

「……」

忠義を尽くす、という言葉が心に痛い。

「役に立つかは分かりませんがどうか……」

「しかし、越が居なくなればあなたは、」 「金子なら遼様から十分
頂いてます。従者の一人や二人、容易く雇えるでしょう」

張遼はうなだれた。

「少し……、考えさせて下さい」

雷音を連れて少し歩いた。

雷音は下「丕β」の戦いで生き残った。名馬とも言える馬だった
為に曹操は自分の物にしたそうだと。

しかし、秣に全く口を付けようとしなかった。まるで長年の相棒
を失った人間の様な哀愁が漂っていたそうだと。

日に日に痩せる雷音を見かねた曹操は張遼に下賜した。生きる気
力を無くしていた雷音だったが、張遼の寝ずの世話に漸く回復した。

以来、張遼は移動には雷音に騎乗した。戦場には決して連れて行かなかった。

十年以上も共にすると目に見えて年老いた。それでも極力、傍に連れていた。雷音だけが成廉との繋がりの様に感じられたのだ。

「少し躰に堪えるか？」

雷音の耳の後ろを搔きながら語りかける。

異例の寒波。

今年の冬は中原では有り得ない寒さだ。遙か北で育った張遼にとっては温い。春の様なものである。

対して雷音は西域の馬。伝え聞いた話では西域は荒涼としているが漢ほど寒くはない様だ。雷音にとってこの寒さはさぞかし辛いものだろう。

しかし、雷音は気にするな、と憂いを湛えた眼差しを返す。元来、穏和な馬である。年を重ねる毎にそれに磨きが掛かった様だ。

その時、雷音の目つきが急変した。

辺りは積雪で木々も覆われ、白い世界と化している。険しい視線を追って顔を上げると、白い視界に何か見えた。雪が動いている様にも見える。

——何だ……？

遠くの雪の中に黒い双眼が見て取れた。雪が動く。

それは見事に擬態した純白の狼だった。

時折見せる鋭い牙、たった今まで血を舐めていたかの如く、朱の舌が見え隠れする。荒々しい容姿なのに不思議と危険を感じない。

雷音を何事も無い様に狼を見つめている。

張遼らを見る狼の目には不器用な優しさが見えた。まるで――。

「越！」

張遼は泗水の畔で失った友の名を呼んだ。

直感でしかなかったが、張遼は確信する。

近付こうとすると白狼は一定の距離を保ちながら歩みを進める。

柔らかな毛並みの尾を微かに動かしながら、立ち止まっては振り返る。

――ついて来い、という事か。

高ぶる胸を抑えながら追いかける。雪に足を取られながら、熱い何かが込み上げる。

辺りに木々が増えてきた。雪に覆われた薄暗い森を奥へ奥へと進む。

暫く歩き、雷音の息が僅かに荒くなった頃。開けた場所に更に二頭の白狼がいた。

伏し目がちの視線、目で淡く光る毛並み。小柄な方は柔和な印象を受ける。

――あれは……廉か！ それでは、

開けた場所の中心に鎮座した白狼は子牛程もある。雪の上に伏せていながら、その存在感は威風堂々たるものだ。張遼には神性を纏っている様にも見えた。

「奉先様……」

張遼は力が抜けた様に崩れた。

「何だ。皆、此处にいたのか」

長年捜し求めたものが其処にある。自然と張遼は安堵した。その様子を呂布は静かに見ている。その瞳から何らかの感情を見

出す事は出来なかった。

沈黙。

辺りからは雷音の息以外、何も聞こえない。白の世界にただ四頭と一人が存在した。

雲の切れ間から陽の光が差し込む。それが合図かの様に呂布は徐に立ち上がった。成廉と魏越も従う。

「何処に行くのですか？」

白狼に張遼は訊ねた。無論、返事はない。視線が交錯したかと思えば、三頭は踵を返した。傍らの雷音もそれを追って駆け出す。

「待てっ！？」 雷音まで何処に」

誰も待ちはしない。

「ま、待て。待ってくれ！ あっ！」

慌てて追いつがる。が、雪に埋もれた何かに蹴躓いた。三つの白と雷音が小さくなっていく。

「俺はどうすれば良いんだ？！ 置いていくな！」

俺も連れて行ってくれ！！」

悲痛な叫びが森に響く。

三人は白い息と共に消えた。遂に三人は振り返らなかった。

うなだれたまま固まっていた張遼だったが、ふと何かに取り憑かれ様に足下の雪を掘り返した。手が悴むが構い無しに掘り続ける。

張遼が躓いたのは一つの墓標だった。

『飛将

驍将

健将

忠臣と共に此処に眠る

泰山王』

決して美麗とは言えない荒々しい字体。しかし、魂の隠った字が彫られていた。

——嗚呼、

張遼は言葉を失う。

『忠臣』の二文字が胸に突き刺さる。

何時だって呂布の忠臣だと信じていた。いや、信じたかった。

しかし、その願いは脆くも崩れ去る。呂布、そして、成廉、魏越、文優、高順、陳宮の顔が浮かび上がった。

——俺は、……俺だけが生きている。

「そうか、……俺は、もう独りなのか」

つい先程まで何とも感じなかった北風が芯骨まで凍みていった。

（終）

狼を追いかけて（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。
皆様の心の片隅にでも残るような作品になれたでしょうか？

せっかく最後まで読んだのですから感想やレビューもよろしかったらどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1376i/>

狼を追いかけて

2010年10月8日14時11分発行